

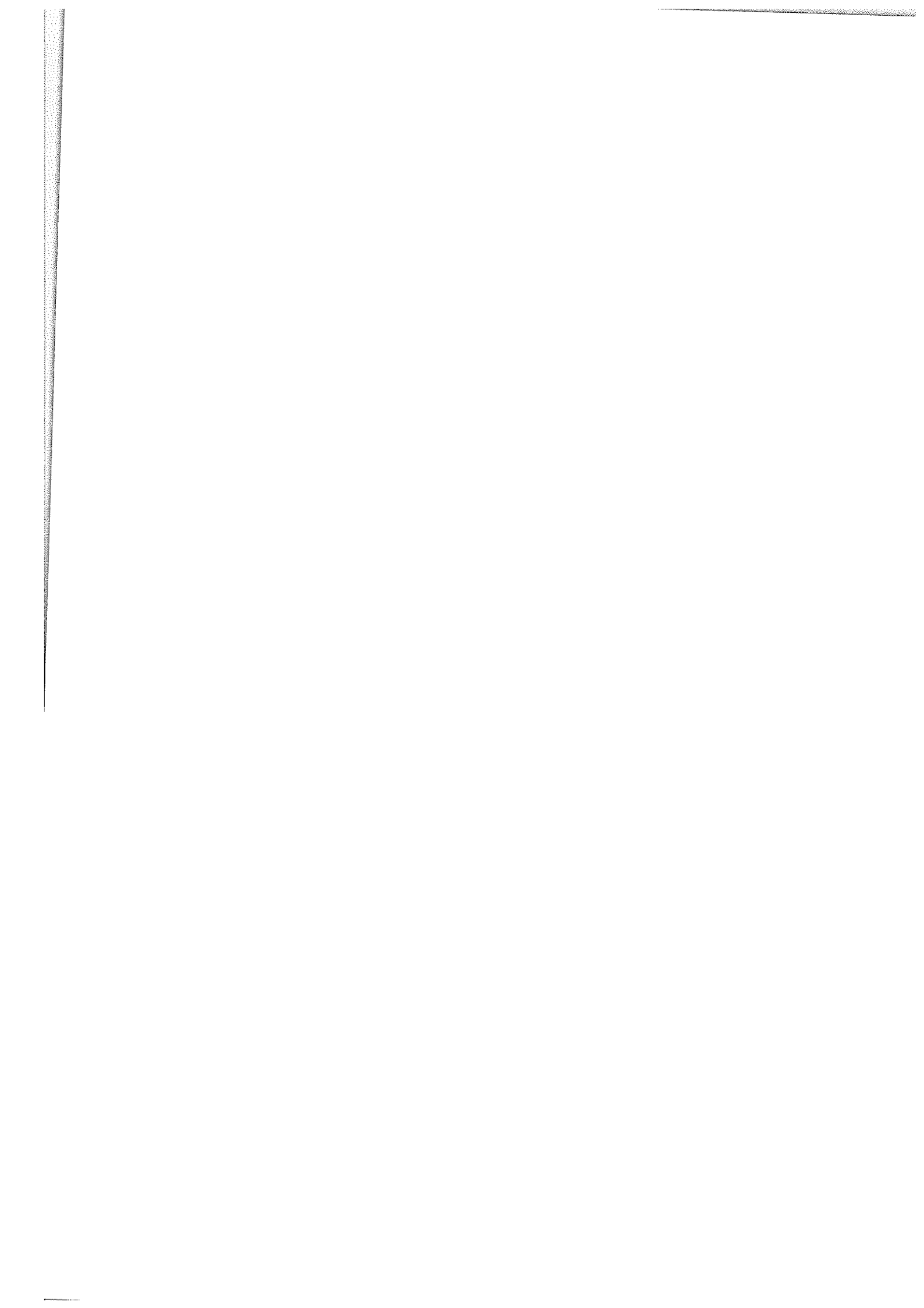
平成24年度 奈良教育大学

「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

報告書

平成25年3月

国立大学法人奈良教育大学



はじめに

理事・副学長（教育担当）

生田 周二

本報告書は、平成 24 年度概算要求特別経費（プロジェクト分）として取り組んだ「『学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける』教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト」（略称、“学ぶ喜びプロジェクト”）の平成 24 年度の成果と課題についてまとめたものです。

“学ぶ喜びプロジェクト”は、ユネスコスクール（大学 2007 年加盟、附属中学校 2008 年加盟）として持続発展教育（ESD）を推進してきた実績・経験（ユネスコパートナーシップ事業など）、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）事務局（平成 23・24 年度）としての活動などの経験を活かしたものです。

また本プロジェクトは、これまで本学が取り組んできた、専門的力量を備えた教育者の養成に向けた各種 GP での実績や「先端的な教職科目体系のモデル開発プロジェクト」等の成果の上に立って、教員養成の充実・発展を目指すものです。

それらを基盤としながら、文化遺産教育、古文化財教育、理数教育、食育、環境教育、特別支援教育、人権教育、文化多様性教育など入り口とした ESD の教材・カリキュラムの開発及び教育課程の開発を、学部、大学院、幼小中の附属校園の連携の下で行い、様々な教育課題と高度化に対応できる「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成を行うことを目指しています。そのために、次の 4 つの側面からアプローチしてきました。

○大学における「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員養成・ESD の教材・カリキュラムの開発

○附属学校の「学び合い・育ち合い」機能の強化のための研究開発

○大学と附属学校の連携による教員養成機能の充実

○大学と地域の連携のためのセンター校的機能の拡充

それぞれの取り組みの詳細については、本報告書を参照してください。とりわけ、学生がプロジェクトに主体的に参画し、いろいろな人々や地域と出会い、多様な経験を積み、それらを教材化しようとしている点が特徴的です。

本報告書をご覧いただき、平成 25 年度のプロジェクト実施に向けて、ご意見やご指導をいただければ幸いです。

「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」

教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

テーマ 1

大学における「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員養成

・ ESD の教材・カリキュラムの開発

3. 關於「自由」與「平等」之關係

自由與平等之關係，自古以來即為思想家所關注之重要問題。自由與平等之關係，可分為自由與平等之關係，及自由與平等之關係。

4. 關於「自由」與「平等」之關係

自由與平等之關係，自古以來即為思想家所關注之重要問題。自由與平等之關係，可分為自由與平等之關係，及自由與平等之關係。

ESD 連続セミナー報告概要

1. 内容

ESD の理論研究および教材開発と ESD に関する教師教育

国立教育政策研究所発行の「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究・中間報告書、最終報告書」の内容理解からはじめ、多くの研究書を参考に ESD の理論研究を行う。また、県内外の文化遺産や環境を取り上げ、ESD・世界遺産教育における教材開発を行う。さらに、ESD に関する実践的教師教育の機会とする。

2. 開催場所と時間

場所：奈良教育大学国際交流オフィス

時間：18:30 ～ 21:00

3. 参加教員

天理市立櫛本小学校 小西慶子

奈良市立飛鳥小学校 松浦 慎

奈良市立朱雀小学校 山方貴順

奈良市立富雄第三小中学校 河野晋也

奈良教育大学 加藤久雄

奈良教育大学 北村恭康

奈良教育大学 中澤静男

4. 開催日

① 5月29日（火）

② 7月 5日（木）

③ 8月 1日（水）

④ 9月10日（月）

⑤ 10月15日（月）

⑥ 11月15日（木）

⑦ 12月18日（火）

⑧ 1月15日（火）

⑨ 2月 7日（木）

5. 成果物

ESD・世界遺産教育に関する指導案

「限りある資源 水 - 沖縄を手がかりとして -」（第5学年） 山方貴順

「白米千米田から発信しよう」（第5学年） 小西 慶子

「外国から学んだ日本の文化 - 長崎くんちと和華蘭文化 -」（第6学年） 河野晋也

「やさしいまちづくり～世界遺産から学ぶ」（第6学年） 松浦 慎

「らく書きを通して考えよう」（第6学年） 松浦 慎

「唐招提寺を通してESDを学ぶ」（第6学年） 中澤静男

【小学校 総合的な学習の時間における事例】

「限りある資源 水—沖縄を手がかりとして—」（第5学年）

奈良市立朱雀小学校 山方貴順

(1) 単元名 「限りある資源 水—沖縄を手がかりとして—」 小学校第5学年

(2) 単元の概要

蛇口をひねると、飲料水をいくらでも出すことができる。平成の日本に暮らす私たちにとって、水は得難く、限りある資源であるとは考えにくい。しかし、国外や過去に目を向けると、水がいかにか得難く、限りある資源であるかが分かる。現在水不足によって慢性的に苦しんでいる人口は、世界に5億から10億人いると、ユニセフは報じている。さらに国際連合は「食糧需要の増加と気候変動によって世界各地で水不足が深刻化しており、水の無駄遣いを防止する努力が必要だ」との報告書を出している。

沖縄では、水不足に備えるため、昔から様々な工夫がなされてきた。例えば、「トゥージ」と呼ばれる石でできたかめがある。雨水や、川やため池から運んできた水を、「トゥージ」に貯めていたのである。「トゥージ」は、家宝として代々大事に受け継がれていた。また、沖縄の伝統的な家では、雨水を無駄にせぬように、樋をはわせ、雨水を貯めるタンクに集めていた。さらに、「カー」や「ガー」と呼ばれる共同井戸を掘り、複数の世帯で使っていた。この「カー」は、神聖な場所とされ、拜む対象でもあった。現在でも「カー」は神聖な場所とされ、崇められている。したがって、「カー」は埋め立てられることはほとんどない。しかし開発等でどうしても埋め立てなければならないときもある。その際には「カー」の中に鏡やお神酒を投げ入れて、お祓いをしてから、工事を始める。この風習は現在でも残っている。現在の沖縄の街並みに目を向けてみると、ほとんどの家に水タンクがあることが分かる。断水に備え、普段から水を蓄えているのである。

(3) ESDの視点の明確化

水を無駄にしない沖縄の文化と自分の生活の比較を切り口に、世界にも目を向けさせ、限りある資源である水とのかかわり方を考えさせたい。

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅰ 多様性…自分のライフスタイルとの比較を通して、沖縄の水を無駄にしない文化に気づくこと【多様】

構成概念Ⅲ 有限性…淡水には限りがあり、食料生産との関連からも、使用の仕方を考える必要があること【有限】

構成概念Ⅳ 公平性…水不足に悩む国や地域にも目を向け、国境を越えた全ての人々が、水不足に陥らないこと【公平】

構成概念Ⅵ 責任性…一人一人が行動を振り返ること【責任】

(4) 留意事項

①教材のつながり

本単元は、水や沖縄に関わる単元であるため、4年生社会科「水のゆくえ」や、5年生社会科「国土の気候の特色と人々の暮らし(あたたかい地方の暮らし)」、5年生理科「台風と気象情報」との関連が挙げられる。

②人のつながり

沖縄出身の方をゲストティーチャーとして招き、給水制限が多かった頃の話の伺う。

③能力・態度のつながり

水を通して、自らのライフスタイルを見直すことができるようにする。限りある資源として水を捉え、水を無駄にしない態度を養いたい。さらに、水だけでなく、電気や食料といった資源をも限りあるものとして捉えられるようにする。

2. ESDの視点を生かした授業の実際

(1) 単元の目標 (重視する能力・態度)

能力・態度② 未来を予測して計画を立てる力…水を無駄にしない文化を知ることから、未来のためにできることを考え、行動に移すことができる。《未来》

能力・態度③ 多面的、総合的に考える力…沖縄県が発信している情報等をもとに、水を無駄にしない文化をはじめ、多様な社会があることを知る。《多面》

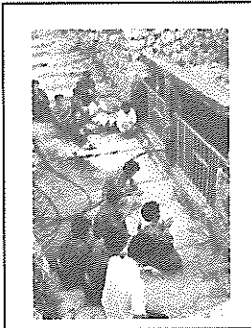
能力・態度⑥ つながりを尊重する態度…自分の生活が、世界の水と関係があることを考えることができる。《関連》

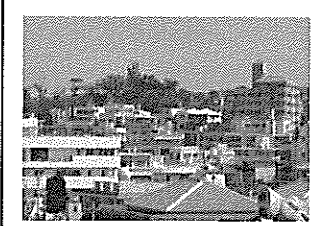
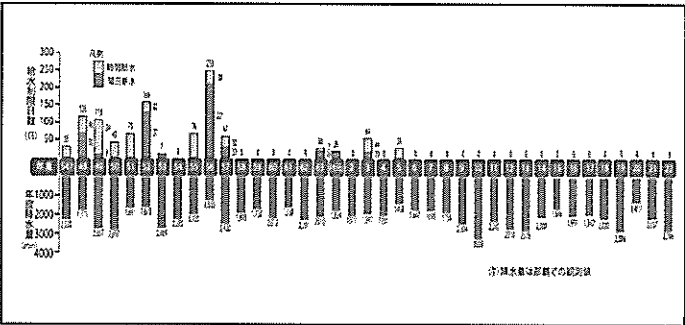
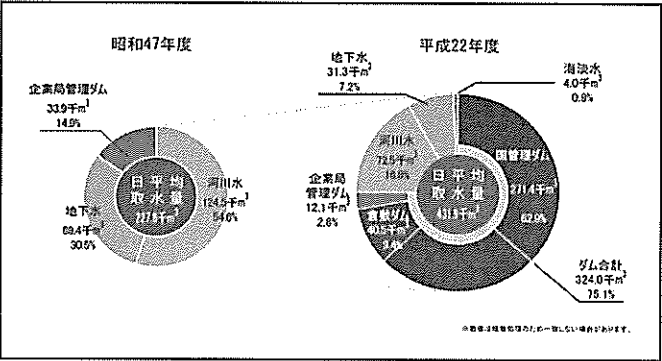
能力・態度⑦ 進んで参加する態度…地球に生きる一員として自分にできることを考え、すすんで実践しようとする。《参加》

(2) 評価規準

未来	多面	関連	参加
①自分のライフスタイルを振り返り、水を大切にしようとしている。	①水を無駄にしない沖縄の文化をはじめ、多様な文化があることを理解する。 ②水不足で苦しんでいる人々が、現在世界にいることを理解する。	①自分の生活が、世界の水と関係があることを考え、判断している。	①地球に生きる一員として自分にできることを考え、すすんで実践しようとしている。

(3) 単元の計画 (全7時間)

時	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価
1	1. 何について悩んでいるのか考える。	 <p>◇雨がよく降るように、また井戸が枯れないように悩んでいる点を考えさせる。 ◆興味、関心をもって単元に臨もうとしている。《多面①》</p>

	<p>2. 那覇市を写した1枚の写真に、水タンクがいくつあるか探す。</p> <p>3. 水タンクは何をするためのものか、またなぜ沖縄にはたくさんあるのかを確認する。</p> <p>4. 水不足になりやすいのは、どのような地域かを考える。</p> <p>5. 自分が住んでいる都市と那覇市の降水量を比べ、降水量の違いを知る。</p> <p>6. 次時に調べたいことを考える。</p>	<p>◇水タンクが30個以上ある点に気づかせる。</p> <p>◇水タンクは、水を蓄え、断水に備えているものであることを理解させる。</p> <p>◇降水量の少ない地域が、水不足になりやすい点を児童に考えさせる。</p> <p>◇インターネット等を使い調べさせる。 例：奈良市・・・約1300mm 那覇市・・・約2000mm</p> <p>「沖縄では降水量が多いのに、どうして水不足になるのだろう。」</p> 
<p>2</p>	<p>1. 沖縄県が出している資料をもとに、水不足の理由を考える。</p> <p>2. 過去の給水制限日数を表した資料から、給水制限日数の推移を知る。</p> <p>3. 次時に調べたいことを考える。</p>	<p>◇以下の3点を理解させる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、人口密度が高いこと。 2、川が急で、短いことから、水がすぐに海へ流れてしまうこと。 3、サンゴ礁でできているため、保水力がないという沖縄の地質 <p>◆沖縄は、降水量こそ多いが、水不足になることを理解している。《多面①》</p> <p>◇平成6年以降は、一度も給水制限になっていない点を理解させる。</p>  <p>「近年、給水制限がないのはどうしてだろう。」</p>
<p>3</p>	<p>1. 沖縄の水源を表したグラフから、水不足を克服した原因を考える。</p>	 <p>◇「国管理ダム」と「海淡水」に着目させる。</p>

	<p>2. 沖縄のダムと、海淡水について調べる。</p> <p>3. 次時に調べたいことを考える。</p>	<p>◇以下の点を理解させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ダムは、沖縄の水不足になりやすいという土地柄を考えて、本島の北部に複数造られた。 ・海淡水とは、海水を淡水にしたもの。海水淡水化施設が建設され、1日に最大4万m³の海水を、淡水にすることができる。 <p>「ダムや海水淡水化施設ができる前、沖縄の人たちはどうやって過ごしてきたのだろう。」</p> <p>◆興味をもって、学習課題を作成している。《多面①》</p>
4	<p>1. 昔から沖縄で行われてきた、水を大事にする工夫を知る。</p> <p>2. 「カー」に設置されている看板の意味を考える。</p> <p>糸満市余座にある「カー」に掛けられている看板には「神聖な場所です。綺麗にしましょう。」とある。</p>	<p>◇「トウジ」「雨樋」「カー」「水タンク」等を活用することで、水不足に備えてきたことを理解させる。</p> <p>◇沖縄出身のゲストティーチャーを招き、水を確保するための努力や苦労の話聞く。</p> <p>◇貴重な水を得るため、沖縄では昔から「カー」を神聖な場所として崇めていたことを理解させる。</p> <p>◆自分が住んでいる文化と比較して考えている。《多面①》</p>
5 6	<p>1. 沖縄以外に目を向ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○バーチャルウォーター ○ユネスコや国際連合の報告 ○地球上の飲用可能な水の割合 	<p>◇水の有限性、貴重性に気づかせる。</p> <p>◆考え判断したことを表現している。《多面②》《関連①》</p>
7	<p>望ましい行動について話し合う。</p>	<p>◇4学年社会科で学習した「水のゆくえ」を思い出し、節水行動について計画をたてる。</p> <p>◆自分のライフスタイル自己の生き方と比較して考え、行動に移そうとしている。</p> <p>《未来》《参加》</p>
課外	<p>※授業前後の水道料金が記された伝票を比較することで、意欲の継続を図る。</p>	

外国から学んだ日本の文化（第6学年）

～長崎くんちと和華蘭文化～

奈良市立富雄第三小中学校 河野晋也

1. ESD を生かした授業づくり

(1) 単元名・学校種と学年

「外国から学んだ日本の文化」 小学校第6学年

(2) 単元の概要

本単元は、長崎で江戸時代から市民に愛されている伝統的な祭り“長崎くんち”（以下“くんち”）を取り上げる。長崎の文化は和華蘭文化という言葉に象徴されるように、日本・中国・オランダという外国の文化が入り混じり、“くんち”も中国から伝わった「龍踊り」やオランダ人役が登場する奉納踊り「阿蘭陀万歳」といった奉納踊りが見られる国際色豊かな祭りである。“くんち”に限らず、ランタンフェスティバルやペーロン大会などの行事、カステラや中国の菓子等の食べ物、石畳等の町中の風景にも外国の文化が多くみられる。“くんち”の「龍踊」は中国風の楽器の音に合わせて数人の龍衆（じゃしゅう）が龍を操って舞う奉納踊りである。本来は中国の雨乞いを祈念する演技で、江戸時代に長崎の唐人屋敷に住んでいた中国人たちの踊りを近くの町人が習ってくんちに取り入れた演目である。

茶道や書道を学んできた児童たちは、伝統文化というものは日本独特のものであり、古くからその形を変えないものであると考えていることが多い。しかし文化とは互いに様々な影響を与え合い、より良いものより人々に合うものに変化していくものである。日本で伝統的に受け継がれている文化も最初は海外の優れた文化として取り入れたものであることがある。それを日本人がより良いものにしようとして形を変え受け継いでいるものもある。

導入では伝統文化のイメージを話し合い、我々が“伝統文化”と呼んでいる茶道やひらがなもルーツは海外から取り入れたものであることを確認した上で、長崎くんちの様子を鑑賞させ、日本固有のものとは限らないということに気付かせたい。くんちをはじめとする日本の文化のルーツを調べることで、我々の先祖が海外から優れた文化を取り入れ日本の文化として発展させてきたことに気付かせ、優れた文化を学び取ろうとした日本人の思いを考えさせる。これらの学習から、日本の文化のルーツとその素晴らしさに気づくとともに、外国の文化を自国の文化と同様に尊重し、学びとる大切さを知ることができる。

(3) ESD の視点の明確化

本単元では、日本の伝統文化について「古くから受け継がれた日本独特のもの」または「日本だけの文化」という認識をもつ児童に長崎くんちを紹介し、外国から取り入れた祭りが江戸時代から続いていることを知らせる。日本とは少し違う中国の出し物や風習、そして外国の文化を取り入れた長崎の町に興味を持たせ文化の多様性に気付かせるとともに、どうして外国の文化を取り入れ、長く受け継ぎ守っているのかを考えさせる。「伝統文化を守る」とは決して古いものを残すことではなく優れているもの素晴らしいものを残すことであり、他から本当に優れているものを取り入れて自文化をより良い形に変えていくことも必要であるということに気付かせ、子どもたち自身に“伝統文化の良さを守り受け継ぐ役割”と“より素晴らしい文化へと育てていく役割”があること、そしてそのためには外国の文化も自国の文化と同様に尊重し、本当に素晴らしいものを取り入れていく心が必要であることを伝えていきたい。

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅰ 多様性…国や地域によって文化は様々であり、それぞれの国や地域で大切に育まれている伝統文化があること。【多様】

構成概念Ⅱ 相互性…日本の文化や伝統文化と呼ばれるものはその良さが大切に受け継がれながらも、外国の文化の良さを受け入れ、学びとることにより良い形へ変化していること。【相互】

構成概念Ⅵ 責任制…“伝統文化の良さを守り受け継ぐ役割”と“より素晴らしい文化を育てていく役割”が自分たちにあることに気づくこと。【責任】

(4) 留意事項

①教材のつながり

本単元は、鎖国時代に出島があった影響で長崎に中国やオランダの文化が入り混じった文化が形成されたことを導入として取り上げている。ここでは社会科の「江戸時代の文化」との関連が考えられる。また地域の行事や学校行事について提案し合う時間では国語科の「討論会をしよう」という単元と関連していくと考える。

②人のつながり

外国の文化・祭りを扱う際には、その国の人々の願いに気付かせ、日本と同じく作物の恵みや天候の安定など人の力では変えることのできない自然の恵みについて、祈っているという点に気付かせたい。その上でそれぞれの国の文化の素晴らしさや良さに気付かせていく。

③能力・態度のつながり

先人の工夫によって形作られてきた日本の文化の良さを知ること大切にしようとする思いを育て、また外国の文化が我々の文化に取り入れられていることを知ることで外国の文化も尊重する態度を育てる。

2.ESD の視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標 (重視する能力・態度)

能力・態度② 今の私たちの生活には日本と外国の様々な文化が影響していることに興味をもち、その良さを見直し“将来の伝統文化”として残すべきものを考える。《未来》

能力・態度③ 奈良の伝統的な祭りや長崎の祭りを比較して国や地域によって様々な祭りの形があることを知り、また外国から取り入れた文化を大切に受け継いでいる地域があることに気づく。《多面》

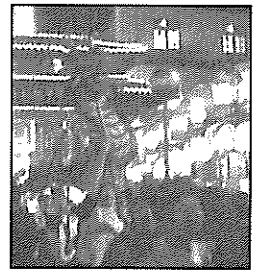
能力・態度⑥ 伝統文化の意味について見直し、日本の文化が様々な国や地域の文化から良さを受け入れ、学びとり、大切に守り育まれてきた人々の思いを考える。《関連》

(2) 評価規準

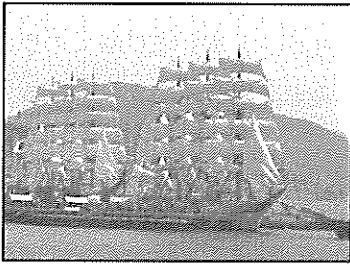
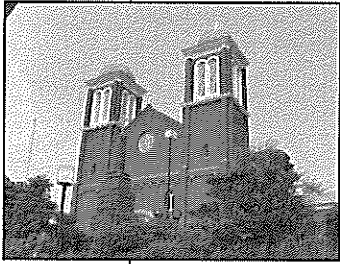
未来	多面	関連
① 伝統文化とよばれているものにも外国の文化が影響していることに気づく。	① 奈良の祭りと比較して長崎くんちや「龍踊」について調べる。	① 「龍踊」の良さを見出して、外国の文化を取り入れ受け継いでいる人の思いを考える。
② 自国と外国の文化の違いや良さに気付き、未来の伝統文化について考える。	② 様々な国の文化が入り混じる長崎の文化を調べ、それぞれの国の文化の良さを考える。	② 本当に良いもの、どんなに年月がたっても愛されるものが、伝統文化として残っていることに気付く。

(3) 展開の概要

時間	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価
3時間	<p>【長崎くんちについて知ろう】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 伝統文化と言われて思いつくものを出し合い、“伝統”“文化”という言葉についてのイメージを膨らませる。 ○ 江戸時代から続く長崎の「長崎くんち」には日本の祭りであるにもかかわらず中国の出し物が登場することに気付かせる。 ○ 奈良の祭りが古くから受け継がれ、大きく形が変わることのなかったことに気付かせ、「長崎くんち」の歴史について調べる。 	<p>◇同じ伝統的な祭りでありながら、海外の文化を取り入れている長崎の祭りの特徴に気付かせる。</p> <p>◆伝統文化という言葉の意味を自分なりの言葉で説明しようとする。《未来》</p> <p>◆長崎くんちについてその歴史を調べる。《多面》</p>
3時間	<p>【どうして中国の出し物が日本の祭りに登場するのだろう】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○龍踊りに焦点を当て、中国の文化が日本の祭りに登場しているわけを考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・くんちが始まったころは龍踊りは演目として登場していなかったことを知らせる。 ・出島があった当時の長崎の町の様子を見せ、外国の文化が多く入っていることに気付かせる。 ・龍踊の意味について知らせる。 ○長崎と外国の関係について調べ、「龍踊」以外にも外国文化が取り入れられている様子を調べる。 ○龍踊を喜ぶ観客の様子を見たり龍衆たちのインタビューを聞き、くんちと龍踊に込める思いを聞きとる。 	<p>◇長崎の祭りに中国の文化が取り入れられている理由を当時の時代背景や長崎の町の様子から考えさせ、祭りに込められている思いを受け継ぐことを龍踊をする龍衆たちが大切にしていることに気付かせる。</p> <p>◆くんちの「龍踊」の意味や歴史について調べる。《多面》</p> <p>◇食べ物、建物、祭り、などのグループに分かれて長崎県に見られる外国の文化について調べる。</p> <p>◇長崎の文化が「和華蘭文化」「ちゃんぽん文化」などと呼ばれていることを伝え、様々な国の文化と日本の文化が同居していることを伝える。</p> <p>◆長崎の文化を調べ、海外から取り入れた文化が大切に受け継がれていることに気付く。《関連》</p>



精霊流し・ペーロン大会・中国風の寺院・旧正月の祭・石畳・卓袱料理・カステラ・墓参りの花火の風習・中華街・洋館群・江戸時代の教会…など



3 時間	<p>【意外に多い？海外発、日本行きの文化】</p> <p>○身の回りにあるものを調べ、長崎の文化のように海外で生まれたものや言葉が自分たちの近くにもないか調べる。</p> <p>○伝統文化と呼ばれるものの中にも海外から伝わっているものがあることを知り、社会科（歴史分野）の教科書を参考にしながら伝統文化のルーツを確認する。</p> <p>○なぜ日本の昔の人は海外の文化を取り入れ、受けついできたのか互いの意見を交流し話し合う。</p>	<p>◇長崎に限らず私たちが使っている道具や言葉、文化には外国の影響を受けたものが多くあり、伝統文化と呼ばれるものにも海外の文化が深くかかわっていることに気付かせる。</p> <p>◆なぜ外国の文化を取り入れ、大事に受け継いでいるのか、受け継ぐ人の思いを参考にして考えている。《関連》</p>
2 時間	<p>【千年後の伝統文化】</p> <p>○海外から伝わった文化に囲まれて生活していることを確認し、どんなものが伝統文化として残しているかを考える。</p> <p>○千年後の伝統文化について、その良さ、素晴らしさを「千年残った理由」としてまとめる</p>	<p>◇“新しいもの”“珍しいもの”が受け継がれるのではなく、長く愛される良さがあるものが伝統文化として残ることを確認する。</p> <p>◆外国のものであれ、日本のものであれ、長く良さが認められる「素晴らしいもの」が伝統文化として受け継がれていくことに気付く。《関連》</p> <p>◆「未来の日本の伝統文化」について自分の考えをもって話し合いに参加している。</p>

「白米千米田から発信しよう」(第5学年)

天理市立櫛本小学校 小西 慶子

1. ESD を生かした授業づくり

(1) 単元名・学校種と学年

「白米千米田から発信しよう」 小学校 第5学年

(2) 単元の概要

本単元は、2011年「世界農業遺産(GIAHS)」*1に認定された「能登里山里海」の一つである「白米千米田」の景観を守り伝えていくための方法や、関わった人々の思いや願いを学ぶことで、棚田の未来について自分たちができることを考え、実践する力をつけることをねらいとしている。

白米千米田は平均面積が18㎡と小さな田んぼが1004枚もある棚田である。面積が小さいので、機械による効率化が測れず、ほとんどが昔ながらの人による過酷な作業を行っており、後継者不足と高齢化で地元農家だけでは耕作を続けることが難しくなっている。そこで、「日本海に面した棚田」という絶景を損なうことを心配した人々が協力して「オーナー制度」を作り現在に至っている。

児童は、社会科の「米作り」の学習で、米作りの大変さや人々の苦勞、願いを学習している。その上で、人々が棚田を守ろうとする思いや願い、また、次世代の人に伝えていこうとしていること、失われつつある家族のぬくもりを理解させたい。また、日本に数多くある棚田を考えたとき、「私には何ができるか」、「地域の人との関わりはどうか」について考えさせたい。そして、地域の未来像を描きながら、自ら行動できる児童を育成していきたい。

*1 世界農業遺産(GIAHS)・・・国連食糧農業機関(FAO)が農林水産の営みによって育まれ次世代の残すべき、景観、文化、生物多様性がある重要な地域であると認定した地域。「能登の里山里海」が日本で初めての認定となった。

(3) ESD の視点の明確化

本単元でESDの視点に立った学習指導を進めるにあたって、棚田は長い年月の中で守り続けられてきたものであり、自然の摂理により土地そのものが変化する可能性のあること(有限性)を理解させたい。また、一時は減ってしまった水田を復活させようと立ちあがった人々がいて、全国からオーナーと呼ばれる人・家族が集まり今の棚田(棚田の景観)が損なわれずにあること(連携性)を理解させたい。そこには、自ら米を作る喜びだけでなく、一緒に汗を流した人々との関わりや、地域住民との心のふれあいがあるということにも気づいてほしい。

そして、「私たちの棚田会議」を目標に、全国の棚田について調べ、自分たちがこれから行うべきこと、地域に働きかけることを探究し、地域の未来像を描きながら、自ら進んで行動することの大切さ(責任性)を自覚させたい。

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅲ 有限性…自然は時として変化すること【有限】

構成概念Ⅴ 連携性…棚田の景観を守るためには、「自分・地域の人々」、「自然」、「地域」がつながりあうこと【連携】

構成概念VI 責任性…絶景の「棚田」を未来に残すためには、一人一人が自分にできることを考え進んで行動すること【責任】

(4) 留意事項

①教材のつながり

本単元は、米作りという視点から、社会の「米作り」や「水資源」との関連が挙げられ、米の収穫量を考える時には、算数の「平均・単位量あたりの大きさ」の求め方が必要となる。農作業をする際、小さな水田と水田の間を歩く距離については、体育の持久走で検証することができる。また、コミュニケーションを行う力の育成としては、国語の「討論」や「パネルディスカッション」を取り入れ、課題の解決を図る。

②人のつながり

白米千米田の「オーナー制度」についての取り組みを学ぶ中で、人々のつながりを理解する。また「私たちの棚田会議」を行い、友だちの意見を聴き、自分の意見とすり合わせる過程を大事にしながら、課題を追究する。

③能力・態度のつながり

「私たちの棚田会議」作りとして、これまで学習してきたことを基に棚田の未来像について話し合う。そのために自分たちができること、地域に働きかけることは何かを考える。

2. ESD の視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標（重視する能力・態度）

《関連》

棚田について、人同士のつながり、自分と地域・自然とのつながりに関心を持ち、それらを尊重し、大切にしようとする。

【関心・意欲・態度】

《未来》

棚田を様々な視点から捉えることで、人の力の可能性や自然の有限性に気づき、未来に向けて自分ができることを表現しようとしている。

【思考・判断・表現】

《参加》

棚田に関する情報を集め、自分の役割を理解し、できることを進んで実践しようとする。

【技能】

《多面》

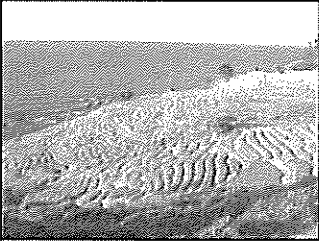

自分・地域・社会・自然などのつながりや広がりや様々な視点から捉え、人々が協力して景観を守るために努めていることを理解している。

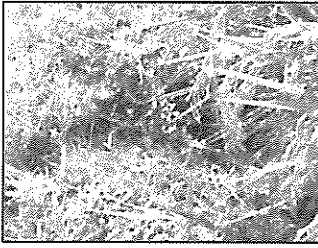

【知識・理解】

(2) 評価規準

関連	未来	参加	多面
①棚田について、関心を持ち、意義や人々のつながりを尊重しようとしている。	①棚田を多面的、総合的に考えようとしている。 ②景勝地の保存について、自分たちにできることを考えることができる。	①棚田の特徴や人々の努力、自然の有限性について調べ、自分たちにできることを実践しようとしている。	①人々の知恵や努力を理解している。

(3) 単元の計画 (総時数 13 時間)

時	主な学習活動と内容	◇教師の支援 ◆主な評価
1	<p>【白米千米田について知ろう】</p> <p>○石川県輪島市に位置する「白米千米田」は、江戸時代に作られた千米田（棚田）であることを知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>「千米田」というけれど、実際には、1,004 枚あるんだ。 平均面積が 18 m²だよ。</p> </div> <p>○国の棚田百選にも選ばれている景勝地であることを知る。</p>	<p>◇棚田とは？そもそもなぜ棚田が必要だったのかを考えさせる。(生きるために山を切り拓くということ)</p> <p>◇白米千米田の写真を見せ、小さな田んぼが斜面に幾重にも重なっていることを理解させる。</p> <p>◆棚田について関心を持ち、多様な観点から調べようとしている。 《関連》</p> 
2 3	<p>【棚田の意義について考えよう】</p> <p>○食料生産について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会科で米作りについて学習したが、学習したような大型機械は使えない。 →手作業？ ・機械が使えないと、農作業の効率があがらない。→経済的にどうなのか？ 若い人が減るのでは？ ・どのくらいの収穫量があるのか、単位量あたりの大きさを使って求める。  <p>【連携】</p>	<p>◇機械による効率化が図れず、ほとんどが昔ながらの人力による過酷な作業であることを理解させる。</p> <p>◆人々が協力して、棚田米作りに取り組んでいることを理解している。 《多面》</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>千米田は、日当たりと風通しが大変良いので、害虫が発生しにくく減農薬のためおいしいよ。 ハザ干しもしているよ。</p> </div>

<p>4</p> <p>5</p> <p>6</p>	<p>○水源・保水機能について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・急な斜面にある水田の水は水資源の確保ほどようになっているのかな。 ・白米千米田は「地滑り地帯」だが、耕作しても地滑りはしないの？ <p>○生物多様性について考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・棚田には、どんな生物がいるのだろうか、調べ、気づいたことを話し合う。【有限】 	<p>◇山地に降った雨が、ゆっくりと地下に浸透していることを理解させる。また、棚田自体が用水路の働きをしていることを理解させる。</p>  <p>◇田起こしや代かきを繰り返すことにより、耕盤という土層ができ、地下への浸透水を減らすことを理解させる。</p> <p>◇多種多様な生物が生息していることを理解させる。</p>
<p>平地にある水田では、見られない生物がたくさんいるよ。</p>		
<p>7</p> <p>8</p>	<p>【白米千米田の保存について考えよう】</p> <p>○地元農家の状況を知る。(減少している)</p> <p>○「オーナー制度」について調べ、発表しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ、オーナー制度ができたのか？ →農家が減り、高齢化が進んだため。 ・オーナー制度とは、何をするのか？ ・オーナー制度の利点は？ (オーナーの気持ちを考える)  <p>【連携】</p> <p>○白米千米田愛耕会の方からの手紙を読む。</p>	<p>◇地元では、高齢化が進み、田んぼに関わる人々が減少し、休耕田が増えていた状況を打破し保存していくためにはどうすればよいかを考えさせる。</p> <p>◇休耕田となると、水田の復活には時間と労力がかかる。休耕田にしないため、全国からたくさんの人を呼び、棚田を作り続けていることを理解させる。</p> <p>◇オーナーになってまでして、米作りをする必要があるのかを考えさせる。</p> <p>◆オーナーになることで、土地の人々とのふれあう時間を持つことができ、お互いが有意義な時間を過ごすことができることを理解している。 《多面》</p>

9	<p>○棚田の保存について、「一人一人ができること」をテーマに話し合う。</p> <p style="text-align: right;">【責任】</p>	<p>◆棚田を様々な視点から捉える事で、人々の努力や可能性、自然の有限性に気づき、未来に向けてできることを考え表現している。</p> <p style="text-align: right;">《未来》</p>
10	<p>【棚田会議を開こう】</p> <p>○世界遺産「フィリピン・コルディリエーラの棚田群」について知る。(DVD)</p> <p>・現状・イフガオ族の人々が互いに支え合ってきたから今があること、そして、新たなつながりの大切さについて考える。【連携】</p>	<p>◇イフガオ族の人々の努力や絆について理解させる。</p> <p>◇棚田の景観を維持しながら、人々の生活や文化、伝統を守り続ける方法を考えさせる。</p>
11 12	<p>○世界にある棚田からグループ毎に場所を決め、情報を集める。集めた情報をまとめ、発表し合う。</p> <p>・棚田の特徴・人々の関わり・保存について</p>	<p>◇棚田の特徴や、人々の努力、自然の有限性について調べさせる。</p> <p style="text-align: right;">《参加》</p>
13	<p>○棚田の景観と人々の生活、文化、伝統を守るためにはどうすればよいかを考える。</p>	<p>◇景勝地として残していくために、自分たちができることを考えさせる。</p> <p style="text-align: right;">《未来》</p>

*参考 DVD

(社) 日本ユネスコ協会連盟

「守ろう地球のたからもの ～豊かな世界遺産編～」

④ 連携、人のつながりの大切さを知る

白米千米田 愛耕会 堂前助之新さんの話より

白米千米田の現在
(1004枚:4ha)

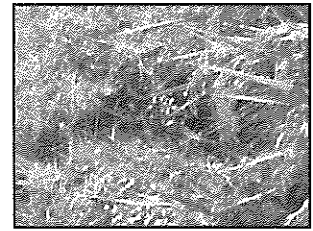
農家 3軒・・・高齢化が進み、どんどん減ってきた
JA
愛耕会 30名程度
オーナー (2012年度:113人とその家族) ※発足6年目

※愛耕会・・・会長:堂前助之新さん

定年前はJAで働いていた。その時に少し千米田に関わっていた。定年後(2年)、市の観光課のすすめもあり、同級生4名と同年代の仲間とともに千米田を耕そうと発足。

<水資源>

- ・山からの水が水源
 - ・田自体が用水路の働きをしていて、上の田の水がいっぱいになると、下の田に水が溜まっていく仕組みになっている。(夏は下の方の田に水が行き渡るまで時間がかかる。)
- ※今年は、猛暑で雨が少ないので、水に困っている



<農薬>

- ・病害虫が少ないので、農薬はほとんどいらない。(4月の除草剤くらい)
-
- ・日照量が多いため(夏:12時間くらい)
 - ・海からの潮風がよくふくため

<オーナー制度(H19~)>

- ・あぜぬり・田植えなど年6回(田植えには、180人が参加)
- ・世界農業遺産に認定されたからか、オーナーが増加した。
(6割は関東圏、京都・大阪各1名、徳島の方もいる。また、JTBといった企業もある)
- ・オーナーになると、マイ田んぼとして立札がもらえる。(1つの田んぼが小さい)
家族3代で来ているところもある。
- ・オーナーが来ていない時は、愛耕会が水の調節などを担う。
- ・オーナー同士、オーナーと愛耕会の人々などが田植えなどを一緒に行う中で交流がうまれる。
- ・田植えなど作業後にはみなさんに「ふるまい」がある。

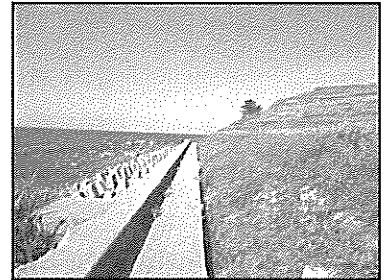


- 休憩の間にみなでおしゃべりをしたり、土手に座って海を眺めたり・・・癒しになる。
- 家族でがんばっている光景を見ると、心がほっこりする。
- 1000枚以上の田んぼなので、1人や少人数で1日中作業するより、1人でも多くの人に来てもらって、おしゃべりしながら短時間で作業する方が楽しい。だから、たくさんの人に来てほしい。

- ・オーナーや観光客が増えたからといって負の要素が増えたというわけではない。ゴミが増えたということもない。(デメリットはなく、メリットがあるのみ)
しいて言えば、駐車場が狭く、道が混雑するところが難点。

<堂前さんが考える「白米千米田」の魅力>

- ・自分の家にも田があるが、千米田の景観は、見ていると癒される。何時間でもその場に居ることができる。ボーッとできるし、疲れが吹き飛ぶ。
- ・海の際まで田があるのは、日本中でここ（白米）だけだと思う。
(稲は海水に弱いので、今年の田植え前は、田のすぐ下まで潮が満ちており、田んぼに入らないか不安だった。)



<その他>

- ・田のへりは一つ一つ鍬で作っていくが、これが一番しんどい。
- ・代かきは家庭用の小さい機械で行う。また、草刈りも機械で行う。その他はすべて手作り。

第6学年

【小学校 総合的な学習の時間における事例】

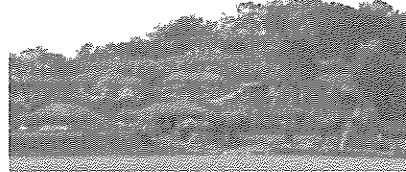
「やさしいまちづくり～世界遺産から学ぶ」

奈良市立飛鳥小学校 教諭 松浦 慎

1. ESDを生かした授業づくり

(1) 単元名

「やさしいまちづくり～世界遺産から学ぶ～」



(2) 単元の概要

本単元は、世界遺産に認定されている韓国の良洞村（ヤンドンマウル）や日本の白川郷と自分の地域の比較を通して、自分の地域の持続可能性を見つめ、まちづくりに参画する素地を養うものである。

良洞村は、大韓民国慶州市にある伝統民俗村で、慶州市中心部から北へ約 25km のところに位置している。村全体が重要民俗文化財（旧称：重要民俗資料）第 189 号に指定（1984 年）されており、2010 年に世界遺産（文化）に登録された。幾度の戦火に見舞われた朝鮮半島において、当時の様子を現在に伝える数少ない貴重な集落であり、現在も約 150 戸の家屋が現存し、住民がそこで生活している。

白川郷は、岐阜県と富山県の県境にある集落で、合掌する手の形に見える急勾配の屋根が特徴である。古くは雪の多い地域に広く見られた建築様式で、屋根裏では養蚕のために蚕が飼われていた。1995 年に世界遺産（文化）に登録された。この集落には「結い（ゆい）」と呼ばれる相互扶助の伝統があり、屋根の葺き替え作業なども、結いをもとに共同で行われている。

世界遺産に住む住民の願いや想い、まちを残すための工夫や取組を知ることを通して、誰にとっても住みやすいまちの在り方について考えたい。また、実際に近い将来、自分たちのまちを創るのは自分たちなのだと意識させ、意欲的にかかわる姿勢を養いたい。

(3) ESDの視点の明確化

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅳ 公平性…地域の文化を遺し、伝える取組を知ることを通して、住民の良好な生活や健康が保証されているだけでなく、世代を超えて保持されていくものであるということ

構成概念Ⅴ 連携性…地域の住民や保護者にインタビューすることを通して、状況に応じて順応したり、寛容な態度で調和を図ったりすること

構成概念Ⅵ 責任性…まちづくりの提案を通して、一人ひとりが責任と義務を自覚し、自ら進んで行動する態度を養うこと。また、自分の地域に対する責任あるビジョンを持ち、その実現に向かっての変容・変革のきっかけをつかむこと。

(4) 留意事項

① 教材のつながり

本単元では、2年生の生活科の町たんけんや、3.4年生の社会科の地域学習の学習を踏まえる。また、それまでに培った調べ方やまとめ方、発信の仕方を応用する。道徳の「郷土愛（4

ー 7)」「社会的役割と責任 (4-3)」とも関連付けられる。

② 人のつながり

地域の方々や保護者へのインタビューを取り入れる。また、発信対象として、まちづくりにかかわる方の協力を得ながら学習を進める。

③ 能力・態度のつながり

身に付けた能力・態度は話し合い活動を中心としたすべての日常生活に活用できる。また、創造的な視点は、何事も前向きにとらえ積極的に行動することにつながる。

2. ESDの視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標 (重視する能力・態度)

- ・自分の地域の未来像を予測し、計画を立てることができる。(未来)
- ・「やさしいまちづくり」について多面的・総合的に考えることができる。(多面)
- ・まちづくりの計画作成に進んで参加することができる(参加)

(2) 評価規準

能力・態度② 未来像を予測して計画を立てる力 (未来)	能力・態度③ 多面的、総合的に考える力 (多面)	能力・態度⑦ 進んで参加する態度 (参加)
① まちの現状から将来像を予測して計画を立てている。	① まちの「やさしさ」について多面的、総合的に考えている。	①まちの住人へのインタビューに進んで参加している。
② 未来のまちとそこに生きる自分を想像して、「まちづくり宣言」をつくることができる。	②まちづくりの構想計画を通して自己の生き方や生活スタイルを振り返ることができる。	②まちづくりの構想計画に進んで参加している。 ③まちづくりのプレゼンテーションに進んで参加している。

(3) 単元の概要 (全12時間)

主な学習活動	◇学習への支援 ◆評価
<p>1. 世界遺産の素晴らしさを堪能する。(1)</p> <p>2. 韓国・良洞村と日本・白川郷のまちづくりの工夫を見つける(1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真から「やさしさ」を見つける ・誰にとって「やさしい」かを考える 住民 観光客 ・住んでいる人の想い・願いを知る 	<p>◇「守ろう地球の宝物」のDVDを活用する。</p> <p>◇自分たちの地域との共通点や相違点に気づかせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・自然と共存 ・人の集える大きな建物 ・入り口で車はストップ ・あちらこちらに消火栓 ・中央に蓮の池 ・傾斜の有効活用 ・「結」の精神 <p style="text-align: right;">など</p> </div> <p>◆様々な角度から相違点を見つける。(多面①)</p>

<p>3. 自分たちの地域に目を向ける (2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住民にインタビュー ・遺したいものを見つける <p>4. 課題を浮き彫りにし、「やさしいまち」にするにはどうすればいいかを考える。(1)</p> <p>5. グループごとにテーマを決めてまちづくりを構想する。(4)</p> <p style="padding-left: 40px;">テーマ例 「防災」「観光」「親切」 「安心・安全」「自然と共存」 など</p> <p>6. 行政、地域の人、保護者、他学年に向けてプレゼンテーションする。(2)</p> <p>7. 「やさしいまち宣言」をつくる (1)</p>	<p>◇インタビューの仕方、デジカメの使い方などをあらかじめ学習しておく。</p> <p>◇視点を明確にしておく</p> <p>◆地域の住民に積極的に話しかけている (参加①)</p> <p>◇思いつきにとどまらず、根拠を明確にするよう、声掛けする。</p> <p>◆将来を予想している (未来①)</p> <p>◇クラスの状況に応じて、グループの中でテーマを決めるか、テーマで集まってグループをつくるか判断する。</p> <p>◇プレゼンテーションのポイントについて学習しておく。</p> <p>◆自分のこれまでの生活と比較しながら、構想を考えている。(多面②)</p> <p>◆友達と協力して計画を立てている (参加②)</p> <p>◇目的を明確にしておく。</p> <p>◇行政や地域の人、保護者に協力を依頼する。</p> <p>◆進んで発表している (参加③)</p> <p>◇卒業制作への発展の可能性を模索する。</p> <p>◆未来のまちと自分のかかわり方を宣言に盛り込んでいる。(未来②)</p>
--	--



第6学年

【小学校 総合的な学習の時間における事例】

「らく書きを通して考えよう」

奈良市立飛鳥小学校 教諭 松浦 慎

1. ESDを生かした授業づくり

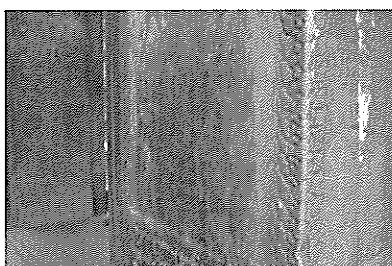
(1) 単元名

「らく書きを通して考えよう」

(2) 単元の概要

本単元は、世界遺産にかかれた「らく書き」を通して、遺産・公共物にいたずらをする事に対する認識を深め、自分と遺産・公共物とのかかわり方や自分の歩みを残す事について考えるものである。

法隆寺（奈良県斑鳩町）東大門（国宝）の檜製の柱に「みんな大スキ」と彫られた「らく書き」がある。景観を損なうだけでなく、文化財保護法に抵触する恐れがある。また東大寺や元興寺にも同じように柱に彫られた跡がある。一方世界に目を向けてみると、アンコールワット（カンボジア）にも日本人が書いた「らく書き」がある。アンコールワットは12世紀（1140年頃）に建てられたヒンズー教の寺院で廃墟となっていた建物である。寛永9年（1632年）、森本右近太夫一房という人物がこの地を訪れ、正面中回廊の柱など3か所に墨で「らく書き」をしている。今では、複数の研究者による査読も行われている。



同じ「らく書き」でも、時代や環境が変われば多角的に見えるということを押さえつつ、遺産・公共物にいたずらをする事が、「自分さえ良ければ」という軽い気持ちであっても、取り返しのつかないことにもなり得ることがあるということを感じてもらいたい。そのうえで、文化遺産や公共物と共に生きる今の自分がどう行動すればいいかを見つめ、持続可能な社会づくりの担い手となってもらうことを目的としている。

(3) ESDの視点の明確化

【持続可能な社会づくりの構成概念】

構成概念Ⅲ 有限性…世界遺産は歴史的なつながりや普遍的な価値を持っているということ

構成概念Ⅵ 責任性…自分が取るべき行動について考えを深めること

(4) 留意事項

- ① 教材のつながり…6年生社会科の歴史において学習した、東大寺や元興寺が今も残されているということに気づかせたい。また、本単元で培った価値観や態度をもとに特別活動で卒業に向けての準備を行う。道徳の価値項目1-3（自律）とも関連させることが可能である。
- ② 人のつながり…発展的に、森本右近太夫について調べてみてもよい。また、東大寺や元興寺の住職の想いや願いを聞いたり、実際に保護のために尽力されている方の気持ちを聞き取ったりすることができる。
- ③ 能力・態度のつながり…人ともとのつながりを多面的にとらえ、総合的に考えることを、

日常生活の場面においてどのようにすればいいか、自己のこれからの生活を思い描きながら考えさせたい。

2. ESDの視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標（重視する能力・態度）

- ・世界遺産にかかれた「らく書き」を通して、「らく書き」について様々な角度から考えることができる（批判）
- ・遺産や公共物とのかかわりについて、他者とのつながりの中から多面的に考えることができる。（多面）
- ・自分のこれからの見据え、遺産や公共物とどのようにかかわっていくのがいいか考え、行動に移そうとすることができる。（参加）

(2) 評価規準

能力・態度① 批判的に考える力 (批判)	能力・態度③ 多面的、総合的に考える力 (多面)	能力・態度⑦ 進んで参加する態度 (参加)
① らく書きについて、様々な情報や意見を吟味し、自分の意見をもつことができる。 ② 積極的・発展的によりよい解決策を考えることができる。	①遺産や公共物とのかかわりについて多面的、総合的に考えている。 ② これからの生き方について様々な物事を関連付けて考えることが。	① 関係者や観光客へのインタビュー活動に進んで参加している。 ② 学んだことを実際の生活に生かそうとしている。 ③ 成果報告会に進んで参加し、積極的に発表することができる。

(3) 単元の概要（全14時間）

主な学習活動	◇学習への支援 ◆評価
1. 世界遺産の素晴らしさを堪能する。(1) 2. 「らく書き」があるという現実を知る。(1) <ul style="list-style-type: none"> ・奈良の世界遺産の心無い「らく書き」。 ・アンコールワットの「らく書き」。 ・思ったこと感じたことを交流する。 	◇「守ろう地球の宝物」のDVDを活用する。 ◇奈良時代について、社会科とも関連付けて解説する。 ◇オープンエンドで終わり、実際に自分の目で確かめに行きたくなるように意識づける。 ◆資料から分かること、友達の意見を踏まえて、自分の考えをもっている。(批判①)

<p>3. 実際に東大寺（法隆寺）に行って「らく書き」を見たり、関係者や観光客にインタビューしたりする。（4）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住職に話を聞く。 ・保護に携わる方の話を聞く。 ・観光客に話を聞く。 ・被害の実際を記録に収める。 	<p>◇なら観光ボランティアガイドの会と連携し、小グループで見学する時間を取る。</p> <p>◇メモを取ったり、インタビューしたり、多面的に取材する方法をあらかじめ指導しておく。</p> <p>◇デジカメの使い方を学習する。</p> <p>◆関係者や観光客に積極的に話しかけている。（参加①）</p>
<p>4. 調べたことを交流する。（2）</p>	<p>◇わかりやく伝えるための方法を選択できるように提示し、工夫を促す。</p> <p>◆様々な角度から見つけたことや教わったことをとらえている。（多面①）</p>
<p>5. 自分たちにできることを考える。（1）</p>	<p>◇単に「ポスターを描く」だけに留まらないたくさんの人を巻き込めるような活動になるように言葉がけする。</p> <p>◆自分たちにできることの案を考えている。（批判②）</p>
<p>6. 小グループによるプロジェクト学習を行う。（4）</p> <p>例 文化遺産の保護につながる活動</p> <p> ちらしを作成し、現地で呼びかける</p> <p> CMを作成し、放送する</p> <p> 実際に修復作業を行う など</p>	<p>◇これからの自己の生き方や生活スタイルに反映できるように意識させる。</p> <p>◆学んだことが自分の生き方に反映されている。（多面②）</p>
<p>7. 成果報告会をする。（1）</p>	<p>◇学年全体で取り組んでいるということ、また取り組んだことが社会に一石を投じていることを実感させる、</p> <p>◆進んで発表している。（参加③）</p>
<p>8. 卒業に向けて、やりたいことを考える。（課外）</p>	<p>◇学んだこと（価値観）を生かし、実生活に反映させる。</p> <p>◆やりたいことの中に、本学習で学んだことを加味している。（参加②）</p>

「唐招提寺からESDを学ぶ」

奈良教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター 中澤 静男

1. 単元名 唐招提寺からESDを学ぶ

2. 単元の概要

本単元は、世界遺産「古都奈良の文化財」の構成要素のひとつである唐招提寺を通して、持続可能な地域社会の実現の基盤となる地域を大切に思う心を養うと共に、持続可能な社会づくりの構成概念を身に付け、その能力や態度を養うものである。

唐招提寺は、759年に唐から招いた高僧鑑真によって開かれた。「招提」には、四方から僧が集まる道場といった意味があり、僧が守るべき規則である戒律を学ぶために建立されたことが、名前からわかる。奈良時代に正しい仏教を日本に伝えてもらうことを目的に、興福寺の栄叡と普照という二人の僧が遣唐使船で唐に派遣された。正式な僧になるためには戒を授かる必要がある。授戒には10人の資格を持つ正式な僧が必要だが、当時の日本には10人の正式な僧がいなかった。そこで、授戒できる高僧を日本に招聘しなければならなかったのである。鑑真は栄叡と普照の願いを受け、5度の失敗を乗り越えて渡来し、聖武天皇などに戒を授けた。

戒律を授ける儀式を行う場所が戒壇であり、唐招提寺には三重の石段で造られた戒壇がある。また唐招提寺の講堂は、平城宮にあった東朝集殿を移して寺院用に改築したもので、平城宮の建物として唯一残る貴重な建築物である。金堂は平成になって大修理がほどこされ、奈良時代から屋根の上にあった鴟尾（しび）がおろされ、現在は新宝蔵で間近に目にする事ができる。

本単元では、鑑真や唐招提寺の仏像、祭事について見学や調査活動を通して学ぶことで、持続可能な社会づくりの担い手を育むことを目的としている。

3. ESDの視点の明確化

【持続可能な社会づくりの構成概念】

本単元では、持続可能な社会づくりの構成概念のなかで次の3つを学ぶことができる。

構成概念Ⅰ 多様性

唐招提寺の釈迦如来立像は鎌倉時代につくられたものである。その胎内から多くの文書が発見されている。そのひとつに「必ず必ず、これらの衆生より始めて、一切衆生、皆々、仏となさせ給え」とあり、多くの人名が記載されているが、そこにはクモ、ノミ、カ、シラミ、ムカダ、ミミズ、カエル、トンボなどの名前も交じっている。また、5月19日にはうちわまきという行事が行われるが、鎌倉時代に唐招提寺を復興した覚盛上人が、蚊も殺さなかったということ寺伝が、この行事の始まりである。この二つを通して、人だけではない、生き物すべてについて考える態度を養うことができる。

構成概念Ⅱ 相互性

唐招提寺の開祖である鑑真は唐僧である。鑑真をテーマとした学習を展開することで、国際交流の重要性を学ぶことができる。

構成概念VI 責任性

鑑真の言葉「仏教のためなり、何ぞ身命を惜しむことあらんや。諸人行かざれば我即ち行くのみ」や、5度の失敗を越えて渡日した鑑真の行動から、責任性や主体性について学ぶことができる。

4. 留意事項

① 教材のつながり

本単元では、2年生の生活科の町たんけんや3・4年生の社会科の地域学習、総合的な学習の時間において学んだ地域の文化遺産の学習を踏まえ、そこで身に付けた調べ方やまとめ方、発信の仕方を応用する。また6年生の社会科の奈良時代の遣唐使や鎌倉時代の文化とも関連付けながら取り組むことができる。また道徳の「社会的役割と責任」とも関連付けて取り組むことができる。

② 人のつながり

唐招提寺の方へのインタビューや奈良市文化財課、奈良国立博物館、奈良文化財研究所等の協力を得ながら学習を進める。さらに奈良観光ボランティアガイドの会の方等、文化財の価値を発信されている方と直接出会い、文化遺産の保護や発信に関する気持ちを聞き取る。

③ 能力・態度のつながり

人間も含めたすべての生き物のをことを視野に入れた行動の仕方や、一度決めたことはあきらめずに粘り強く取り組むことなどを、日常生活の場面においてどのようにすればよいか、自己の生活を振り返りながら考えさせたい。

5. ESDの視点を生かした授業の実践

(1) 単元の目標（重視する能力・態度）

態度・能力① 批判的に考える力

唐招提寺に関する多種多様な情報から必要な情報を取捨選択し、よりよい課題解決を主体的に進め、考えを深めることができる。

態度・能力③ 多面的、総合的に考える力

唐招提寺を通して文化遺産の保護、伝統の伝承について、必要とされる環境や社会など多面的、総合的に考える力を養うことができる。

態度・能力④ コミュニケーションを行う力

グループでの調査活動やインタビューや聞き取り調査、それをもとにした考察などの学習を通して積極的にコミュニケーションしようとする力を養うことができる。

態度・能力⑥ つながりを尊重する態度

鑑真の行動、初夏如来立像に込められた願いから、自己と社会、自己と自然とのつながりについて関心を持ち、それらを尊重しようとする態度を養うことができる。

態度・能力⑦ 進んで参加する態度

鑑真の行動から、持続可能な社会づくりのための自分の役割を自覚し、自主的・主体的に、また粘り強く取り組む態度を養うことができる。

(2) 評価規準

批判的に考える力	多面的、総合的に考える力	コミュニケーションを行う力	つながりを尊重する態度	進んで参加する態度
①鑑真の渡日の意志を考える。 ②リーフレットの内容について、代替的にアイデアを出す。	①鑑真や唐招提寺の調査結果を比較し、共通点を見出す。	①インタビューや聞き取り調査に積極的に取り組む。	①調査結果をもとに、自己の生き方と環境との関連を考える。	①地域のよさを調べ、進んで発信する。

6. 単元展開の概要 (全 16 時間)

主な学習活動	◇学習への支援 ◆評価
1. 鑑真に関するDVDを視聴する。(1) 2. 学習課題をつくる。(1)	◇ NHK for School 第 36 回「鑑真～海を渡ってきた中国の僧」を視聴させる。 ◇ 奈良時代の様子について、社会科とも関連付けて解説する。 ◆ 鑑真の渡日の意志を考える。(批判①)
なぜ、鑑真は何度も失敗してもあきらめなかったんだろう。	
3. 鑑真や唐招提寺について調べまとめる。(6) ・ 唐招提寺の見学 ・ 図書館を利用する。 ・ 文化施設を利用する。	◇ なら観光ボランティアガイドの会と連携し、少人数グループで唐招提寺を見学する。 ◇ メモをとったり、インタビューしたり、多面的に取材する方法を指導する。 ◇ 図書館等の利用の仕方を指導する。 ◆ 主体的に調査できる。(コミュニケーション①)
4. 調べたことの交流(3) ・ 鑑真の行動について ・ 釈迦如来立像の胎内文書について ・ うちわまきについて	◇ 共通点を見つけるよう指示する。 ◇ 自分の生き方と比べて考えさせる。 ◆ 調査結果を比較し、共通点を見出す。 (多面・総合①)
5. 鑑真・唐招提寺リーフレットの作成(4) ・ ESDの視点から、鑑真の行動や唐招提寺から学んだことをまとめる。	◇ これからの自己の生き方や生活スタイルについて考えたことを記述させる。 ◆ リーフレットの改善に取り組む。(批判②) ◆ 自己と環境との関わりを尊重する。(つながり)

6. 地域の文化遺産を調査し、個人でリーフレットを作成し、学級でリーフレット交換会をするほか、地域でも配布する。(1) (課外)

◇ 保護者と一緒に取り組めるよう、保護者に協力を要請する。

◇ 作成できたリーフレットを評価し、さらなる行動化への意欲の向上を図る。

◆ 自主的に粘り強く取り組み、発信する。(参加)

十津川道普請 ESD 体験ボランティア

— 持続可能な社会づくりをボランティアから考える —

奈良教育大学 ユネスコクラブ

1. はじめに

平成 14 年文部科学省中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」において、『奉仕活動・体験活動』は、人、社会、自然とかかわる直接的な体験を通じて、青少年の望ましい人格形成に寄与する。」として、18 歳以降の青少年の奉仕活動・体験活動の推進が奨励された。また小学校・中学校・高等学校においては、新しい学習指導要領の総合的な学習の時間の「内容の取扱い」において、ボランティア活動を積極的に取り入れることとされるなど、自己の在り方や生き方を考える力を育成する上で、ボランティア活動の重要性が指摘されている。

奈良教育大学ユネスコクラブでは、平成 23 年の台風 12 号により被災した十津川村で「道普請」ボランティアを実施している。「道普請」によって修復している道には世界遺産である紀伊山地の霊場と参詣道も含まれている。この取組を本クラブでは ESD のひとつに位置付け、平成 24 年 1 月から断続的に取り組んでいる。この体験を踏まえ、ESD の視点からボランティアの意味について考察を加えたいと思う。

2. ねらい

- ・ ボランティア活動を通して持続可能な社会づくりへの積極的な態度を育てる。
- ・ ボランティア活動と近代社会における賃労働の比較を通して、客観的時間についてクリティカルシンキングを行うことで、時間に関する概念を再検討する。
- ・ 「道普請」の企画、実施、報告会の開催を通して、様々な人たちと協力しながら運営するスキルを身につける。
- ・ ボランティアの必要性について社会と人間の側面から考察し、持続可能な社会の実現における時間概念について理解を深める。

3. 活動の概要

(1) 平成 23 年 9 月の台風 12 号による被害について

台風 12 号の接近にともない、紀伊半島の広い範囲で河川の氾濫や洪水、土石流、土砂崩れなどの被害が発生した。奈良県五條市大塔町においても大規模な土砂災害が発生し、本学の奥吉野実習林も被害を受け、現在も研究施設の利用ができない状態である。

十津川村においては、死者 6 名、行方不明者 6 名、負傷者 3 名という人的被害の他、家屋への被害、長殿、栗平の 2 か所における土砂ダムの形成など大きな被害を受け、現在も仮設住宅での生活を余儀なくされている方もおられる。また、十津川村には後述する紀伊山地の霊場と参詣道という世界遺産に登録されている 2 本の道があるが、この道においても土砂災害や倒木被害が発生するなど、通行不能になっているところがある。これらの道は世界遺産に登録される以前に、十津川村民にとって生活道路である。村民は代々これらの道の保全や修復に取り組んできたが、

今回の被害の大きさと村民の高齢化に伴い、道普請ボランティアを募集することとなった。

(2) 紀伊山地の霊場と参詣道について

日本には現在 16 件の世界遺産が登録されており、そのうちの 3 件が奈良県にある。法隆寺地域の仏教建造物(1993 年登録)、古都奈良の文化財(1998 年登録)、紀伊山地の霊場と参詣道(2004 年登録)であり、いずれも文化遺産として登録されている。

登録基準は次の 4 点である。

- ii ある期間を通じて、又はある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、町並み計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの。
- iii 現存する、又は消滅した文化的伝統又は文明の、唯一の又は少なくとも希な証拠となるもの。
- iv 人類の歴史上重要な時代を例証する、ある形式の建造物、建築物群、技術の集積又は景観の顕著な例。
- vi 顕著な普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統、思想、信仰又は芸術的、文学的作品と、直接又は明白に関連するもの。

紀伊山地の霊場と参詣道は三重県、奈良県、和歌山県にまたがる紀伊山地にある吉野・大峯、熊野三山、高野山という 3 つの霊場とそれらの霊場をつなぐ参詣道(熊野参詣道、大峯奥駆道、高野山町石道)から構成されている。奈良県内の具体的物件として、吉野山、吉野水分神社、金峯神社、金峯山寺、吉水神社、大峯山寺等が登録されている。また県内にある参詣道としては、吉野・大峯と熊野三山を結ぶ修験者の修行の道である大峯奥駆道と熊野参詣道のうち高野山と熊野三山を結ぶ小辺路(こへち)がある。

(3) 十津川道普請 ESD 体験ボランティアの概要

① 第 1 回

日時 : 平成 24 年 1 月 21 日～22 日 (奈良県南部振興課との共催)

参加者 : 学部生 6 名、大学院生 1 名、教職員 3 名 計 10 名

活動場所と内容

1 日目 : 玉置神社近辺の大峯奥駆道の修復

2 日目 : 玉置神社近辺の大峯奥駆道の修復と間伐材運搬の森林ボランティア

② 第 2 回

日時 : 平成 24 年 2 月 23 日～24 日

参加者 : 学部生 2 名、大学院生 3 名、教職員 1 名 計 6 名

活動場所と内容

1 日目 : 十津川村歴史民俗資料館で十津川村の概要や世界遺産を学ぶ

十津川村観光振興課地域雇用創造協議会の方から、十津川村の現状や「道普請」について学ぶ

2 日目 : 熊野参詣道の小辺路(神納川から三浦峠)の修復

③ 第 3 回

日時 : 平成 24 年 5 月 26 日～27 日

参加者 : 学部生 5 名、大学院生 4 名、教職員 1 名 計 10 名

活動場所と内容

1 日目 : 笠捨山の道の修復

2 日目 : 竹筒集落近辺の道(玉置神社参詣道)の修復

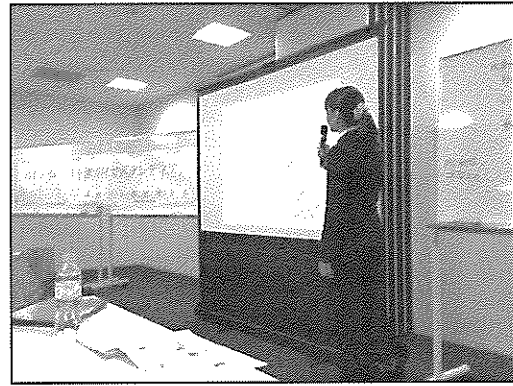
④ 第4回

日時 : 平成24年11月24日～25日(ろうきんとの共催)

(4) ボランティアの実際

① シンポジウムの開催

第4回の道普請では、経験者を中心にボランティアサポートセンター学生スタッフとユネスコクラブで学生実行委員会を立ち上げ、企画から携わった。今回はろうきんとの共催であり、学生・一般の参加者を募集するため、10月26日に事前シンポジウム「十津川村でボランティア」を開催した。



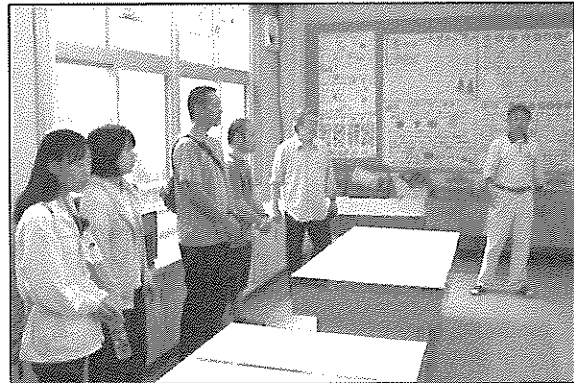
② 勉強会の実施



第2回の道普請では、宿泊地である旧五百瀬小学校神納川HBPにおいて、地元の方に過疎化や学校の統廃合、村での暮らしといった十津川村の現状について交流する。旧五百瀬小学校校舎には、最後の在籍児童たちのメッセージが黒板に残されていた。また図書室には児童の絵画作品も掲示されており、地元の方々にとって、小学校がなくなる意味の大きさについて実感させられた。

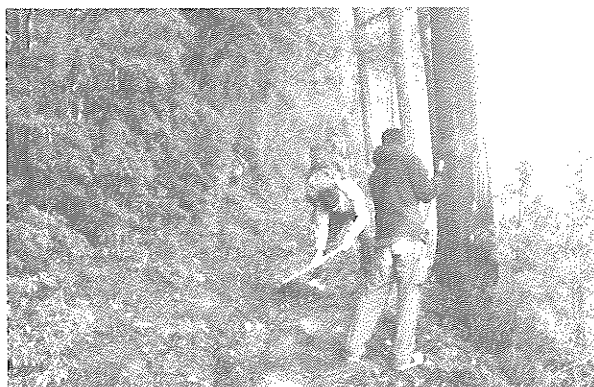
③ 十津川村立十津川第一小学校訪問

第3回の道普請では、ユネスコクラブの先輩が勤務する十津川第一小学校を訪問させていただいた。本小学校では、昨年の台風による河川の氾濫で1名の児童が亡くなっている。台風時のことや卒業式などでの対応、また避難所運営等について、教頭先生から指導していただき、あらためて教員という仕事の重さについて考えさせられる。



④ 道の修復と森林ボランティア

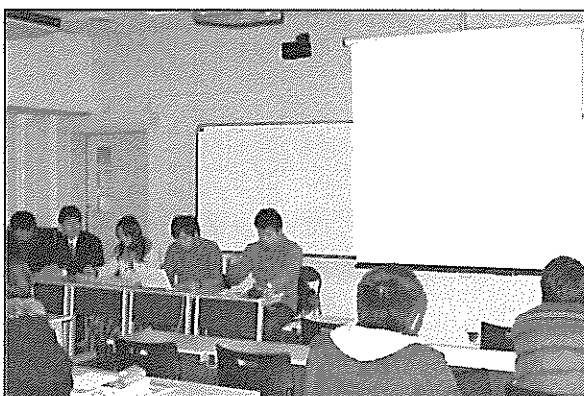
道の修復といっても、重機を使うようなものではない。台風によって道に覆いかぶさっている土砂や枝、倒木などをトンガやジョレン、竹ボウキといった道具を使い、全くの手作業で整備していく。ただ、作業現場までの道のりが遠く、急斜面を登り続けたり、道なき道を行ったりという苦しさがある。その分、整備された道を見ると充実感を得る事ができる。



⑤ 森林ボランティア



第1回の道普請の2日目には、十津川村主催の道普請に参加されていた方々とともに、間伐材の運びだしなどの森林ボランティアも体験する事ができた。健全な育林に間伐は欠かせない。ところが林業家の高齢化等により、間伐してもそれを林道まで運び出せない現状がある。チェーンソーを使った伐採は林業家にまかせ、間伐材の運び出しボランティアに汗を流した。



⑥ 報告会の開催

ボランティア体験を学びにつなげる目的で、体験レポートの作成を行っている。また他者への伝達を目的とした報告会を開催し、活動を紹介すると共に意見を交流することで、ボランティア活動の意義を考え合う機会としている。東日本大震災津波の被災地でボランティア活動をした学生からの意見など、学べることが多い。

4. 考察

(1) 持続可能な社会の形成に関するボランティアの意味

第一次産業が主流であった時代、自然を相手にする産業では、季節ごとに仕事が決まっていたり、緩急があったりと時間は不規則な円運動として捉えられていた。また職人の世界では労働時間に関わらず、仕事の出来栄えによって賃金が決められていた。そこでは時間は自然との関係性や労働との関係性の中に存在していた。ところが現代の私たちは、時間とは常に一定の速さで流れている（時間の矢）客観的な存在であるという概念を持っている。我々はこの客観的な時間の存在を前提に労働に従事し、時間当たりの労賃によって生活していると同時に、時間に即して生産された商品を購入している。つまり現代の市場経済は時間と共に存在しており、我々の存在もそのシステムの中に位置付けられている。

現代社会において、自然との関係性の中にあつた時間が「合理的でないもの」「効率の悪いもの」として退けられてしまったことが、自然の一部である人間の生きにくさや、自然を無視した経済活動による環境破壊の一因であろう。報酬を求めないボランティアは「時間×労賃+利潤=商品価値」という市場経済の定式を乗り越え、人間・自然と時間の関係性の再構築を手がかりに持続可能な社会のあり方やそこでの人の生き方を考察する糸口になるのではないだろうか。

(2) 道普請とESD

十津川村では村民の手で、数百年にわたって道普請が行われてきており、その一部が世界遺産に登録されている。これまでも台風被害は何度もあり、失われて当たり前な道が現在も存在しているのは、村民の利他的行動の蓄積であろう。今回の道普請はその長い利他の歴史を受け継ぐことでもある。自分のことより人のこと、まわりの生物のことを考えて行動することが、持続可能な社会の構築に決定的に必要であり、道普請はそれを体験的に学ぶ機会として重要である。

十津川道普請に参加して

数学教育専修 1回生 濱崎 千華

今回行った「道普請」という活動は、台風によって大きな被害を受けた山道を歩けるように整備する活動でした。私は、この活動の話を知るまで、「道普請」という言葉を知りませんでした。参加しようと思った理由は、十津川村も道普請も初めてで興味があったことと、ボランティアに積極的に取り組みたかったからです。活動を終えて改めて振り返ると、とても充実した2日間だったと思います。

私は、この活動を通して学んだことが3つあります。第1に「努力は報われるということ」、第2に「チームワーク」、第3に「自然災害の怖さ」です。

第1の「努力は報われるということ」は、山で道普請をしている時に感じました。登山時は枯葉や石で足場も悪く、とても危険な山道だったけれど、道普請をしていくうちにしっかりと土を踏みしめながら歩ける道になったのです。自分たちが一生懸命やってきた成果が一目瞭然で、今までにない達成感を感じることができました。

第2の「チームワーク」です。今回参加した1回生は私だけで不安もありましたが、一緒に活動した先輩方は親しみやすい方ばかりで、何も心配はいりませんでした。山道では、すれ違う度に「お疲れ様です。」と声をかけ合いながら活動していたので、弱音を吐くこともなく、スムーズに進めることができました。地面が脆く危険な場所は、先に行く先輩に安全な進み方を教えてもらいながら、協力して進みました。男と女で使用する道具を異なるものにし、男女2人1組で進めていきました。前回の道普請に参加した先輩の話によると、前はペアを組まずに一人で進めたそうです。私は今回が初めてでしたが、1人で黙々とやるよりは、二人で多少の会話を混ぜながら進める方が効率的だと思いました。

第3の「自然災害の怖さ」です。今年の春から奈良に住み始めた私は、十津川村がどんな村かとか、どれほど台風の被害を受けたのかを知りませんでした。道普請をした山道は、倒れた木々が道をふさぎ、積もった枯葉で滑りやすかったです。先導していただいた北村さんによると最近まで立っていたという鳥居が倒れていて、跨がざるをえない場所もありました。見てすぐに台風の被害を受けた結果だと分かりました。2日目に訪れた十津川第一小学校では、洪水の怖さを知りました。教頭先生から、小学校を避難所として開放した時の様子について詳しいお話を聞かせていただきました。何もかもを壊してしまう自然災害の怖さを痛感し、どうすることもできないもどかしさを感じました。

以上の3つのことを学びました。活動を通して得られたものは本当に大きいです。今回参加できなかったメンバーも、経験しておくべきだと思いました。今年はまだ何度か道普請に行く計画があるので、次の機会もぜひ参加したいです。また、これからも道普請だけでなくボランティア全般に積極的に参加していきたいです。

二度目の十津川道普請ボランティアを経験して

文化財造形専修 2 回生 横井まどか

昨年九月、台風 12 号の影響により奈良、和歌山、三重県に跨る世界遺産“紀伊山地の霊場と参詣道”が被害を受けたことを覚えていますか。大々的に報道されたのは、熊野那智大社のご神体である那智の滝が土砂で埋まってしまったというものでした。これは和歌山県での被害であり、崩れ落ちた山が新聞の一面を飾っていたことを記憶している方は多いかと思えます。最初に記しましたように“紀伊山地の霊場と参詣道”とは和歌山県だけではなく奈良県と三重県にも跨っています。特に、今回の道普請の舞台であった奈良県の十津川村はその参詣道やそれに準ずる道が密集する地区です。しかしその現状については、今年一月に道普請が持ち込まれるまで私は全く知らず、まず道普請ってなんだろう？というところからの出発でした。道普請の普請とは仏教用語で、人々を集めて寺院のお堂や塔の労役に従事してもらうことです。今では単に建築や土木の工事のお手伝いという意味で使われているようです。

道普請ボランティアに行くのは今回が二度目でしたが、前回よりも良かったと思ったことが 2 つあります。一つ目は前回よりも人数が多かったこと。二つ目はペアワークです。

一つ目の人数が多かったことについてですが、以前私が参加した道普請では 6 名という少人数のために、作業があまり進みませんでした。しかし今回は 10 名という大人数。作業の進みが早いですし、みんなが作業して歩きやすくなった道を歩くとみんなの頑張りが感じられて、自分も頑張ろう！という気になります。何より、大人数の方がご飯やお風呂の時はしゃぎ方が派手で楽しいですからね。

二つ目のペアワークについてですが、これは一つ目の人数にも関係します。今回は人数が多いということで、男女のペアで作業をするという形をとって作業を始めました。女子が落ち葉を払い、男子がその後に残った石や木の枝を掻いていくという形態をとったペアが多かったのですが、これがとにかく楽。役割を分担してあるので作業の効率が良いですし、なにかトラブルが起きた時に直ぐに助けが来てくれるので安心です。一人だと、知らない間に滑落してた、なんて笑えないことが起こり得るのでその心配が減った分作業に集中しやすかったです。さらに、一緒に作業をしているので道が出来ているのを確認して、協力して道を作り上げた！という達成感の共有がありました。これは一人ではできないことです。

昨年度の二月に初めて道普請のボランティアに参加させていただいたのですが、これがとにかく辛くて、もう二度と行かない！と騒ぎ立てたものです。が、文句を言いつつも今回の道普請ボランティアも参加することに。何故？と、自分でも不思議でしたが、辛くてもしんどくても泣きべそかいても、それに勝る何か道普請と言うものにあるような気がします。どんなに挫けそうになっても周りのみんなが励ましてくれて、自分は色々な人たちに支えられているんだと言うことを漠然と感じたり、自然の中で人間が生きていると言うことを実感したり。何より自分の作った道を振り返って見た時の感動は、参加した人にしか分からないものだと思います。皆さんも、もし機会がありましたら道普請ボランティアに参加してみてください。

十津川村ボランティアで感じる ESD と魅力

物質科学専修 2 回生 後藤田洋介

十津川村道普請ボランティアとは、平成 23 年の台風 12 号によって一部損壊した、世界遺産「紀伊山地の霊場とその参詣道」の道普請（道の修復を行う）ボランティアである。道の修復といっても大きな重機を用いるわけでもなく、小さなクワのような道具を用い、車で入ることのできない細い山道を修復が主な活動です。奈良教育大学ユネスコクラブは、この十津川村道普請ボランティアを開始して、今回の活動で早くも三回目となりました。第一回では足元にまだ雪が残る季節に、第二回は前日に雨が降り、川が増水していました。二回の活動を通じ、天候には恵まれていませんでしたが、ついに第三回目で快晴に恵まれました。



道普請を終えてみんなで記念撮影

私がこの第三回道普請ボランティアで感じたことは大きく分けて三つあります。それは、第一に、世界遺産に直に触れ、その修復を行ったこと。第二に、自分の中での十津川村のイメージの変化。第三にボランティア意識の変化です。

第一に、世界遺産に直に触れることについて。われわれは目に触れる世界遺産を自らの手で修復することはまずないと私は思います。しかし、この十津川村道普請ボランティアでは、世界遺産「紀伊山地の霊場とその参詣道」を道普請するので、世界遺産に直に触れ、その景観、価値を未来に受け継ぐ ESD を自らの手で体感することができると思います。

第二に、私の中で十津川村といえば、「十津川警部」のイメージしかなく、どこにあるかさえ、わかりませんでした。しかし、この道普請ボランティアで十津川村を訪ね、十津川村の景色を知り、また、人と交流をすることで、私の中で十津川村のイメージが劇的に変化しました。最近では、十津川村のニュースなどを見るたびに、十津川村の様子が気にかかるようになりました。こうして、心の中につながりを感じられたこと、そのつながりは、自分と人であったり、自分と地域であったりしますが、自分の中で、十津川村の認識が変化したと感じています。

第三にボランティア意識の変化です。今まで、ボランティアをしている様子を見て、「何のためにしているのだろう」と感じるばかりでしたが、このボランティアを行ってみて、確かに、「もう一度ボランティアに行きたい」「最後にやり残したところはどうなっただろうか」と思うようになりました。そうなった理由は一言では語り尽くせませんが、地元の方々の「ありがとう」であったり、おいしいご飯であったり、体に残る筋肉痛や、心に残るやりきった感など、いろんな要素が私に働きかけ、「もう一度、ボランティアをしたいな」という気持ちになっているのではないのかと私は感じています。

以上の三点が、この十津川村道普請ボランティアで私が感じたことです。物理的に未来に景観や価値を残すことも、自分の中につながりを残していくのも、これからも続けていこうと思うことのどれもが、この十津川村道普請が感じさせる ESD の、ボランティアが感じさせる魅力ではないのかと私は思いました。

十津川村とわたし

国語教育専修 4回生 清水 阿弓香

11月24日、25日に道普請に行きました。参加しようと思ったきっかけは単純で、前に道普請に参加した人たちが、とても魅力的な体験をお話してくださったからです。今回は抽選で見事当選し、運よく行けることになって、本当にありがたかったです。

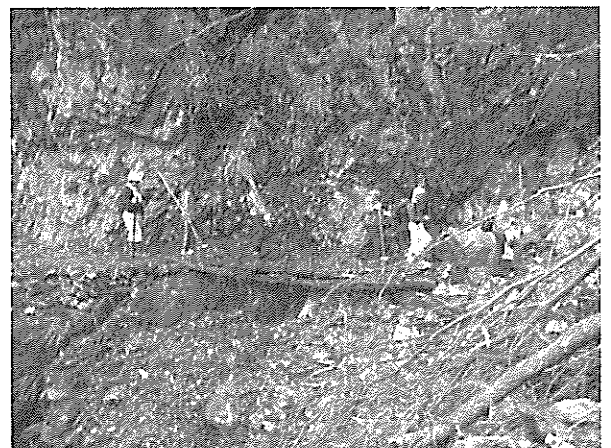
今回の体験を通してお話したいことは3つあります。第1に十津川村の自然について、第2に社会に出るということについて、第3にボランティアについてです。



第1の十津川村の自然についてですが、空気が澄んでいて、森も豊かで、神聖な場所に来たような印象がありました。とても美しかったです。道を歩き始めると、その感覚は更にはっきりとしていきました。美しい景色の中での作業は、とても気持ちがよかったです。作業をしながら私は漠然と、「この自然を守りたい」と思いました。しかし今、全ての活動を終えて十津川の自然を振り返ってみると、「守る」という言葉はふさわしくないよ

うに感じるのです。どちらかという、「共に生きる」といった言葉のほうがピンとくるのです。一日目に作業したところは、前も作業をしたところだと聞きました。道は何度も自然によって危機にさらされていました。それでも道はなくなることなく、今も使われ続けています。自然のありのままの姿が見える、いい意味で整っていない自然はとても美しく、厳しく、力強いものでした。自然を破壊することなく、畏怖し、共に生きてきたのが十津川村なのではないかと思いました。

第2の社会に出るということについて。学生として社会人の方と交流する機会はそうありません。とても勉強になりました。教員になることに不安を感じているとお話すると、「最初はみんな同じ」「あなたならやっつけていける」など、それぞれおっしゃってくださいました。心強かったです。道普請の作業のときは非常に積極的で、私も負けていられないという気持ちで頑張ることができました。社会人の方が特に頼もしく感じたのは、アクシデントが起こったときのことです。あ



の状況で私は軽くパニックになっていたと思うのですが、社会人の方や先生方が素早く正確な対応をされて、みんな無事に戻ってくることができました。社会に出るということは、きっと何に対しても責任が伴ってきます。その中で、あの方たちのように落ちついて判断し、しっかりと行動に移していかなければなりません。私はいいい見本をたくさん見ることができたと思います。来年に向けて、自分を磨いて

いきたいです。

第3のボランティアについて、私は何故か帰り道に物足りなさを感じました。参加するだけで学んだことはたくさんありました。みんなで協力しあって作業する連帯感の気持ちよさや、十津川村の人々のためになることをしているという充実感、世界遺産に手を入れたことも本当に貴重な経験でした。けれど、私が行く前に想像していたものと少し異なりました。悪い言い方かもしれませんが、観光に行って帰って来た気分でした。今思うと、



自己満足で終わってしまったように感じたのではないかと思うのです。私たちが作業したあの道を通る人を実際に見たわけでもなく、地元から直接感謝されたわけでもありません。達成感がないのだと感じました。「地元の人が参加されていないのが残念」とおっしゃったこととも関係があると思います。成果が見えて、顔が見えないボランティアというものは少し寂しく感じました。もしかしたら、くり返し参加することで見えてくるものなのかもしれません。

初めての道普請のボランティアでしたが、とても楽しかったです。ずっと遠かった十津川村が身近に感じ、また行けるという気持ちになりました。十津川の魅力も知ることができてよかったです。まだ道普請のボランティアに参加したことのない人には是非行ってほしいです。そのために、私は参加するきっかけをあたえてくれた人たちのように、この活動のよさを伝えたいと思います。

私が十津川村で得たこと

英語教育専修 1 回生 糸 綾香

11月24、25日、私は奈良県十津川村での道普請ボランティアに参加した。この取り組みは私がユネスコクラブに入部した最大のきっかけでもある。実際に現地に行くまでは、体力に自信がなく、作業を続けることができるかとても不安だった。しかしいざ始めてみると、とても楽しく、学びあり、笑いあり、ハプニングありと、短い時間で本当にたくさんを経験できた。

さて、今回の道普請を通して学び、経験したことの中から特に3つを紹介したい。第一に十津川村について、第二に自分の考えの変化、そして第三に私が感じる事ができた達成感の3つである。

まず十津川村についてである。今回私たちを案内してくださった北村さんから、十津川村にまつわる話をたくさんお聞きすることができた。例えば石垣についてである。十津川村の山道にはところどころに、石がたくさん組まれた場所があった。北村さんは、これらの石垣は明治期ごろに作られたもので、こんなにたくさんあるのは十津川特有だと教えてくださった。石垣は頑丈なつくりで、あれほど急な斜面にどのようにして作ったのだろうかと非常に驚いた。また1日目に作業をした笠捨山周辺の道は、昔、郵便配達夫が通った道であったそうだ。しかも驚くことに、当時の配達夫は真夜中にこの道を通っていたようだ。その過酷さと、恐怖からだんだんその仕事は無くなっていった。しかし、石垣、山道から昔の人々の力強さを感じた。

第二の自分の考えの変化についてである。この活動に参加する前や、実際に活動を始めた直後は、ただ道をきれいにしようという思いだけであった。しかし活動を続け、集団の先頭を歩いているうちに、だんだん考え方が変わってきた。自分が歩いていて滑った所や、歩きにくいと思ったところを後から来る人が通りやすいようにしようと思うようになったのだ。今回は社会人の方々も数多く参加してくださり、様々な世代の人々と関わる事ができた。私の考えの変化は、こういった仲間とのつながりから生まれたのだと思う。この思いはやがて、十津川村の人々とつながることもできるのではないだろうか。

最後に達成感についてである。一日目の作業が終わり下山をしている時、登ったときより歩きやすくなっていることを実感した。落ち葉が無くなり、崩れた道も少しずつ修復されていた。この時自分たちの手でこの道をきれいにしてきたのだ、という達成感を感じる事ができた。事前にそういった話を聞いていたが、やはり実際に体験してみると想像を超える達成感があった。また二日目には前日に自分たちが登った山を見る事ができた。北村さんから「昨日糸さんが登ったのはあそこだよ」と教えてもらった場所が思っていたよりも高い所で、自信無かったけど登れたんだと感動した。体力だけでなく、精神的にも少しではあるが自信を持つ事ができたように思う。

以上、3つのことを私はこの道普請を通して、学び、経験することができた。本当に今回の道普請は私にとって大きな体験となった。たった2日間であったが、これからも忘れることはないだろう。次回もぜひ参加したいと思った。今回得た少しの自信と体力とを今後もっと養っていき、これからの活動に生かしていきたいと思う。



大峰奥駈道にてチーズ！

十津川村の道普請に参加して

数学教育専修1回生 濱崎 千華

十津川村で行った道普請は、台風や豪雨などで崩れた山道を歩けるように整備するというものでした。私は、5月に初めて十津川村で道普請をしたので、今回で2度目でした。前回の活動と大きく異なるのは、学生だけでなく、社会人と一緒に作業したことです。事前にシンポジウムを行い、参加希望者を募りました。めったにない経験ができました。

さて、私は今回の活動で、嬉しかったことが2つあります。1つは「社会人と一緒に作業できたこと」、もう1つは「がんばりを認めてもらえたこと」です。

1つ目の「社会人と一緒に作業できたこと」です。私がやっていた作業は、道に転がる石をよけ、落ち葉を掃くという基本的なことでしたが、社会人の男性は、足場の不十分なところでは、あえて石を置いて、足場を固めていました。また作業は個人個人が自分のペースで進めていくやり方で、その途中に「もう少し間を空けて作業した方がいいよ。」とアドバイスをもらいました。この他にも、学生だけでは得られないような気づきが多くありました。学生が社会人と交流するのを楽しく思うのと同じように、社会人も「若い人たちと一緒に作業できて楽しかった。」と言っていました。いろんな年代の人が一緒に作業することに初めは不安もありましたが、そういつてもらえて嬉しかったです。1日目は、上手くコミュニケーションがとれない時があり、人が固まって作業の進みにくいことが反省点でしたが、2日目はみなさん慣れてきたようで、サクサク進められました。食事中やバスの中など、社会人と色々な話をして楽しかったです。



2つ目の「がんばりを認めてもらえたこと」です。作業中にすれ違う時「ここすごく綺麗になってるね。歩きやすいね。」と声をかけてもらったことが本当に嬉しかったです。道普請の作業に限らず、誰かに頑張りを認めてもらおうと嬉しくなります。将来教師になった時に、生徒の努力を認めてあげてを大事にしたいと思いました。1日目の傘捨山での作業は、足場の危険な箇所がいく

みんなハイ、チーズ！ つもあり、登るだけで疲れてしまいましたが、一生懸命みんなで作業して、終わってから味わう達成感と疲労感はとても心地よいものでした。

今回の活動を通して十津川村がもっと好きになりました。作業中のお弁当も民宿での食事とてもおいしかったです。山で蜂に刺されるというアクシデントがあった時、騒ぎを聞いて様子を見に駆けつけてくれた村の人もいました。十津川村の人々はとても温かいです。また、今回実行委員として参加して、緊急時に備えて、応急処置や対応の仕方も知っておくべきだと思いました。十津川村で過ごした2日間は楽しく、充実していました。道普請に参加した社会人や学生、企画から携わった実行委員、食事を作ってくださった十津川村の方、そして常に安全運転をしてくださったバスの運転手さん、この道普請に関わった全ての人に感謝の気持ちを伝えたいです。ありがとうございました。

ただいま。十津川村

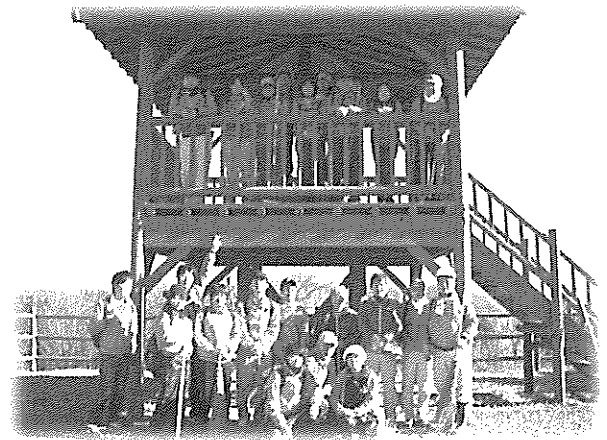
奈良教育大学教職大学院 中澤 哲也

11月23,24日と第4回目十津川道普請へ行ってきた。私にとって2回目の参加であった。今回は今までの学生だけの参加ではなく、社会の方々と一緒に参加するという形であった。学生が13人、社会人が10人であった。中学生から、仕事を退職された方まで幅広い年齢層であった。今回の道普請に参加したことで自分の中で、新たなボランティアについてのすばらしさに気づけたのではないかと考える。その理由は2つある。1つ目は2度目の道普請参加について。2つ目は社会人との共同活動についてである。

まず1つ目の2度目の道普請参加についてである。私が初めて道普請に参加したのは今年の1月で、10ヵ月前のことだった。当時はまだ台風12号の爪痕がはっきりと残っていた。土砂によって、あちこちの樹木がなぎ倒されている山に入っていく、初めてながらに一生懸命修復作業に汗を流した。そこでは仕事やアルバイトでは感じられないボランティアのすばらしさを感じることができた。奈良市に帰ってからはもう一度行きたいという気持ちが強くなっており、今回の十津川村に到着した時には故郷に帰ったようなどこかなつかしい感じがした。もし、10ヵ月前に観光として十津川村を訪れていたらこのような感じにはなれなかったと思う。道普請によって、私は十津川の自然に愛着を持つようになっていたのだ。これは道普請に2度参加したことで初めて気づけたことであった。この体験により、ボランティアは自分とその土地をつなげる力があるのではないかと感じることもできた。

次に2つ目の社会人との共同作業についてである。仕事を退職された方、現役で働かれている方、中学校の現職の先生など様々な方が参加された。学生と社会人との距離を縮めるために、行きバスや1日目のふり返りの場面でゲームなどを取り入れた。その場ではお互いが交流し合い、良い感じの雰囲気にはなっていた。しかし、時間がたてば、学生は学生、社会人は社会人といったように固まって行動する様子が多々見られた。せっかくの機会なのでこれはもったいないと思っていたが、2日目になると道普請の作業を通して、声かけが活発になってくるのを感じた。お互いを励ましあい、ねぎらいながら作業を進めていくことで1日目よりも効率よく、また作業も楽しくできたのだ。それだけでなく、協力して道をきれいにした時の達成感を共に味わったり、十津川の美しい景色を堪能し合ったり、作業後の温泉につかりながら2日間の思い出を語り合い、同じ空間を共有することで自然と心の距離が近づいたのであった。私自身、2日目の作業の休憩時間などに現職の先生から中学校の子どもの実態など、普段の大学院では聞くことができない貴重なお話を聞くことができた。このようにボランティアは普段関わることのない異年齢の集団も互いに仲良くなれるような力があるのではないかと感じることもできた。

以上が今回の十津川道普請に参加したことで、新しく見えてきたボランティアのすばらしさである。行けば行くほど、新しい何かに出会え、何かを発見できる十津川道普請。次の機会があればぜひ参加し、また十津川村に帰れることを楽しみにしている。



【道普請だからこそ出会えた仲間たち】

十津川村道普請に行っただこと

国語教育専修 1 回生 兒島 佑美子

私は11月24日、25日に行われた十津川村での道普請に参加した。中学生から社会人までの年齢層の幅広い参加者が協力しあって世界遺産の道を修繕した。途中大きなアクシデントに見舞われたが社会人の方々の迅速な対処により乗り越えることができた。

私は今回の道普請で3つのことを学ぶことができた。1つ目はたくさんの人との関わりの中から得られたもの。2つ目は世界遺産の道を自分で修繕することの意味。最後に十津川村の素晴らしさについてである。

まず1つ目にたくさんの人に関わりの中から得られたものについてである。私は最初にバスに乗ったとき、自分がとても人見知りなため2日間うまくやっっていけるか不安だった。しかも今回は社会人の方もたくさんおられたのでより不安だった。しかし道普請中にグループになって協力して作業したり、ご飯を一緒に食べたりしているうちにだんだん打ち解けていくことができた。それは私だけでなく全体がそうになっているように感じた。すでに教職に就いておられたり、今は退職されてボランティア活動のうちこんでおられる先輩方のお話を聞くのは大変勉強になった。1つの作業を協力して行うことで一体感が生まれ打ち解けられることがわかった。

2つ目に世界遺産の道を自分で修復することの意味についてであるが、まずこのような機会自体めったにないことである。さらに明治にはこの道は郵便配達に使われていたという話や昔から道普請をしてこの道は保全されていたというお話を聞くことでさらに自分がしていることの大切さを感じた。このような意味のある道は次の世代へも残していきたいと思った。昔の人もこのような思いでこの道を残してきたという、普段授業で聞いていることを自分の身で感じることができた。

最後に十津川村の素晴らしさについてであるが、道普請作業中や宿の周りの景色は雄大で本当に素晴らしいものであった。夜は街灯が少ないため星がとてもきれいに見えた。日本にこのような場所は減りつつあるので世界遺産の道と共にこのような自然の風景も残していくべきだと感じた。十津川の自然を感じながら入る源泉かけ流しの温泉やしいたけをはじめとする地元の食材を使った料理も満喫することができ、もっとたくさんの人に十津川のよさを知ってほしいと感じた。私にとって大変貴重な体験となった今回の道普請、機会があればまたぜひ参加したいと思う。



十津川道普請に参加して

奈良教育大学教職大学院 松浦 慎

日時：2013年1月21日～22日

場所：十津川村

宿泊地：かんのがわ HBP <http://www.kannogawa.com/>

センター試験休みを利用して、十津川村で道普請を行った。道普請とは「道路を直したり、建設したりすること。」(大辞林)であり、道普請を通して、自然への畏敬の念を抱く共に、先人に思いをしのび、自然と人間あり方について考えたいとの思いから参加した。具体的には、現地の草木が生い茂った道を整備したり、岩などが崩れているところはできる範囲で補修したりした。

十津川村のいたるところに、今年の台風12号の災害の傷跡が残っていた。また、高齢化による労働力不足も否めないようだ。

晩は、廃校になった五百瀬小学校を活用して活動している「かんのが HBP」に宿泊した。十津川で採れたものをいただいた。おでんや山菜のつけもの、しいたけなどどれも新鮮で素材の味が引き立っていた。2日目は、現地で活動されている方と、活動団体と行政のかかわり方についてディスカッションしたり、道普請の残った時間を利用して、世界遺産の玉木神社を参拝したりもした。

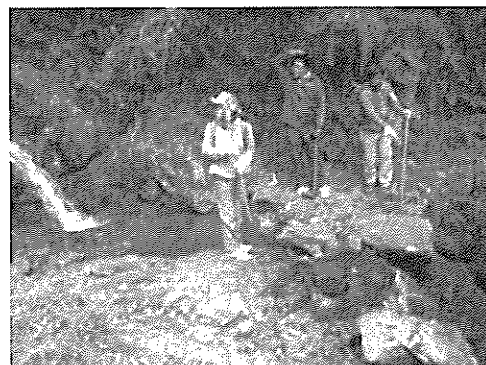
〈今回の道普請を通して感じたこと〉

・世界遺産の熊野古道も、山道も、一回作って終わりなのではなく、地元の人やかかわる人がこまめに修復・整備を繰り返し続けて今に至っているということを身をもって知った。

・初めての体験ということもあり、どのように補修すれば正解かが分からなかった。その体験を通して、素人がボランティアで道普請をすることで、地元の方々が長年受け継いでこられた修復の技術を風化させるのではないかという気持ちになった。しかし、高齢化による労働力不足は深刻だということもあり、「伝統文化の継承」と「労働力の確保」というバランスをどのようにとっていくかはこれからの課題であると考えている。

・地産地消は素晴らしい。

・地域を活性化するためには、地域の人だけではなく、外部の人の意見を参考にすることも大事である。地元の人にとっては当たり前のことでも、外から見ればとても有意義なことである可能性があるからだ。せっかくの魅力をたくさんの人に知ってもらう。来てもらう。それが過疎化をとめるきっかけになるも



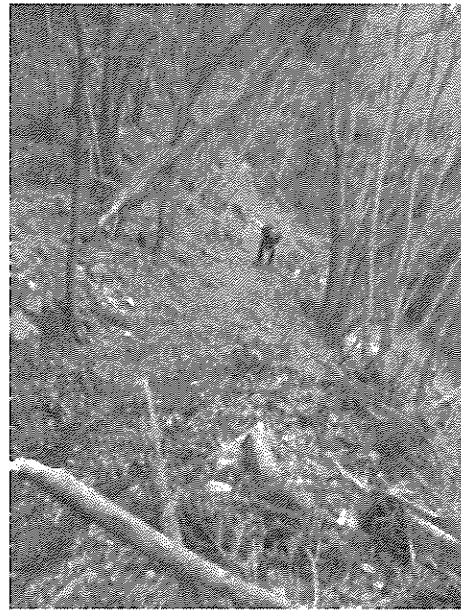
のと考える。

・活動団体と行政の連携のありかたについても考えさせられた。行政は数年単位で必ず異動するので、良好な関係が築きにくく、続きにくいという現状がある。傾向として数年で変わるので真剣にかかわろうとせず、結局溝ができてしまうシステムになっているように思われる。基本は対象を「好きになること」だと思う。いまここで起こっている事象は教育の世界でも同じことが言える。1年でクラス替えがあるからといって、その場しのぎのかかわりをしてはいけない。真摯に向き合うからこそ、信頼され応援され、協働できるのだと思う。

・コンサルタント系の起業が増え、その団体自体が自分で考えることをやめてしまっているような風潮を感じた。アイデアは専売特許でも何でもなく、自分ごとにしなさいといけない。そういうところに依存が大きくなると、気がつく創造力が低下し、組織の弱体化につながってしまう。

・玉木神社は、険しい山の上にあり、なかなか参拝困難である。急勾配に霊験あらたかな鳥居や神社、杉などがひっそりと祀られていた。長い日数をかけて熊野古道を通り、やっとの思いで辿り着いた時の修験者の気持ちに想いを馳せることができた。

・十津川村活性化計画を大学生とNPO団体と行政がコラボして考えると、お互いにとっても有意義なのではないかと考える。そこに十津川サマースクールなど教育のアプローチも組み込むことで、さらなる発展につながるのではないかと考えた。



第五回十津川村道普請ボランティアに参加して

物質科学専修2回生 後藤田洋介

2011年の台風十二号の被害から、1年半以上の歳月が流れようとしている。依然として、奈良県南部にある十津川村にはその爪痕が残っている。十津川村道普請ボランティアはその台風十二号の被害を受けた世界遺産「紀伊山地の霊場とその参詣道」の普請を行うボランティアで、すでに4回のボランティアが行われている。今回の1月21日から1月22日にかけてのボランティアで第五回目を迎えた。

私が今回の道普請ボランティアに参加して感じたことを、挙げて述べたいと思う。

○道普請で感じること

- 人との出会い
- 十津川村の自然
- 玉置神社

○道普請で感じること

私は今回の参加で道普請に三回参加した事となった。はじめての参加ではボランティアの価値について考えた。二回目では危険な道を歩むことで、昔の人の生活の厳しさ、現代における参詣道の持続不可能性について考えた。今回の三回目の参加で私が感じたのは十津川村がいろいろな「つながり」を感じさせるということだ。

○人との出会い

道普請に参加するといろいろな人に出会っている。大学生メンバーでの出会い、陰性との出会い、十津川村の方との出会いなど、たくさんあるのだが、その中でも、かんのがわ HBP の方、道普請を一緒に行っている方との出会いは大きいものがあった。かんのがわ HBP の方は今回の道普請で会うのが初めてではなく、私が初めて参加したときにお会いしている。この方は私の名前を憶えてくださっていて、まさに出会いが続いていることを感じた。また、今回道普請を一緒に行った方は、私は参加していない道普請の参加者で、十津川村の魅力に取りつかれ、十津川村に移住してきた方など。また、毎回お世話になる十津川村市域雇用創造課の方なども、この道普請ボランティアがなければ出会っていない方だと思う。この道普請ボランティア、しいてはボランティアには人と人を引き付ける力があるのではないかと感じた。



お世話になった方々との集合写真

○十津川村の自然

十津川村は周りを山々に囲まれている土地である。特産品としてはシイタケ、野菜など、またこんにゃく、柚餅子、めはりずしなどの加工品も有名である。産業としては源泉かけ流し温泉などが挙げられる。食事に関しておいしい地元の食べ物を味わうことができるとともに、地産地消が身をもって感じることのできる良い機会だと感じた。教科書では地産地消を推奨しているが、都会で地産地消を体験する

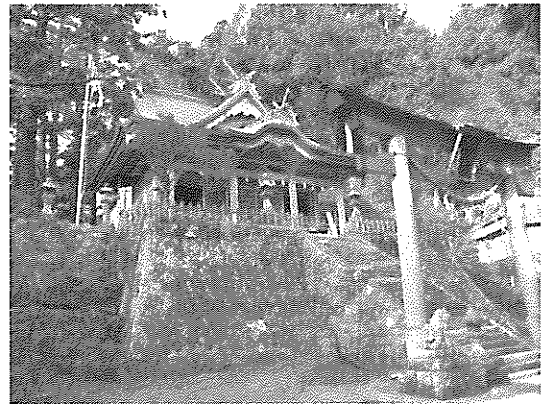
のは難しい。しかし、十津川村では、「隣の方に人参をいただいた」「烏骨鶏の卵をもらったから卵がけごはんにして」という地域のつながりと、地産地消を身近に感じることのできる良い体験を行えたと思う。温泉では、道普請の疲れを取り除くことができるうえ、参加したメンバーと距離を縮める良い機会だったと思う。十津川村の自然は、地産地消、温泉などで、人と人の距離を縮める力を持っているのではないのかと感じさせてくれた。



十津川の自然を生かした夕食

○玉置神社

玉置神社は玉置山の山頂付近に位置し、世界遺産「紀伊山地の霊場とその参詣道」の構成要素で有名である。私は三回の道普請ボランティアに参加しているが、どの回も玉置神社の周辺の道普請ではなかったため、今回、玉置神社を訪ねるのが初めてだった。とても周囲の長い大杉や国宝の襖絵、玉石社、そして玉置山の頂を見ることができた。玉置神社から玉置山の頂までは、その前日、その日の朝が雨だったためかもしれないが、落葉などで、登山しにくい状況でもあった。先人たちが通ってきた道をなくさないためにも、道普請ボランティアの必要性を感じた。



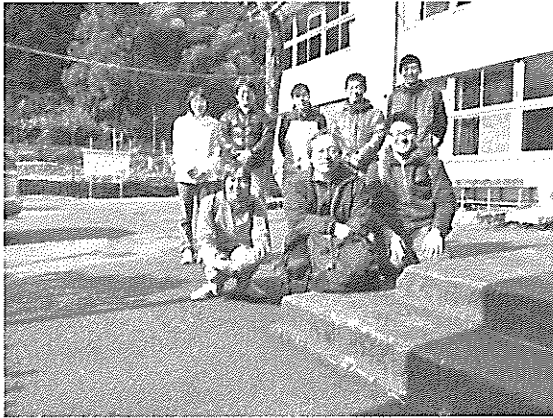
玉置神社

○終わりに

世界遺産である「紀伊山地の霊場とその参詣道」における道普請ボランティアは、ただ道を直すというところにとどまらず、その現地の人々との交流、自然とのふれあいから、日本人が忘れつつある、人と人のつながり、人と自然とのつながりを再確認するきっかけとなるに違いない。また、世界遺産を我々の世代で価値の内容にしないように、このボランティアを継続し、参詣道の持続可能性を高めることが大切だと感じた。

第5回十津川道普請に参加して

数学教育専修 1回 濱崎 千華



1月21・22日に奈良県南部にある十津川村で道普請ボランティアを行いました。私自身は3回目となる道普請でした。十津川村で行った道普請は、台風や大雨の影響で崩れた山道を、道具を使ってきれいに整えていく作業です。相変わらず登山は疲れますが、参加回数を重ねるうちに、作業はスムーズに進められるようになりました。自分でも上達したと感じられることが嬉しいです。季節も変わり、改めて十津川村の良さを感じ、新しい学びも得られました。

さて、私は今回の道普請で考えたことが3つあります。1つ目は「道普請をする意味」、2つ目は「感謝の心」、そして3つ目は「これからの十津川道普請ボランティア」です。

1つ目の「道普請をする意味」です。今回の道普請は、高津という所で行いました。各自道具を持ち、40分程山を登り、目標地点で一旦休憩をしました。この時、一緒に作業をしてもらった北村さんと森本さんに少し話をしてもらいました。北村さんの話によると、私たちが40分間息を切らして登った山道や、その先の険しい道は、昔、寮生活をする高校生が週に1回自宅へ帰るための帰路だったそうです。今では歩くことも危ないと感じる道であるし、冬は特に雪が積もって滑りやすいので、私ならとても無理だと思いました。森本さんは、十津川村のお年寄りが健康センターで怪快に走るのを見て驚いたと話していました。十津川村は高齢化が進んでいるけど、お年寄りの方は昔からずっとこの十津川村で元気に生活してきたのだと分かりました。ここで考えた「道普請をする意味」とは、実際に山に登って、村民が使っていた道を自分も歩いてみることで、十津川村の生活を知ることです。改めて、道普請をすることは昔の人の文化を守ることなのだ学びました。

2つ目の「感謝の心」です。私は3回道普請をしてきたけど、1度も山道を利用する村民に会うことがありません。作業をされていて、これで誰もが通りやすい道になったのだろうか、私の自己満足で終わってはいないだろうか、と不安に思うことがありました。でも、今回、道普請をしている時に、一緒に作業をしていた先輩に「綺麗な。ありがとう。」と言われて、心が温かくなりました。今まで「お疲れさま。」や「頑張ろう。」と声をかけ合うことはあったけど、「ありがとう。」と言われたのは初めてでした。自分自身元気づけられてやる気が出たので、私もこれからは「道を通りやすくしてくれてありがとう。」と直接伝えたいと思いました。

3つ目の「これからの十津川道普請ボランティア」です。いつも私たちの道普請をサポートしてくれている北村さんが、3月で十津川村を離れるという話を聞いて、これからもこの道普請を続けられるのか心配になりました。どんな形でも、道普請は続けていきたいです。ユネスコクラブで参加していない1回生はもちろん、クラブ外の学生にもぜひ経験してほしいと思います。

以上の3つのことを考えました。今回の道普請は、今までで一番村民の話を聞いて、十津川村について深く考えることができました。また機会があればぜひ参加したいです。ありがとうございました。

第4回道普請

奈良教育大学教職大学院 1回生 島俊彦

11月24・25日の2日間で、第4回道普請が実施されました。昨年の台風12号によって崩れたり傷んだりした、世界遺産に登録されている十津川村の熊野古道の他、昔からの生活道を修復作業（道普請）しました。今回の道普請では、一般参加の社会人・ボランティアオフィス・ユネスコクラブ・近畿労金・十津川村役場から、総勢23人が参加し修復作業に汗を流しました。

昨年度より実施され、今回で4回目を迎える道普請ですが、私にとっては今回が初参加となりました。この活動に参加し、私は3つの大きな学びを得ることが出来ました。それは、第1にボランティアに対する価値観、第2に仲間の大切さ、第3が自然と人間の共生です。

第1のボランティアに対する価値観ですが、道普請に参加する以前の私は、ボランティアにあまり関わった事はありませんでした。関わったとしても学校行事等で行われる、半強制的なボランティア程度のもので、果たしてそれをボランティアと呼んで良いのか疑問を抱いていました。しかし、道普請で自然や今後道を通る人の為に汗を流す中で、自分達の頑張りが、他者や社会の為になるんだという実感を得ると共に、徐々に修復していく道を見て、達成感や充実感を味わう事が出来ました。この経験によって、ボランティアに対する消極的な価値観が一変し、今後も道普請へ継続的な参加をしたいと考えようになりました。

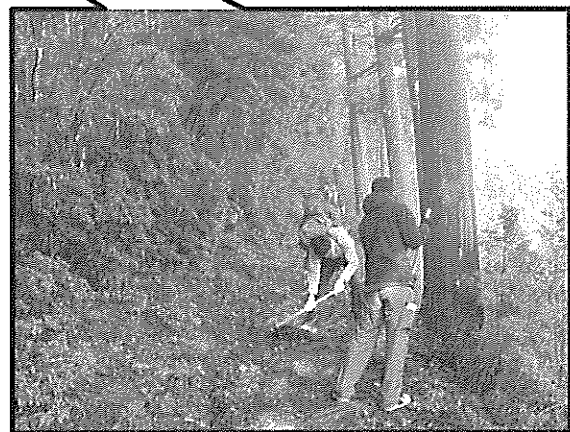
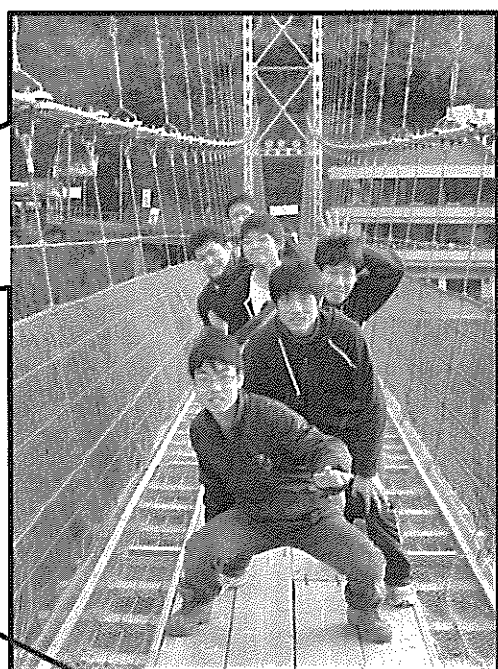
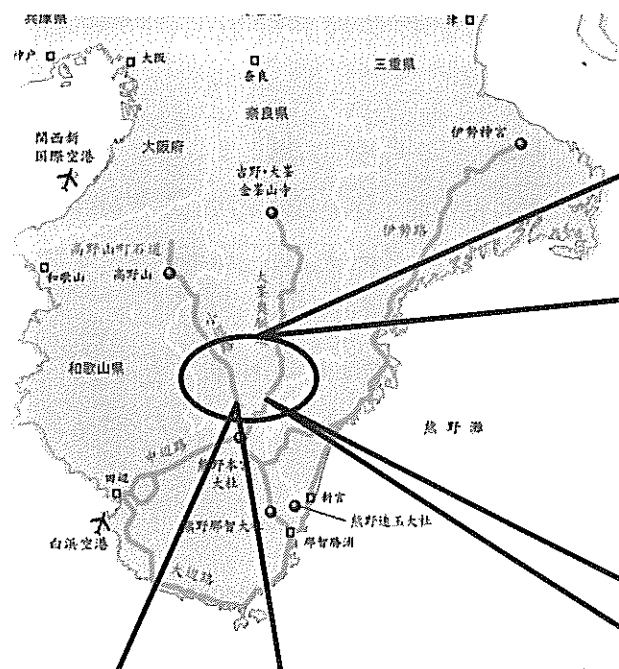
第2の仲間の大切さですが、今回の道普請では社会人と学生がチームを組んで、作業をしました。多くの人が初対面という環境の中で1泊2日を共にしました。普段関わることの少ない者同士が、十津川村の復興に尽力するという目的を共有することで、強固な絆をもった仲間となりました。険しい道中では、互いに励まし支え合う姿がありました。作業後の食事や温泉でも、互いの仲を深める事が出来ました。活動を通して、世代や立場を超えた大切な仲間を手に入れる事が出来ました。

第3の自然と人間の共生ですが、2日目に行った玉置神社の玉石には、本来なら山に有る筈のない白い石が沢山ありました。漁師が豊漁を祈って山に持ってきた石だそうです。昔の人達は、より良い海にするには山から良くすると言うことが、経験的に理解できていたのだろうと考える事が出来、自然と人間の共生のあるべき姿を考える機会となりました。

以上の理由から、道普請への参加が、自身にとって非常に貴重な学びにつながったと確信しています。今後も道普請やボランティアに積極的に参加し、より豊かな学生生活を送りたいと思います



十津川道普請 ESD 体験ボランティアフォトギャラリー

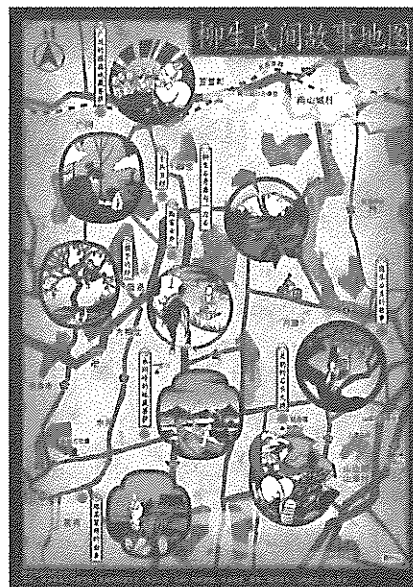


奈良の民話・伝統文化プロジェクトの活動紹介

青木智史

周知の通り、奈良には古くから各地域で語りつがれてきた民話などの伝承文化が存在している。これらは、伝承地域の歴史や風土、特色、文化などを世代を超えて語り継ぐものであり、かつては地域コミュニティの中で重要な教育的役割を担っていた。近年は地域コミュニティの希薄化や核家族化などに伴い民話の伝承そのものが失われつつあるが、奈良県は比較的多くの民話が現在も地域の中で語りつがれている。しかし、その担い手は減少の一途を辿っているのが現実である。さて、民話などの伝承文化は口承による「語りの文化」であり、「語る」ことにより人との繋がりを構築し、家庭内や地域内、世代間の関係性を保ち、地域コミュニティを持続的に維持していく働きも有している。この働きには、伝統文化の尊重や、生活する地域に対する理解の深化、人間愛や礼節、価値観、思いやりや助け合い、コミュニケーション能力の育成、自然に対する畏敬と知識など、地域社会・環境を持続的に支える重要なものが含まれている。これらは、ESDを推進していく上で大きな魅力といえよう。そこで、奈良県内各地に残された民話を活用した教育プロジェクトを企画した。具体的には、(1) 奈良各地の民話を活かした地図教材の作成、(2) 失われつつある民話・伝承の担い手の育成、の2つの取り組みである。

まず、奈良各地の民話を活かした地図教材の作成について紹介する。奈良教育大学では平成21年に「地域と伝統文化」教育プログラムの一環として「ならまち民話地図」の初版を作成して以来、奈良県内で伝えられてきた民話をテーマにした民話地図教材の作成を継続的に行ってきた。本学近傍の「奈良町」の民話以外にも、奈良県南部の特色ある地域である「吉野」の民話、そして奈良市東部の剣豪の里として名高い「柳生」の民話など、奈良県内の特色的な地域に着目した民話地図教材を制作している。「学ぶ喜び」プロジェクトの開始までに、「ならまち民話地図」は日本語、英語、ドイツ語、中国語、韓国語の5カ国語版を、「吉野民話地図」は、日本語、英語、ドイツ語、中国語、の4カ国語版、「柳生民話地図」は日本語版のみ、を作成・公開している。本プロジェクトではこれに加え、「柳生民話地図」の英語、ドイツ語、中国語の3カ国語版を新たに作成した。さらに、これまでに制作した民話地図も、ESDと「学ぶ喜び」という観点から、発展・改良して増刷を実施した。改良点としては、例えば「ならまち民話地図」「吉野民話地図」「柳生民話地図」の日本語版について、広く教材として活用されることを目指す観点から小学5年生以上で習う漢字や固有名詞にはルビを振り、それにあわせてデザインの変更を行った。こ



制作した「柳生民話地図」中国語版

これは、従来の民話地図が「語る」ことを意識した教材にもかかわらずやや難解な固有名詞などがあったことについて改善の要望があったため、本プロジェクトを契機に改善を図ることとしたのである。各外国語版についても利用する中で明らかとなった問題点の修正やデザインの改良を行っている。また、本プロジェクトで新たに制作した「柳生民話地図」の英語、ドイツ語、中国語については、奈良教育大学の学生や海外からの留学生、教員、海外協定校等が力を合わせ、共同作業により作成を行った。加えて、これら民話地図教材は、奈良教育大学で企画、調査、制作、公開、利用を一貫して行っており、教員を志す学生達に教材開発のノウハウを伝える重要なツールともなっている。例えばプロジェクト実施担当教員の学部・大学院における講義で教材開発例として活用し、優れた教員を目指す学生達の力量醸成のための一助とした。また、奈良教育大学のESD教材開発の一例として「第4回ユネスコスクール全国大会／持続発展教育（ESD）研究大会」で配布され、民話などの伝承文化が持つESDにおける豊かな可能性を示す資料とした。なお、同大会で行われた特別授業においても、平野啓子さん（日本ユネスコ国内委員会広報大使）から奈良の民話についての言及もあり、今後のESDにおける一層の民話の活用が期待される場所である。

もう一つの取り組みである失われつつある民話・伝承の担い手の育成は、公開講座の形で実施した。平成21年から毎年開講している奈良の民話をテーマにした「語り手養成講座」は、本学の学生だけを対象とするのではなく公開講座として広く一般に開かれたものである。平成21年度の「奈良の民話・語り手養成講座」、平成22年度の「なら・語りの入門講座」、平成23年度の「2011年度なら・語りの入門講座」と、継続的に開講し、多くの語り手の養成を行ってきた。そして今年度はそれをさらに発展させ「2012年度 語りの入門講座Ⅱ」として平成24年10月9日から全10回の公開講座として展開した。計51名の学生や一般の参加者があり、伝承文学研究者の奈良教育大学名誉教授の竹原威滋や、現役で活躍されている語り手の村上郁さんを講師に迎えて展開された。また、ESDでは、育成された人材の社会への貢献が重視されており、本プロジェクトにおいてもその点を意識した試みを併せて行っている。講師の竹原は、奈良の民話・伝承を語りつぐ活動として市民グループ「奈良の民話を語りつぐ会」を運営している。



「2012年度 語りの入門講座Ⅱ」の風景

「2012年度 語りの入門講座Ⅱ」を含め「語り手養成講座」で養成した語り手のうち有志が同会の活動に参加し、「奈良民話祭り」の開催や地域の幼稚園や図書館などで民話の語りを行っている。本学の「語り手養成講座」と市民活動「奈良の民話を語りつぐ会」が連携した人材育成から社会貢献までの一貫した取り組みとなりつつあり、今後も継続して取り組んでいきたいと考えている。

陸前高田市 文化遺産調査団派遣 報告書

1. 目的

2011年3月11日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市は大きな被害を受けた。市民の約1割にあたる人命が失われたほか、市庁舎を始め、博物館や図書館、文化ホール等の市の重要施設が被災した。多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市の市民を元気づけることになる。また、その文化遺産を通したESD教材を作成し、現地の小中学校で活用していただくことで、陸前高田市の子どもたちを勇気づけるものとなると考える。

2. 開催月日

事前調査 平成24年6月22日(金)～25日(月) 3泊4日

本調査 平成24年9月6日(木)～9日(日) 3泊4日

3. 派遣先 陸前高田市 常膳寺 小友小中学校、高田松原 他

4. 活動内容

- (1) 常膳寺での文化遺産調査
- (2) 文化遺産を通したESD教材の作成
- (3) 防災教育

5. 参加者

事前調査：加藤久雄、山岸公基、中澤静男 3名

本調査：教員 山岸公基、中澤静男、
大学院生 宮武杏名、小松原 絵里
教職大学院生 新宮済、中澤哲也
学部生 古川真里奈、幸田早苗 計 8名

6. 成果物

- (1) 3月10日の報告会において、概要報告・座談会および模擬授業を実施。
- (2) 各学生レポート・防災教育についてのレポート
- (3) 指導案「海をわたった中吉丸」「高田松原にこめた願い」いずれも 小学校ESD・総合的な学習の時間
- (4) 指導案「高田松原と人の関わり -陸前高田市の未来を考えよう-」小学校ESD・防災教育
- (5) 子ども配布資料
- (6) 仏像調査報告書(山岸)

1. 単元名 高田松原にこめた願い

2. 単元目標

- ・ 「高田松原」に関わった人々の生き方に関心を持ち、意欲的に調べる。 (関心・意欲・態度)
- ・ 「高田松原」を受け継いだ人々の想いを調べ、これからの自分にできることを考える。(思考・判断・表現)
- ・ インタビューなどを通して、先人から受け継がれてきた想いを聞き取り、まとめる。 (技能)
- ・ 高田松原と地域の人々との関わり、地域の人々の願い、努力を理解する。 (知識・理解)

3. 単元について

(1) 教材観

岩手県陸前高田市の名勝、「高田松原」は市民からも大変愛される陸前高田市のシンボルであった。約7万本もの松が海沿いに2キロメートルにわたって続いており、高田市民はもちろん、観光客にも海水浴や、憩いの場として親しまれていた。「高田松原」は1666年(寛文6年)、仙台藩主の綱宗公(伊達家19代藩主)が高田村の、豪商菅野奎之助に立神浜(当時の高田松原)の田畑に被害を及ぼす塩害や、強風を防ぐため、気仙郡高田村(陸前高田市高田町)に松の植栽を命じた(当時、仙台藩では、財力のあるものにその土地の公共事業を行なわせる手段をとっていた)のが始まりである。その約50年後には玉山金山を治める松坂新右衛門が同じく気仙川流域の新田を塩害、風害、洪水から防ぐために今泉村(陸前高田市気仙町)に松を植え、その2つが1つになり高田松原になった。塩分を含んだ砂地での植林作業は当時の技術では難しかった。植林後、明治20年と、昭和8年の三陸大津波、昭和55年のチリ地震津波では大きな被害がでたが、そのつど補植され、大切に育てられてきた。現在も高田市には「高田松原を守る会」が中心になって松原の補植活動がされてきた。

しかし、2011年3月11日の東日本大震災津波によって「高田松原」は1本を残して崩壊した。残された松は「希望の松」としてたくさんのメディアに取り上げられたが、やがて枯死してしまった。現在高田市ではその「希望の松」を地域の活性化のシンボルに、また、津波の恐ろしさを伝えるモニュメントにするという計画がある。

今回「高田松原」を教材化した理由は3つある。1つ目は菅野奎之助や松坂新右衛門が新田開発のために松を植えたことを伝えることである。松を植えたことで、人々がどれだけ助かったのかを当時の時代背景と合わせて考えることで、植林することの効果やすばらしさを学べるのではないかと考える。2つ目は江戸時代に植林された松を地域の人々がしっかりと現在まで受け継いできたことを知ることで、人々の努力や陸前高田市を愛する気持ちに気付くことができる。特に「高田松原を守る会」の方々にもインタビューすることで、より具体的な話を伺うことができ、児童の心にひびくと考える。3つ目に「高田松原」が津波によって流されてしまった今、先人から受け継がれてきた願いを次の世代に伝えるにはどうすればいいのかを考え、「高田松原」の代わりに、陸前高田市の子どもたちが次の世代に何を残していくのかを考え、行動するきっかけになると考える。

(2) 指導観

総合的な学習の時間では互いに教え合い学び合う活動や、地域の人との意見交換や交流活動などといった体験活動、言語によってものごとを整理したり、分析したりして考えを深める言語活動を共に充実させることを重視する。高田松原を指導する際、押さえておきたいことが3つある。1つ目は高田松原についての教育、2つ目は高田松原のための教育、高田松原を通しての教育である。

1つ目の高田松原についての教育についてである。高田松原の背景には多くの歴史がある。菅野奎之助や松坂新右衛門が新田開発のために松を植えたことや、三度の津波によって塩害にあったときも地域の人々が協力して

高田松原を守ったことを知ることで、学習者と保全にかかわった人々をつなぎ、大切なものを守る活動の価値や意義を理解することができる。

2つ目の高田松原のための教育についてである。陸前高田市には高田松原を守る会がある。現在、陸前高田市は津波によって高田松原を流されただけでなく、塩害によって、海岸沿いには松が育つことができない状況になってしまった。しかし、高田松原を守る会の方々は今も高田松原を復興しようと苗木を植えたりしながら頑張っておられる。こういった高田松原のための取り組みをされている方々から、実際にインタビューをすることで、より身近なものとして考えることができ、学習者の行動の「変化」のきっかけになる。

3つ目に高田松原を通しての教育についてである。高田松原が今まで存在していたのは、単なる偶然ではなく、江戸時代から長い年月の中で大切にされてきたからである。高田松原を通して、保全活動をされてきた人々に出会い、その生き方にふれることで学習者の視点が広がり、次は自分達の番であるという活動への意欲の向上が期待できる。また、「〇〇を守る会」などを自分たちで立ちあげることで、陸前高田市を守る一員として町づくりに参加し、まちのよさを自分たちで伝えていく切り口を見つけるきっかけにもなると考える。

3. 評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の 技能	社会的事象について の知識・理解
① 高田松原を植林・保全し続けてきた人々に関心を持ち、意欲を持ってしらべようとする。 ② 高田松原に込められた願いを次の世代に伝えるために意欲的に参加している。	① 植林・保全活動によって受け継がれた人々の願いや、思いを考える。 ② 高田松原が津波によって流されてしまった今、自分たちで先人の想いを伝えていくにはどうすればいいか判断し適切に表現する。	① 高田松原について調べたり、高田松原を守る会の方にインタビューしたりして、高田松原がどのようにして受け継がれてきたかを読み取りまとめることができる。	① 菅野壱之助や松坂新右衛門や、保全活動を行ってきた地域の方々の努力と、高田松原に込められた願いを理解する。

5. 単元計画（全 10 時間）

主な学習活動	学習への支援	評価規準				備考
		関	思	技	知	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">1. 高田松原を知ろう！</div> ○なぜ海岸沿いに高田松原があったのかを考える。 ○古地図をもとに高田松原が植えられたのか理由を話し合う。	●震災前の高田松原の写真・映像を見せる。 ●高田松原は植林によってできたものということに気づかせる。	①				高田松原の写真・映像 高田松原の古地図

<p>2. 陸前高田にいたすごい人</p> <p>○高田松原の歴史年表を作成する。</p>	<p>●「被災地からのレポート」より、菅野奎之助や、松阪新右衛門の資料を提示する。</p>			①	「被災地からのレポート」
<p>3. 高田松原を救え！</p> <p>○これまで明治20年、昭和8年の三陸大津波、昭和55年のチリ地震による大津波が陸前高田を襲ったことを知る。</p> <p>○三度の大津波で塩害を受けた松が、育ち続けていたところに注目し、地域の人々が守り続けていたことを知る。</p> <p>○次時の高田松原の保全活動について知りたいことを調べる。</p>	<p>●「被災地からのレポート」より、陸前高田市がこれまでに受けた津波の被害を提示する。</p> <p>●高田松原を通して、受け継がれてきた先人の思いを考えさせる。</p>		①	①	「被災地からのレポート」
<p>4. どうして高田松原を救ったのだろう</p> <p>○「高田松原を守る会」にインタビューをし、なぜ松が今まで守られていたのかを調べる。</p>	<p>●高田松原を守る会の方にきていただき、お話を聞く。</p>			①	
<p>5. 私たちの高田松原を思い出そう</p> <p>○高田松原は自分たちにとってどんな存在であったか考える。</p> <p>○インタビュー内容と、それに対する思い、また松原に対する自分たちの思いをグループでレポートにまとめる。</p> <p>○レポートの発表を通して、高田松原にこめられた願いを理解する。</p>	<p>●高田松原での家族の写真などを持ち寄る。</p> <p>●これまでの学習を整理させる。</p>			①	

<p>6. 先人の思いをつなげよう</p> <p>○自分たちが先人の思いを次の世代につなげるにはどうすればいいか考える。</p>	<p>●子どもたちにできる形で、伝えていけるようなものであることにする。</p>	②				
<p>7. 宝もの探しに出発!</p> <p>○資料集めを兼ねて、フィールドワークを行なう。</p>	<p>●昔からあるもの、現代のものなど、視点を与えるようにする。</p>	②				
<p>8. どうやって伝えよう?</p> <p>○地域で見つけた、大切に伝えられてきたことを自分たちが次の世代に伝えるためにどうすればいいか考える。</p>	<p>●高田松原だけでなく、様々な地域の紹介をする。</p>	②				
<p>9. 私たちの陸前高田市を伝えたい!</p> <p>○考えた計画をもとに実現できるか調査する。必要であれば、市に問い合わせる。</p> <p>○計画を実行する。</p> <p>○「〇〇を守る会」を結成し活動する。</p>	<p>●学校側の質問や提案はある程度まとめさせてから、市に協力してもらおうようにする。</p>	②				

6. 本時案

ねらい 高田松原を守る会の方のインタビューを通して、町の宝物を守ることの大切さを知る。

主な学習活動	学習への支援	備考
<p>1. 高田松原は様々な人によって支えられてきたことを知る。</p> <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px auto; width: fit-content;"> なぜ、高田松原は今まで守られてきたのだろう。 </div> <p>2. 「高田松原を守る会」に人のお話を聞き、守るためにどういった活動をしてきたのか、なぜ守ろうとしたのか、今後どのような活動をしていくのかを知る。</p> <p>3. インタビューを通して、感じたことを発表する。</p> <p>4. 昔からある地域の宝物を探しに行く計画を立てる。</p>	<p>○ 映像を利用して高田松原が津波に流されるまでの概要をおさえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 江戸時代に菅野奎之助や松坂新右衛門によって植えられたこと。 ・ これまでに3度の大津波を乗り越えてきたこと。 ・ 「高田松原を守る会」をはじめ、多くの市民によって守られてきたこと。など... <p>○ 「高田松原を守る会」の方のお話を黒板にまとめていく。</p> <p>○ 発表者の意見を黒板にまとめていく。</p> <p>○ 高田松原のように地域にもこれまで守られてきたものへ視点を与える。</p>	<p>ムービーメーカー</p> <p>「高田松原を守る会」の方へのインタビュー</p>

【ご指導欄】

小学校総合的な学習の時間学習指導案

奈良教育大学教職大学院 新宮 済

1 単元名 「海をわたった中吉丸」

2 単元の目標

- ・ 常膳寺の胎内墨書がある薬師如来立像の見学から、地域の歴史に関心を持つとともに、地域を大切にしようとする心を育てる。
- ・ 小笠原村と陸前高田市の時間を越えたつながりから、持続可能な発展に関する価値観の一つである人と人とのつながりの大切なことを考える。
- ・ 中吉丸関係者等へのインタビューや、インターネットや図書資料からわかったことを年表や図にまとめる。
- ・ 陸前高田市と小笠原村双方の関係者の中吉丸漂流への思いを共感的にとらえ、人と人とのつながりの大切さを理解する。

3 教材観

陸前高田市小友町の常膳寺（じょうぜんじ）の薬師如来像の胎内には墨書がある。そこには「小友村 大願主 及川庄兵衛」と書いてある。調査により及川庄兵衛はこの地に生きた先人であり、幕末に遭難した中吉丸の船主であることが明らかになった。ここで中吉丸の歴史について説明する。1839年中吉丸に乗り込んだ六名は、奥州気仙郡小友浦（小友町三日市）から荷物を積み、常州（茨城県ひたちなか市）に向けて出帆した。しかし、出帆から10日程たったころ、嵐に吹き流されて漂流した。漂流すること35日、中吉丸は小笠原島に漂着し島人に助けられた。小笠原島の島人は言葉、服装、顔立ち、食事すべてが異なっていた。しかしながら、お互いが身振り手振りを使い、意志を通じあわせ、船員は二か月間小笠原島で、彼らと生活した。日本に帰船した後、異国で生活していたことが幕府に知れ、江戸で取り調べを受けることとなった。9か月間のおよぶ取り調べを受けたが、無実が証明され小友浦出帆から1年1か月後に小友町へ帰った。当時江戸幕府は鎖国令を布いており、海外に日本人が行くことを禁止していたことが原因となったという事件が中吉丸漂流記に書かれている。当時小笠原島は外国人が住んでいて、捕鯨船の補給拠点としての役割を担っていた。当時、開国派として有名な渡辺崋山も、西洋の生活が垣間見ることができ一番近い異国として憧れていた。その島へ陸前高田市の先人達が偶然に足を踏み入れ、外国人と交流したのだ。彼らは、命を助けてくれた島の人からいただいた品物を、幕府から隠し小友町へ持ち帰り大切に守ってきた。

常膳寺の薬師如来像はこのような歴史を背景につくられた。東日本大震災によって170年前からの陸前高田市と小笠原島のつながりの証であった文化財(小笠原島からのお土産)は流されてしまった。しかしながら、このつながりは、途切れることはなかった。小笠原村の人々は陸前高田市へ復興支援を積極的に行ってくれたのである。

常膳寺の薬師如来像から中吉丸を学ぶことを通して、地域を誇りとし、また人と人とのつながりを大

切に思う心を育てたい。

4 指導観

子どもたちの学習意欲を高めるために、中吉丸の船員になるという疑似体験をする導入を行う。嵐によって漂着した島に住む人の、容姿、言葉、食べ物を提示して、漂着した島がどこの国であったか考えさせる。その島が小笠原島であり、かつて小笠原島は日本の国土ではなく、外国人が住んでいたということに驚くだろう。

ここで「小笠原村と陸前高田市はつながっている、それを示すものが薬師如来像である」という声掛けをし、子どもたちの概念を崩していく。子どもたちの「なぜ？」と思う気持ちを大切に、学習課題を設定していきたい。それぞれが立てた仮説のもとに主体的に調べ学習を行わせたい。課題解決のためには、現地に足を運んだりインタビュー調査したりすることが大切である。このような五感をつかった学習を行うことで児童の理解が深まる。またインタビューを通して、陸前高田市の人々がこの仏像を大切に思う気持ち、小笠原島の人たちへの感謝の気持ち、祖先を誇りに思う気持ちなどにふれさせたい。また多様な考え方にふれさせるために、様々な規模での話し合い活動を取り入れる。話し合いへの参加は児童の主体的な学習につながると考える。

最後に学習のまとめとして「この絆を後世へとつなげていくには」というテーマの話し合いを行うことで、陸前高田市と小笠原島をつないだ中吉丸のように、人と人のつながりを大切にしようとする役割を担う態度を育てたい。

5 評価の規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
① 中吉丸に関心を持ち、意欲的に調べる。 ② 進んで交流する。	① 中吉丸に関わる人々の思いを考える。 ② 人と人がつながる上で大切な利他的行動を考える。	① インタビューやインターネット、図書資料からわかったことを、年表や図にまとめる。	① 陸前高田市と小笠原村双方の関係者の中吉丸事件への思いを共感的にとらえる。

7 本時の目標

中吉丸がつなぐ陸前高田市と小笠原村について気がつくことができる

主な学習活動	予想される児童の反応	指導の留意点	評価
1 中吉丸の船員になって漂着した島がどこか考える。	アメリカ、沖縄 ハワイなど外国を想像する。	デジタル機器を使い児童の学習意欲をあげる工夫をする。	
2 ゲストティーチャーの及川さんにインタビューしながら、陸前高田市と小笠原村のつながりに貢献した中吉丸について知る。	「及川さんは、どうして小笠原村にいったのだろう。」	インタビュー内容をキーワードを板書していく。	
3 及川さんにインタビューをして自分が考えたことを発表し合いながら、人と人とのつながりについて考える。	「中吉丸は陸前高田市と小笠原村のつながりをつくった、僕らの地域の宝物だね。」	中吉丸が果たした役割を整理し、陸前高田市と小笠原村の交流への当事者意識を養う。	関心・意欲・態度②

6 単元計画（全15時間）

主な学習活動	学習への支援	評価について
<p>1 陸前高田の先人が漂着した島はどこだろう？(1)</p> <ul style="list-style-type: none"> 中吉丸漂流のロールプレイ 	<ul style="list-style-type: none"> イラストを提示し、意欲を高める。 写真資料や地図を用意し、漂流の大変さを感じさせる。 	<p>関心・意欲・態度 ①</p>
<p>どうして陸前高田市と小笠原村がつながっているのか？</p>		
<p>2 常膳寺に行こう (4)</p> <ul style="list-style-type: none"> 常膳寺の仏像を見学し、和尚さんから、お寺についての話を聞く。 薬師如来像の胎内にある墨書の中で読める文字を探していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域遺産が守り、伝えられてきたものであることを押さえる。 墨書の貴重さや身近に見学できる貴重さを伝え、意欲を高める。 及川庄兵衛という名前に注目させる。 	<p>観察・資料活用の技能①</p>
<p>3 中吉丸について調べる (4)</p> <ul style="list-style-type: none"> 図書館やインターネットを利用し、中吉丸の漂流事件を調べる。 中吉丸の乗組員の子孫にインタビューし、漂流事件に関する感想を聞き取る。 中吉丸事件の意味を話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> グループで目的を決めて調べる。 事前に主な質問事項をまとめて相手に伝え、インタビューの仕方を指導する。 中吉丸事件の貴重さを考えさせる。 	<p>関心・意欲・態度 ① 観察・資料活用の技能① 思考・判断・表現 ①</p>
<p>4 小笠原村との交流について (4)</p> <ul style="list-style-type: none"> 最近始まった交流に参加された方から、話を聞く。 東日本大震災津波の被災への小笠原村からの支援について調べる。 人と人のつながりについて話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 現在も交流している意味を考えると、人と人のつながりについて考え、一人一人が現代の中吉丸として、様々な人とつながっていこうという意欲を高める。 	<p>思考・判断・表現 ② 知識・理解①</p>
<p>5 まなびの交流 (2)</p> <ul style="list-style-type: none"> 小笠原村立小笠原小学校に、現在の気持ちを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちから働きかけることの大切さを指導したい。 	<p>関心・意欲・態度 ②</p>

総合的な学習の時間学習活動案

平成年月日

小学校年組

授業者

印

1. 単元名 高田松原と人の関わり ―陸前高田市の未来を考えよう―

2. 単元の目標

- ・ 高田松原とそれに関わった人々に関心を持ち、意欲的に調べる。(関心・意欲・態度)
- ・ 地域の人々の生活や願いと高田松原の保全や再生に関わる人々の努力や苦心を関連付けて考える。(思考・判断・表現)
- ・ 現地見学したり、地域の人々に聞き取り調査したりして、必要な情報を集め、活用する。(技能)
- ・ 高田松原と地域の人々との関わり、地域の人々の願い、努力を理解する。(知識・理解)

3. 評価基準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
高田松原とそれに関わる人々に関心を持ち、意欲的に調べている。	地域の人々の生活や願いと、高田松原に関わった人々の努力や苦心を関連付けて考える。	現地見学したり、地域の人々に聞き取り調査をしたりして、必要な情報を集め、適切にまとめる。	高田松原と地域の人々の関わりと地域の人々の願い、努力を理解する。

4. 指導について

(1) 教材観

岩手県陸前高田市にある名勝「高田松原」は約7万本もの松林が、海岸沿いに約2キロメートルに渡って続いていた。多くの人々に愛され、観光地として有名であり、地元の人々にも陸前高田市のシンボルとして親しまれてきた。「高田松原」の由来は、江戸時代の二人の先人によるものである。まず、一人目は富農であった菅野壱之助(かんのもくのすけ)である。高田松原の砂浜は荒涼とした不毛の地であった。そのため、潮風が絶えず砂塵が吹き上げては、近くの田畑を埋め尽くしたりして、作物は収穫がないこともしばしばあった。村では防風・防波・防砂の策を何度も講じたが効果は得られなかった。そこで、壱之助は1666年に仙台藩の命を受け、1667年に植林を行なった。このとき植林された松原が高田松原と呼ばれている。二人目は仙台藩の玉山金山の金山奉行を仕切った松坂新右衛門である。1637年ごろ、今の高田松原の西側後背地は新田開発が行われていたが、洪水や潮害、風害で苦慮していた。そこで、新右衛門が壱之助の例を励みに私財を投じて植林を行った。このとき植林された松原は今泉松原と呼ばれている。この二つの松原を総称して高田松原と呼ばれるようになった。どちらも海水が染み込んだ砂地、夏の高温、冬の凍結などの悪条件の中、松が根づくまで大変な苦勞と努力のすえ、成し遂げられたのだ。

しかし、2011年3月11日の東日本大震災津波によって、約7万本もあった松がたった一本を残して破壊されてしまった。現在は途中でちぎられたような松の木が海岸沿いに続いており、津波の破壊力を象徴している。「高田松原」があった海岸の砂浜も地盤沈下してしまった。しかし、その

崩壊してしまった「高田松原」を再生しようという活動が、「高田松原を守る会」を中心として行なわれている。また、奇跡的に残った一本松も「希望の松」として全国に知られ、現在モニュメント化されている。

今回、私が「高田松原」を教材にした理由は三つある。一つ目は陸前高田市の子ども達が地元の歴史を知る契機として、二つ目は「高田松原」を中心とした人のつながりが見えること、三つ目は「高田松原」を通して防災についても学ぶことができるからである。

一つ目の陸前高田市の子ども達が地元の歴史を学ぶ契機についてである。「高田松原」は陸前高田市竹駒町にある玉山金山と深く関係している。玉山金山では江戸時代まで多く金が取れ、人々の生活を支えていた。しかし、やがて金が取れなくなり、多くの人々が生活に困窮するようになった。そこで、新田開発が行なったのが菅野奎之助と松坂新右衛門である。こういった地元の歴史を知ることによって社会の授業で習った歴史と自分の住んでいる地域の歴史が関連付けられ、理解が深まり、自分の住んでいる地域のことを誇りに思うことができるのではないかと考える。

二つ目の「高田松原」を中心とした人のつながりが見えるというのは、「高田松原」の景観は前に述べた二人の先人以外にも多くの人々が協力して保全されてきたからである。「高田松原」は東日本大震災津波以前にも1896年の三陸大津波、1933年の三陸大津波、1960年のチリ地震津波などで海水を被り、大きな被害が出た。しかし、その都度地元の人々が捕植し、高田松原は守られてきたのである。つまり、「高田松原」は当たり前前に存在してきたのではなく、時代を超え地元の人々の支えによって存在してきたのである。これは「高田松原」だけでなく、地域の文化財や伝統行事、自分達にも置き換えて考えることができる。自分の身の回りのことに置き換えて考えることで地域の人々への感謝の思いや地域を愛する心を育てることができると思う。

三つ目の防災についても学ぶことができるというのは、他の地域の文化財や伝統行事にはない「高田松原」の持つ特徴である。二人の先人が植林したことと、現在「高田松原」を再生しようとしていることは、行動の内容としては同じである。先人達は新田開発をするにあたって塩害を防ぐために植林した。現在は地元のシンボルを復活させるため、そして津波の恐怖を忘れないため再生活動が行われている。行動に込められた思いや目的は異なるが、どちらも地元の人々のためという点では共通している。その「高田松原」に込められたメッセージの時代による移り変わりを理解する上で、今の子ども達が大切にしなければならないメッセージは、津波の恐怖を忘れないという願いである。津波を知らない未来の子ども達に本当の津波の恐怖を伝えられるのは、実際に津波の被害に遭った子ども達である。「高田松原」は東日本大震災・津波を風化させないために重要な役目を果たし、海と共に生き続けることを考えた町づくりを目指すことは、持続可能な地域社会づくりと重なると考える。

(2) 児童観 省略

(3) 指導観

この単元を指導するにあたって、配慮したい点は三つある。

一つ目は児童の地域への関心を高めることである。そのために、「高田松原」を導入教材として活用し、児童の調査活動などに対する意欲を高めることで、主体的に学ばせたいと考える。

二つ目に現地での五感を使った学びをさせることである。いつも何気なく接している地域の身近なものでも学習をした上で接すると、いつもは気づかないことに気づくことができたり、実際

に関係者と話を聞くことで、資料などを読んだだけでは伝わらないことが伝わってきたりする。現地で五感を使って学ぶことで、児童に地元を見直させたいと考える。

三つ目は児童に学んだことを自分の生活に応用させることである。「高田松原」から学んだことを授業で終わらせてしまっただけでは、もったいない。学んだことをどのように自分の生活に生かせることを考えさせたいと考える。

5. 単元展開の概要（全14時間）

	主な学習活動	○学習への支援 ◆評価	備考
第1次 (2時間)	1. 高田松原の歴史 ・ 2枚の絵図と現在の地図を比べる。 ・ 高田松原の歴史年表を読み取る。	○寺や神社、地形に注意して、絵図を読み取らせる。 ○双方の松原に注目させる。 ○2人の先人に注目させる。 ◆高田松原と地域の人々の関わりと地域の人々の願い、努力を理解する。	文政5年の今泉村絵図と高田村絵図 高田松原年表
第2次 (4時間)	2. 高田松原の現地見学 ・ 破壊された松原の現状を五感を通して理解する。 ・ 気仙沼市唐桑半島の津波体験館の見学	○陸前海岸の人々が昔から津波被害を防ぐために、努力していたことに気付かせる。 ○津波被害のメカニズムを理解させる。 ◆現地見学したり、地域の人々に聞き取り調査をしたりして、必要な情報を集め、適切にまとめる。	気仙沼市唐桑半島津波体験館
第3次 (2時間)	3. 高田松原の未来を考える ・ 津波の体験を共有する。 ・ 松原の今後について考える。 ・ グループで「高田松原を守る会」や「高田松原を保全しようとしている人の存在や活動について新聞記事や市政だよりなどを用いて情報を収集する。 ・ インタビューの内容を考える。	○無理に言わせないように配慮する。 ○高田松原を守る会について、最後に伝える。 ○「高田松原を守る会」の人にゲストティーチャーとして来ていただくことを伝え、質問内容を考えさせる。 ○質問は、事前に伝え、学習の意図を説明する。	新聞 市政だより

第4次 (1時間)	4. インタビューしよう。 ・ 「高田松原を守る会」の方にインタビューをする。	○メモを取りながら聞くよう、指示する。 ◆高田松原とそれに関わる人々に関心を持ち、意欲的に調べている。	ゲストティーチャー
第5次 (1時間)	5. 深めよう。 ・ 調査やインタビューの結果をグループごとに話し合ったあと、学級全体で未来に伝えていきたい陸前高田市について話し合う。	○松原再生への取組の背景にある「心」を考えさせる。 ○津波に負けずに、海と生きる町づくりの主役は自分たちだという当事者意識をもたせる。 ◆地域の人々の生活や願いと、高田松原に関わった人々の努力や苦心を関連付けて考える。	
第6次 (4時間)	6. 伝えよう ・ 高田松原の歴史や東日本大震災・津波を超えて伝えていきたい陸前高田市を絵本にする。	○伝えたいことを中心をはっきりさせ、場面構成を考えさせる。	
第7次 (課外)	7. 読み聞かせをしよう ・ 作成した絵本で、他学年の児童や地域の方に読み聞かせを聞いてもらう。	○感謝の心で絵本を聞いてもらおう。	

指導案作成：奈良教育大学数学教育専修1回生 幸田 早苗

防災教育について

社会科教育専修 4 回生 古川 真里奈

東日本大震災・津波が起きて、はや1年半が過ぎた。私たちは、この災害を過去のものとするのではなく、未来にも同様のことが起こりうるかもしれないと想定し、生かしていく必要がある。今回、私は9月に訪問した岩手県陸前高田市の経験をもとに、防災教育について述べていく。陸前高田市での経験は、私に防災教育の重要性や、危機感を与えてくれた。それを3・11以前の防災教育の在り方と3・11以後の防災教育の在り方（改善点）の2つの点から述べる。

(1) 3・11 以前の防災教育について

3・11 以前の防災教育について、ある一つの出来事が契機になっている。それは、1995年1月17日におきた阪神・淡路大震災である。この震災は、ここ数十年における防災への見直しになったのではないかと考える。また、「ボランティア元年」というように、誰かのために活動をするという助け合う心が人の行動へとあらわれた年になったのではないかと考える。この災害から、社会だけでなく、教育や学校現場も変わっていった。文部科学省においては、学校教育を対象として「生きる力をはぐくむ防災教育の展開」（平成10年3月31日）や「生きる力をはぐくむ学校での安全教育」（平成13年11月30日）をとりまとめ、防災教育の意義とねらい、機会と指導内容、進め方、展開例、防災管理の進め方等を示している。また、様々な防災教育教材を配付するとともに、独立行政法人教員研修センター等において、教職員を対象とする研修が行われている。学校現場においては、避難訓練や冊子・イベント等による啓発活動、被災者や語り部からの聞き取りなど、さまざまな活動をおこなっている。特に総務省消防庁制作の「学校の取り組む防災教育100選」には、先進的に取り組んでいる学校の防災教育の取り組みの事例が掲載されている。

一方で、自分の小中学校時代を振り返ってみると、防災教育といえば避難訓練しか記憶に残っていない。周りの大学生にも聞いてみると、おもに避難訓練だけという意見が多かった。2007年に和歌山県が行った「学校防災に関する実態調査」の結果の一部を表したのが下のグラフである。

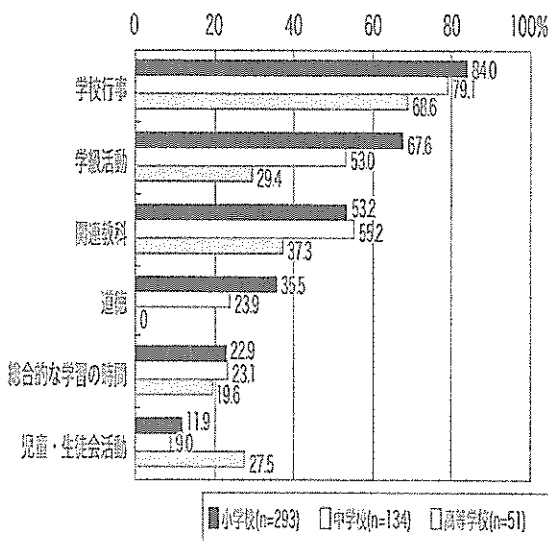


図 10.3 防災教育の実施状況（「行っている」の回答率）

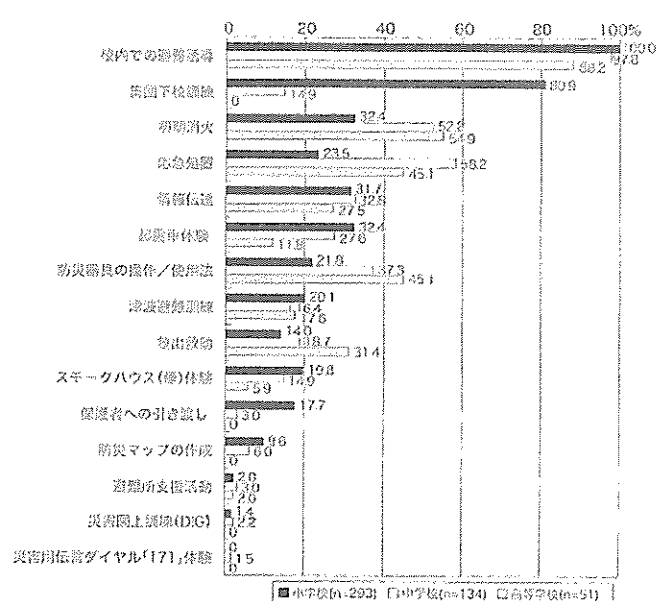


図 10.7 防災訓練 指導の内容（「行っている」の回答率）

左のグラフからは、防災教育は、「学校行事」として行われることが最も多く(81%)、「学級活動」(59%)、「関連教材」(52%)という内容になっていることがわかる。右のグラフは、防災訓練の内容についてであるが、ほとんどの学校で実施されているのが、「校内での避難誘導」(98%)である。次の「集団下楼」(88%)は、小学校で約81%実施されているが、中学校では15%、高校では実施されていない。また大多数の学校が学校管理において、マニュアルを作成している。また、学校は避難所に指定されていることが多い一方で、その避難所としての運営計画を作成しているのが約半数に留まっていることも調査から明らかになっている。

このことから、地域差はあるだろうが、学校現場においては、防災教育は行ってはいるものの、最低限度の対策しかおこなっていないように思える。次に3.11以降の防災教育の在り方について考えたい。

(2) 3・11後の防災教育における改善点について

3・11東日本大震災・津波では、たくさんの命が失われた。今でも、その被害は進行しており、まだまだ、復興できていないのが現実である。東北においては、防災教育ではなく、復興教育として取り組んでいる。一方、東北地域以外の学校における防災教育において、大きく変わったことがあげられる。それは、現実感のある防災教育を行う学校が増えてきたことである。その一つに、避難訓練があげられる。今までの避難訓練では、上記のグラフにもあるように、「校内での避難誘導」が主であった。しかし、今回の大震災が放課後に発生したことから、いつでもどこでも対応できるように、今では、授業内だけでなく、休み時間や放課後など様々な時間帯において避難訓練が実施されるようになったという。このように、実際に想定した訓練へと変わってきている。しかし、まだまだ、課題が残っていると思える。そう思えるようになったのは、実際に被災地について体感したからである。

今回、私が訪れた陸前高田市では、まだがれきの山がたくさん残っていた。市役所も、プレハブのままであり、中学校も被害にあったまま残されており、今は小学校の校舎を借りて合同で教育をおこなっているところもあった。今回、その小学校の校長先生に、震災の話を伺うことができた。お話しくださったことは、どれも体験を通した話で驚かされるものばかりであった。その中で最も心に響いたことは、マニュアルではなく、個々の子どもに生き延びる力をつけることが大切だということだ。マニュアルというのは、ある想定のもとで作られる。しかし、今回の東日本大震災の津波は、想定外の規模であった。マニュアル通りに行動する力ではなく、そのときの状況において自ら判断し、最善のことを尽くして行動する力が必要なのである。今日、「生きる力」の育成がいわれている。そんな中で、東北の子どもたちは、自らのからだでそれを実感したのではないか。そして、われわれも東北の人々の姿から、本当の意味で実感したのである。これは、生きた教訓として、未来につなげていかなければならない。「自然災害大国」日本に住んでいる私たちは、自然とうまく付き合って生きてかなければならない。今回のことで、自然のおそろしさを実感した。しかし、自然は安らぎもあたえてくれる。自然の二面性を実感した今こそ、自然との共生が今後の課題である。

わたしは、東北での学びと、実際の学校現場での様子に、ギャップを感じている。東北大震災での経験が、本当に今、活かされているのだろうか、疑問である。人間は「自分は大丈夫」という「正常化への偏見」がはたらく。自分には起こらないだろうと無意識のうちに思ってしまうのである。東日本大震災が起こる前から、防災教育は常におこなわれてきた。防災教育について、1. ハードとソフトが融合した防災教育、2. 地域をつなぐ防災教育、3. 世代をつなぐ防災教育、4. 「助かること」だけでなく「助けること」を重視した防災教育、5. 成果物を生み出しながら学ぶ防災教育、6. 生活に根ざし

た防災教育、7.「正解を学ぶ」だけでなく「みんなで考えること」を目指した防災教育という7つの視点がある。これは、阪神・淡路大震災後、注目されていたのである。これは、防災教育の根底にあるものだと考える。起こったから考えるのではなく、起こる前に考えて対応策をとっておくことは持続可能な社会を考えていくことと通底する。これが防災教育であると考えている。

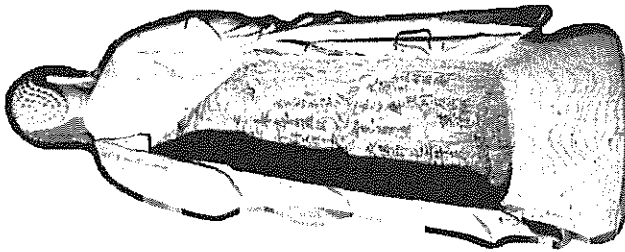
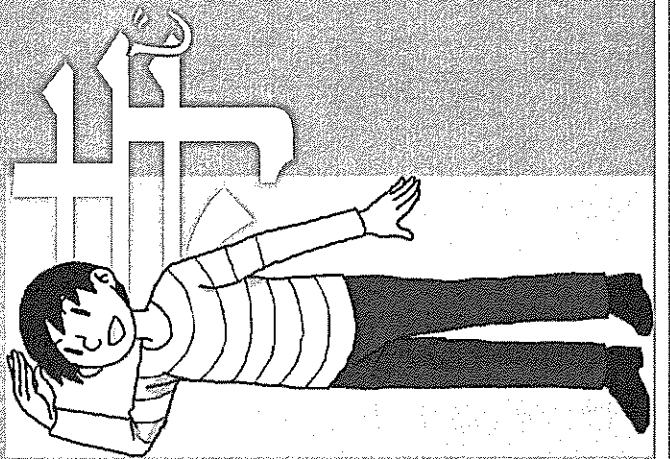
参考文献

- ・東日本大震災と学校教育―震災は学校をどのように変えるか―
著者：佐々木幸寿・多田孝志・和井田清司 出版年：2012年2月20日

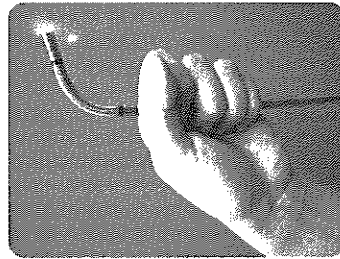
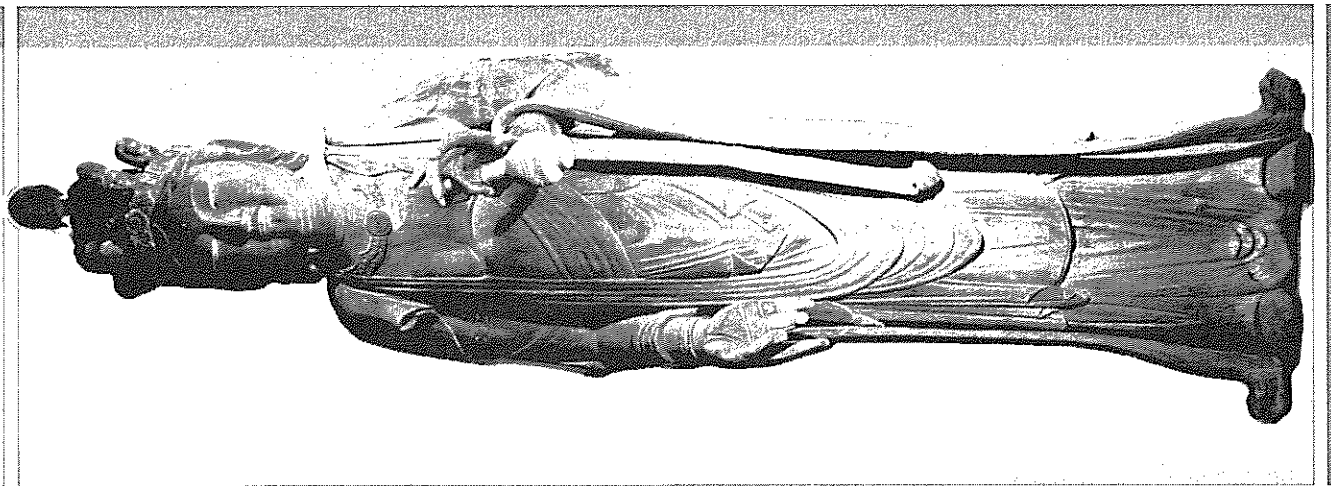
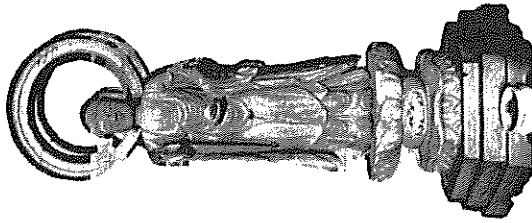
- ・教師のための防災教育ハンドブック
編者：山田兼尚 2007年3月31日 学文社

- ・国際防災・人道支援フォーラム2007 報告書―防災教育の取り組み―
平成19年2月28日発行 発行/国際防災・人道支援フォーラム実行委員会

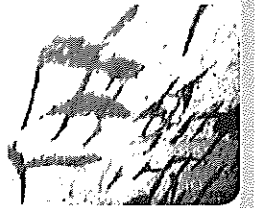
常陸守



仏像の中から書で書かれた文字が見つかることがあるよ。仏像が見つかった埋田や、完成日、仏像をつくった人、つくってもらった人の名前などが書かれているよ。常陸守の薬師如来立像にも書で書かれた文字が見つかったよ。及川庄兵衛さんが天保十三年に島上牛彦さんにつくってもらったことや、おだやかに国が栄えることを願って作られた、ということが書かれていたんだ。薬師如来は病気を治したり、国の安泰を願う仏さまだからこのお願い事はぴったりだね。同じ時代に漂流した「中舌丸」との関係も調べてみよう！



チューブの先にカメラがついているよ。



仏像の中を見るために「ファイバースコープ」という細い管の形をしたカメラを使うよ。お医者さんが私たちのからだの中を調べるのに使う胃カメラに似ているね。ファイバースコープが入りそうな穴や隙間から仏像のからだの中を調べよう。

常陸守の阿彌陀如来坐像の中も

ファイバースコープで探したら、

頭の部分に文字が見つかったよ。

「伊達」って文字がわかるかな？

どうやって文字をさがすの？



11面観音菩薩立像

文字通り、11面の顔を持つ広さまだよ、色々な方向を11面の顔で身振して、全ての人を救おうとしているんだ。常陸寺の十一面観音菩薩立像を見てください。えっ、顔1つしか見えない？ 顔の上をよく身でみて。11面の顔が少し小さくついているはずだよ。それぞれどんな気持ちでみんなを見ているんだろう。表情をよく観察してみよう。



思ったことを書く。

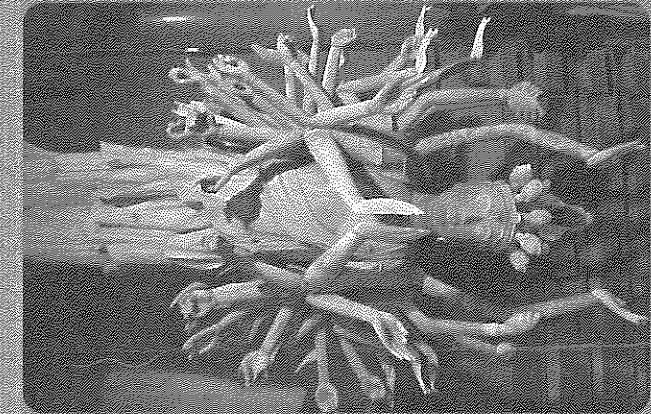
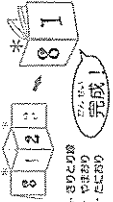
.....
.....
.....

まわりはどんな感じがあるかな？
書いてみてね！

おりにみブツのつくりかた

● 何枚も、はしりにつくるときは、必ずてまを、まわりの顔にあててみる。

● たて半は、とくまを、かけてのりする。



常陸寺って？

岩手県陸前高田市小友町の夷根山の中に
ある真言宗のお寺だよ。江戸時代の寛
文十一年(1671)に石門法印というお坊
さんが開いたと伝えられているよ。以前
は、ここで縁日もあったんだって。
観音堂、阿弥陀堂、客殿の3つのお堂
があり、その中にいろいろいるな仏像がまつ
られているよ。1000年前からたっている
と伝わる彫形もあるんだ。泉の天然記
念物に指定されて今も大事にされている
よ。

境内のようす



干手観音菩薩立像

干手観音菩薩は干の手と干の目を持つ
仏さまだよ。手のひらにある干の目でみ
んなの顔いっしょをみて、干の手でその顔い
っしょを叶えてくれるんだよ。
常陸寺の干手観音菩薩立像を見てもい
ま。たくさん手があるね。えっ、干本も
ないじゃないって？ そうなんだ。実は
干本の手を美濃に持っている干手観音
菩薩は少ないんだ。1本の手に25本分
の方を込めているんだって。この像には
美濃は何本の手がついているのかな？

干手観音菩薩は干の手と干の目を持つ
仏さまだよ。
干手観音菩薩立像を見てもいいよ。



陸前高田市を訪れて

数学教育専修 1回生 幸田 早苗

2011年3月11日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市は大きな被害を受けた。しかし、そんな中、高台にあった常膳寺というお寺の仏像は被災しなかった。この仏像などの文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市の市民を元気づけ、また、そういった文化遺産を通したESD教材を作成し、地元の小中学校で活用していただくことで、陸前高田市の子ども達を勇気づけることを目的で、今回の陸前高田市文化遺産調査団が派遣された。活動は文化財調査を中心とするA班と防災教育を中心とするB班に分かれて行なった。私はB班として主に被災地を訪れたり、地元の方々の話を聞いたりした。

私が陸前高田市を訪れて学んだことは四つある。一つ目はリアルな防災教育、二つ目は地元の人々にとっての高田松原、三つ目は地域教材としての中吉丸、四つ目は実際に五感を通して学ぶことの大切さである。

一つ目のリアルな防災教育というのはマニュアルでない、いつどこにいても災害が起こったときに命を守るための教育だ。例えば、大震災前まで被災地でも行われ、今も日本の多くの学校で行なわれている避難訓練は、学校に生徒がいるときに限られている。これでは、いつどこで起こるかわからない災害に対応できない。だから、様々な場面を想定した避難訓練が行なわれようとしている。また、昔からの言い伝えで「津波てんでんこ」という言葉がある。これは災害が起こったときには家族それぞれが自己責任で避難しろという意味である。1人でも多くの命を守るための重要な言葉である。これらは被災した小友小学校の校長先生が話してくださった内容である。実際に尊い子どもたちの命を失ったからこそその言葉の重みと、もう二度と同じようなことは繰り返さないという使命感が強く感じられた。気仙小学校は三階建ての三階まで津波が押し寄せたが、生徒全員が助かった。気仙小学校のグラウンドが避難場所になっていたが、お年寄りの高台へ逃げろという言葉で無事に避難できたという。現代は科学が進み、警報などを信じきってしまうが、「津波てんでんこ」や、お年寄りの「高台へ逃げろ」という言葉など、地域に伝わる言い伝えなども防災において重要だということだ。そういった点で地域とのつながりはESDや防災教育にとっても、重要である。また、次の災害に備えて、より正確な科学的な情報を個人が知っておくことも防災につながってくる。ほかにも、実際に被災したからこそその本当の防災教育について学んだ。これらは全国どこでも通用することなので、しっかりと伝えていかななくてはならないと思った。

二つ目は地域の人々にとっての高田松原である。日本百景の一つとしても有名な高田松原には約7万本の松が生えていたが、震災による大津波で一本を残し壊滅した。その一本が希望の松として全国に伝えられたものである。被災地の松原については地域の人々が補植などをして大切に守ってこられたことなどを私は事前学習をしていた。学習していた中に松坂家四代新右衛門が植林を行なったとあった。そのご子息の方が現地を案内してくださった方々の中におられて、詳しく話を聞かせていただいた。高田松原が海岸に生えていたから海が見えなくて津波が来ているか知ることができず、逃げ遅れたのではないかという意見もあるが、やはり、高田松原は地域のシンボルとして守られてきたものだから、これから松原を再生するつもりであるという。できれば元の場所に再生したいと言っておられた。実際にすで

に高田松原の松ぼっくりからとれた種で千本近くの松が育てられている。こういった活動は地域を元気づけ、つながりを深めるのにとってもいいことであると感じた。また、一本松についてはもう海の塩分で枯れており、これから1億5千万円かけてモニュメント化することが決まっているそうだ。この計画は市が市民に黙って決めてしまったことらしく、そんなに多大な予算をかけてモニュメント化する必要があるのかという地元の人々の声もあった。そういったことも含め、高田松原はこれから陸前高田市を復興する為の大きな課題であると学んだ。



津波で被災した高田松原

三つ目は地域教材としての中吉丸である。中吉丸とは江戸時代に江戸に海産物を届けるために小友浦から出航した船である。中吉丸は途中で嵐に遭って遭難し、外国人が住むある島に漂着して助けをもらい、江戸で事情聴取を終えた後、無事に乗組員全員が帰還した。この漂着した島が現在の小笠原諸島である。この事件にちなんで造られた仏像が文化財調査をした常膳寺に収められており、広田半島の琴平神社には記念して建てられた石碑もある。2年ほど前はから小笠原諸島の人々と交流もされている。この話を深く掘り下げていくと、当時ではどれほどすごいことか、日本の歴史の背景も見えてきて、とてもおもしろいと感じた。しかし、意外と地域の人たちには知られておらず、石碑などはあっても、学ぶ機会がないので、あるのが当たり前になり、興味をもつこともないそうだ。地元の人々の方が地域の魅力に気づきにくいものであるが、この中吉丸の話は地域を誇るものであると思うので、これから語り継ぐべきものであるので、教材化し、多くの子どもたちに知ってもらいたいと思う。

四つ目は実際に五感を通して学ぶことの大切さである。今回、私がこの調査に参加しようと思った一番の理由は、実際に被災地をこの目で見ておきたいと思ったからである。現代を生きる私たちがしなくてはいけないことは、東日本大震災の被害や津波の恐怖を、震災津波を知らない後世にしっかりと伝えていくことである。本当の被害や恐怖を伝えるには実際に現地に行くことが必要だと思った。被災地は私が思っていたよりも復興が進んでいなかった。津波にあった市役所や市民体育館、ぐちゃぐちゃになった車など、そのまま残されており、言葉では表しきれないほどの悲痛さ、残酷さを感じた。被災した建物に足を踏み入ると、匂いも外とは違っていると感じた。また、地元の人々の被災した話、当時を思い出し涙ぐむ姿は心に響いた。今までテレビや新聞などの多くのメディアで、たくさんの写真や映像を見て、たくさんの被災者の話も読んだりしてきた。被害の大きさや、被災者の方の心の傷などわかったつもりでも、どこか人事のように感じてしまっていた。しかし、実際に被害状況を見て、被害の規模を感じて、被災者の方の話を聞いて、初めて被災者の方の気持ちに近づけたと思う。それと同時に私たちが後世にこの体験を伝えていくことの重要さと使命感を改めて深く心に感じた。実際に五感を通して学ぶことの大切さは震災だけでなく、どんなことでも共通することだと思う。

以上の学んだことから、私がすべきこと、課題がはっきりとした。それは二つある。一つ目は震災で失われた多くの命を無駄にしないために震災・津波の恐怖や被害、そこから学んだことをしっかり伝えていくことである。二つ目は防災にも重要な役割を果たす地域のつながりを深めることである。この二つの課題を果たすためには教育が欠かせないと思う。教育とは勉学を教えるためだけでなく、命を守るためにも重要であることが身をもってわかった。これから教員を目指す立場として、生徒の命を守らなくてはならないという責任感を持ち続けたい。

岩手県陸前高田市の経験を経て

社会科教育専修 4回生 古川 真里奈

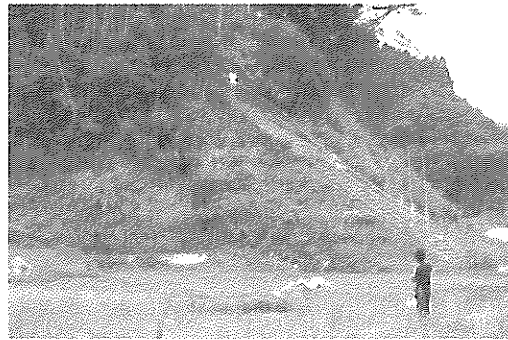
今回、この「学ぶ喜び」プロジェクトの岩手研修旅行では、大きく分けて3つの活動を行った。1つ目に常膳寺における文化財調査、2つ目に東日本大震災津波の経験をふまえた防災教育の調査、3つ目に、中吉丸についての調査である。私は防災教育について主に調べるグループに入り、事前に3回にわたる勉強会をおこなった。三陸海岸は昔から津波が多い地域であったこと、地域の歴史などを事前に学んだ。また、高田松原に関しては、奇跡的に残った松の木1本を今後どうしていくのか、疑問が生まれ、学習意欲を高める学習となった。

私が今回この活動に参加した理由は、学校における防災教育の在り方について学びたかったからである。教育実習に行った時、不審者の侵入を想定した訓練があった。その際に、担当の先生がおっしゃった「先生がみんなの盾になり、みんなを全力で守るから。」という言葉が今でも心に残っており、その言葉に考えさせられた。私は早ければ来年、教員として子どもたちの前に立つ。その時に、自信をもって子どもたちを守れるような教員になりたいと思い参加した。実際に、防災教育のグループに入り、たくさんのことを学んだ。そして、防災教育だけではなく、滅多に経験することのない文化財調査や現地調査をすることで、たくさんのものを得た。それを以下の3つの活動から述べる。

1つ目の常膳寺における活動では、十一面観音立像、千手観音立像、薬師如来立像、阿弥陀如来座像の4体の仏像について、ファイバースコープを使って仏像内の銘文を調査した。実際に、脚立を使って、約3メートルもある十一面観音像の頭部を間近で見たときは、とても感動した。一方で、なかなかファイバースコープを入れる隙間が見つめることができず、調査の困難さも実感した。実際に調査で成果を得られるのは約1割と伺った時、研究者の功績の裏にはたくさんの努力が隠れていることを肌で実感した。私は今回この調査に参加させていただいて、実際に見て触って聴くことで得る学びの大きさを知った。また、わからないことや疑問に思ったことは調べる、という原点に立つことができたのではないかと思った。さらに、行動力が足りないことに気がついた。知らないことをわかっていたのに、事前学習が充分でなかったことを今反省している。調査の際に、先生や現地の方々にお話しを伺う機会があったのに、知識が足りず知る機会を自ら減らしてしまった。これからは、その場の状況を考えて行動することはもちろんのこと、意欲的に知ろう、積極的に調べようという姿勢を大切に、その力を養っていきたい。

2つ目の防災教育では、陸前高田市立小友小学校を訪れ、校長先生のお話を伺った。そこでは、学校における防災教育の在り方について、防災マニュアルではなく、自分たちで判断する力、行動力が必要であることを学んだ。また、及川さんや佐藤先生などの陸前高田市の方々には被災地を案内していただき、津波が来た時の様子や、その際の対応方法など、たくさんのことを話していただいた。実際に大津波による被災地を訪れたり、過去にあった津波災害で建立された石碑を見てまわったり、その土地の方々の生の声を聴きながら、防災教育の在り方について考えていった。昔からこの地域では、「津波てんでんこ」という言葉を合言葉にしていたという。「津波てんでんこ」とは、津波の時には家族のきずなを断ちきって、自己責任で逃げる、ばらばらでも必ず逃げているだろうと信じて逃げることを意味している。今回、この言葉や津波がきたら高台に逃げるといった昔からの言い伝えによって助かった人が多くいるという。ここでの話を聞いて私は「絶対」がないことを学んだ。3メートルの防波堤も一瞬で津波に飲み込まれてしまった。防災マニュアルで動いていたら多くの犠牲者が出たであろうという気仙中学校

の事実。町の避難場所に逃げて多くの方が亡くなってしまったという事実。「絶対」ここなら大丈夫、という場所はないこと、自ら判断して動く力が必要なこと、生きるための力を養うことが必要だと感じた。命の危険がせまったとき、なによりも大事なものは生き延びるための判断力、行動力である。そして、過去の経験を現在に、未来に生かしていく、持続していくことが大切なのではないかと考えた。そのためにこれからは積極的に行動する、さらに考えて行動する力を養っていく決意である。



高台にある神社へ続く階段



3つ目の中吉丸の調査では、中吉丸関係者の子孫の方々からお話を伺った。先祖から受け継いできた貴重なお話をさせていただき、江戸時代末期に小友浦から海産物を積んで出航した中吉丸が途中で漂流したこと、漂着したところが現在の父島で、当時そこに住んでいた異国の方々と交流していたことなど、詳しい話を聞いた。今では、その交流した方々同士の交流があり、

中吉丸関係者にお話を伺っている様子 一昨年に実際に小笠原諸島で対面し、中吉丸について展示会を開いたそうだ。私はこの話を聞いて、地域教材のすばらしさに気づかされた。その地域だけにしかないその地域オリジナルのもの、それは地域の誇りにもなるだろう。現在、国際化が浸透している中で、早くからこの地域は国際交流をしていたのである。そしてそれが時代を越えても、こうやってまたつながっている素晴らしさを、将来、地域の社会の担い手となる子どもたちに伝え、地域や社会を愛する子どもを育てていきたいと思う。

一方、私自身を振り返ってみると、自分の地域について学んだという記憶がない。どれだけ子どもの生活と近づけて、子どもたちに興味をもってもらえるようにするかが今後の課題となると思う。

高田松原も、地域に密着した教材になりうると思う。1本だけ残った奇跡の松も2012年9月12日に伐採されてしまった。今後、シンボルやモニュメントにして残していくそうだ。津波で高田松原は失われてしまったが、高田松原を守る会では、同じDNAをもつ松を種子から育てていた。ここでは、1本の松の木の存続に対して、様々な意見があったことを知った。何がその地域にとっていいのか、人それぞれが違う。同じものについても違った考えがあり、それぞれに込められた人の思いを受け止めることの大切さをこの松の木は教えてくれた。私はこのような活動や歴史を通して、今はなき高田松原を誇りに思い、地域を愛せるようなそんな教材を作っていきたいと考える。

このように、今回の活動において大きく3つのことを学んだ。1つ目に判断力、2つ目に行動力、3つ目に五感を使った体験の必要性である。特に3つ目の五感を使った体験により、判断力、行動力が養われると考える。行く前には、上記に述べたことを意識していなかったのだが、実際に現地に立つことで意識を変革するができた。このような意識をみんなにも共有してほしい。そのためには、「伝えること」が重要である。学校教育や生涯教育など様々な場面で取り組むことで、伝えることができる。また伝えることで地域を愛する心も育っていく。私は、その土地の歴史はもちろんのこと、多方面からアプローチした教材を作っていきたい。そのために、今は、積極的にいろんなことに取り組み、陸前高田の方々に感謝しながら、その教訓を、行動力、判断力をもって伝えていく所存である。

本物だから伝わること

奈良教育大学教職大学院 1 回生 中澤哲也

はじめに

9月6日から10日の4日間、陸前高田に訪れた。主な目的は文化財調査、防災教育、ESD 学習の教材化であった。なぜ私がこのプロジェクトに手を挙げたかという、理由は2つある。1つ目は2011年3月11日に東日本大震災・津波が起こって1年と半年が経つのだが、まだ被災地を訪れていないということに危機感を感じていたからである。これから私が教師になり、子どもたちに日本の将来のことを考えてもらうために、自分自身が歴史に残るであろう被災地の現場を訪れておかなければならないと考えていた。2つ目に今回のESD 学習の教材化という取り組みが、陸前高田の子どもたちの学ぶ意欲につながるが大変すばらしいことだと感じたからである。

また、4日間の学びをより良くするため、学部生、修士の大学院生と、陸前高田の津波の歴史や、千本松原のことなどをまとめ、共有するといった事前学習をした。この事前学習によって、私自身の今回のプロジェクトに参加する意欲がさらに高まったと思える。

今回のプロジェクトに参加させてもらい、4日間の中で活動を通して特に感じたこと、学んだことを3つあげて述べたい。1つ目は初めて被災地に訪れたことについて、2つ目は研究のスペシャリストについて、3つ目は陸前高田で出会った人たちについてである。



【被災地に勇気をあたえる向日葵】

これが被災地

まず1つ目の被災地に訪れたことについてである。現地に訪れるまで、被災地の状況はテレビや新聞といったメディアを通して、ある程度の現状を把握し想像していたつもりであった。しかし、実際に津波の被害にあった市役所や博物館、小学校へ案内してもらったときに、それが現実のものであると受け入れるのにかなりの時間がかかった。信じられない光景が次々に目に入った。そこにはメディアを通してでは決して伝わらなかった何かがあった。特に心に残った場所が市民体育館であった。床や壁だけでなく、アリーナ席や天井までが完全に崩壊されていた。「地震後に体育館の中に大勢の人が非難したが、そこにも津波は容赦なく襲いかかり、体育館内が洗濯機状態になった。そして人々の命を奪っていったんだ。」と、現地を案内して下さった及川さんが教えて下さった。そこで命を落としたと思われる人たちの靴や鞆、写真やおもちゃなどがそのままの状態に残されており、どうしようもない気持ちになった。

この体験を通して、私はこの津波被害の現実を伝えなければならないことを心に強く抱いた。また、及川さんがつぶやいていた「人災だな」という言葉も決して忘れてはならないと感じた。自然と共存していくには自分たちはどのように生きていくことが持続する社会を築き上げられるのかという視点をつねに持ち、それを未来の子どもたちに伝えていきたい。

熱意

2つ目に研究のスペシャリストについてである。2日目に、何十年も文化財調査をされている山岸先生と、先生のゼミ生である修士課程の大学院生と一緒に、常善寺の仏像調査のお手伝いをさせてもらっ

た。実際にファイバースコープという小型カメラを仏像の中に入れて、千手観音像を持ち上げたりと、本当に貴重な経験ばかりであった。いつもは拝んでいるだけの仏像を調査すると、かなりの緊張感があった。また、この調査によって、新たな歴史が発見されるかもしれないというワクワクした気持ちにもなった。しかし、一番この調査で私の関心を引いたことは、山岸先生や、文化財を専門としている修士課程の大学院生たちの調査に対する姿勢であった。専門としているだけあって、調査に取りかかると、仏像に対するまなざしが一変し、プロフェッショナルの顔つきになった。後で聞いた話では、文化財調査をするにあたって、何かを発見できる確立は1割以下だという。つまり、10件文化財調査を回っても、何かが発見できるのはわずか1件。それでもその1件の発見することを求めて、調査・研究を続けているのである。これは文化財に対してとてつもない熱意と愛情が必要なことであると考え。また同時に、それは教師という仕事と同じであると感じた。教材研究や学級経営にどれだけ力を入れても、子どもが目を輝かせてくれることはほんの一瞬である。しかし、その一瞬のために教師は長い時間をかけて自分を磨いていくすばらしい仕事であると考え。今回の調査で先生や院生たちと同行させてもらい、大切なことに気づくことができた。

人から人へ

3つ目に陸前高田で出会った人たちについてである。今回の陸前高田調査では実際の津波の風景を高台から見ていた現地の方々にインタビューすることができた。現地の方々は私たちが快く受け入れてくださり、いろんな被災場所に案内して下さった。そして実際にそこで何があったのか、見たまま、感じたままのリアルなお話を聞かせていただいた。一瞬で人や街が消えたこと、先人の知恵がいかに優れていたかということ、残された『希望の松』の保存についての思いなど、現地でしか聞く事ができない貴重なお話ばかりであった。また、難破した中吉丸のインタビューの時も、自分たちのご先祖様に対する思いをたくさん聞かせていただき、大変有意義な時間を過ごせた。



【東北弁で一生懸命伝えてくれた】

この4日間でたくさんの人に出会い、たくさんのことを聞いた。しかもそれは一人一人の思いがしっかりとこもっており、すべてが大切なことに思えた。まだ学生である私たちのために、こんなに親切に一生懸命語ってくださった方々へは本当に感謝にている。出会った方々にお返しができるとしたら、自分たちが陸前高田で聞いたこと、見たことを多くの人に伝えることであると思う。西日本では東日本大震災・津波に関する関心が薄れてき

ており、すでに復興されているといった誤報さえも流れている。そのようなことを防ぐために、まずは自分の周りから発信していきたい。

最後に

以上の3点が陸前高田での4日間を通して、自分が感じたこと、学んだことである。本当に今回は現地に立たなければわからないことだらけであった。本物に出会い、ふれる大切さを身にしみて感じた4日間であった。この体験を忘れず、まずは現地に立つといったスタンスを持ち続け、自己成長につなげていきたい。

「学ぶ喜び」プロジェクト—地域の人々と残された文化財

奈良教育大学大学院美術教育専修 2 回生 小松原 絵里

1. はじめに

「学ぶ喜び」プロジェクトの 2012 年 9 月 6 日から 9 日までの活動は、今年の東日本大地震の被災地である岩手県陸前高田市の視察およびインタビューと常膳寺における仏像調査を行い、その後の活動で防災教育や ESD 教育などに活用することを主な目的とする。また昨年世界遺産登録された岩手県西磐井郡の平泉を訪れ、中尊寺や毛越寺など遺跡や文化財等を実見した。調査中は仏像調査に重点を置く A 班と防災教育・ESD 教育に重点を置く B 班とに分かれ、私は A 班に属す。

事前の活動として 3 度に及ぶ勉強会が行われ、私自身はその 3 回目の勉強会に参加し、他の参加者の発表から陸前高田市のことや資料に書かれた被災時の状況などを学んだ。また仏像調査のため、調査に用いられるファイバースコープ等の機器のデモンストレーション、前回の調査時の内容学習などを行った。さらに最終日に訪れる平泉の毛越寺には、私の修士論文のテーマに関わる作例である「訶梨帝母像」があり、今回の拝観をより意味のあるものにするため、その像に関わる簡単なレポートを作成・配布した。

2. 考察

○活動 1 陸前高田市の視察及びインタビュー

陸前高田市の「今」を目の当たりにし、私たちの想像以上に復興が進んでいないことを実感した。処理の出来てない土砂とがれきの山とそれを手作業で分ける人々、プレハブで営業する銀行やコンビニや店、市役所も簡易施設のままであった。雑草が生い茂るその中にかつて家が建っていたであろう形跡をみることができ、建物として確認できるものは市役所や博物館、体育館などいくつかのみで、それらも津波の脅威を示しており、聴けば博物館の資料も殆どが流されてしまったということであった。また幾つかのお話のなかで印象的であったのは津波の脅威だけではなく規定の避難場所の人々が被災してしまい昔の教え通りに山の方へ避難した人々が助かったこと、山の方へと避難したくても土砂崩れを防ぐコンクリートの壁があったこと、海岸に近い地域の人々の方が、少し海岸から離れた地域の人々よりも津波を意識して比較的避難ができたこと等である。入り江の形や地形の関係で被災時の様子もやや異なり、従来の単一的なマニュアルでは対応できないことを知った。科学的な調査に基づいたマニュアルに加え、各々が逃げていると信じ互いが生き延びるということ、何処でどのような形で被災するかわからないので自分で考え行動する力をつける防災教育が必要であることを学んだ。

○活動 2 常膳寺での仏像調査

前回の調査では口径 6 mm ファイバースコープでは像内の銘文を確認することができなかった十一面観音立像と千手観音立像の調査から始めた。この度用いられたファイバースコープは口径 2.4 mm であったが、十一面観音立像の像内の銘文を確認することは叶わず、千手観音立像に関してもファイバースコープが入る余地がなかった。あとは両像共に後の解体修理時に期待するのみと思われる。次に前回の調査で銘文が確認された阿弥陀如来坐像の再調査を行い、明瞭ではなかった部分の一部を判読することが可能となった。また地域の人々と共に薬師如来立像像内の銘文を確認する他、不動明王立像を含めた調書作成などを行った。ファイバースコープを用いる調査への同行は始めてで

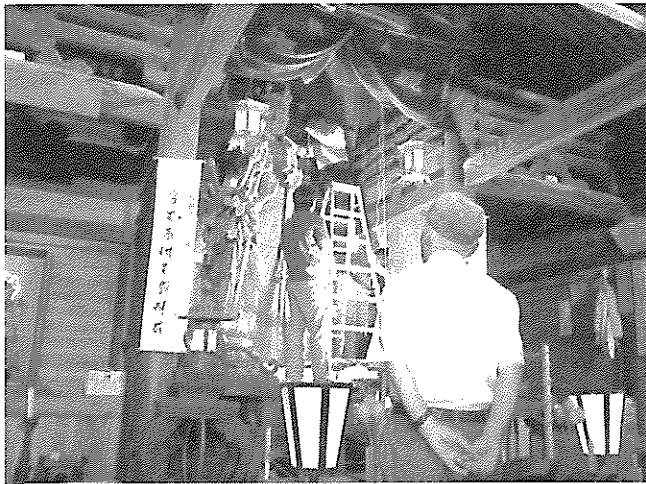


図 1 十一面観音立像の調査の様子

あった為、機器の扱いや調査時の留意点など実践的内容を学ぶことができ、調査の様子を見に来られた地域の人々の様子やお話からこの度の調査への期待と被災後に残った文化財への強い想いを知ることができた。

○活動3 平泉 毛越寺における「訶梨帝母像」

平泉には世界遺産に指定された仏国土(浄土)を表す建築や庭園・考古学的遺跡群があり、それを初めて目の当たりにすることができたことも貴重な経験であったが、平安時代まで遡る国内の作例が少ない訶梨帝母像の一つである作例を実際この目で見ることは、私にとってそれと同じかそれ以上に大きな意味をもつ経験となった。それまでに見ることのできた資料で想像されたよりも上半身の保存状態が良く、大らかで美しい曲線の像であった。資料では判別し難かった右手の様子や左手に抱えられた子の表情やその身体、また膝下の補修部分までも確認することができた。他の作例と比べても東北地方だからこそ見られた表現を持つ作例であったのではないかと思う。この経験を必ず修士論文に活かしたい。

3. まとめ

被災者の方々の話を聞く中で、私が感じたことの内の一つに郷土の文化財への強い想いがある。地元の歴史や文化を示していた文化財や資料が多く流されてしまった後に僅かに残ったそれらは、単に文化財として貴重なものとしてだけでなく役割を果たしているように感じられた。今後の活動



図 2 金剛寺跡と復興のシンボルのひまわり

では現地で私が学び、聴き、視て、感じたことを活かし、後世まで文化財を残したいという地域の人々のために、その未来を担う子どもたちが文化財を通して地域について知り、学びやすいような教材を開発したい。実見することの大切さはこの度の活動でも改めて感じられたことであるので、できれば文化財と実際に観ながら学びが深められるような地域学習としての教材を考えている。子どもだけでなく大人が見ても遜色のない内容と、実際に使って貰えるような教材というものを突き詰め作成することが今後の課題である。

陸前高田を訪ねて

奈良教育大学教職大学院 1回生 新宮 済

9月6日から9日までの4日間、学ぶ喜び・ESDプロジェクトの一環で、岩手県陸前高田市への文化遺産調査団を組織し、調査に向かった。調査の目的は①文化財調査、②防災教育、③文化遺産を通じたESDの教材化である。今回の文化遺産調査団はT型モデルがはじめて導入された。T型モデルとは教育大の学部生、大学院生、教職大学院生が大学チームを組んで参加することで、教授に三者がついて動くことで学びをさらに深めていくモデルである。調査団は教員2名、教職大学院生2名、文化財造形専修大学院生2名、学部生2名、計8名で構成された。

私はこのプロジェクトに深い思い入れがあった。昨年の東日本大震災から1カ月たった4月26日、私は関西からありったけの水と非常食を背負って石巻市に住む友人のもとを訪れた。街に立つと恐怖で足がすくんだ。私の記憶にある友人の住む街はすべて波に奪われてしまっていたのだ。「全部もってかれた。」とつぶやく友人に、何の言葉も返してあげられなかった。今回の教材化は、津波で失われなかった文化財調査から、『街には、こんな素晴らしいものが残っているんだよ。』と学校現場で発信することで街に希望をつくり出せる。その一役を東北出身の自分が担いたいと考えた。

震災から1年半経った被災地は、いたるところに津波の傷跡を残していた。現場で高田市民と一緒に4日間活動できたからこそ感じたこと、学んだことについて防災教育、文化遺産を通じたESDの教材化の順に報告する。



津波で流された千本松原

防災教育

研修では被災地や学校を巡り、及川さんや佐藤先生など陸前高田の方々の声を聞いたり、校長先生にインタビューしたりできた。私達は出発前の事前学習で写真集やYouTubeで見た被災地に立った。住宅街は跡かたもなく流され、地面には覆い隠すように草が生えていた。及川さんは被災地を一緒に歩きながら様々な思いを語ってくださった。実際にご覧になった津波の光景、自然に対するやるせない思い、失った友人の記憶、その1つ1つが魂の叫びとなって心に響いた。広田半島の海岸沿いを車で走ると震災記念碑を見つけた。震災記念碑とは1933年の三陸津波の後に朝日新聞社が「津波が起きたら高台に避難するよう」教訓として刻んだ記念碑である。「記念碑は地域の人にとって、津波はここまであがってくるよというライン。今回もここより下が波にのまれたんだよ。俺らみたいな年寄りや漁師は小さい時から教えられてきたから教えを守ったけど、若い人は知らねがったんだべなー。」と及川氏は悔しそうに話した。三陸津波で助かった先人が残してくれた貴重なメッセージが伝わっていれば、助かった命があったかもしれない。私はこの記念碑を見ながら「生きるための情報」を後世へ伝えていくことの大切さを感じた。

大地震の後は津浪が来るよ
地震があったら、高所に集まれ
津浪と聞いたら、欲捨て逃げよ
低いところに住家を建てるな

石碑に書かれた言葉

小友小学校での校長先生へのインタビューでは、これまでの防災教育に対する考え方が大きく変わることとなった。校長先生の「教員は、子どもたちが生きるために動くこと、生きるための決断をすることが大切だ。」という言葉が心に残った。リーダーの判断ミスにより悲しい死を迎えてしまったたくさ



小友小学校長先生に話を聞く

んの人がいる。これからの教師に求められていることは、子どもたちが生きるための決断できる力ではないか。マニュアルに従うだけでなく、教員が自分で判断することの大切がわかった。

「これまで子どもたちにとって、海はめぐみであった、津波があつて海の怖さが染みついた。だからといって怖いからこの地を離れることは現実的に不可能なのです。はやく復興したい。」

そう強く言い残し校庭で野球する子どもたちを見つめる姿を見て、まだまだ復興は終わっていないことが伝わった。

文化遺産を通したESDの教材化

陸前高田市で指定されていた文化遺産はほとんどが流失したようだ。なぜなら陸前高田市の博物館は海岸部に所在していたため、今回の大津波によって、被災したからである。博物館跡にはがれきが散らばっていた。二階は収蔵庫であつたと思われるが、収納ケースが壊れ、そこにあつたであろう文化財は跡形もなかった。今回調査を行った常膳寺の算額や、中吉丸の生存者が持ち帰った伝道書や貝なども、博物館で大津波に飲み込まれてしまったと聞いた。

市のシンボルである高田松原も最後の松が枯れてしまった。石巻で聞いたように、及川さんも「文化財も全部もってかれた。」と悔しそうに話していた。

常膳寺での仏像調査では、仏像の胎内にかかれた墨書を解読していくなかで、江戸時代末に漂流し、奇跡的に生還した中吉丸事件との関連が発見できた。先人が残した小友町と小笠原の海を越えた交流が時を経てふたたび動き出したのだ。中吉丸事件は、陸前高田市史にも記載されている事件だが、地元でもあまり伝えられていないようだった。今回の調査結果をもとに、中吉丸と薬師如来像の教材化を行い、地元の子供たちが地域のよさを見つけ、地域を大切に思う心を育てるお手伝いができればと思う。

高田を訪ねたことで、高田市民の魅力もたくさん見つけた。「津波で流されてしまったけれども、必ず復興しますから、遊びに来てください。」と話してくれた気仙大工伝承館職員の笑顔が忘れられない。高田に生きる市民のあたたかい心を是非伝えたいと感じた。

現場に立って知ったことは、まだまだ復興が終わっていないことだ。それでも市民の方々は様々な形で復興しようと頑張っていた。松原保存会の生き残った松の栽培、明りの少ない街を照らすラーメン屋、震災後も育てつづけているブドウ畑。中吉丸の歴史を調べ発信する人々、町に残る良いところを自慢してくれた市民の表情は明るかった。新たな町の良さを見つけ出し知ってもらい、市民の明るい顔を増やしたい。「文化遺産を通したESDの教材化」することで復興の手助けになれるのではないかと考えた。



中吉丸の文字と初対面した子孫の方々

「岩手研修旅行」を経験して

奈良教育大学大学院美術教育専攻 2回生 宮武 杏名

(1)はじめに

今回、2012年9月6日から9日まで、主に陸前高田にて活動を行った。6日に陸前高田の被災地を現地の方々に案内していただき、市立小友中学校を訪問した。7・8日には常膳寺での山岸先生の仏像調査に同行し、9日に、世界遺産・平泉を見学した。私は主に仏像調査を中心に行うA班に属し、被災地の見学や被災者の方のお話から防災に関して考えることと、常膳寺の仏像調査から被災地の方を元気づけるきっかけを見つけることの2つを目指し参加した。結果として防災に関しては自分で考えて動くことが大切になる、ということを学んだ。仏像調査では、私自身が調査の経験を積むことが出来た。また今回調査した仏像が多く文化財を失った陸前高田に残った数少ない貴重な文化財であることを学んだ。

(2)考察

まず防災についてである。初日に陸前高田の町を見学した際、案内して下さった方からは「人災の側面もあった」とお聞きした。自治体が指定した避難場所であった気仙小学校や、市立体育館は津波に飲み込まれてしまっていた。小友中学校の校長先生は「避難したら点呼を取る、でもそれより前に逃げないといけない」とおっしゃった。今後必要なこととして、学校管理外で被災した時の対策や自由度の高い訓練の必要性を挙げていらした。

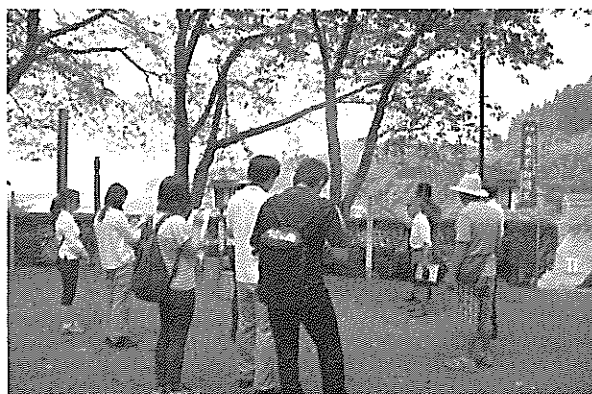


図 1 避難所となった寺で当時の話を聞く

このように被災した方々からの話をうかがっていると、マニュアルに頼るだけでは、今回のような予想を大きく上回る自然災害の時、生き残ることの難しさを感じた。指定された避難場所は必ずしも安全ではなく、少しでも高いところへ逃げるのが自らの命を守ることに繋がった。目や耳にする情報、昔からある情報を統合して安全なところへ逃げる、素早い判断力とそれに足る知識を持つておくことが、今後の防災には必要となってくるのだろう。その際に、小友中学校で行われている「我が家の防災カード」といった、子どもが学校で学んできたことから、大人も一緒になって防災を考えるような取り組みが有効であろう。

次に仏像調査に関して述べる。今回調査を行ったのは常膳寺観音堂の十一面観音立像・千手観音立像・薬師如来立像、阿弥陀堂の阿弥陀如来坐像、客殿の不動明王立像である。不動明王立像以外は今年6月にあらかじめ山岸先生がファイバースコープによる調査を行っており、その際に薬師如来立像、阿弥陀如来坐像からは像内銘文がみついている。今回は前回ファイバースコープが入らなかった十一面観音立像・千手観音立像・不動明王立像の内部をより小口径のファイバースコープで調査し、調書を作成した。十一面観音立像・千手観音立像ともにファイバースコープは入ったものの銘文は見つからなかった。不動明王立像は残念ながらファイバースコープが挿入できなかった。さらに阿弥陀如来坐像は前回未解読だった文字を一字解読した。十一面観音立像については背景を白にした写真の撮影も行った。



図 2 脚立に上りファイバースコープが入れられるところを探す

今回の調査は私には初めてづくしであり、私自身の仏像調査の経験値を大きく上げてくれる調査だった。初めて3mを越える大きさの仏像を経験し、大きいとファイバースコープを差し込むスペースを見つけるのにも脚立が必要で、思いのほか大変であると学んだ。阿弥陀堂では蜂が巣をつくっているため屋外で調査を行った。その場にあるものを有効に使い、与えられた場所で最大限の調査を行う姿勢を山岸先生から学んだ。

また、調査中についていて下さった方に、2つの陸前高田の文化財について伺うことが出来た。

その話から学ぶことが大きかったように思う。ひ

とつは常膳寺に奉納されていた江戸時代の算額についてであった。ずっと客殿にあったが、日焼けによる劣化を防ぐため市立博物館に寄託したのだという。もうひとつは小笠原へと漂流した中吉丸に関連する資料である。これも博物館に入れてあった。しかし博物館の立地により、これらの資料は津波で流されてしまったそうだ。文化財の収集・保管を行うべき博物館は津波を前にその役割を果たせなかった。今回の調査にご協力頂いた方々のお話を聞くに、やはり地域住民の喪失感は大きいようだった。安全だと考えて寄託したが、失われてしまったのだ。

博物館が被災し、多くの文化財が失われたことによる人々の喪失感はあるけれども、一方で今回調査を行った仏像が、どうにか残ったこの地域の貴重な文化財として、人々の前向きな期待につながるものになりうると感じた。失われた文化財は元に戻ることは決してない。しかしそこから学ぶことはできる。残ったものを大事に守っていくこともできる。それが人々の喪失感を埋めていくきっかけにも、復興の足掛かりにもなるのではないか。ちなみに2012年10月4・5日の2日間、常膳寺では他のお寺と合同で復興祈願の合同特別開扉を行うのだという。前向きな一歩はもう踏み出されていた。



図 3 普段は幕で隠される十一面観音立像

(3) まとめ

今回、「学ぶ喜び」プロジェクトでの研修旅行で私が主に携わったのは、常膳寺の仏像調査であった。しかし、この4日間で私は仏像調査の経験を積む以上に多くのことを学んだ。それは実際に見たり聞いたり、経験することに勝るものはないということである。テレビでみる被災地と目の当たりにする被災地はどこか違って見えた。調査に協力して下さった方々の中には、涙を流しながら案内して下さる方がいた。資料を用意して、時間を作って説明して下さる方がいた。なぜ見せようとしてくれるのか、なぜ語ろうとしてくれるのか。失ったものから学びを見出し、それを語りついでいく。失ったものは決して戻ることはいけけれどあったことを忘れないこと、学んだことを忘れないこと、そうすることで前へと進んでいくことが出来ると感じた。

上面のうち正面中央のそれは鎌倉時代の作かとみられる。ただ四軀を通じてやや形式化への傾きが認められること、また今後詳細な検討を要するが同じ三陸地方所在の宮城・旧牡鹿町保管十一面観音菩薩立像（櫃かと思われる針葉樹を用いた木造、素地。像高二八八・〇cm、室町時代の作とされ、国指定重要文化財）と、用材や作風に一定の類似があり、室町く安土桃山時代の作と考えるのが妥当であろう。

阿弥陀如来坐像

ファイバースコープ調査により面部内銘記の存在が明らかとなり、元禄十年（一六九七）五月、仏師佐々木安路一遍居士の作であることが明らかとなった。作者の知られる十七世紀の基準作として、同時期の仏像を考えるうえで指標となる作例である。また銘記中に「伊達氏四位／松平陸奥守／綱村持（二時か）代」と当時現前高田市域が属していた仙台藩の第四代藩主伊達綱村（一六五九く一七一九）の名が記されることはきわめて珍しい。元禄十年五月には伊達綱村は江戸に在府しており本像の制作に直接関与した形跡は認めがたいが、常膳寺と仙台藩との密接な関係を示す新出史料といえよう。当時「常善寺」の表記がなされていたことも知られる。なお、体部内銘記により大正四年（一九一五）に修理が行われたことも明らかとなった。相貌に土臭さと生々しさが混在するが、衣文表現、とりわけ垂下する両袖部のそれが迫真的で、左足を踏み下げる像容も当代の如来像として例が少なく、佐々木安路一遍居士の巧技が示されている。

薬師如来立像

ファイバースコープ調査により体部内前面・背板内面の銘記の存在が明らかとなり、その後背板がいったん外されて銘記の全貌が知られた。天保十三年（一八四二）、邑上牛彦（源）宜雅の作である。また本像の大願主「小友村肝煎／及川庄兵衛／莫信」は、天保十年（一八三九）同十一年にかけて、鎖国の幕藩体制下にあつて異国に漂着した事例として知られる中吉丸の船主である。中吉丸漂着事件直後に造立された本像は、同期のおそらくは在地仏師である邑上牛彦の作風を伝えるとともに、銘記の内容が豊かで新出の歴史資料としても注目される。

謝辞

二度の調査を通じて、金剛寺住職（常膳寺兼務住職）小林信雄師、及川征喜氏、佐藤文雄氏、松坂泰盛氏をはじめとする陸前高田の方々に数々のご高配を賜った。また本稿は奈良教育大学「学ぶ喜び」プロジェクト 陸前高田市文化遺産調査団（山岸、加藤久雄副学長・教授、中澤静男講師、大学院生宮武杏名氏、小松原絵里氏、新宮済氏、中澤哲也氏、学部学生古川真理奈氏、幸田早苗氏）による調査成果の一部である。関係各位に対し、深甚の謝意を表したい。

岩手県陸前高田市・常膳寺の仏像

奈良教育大学教授 山岸公基

はじめに

岩手県陸前高田市小友町常膳寺の仏像をめぐるのは、平成二年一月の『仏像を旅する 東北線』（至文堂）に十一面観音菩薩立像に関する大矢邦宣氏の簡単な紹介があり、当時大学院生であった筆者も同年八月に簡略な調査の機会を得たことがあった。平成二十三年の東日本大震災での陸前高田の惨状が報じられるにつけ、人的被害の大きさに心を痛めるとともに、常膳寺の仏像が震災を経てどのような現状にあるか懸念していた。平成二十四年に及川征喜氏より常膳寺諸像の調査依頼を受け、本学「学ぶ喜び」プロジェクトの一環として六月と九月との二度にわたり調査を実施した成果を本報告書に盛っている。不幸中の幸い、仏像に震災による大きな被害は無かった。

常膳寺の仏像のうち十一面観音菩薩立像（観音堂本尊）・千手観音菩薩立像（観音堂前立尊）・不動明王立像（客殿本尊）・毘沙門天立像（観音堂西脇壇安置）・阿弥陀如来坐像（阿弥陀堂本尊）・薬師如来立像（観音堂東脇壇安置）の主要な六軀は、作風から十一面観音菩薩立像以下の四軀と阿弥陀如来坐像、薬師如来立像の三グループに分けられる。以下各グループの特色に触れたい。

十一面観音菩薩立像・千手観音菩薩立像・不動明王立像・毘沙門天立像

十一面観音菩薩立像と他の三軀とは法量に大差があり、垂直性の強い、前後矧の原材料に規制された十一面観音菩薩立像の造形の異色が際立つ。しかし、紐・珠繫・紐の基本帯外側に円形飾をつけ帯一条の副帯を渡す臂釧や、列弁文・紐二条・列弁文とする腕釧の制が十一面観音菩薩立像・千手観音菩薩立像・不動明王立像で、胸飾の波形の輪郭が十一面観音菩薩立像・不動明王立像で共通しており、材質・構造、及び耳孔の彫りなど細部が十一面観音菩薩立像や千手観音菩薩立像・不動明王立像で互いに近似し、また不動明王立像と毘沙門天立像とは保存状態に相違があるとはいえ法量や頭体の比例が似通うことから、同時期に共通の制作環境下に成ったとみられる。不動明王像と毘沙門天像とが観音の脇侍とされることは、比叡山横川根本観音堂（横川中堂）の例などを嚆矢として全国に類例が多い。

このうち十一面観音菩薩立像は差首の寄木造であるが、通常と異なり三道下縁で差すことにより頭体を共木のように見せており、平安時代の一木造ないし立木仏に倣う意図が看取される。より時代の風に敏感な千手観音菩薩立像は、垂直性の強い裾・腰布の布帛表現が鎌倉時代・貞応二年（一二二四）定慶作の京都・大報恩寺六観音像などに淵源しており、鎌倉時代彫刻を踏襲しようという意図が顕著で、特に地髪部頭

品質構造

本体

広葉樹環状孔材。セندگانか。木造。素地。

伝来

一、常膳寺観音堂東脇壇に伝来した。

備考

一、 実査 平成二年八月(山岸公基)。平成二四年六月二十三日・二十四日(山岸公基・加藤久雄・中澤静男)。九月七日・八日(山岸公基・中澤静男・宮武杏名・小松原絵里・新宮済・中澤哲也・古川真理奈・幸田早苗)。

藥師如來立像

木造 素地 一軀 像高一〇〇cm前後

岩手県陸前高田市小友町字上の坊二四 常膳寺

銘記

体部前面墨書

小友村肝煎

大願主 及川庄兵衛

天下泰平國 家安康 莫信

奉造立藥師 如來尊像

于時天保十三 大佛師 邑上牛彦

丙寅八月日 宜雅作之

背板内面 墨書

点眼師 金剛寺 小友村肝煎

為大願主二古祐道濟川居士 及川庄兵衛

法印阿春 安樂 法號 安躰妙延禪尼 莫信

天下泰平國家豐饒

奉造立藥師瑠理光如來尊像

大佛師

日月清明 願主并諸寄進信心之民子 生歲五十七才

時天保十三晨壬寅 家運長久延命專 邑上牛彦

秋九月吉旦 祈願所也 金輪良語居士 源 宜雅敬作之

奉修覆阿彌陀如来尊像老軀

當寺現住

法印英完代

職工 當村

小松平助師

法量(單位cm)

本体

像高

四八・五(一尺六寸二分)

品質構造

本体

針葉樹。寄木造(頭体別材)。玉眼。素地。

伝来

一、常膳寺阿彌陀堂本尊として伝来した。

備考

一、実査 平成二年八月(山岸公基)。平成二四年六月二十三日・二十四日(山岸公基・加藤久雄・中澤静男)。九月七日・八日(山岸公基・中澤静男・宮武杏名・小松原絵里・新宮濟・中澤哲也・古川真理奈・幸田早苗)。

阿弥陀如来坐像

木造 玉眼 素地 一軀 像高四八・五 cm

岩手県陸前高田市小友町字上の坊二四 常勝寺

銘記

面部内 墨書

元禄 丑拾歳
 仙臺領 氣仙郡小友
 佐々木 玉眼(亡)
 佛師 白毫 安路一遍居士俗名
 伊達氏四位 綱村持代
 松平陸奥守 五 月良辰
 玉眼(亡)

溪當 常善寺

体部内 墨書

大正四乙卯歳参

願主鈴木喜作

頭部幹部を通し、木芯を像のほぼ中央を通る線に籠める。堅一材ないし、前後二材より彫出。前後の割目（または矧目）は両耳後ろ寄り、両体側、両足ふくらはぎを通る線。この頭体幹部材に、髻、両肩以下（左右とも肘・手首矧）、両沓先を各矧ぐ。持物別製。

保存状態

本体 像表面全面にわたって風化・ささくれ立ちが著しい。

備考

一、実査 平成二年八月（山岸公基）。平成二四年六月二十三日・二十四日（山岸公基・加藤久雄・中澤静男）。九月七日・八日（山岸公基・中澤静男・宮武杏名・小松原絵里・新宮濟・中澤哲也・古川真理奈・幸田早苗）。

毘沙門天立像

木造

一軀 像高七二・三 cm

岩手県陸前高田市小友町字上の坊二四 常膳寺

法量(単位 cm)

本体

像高	七二・三	面長	一一・〇
髮際高	六七・六	耳張	一四・五
髻頂—顎	二〇・〇	胸奥	十三・八
面幅	一〇・〇	腋張	十五・二
面奥	一四・五	裾張	三〇・二
腹奥	十三・〇	足先開内	二六・五
肘張	三三・五	邪鬼張	四三・五
足先開外	三三・五	框座高	三・八
邪鬼高	一五・三		
邪鬼奥	二一・一		
光背			
高	八五・五		
台座			
框座高	三・八		

品質構造

本体 針葉樹

肘張	三二・三	裾張	三〇・三
足先開外	三〇・七	足先開内	二五・〇

台座
高(天板上面) 二八・二

品質構造

本体 針葉樹 樺か。素地。割矧造または寄木造。素地。

頭体幹部を通し、木芯を像のほぼ中央を通る線に籠める堅二材ないし、前後二材より彫出。前後の割目(または矧目)は両耳後ろ、両体側、左足首を通る線。この頭体幹部材に、両肩以下(左右とも肘・手首矧)、両足先(右は体幹部材との間にマチ材をはさむ)を各矧ぐ。持物別製。

備考

一、実査 平成二年八月(山岸公墓)。平成二四年六月二十三日・二十四日(山岸公墓・加藤久雄・中澤静男)。九月七日・八日(山岸公墓・中澤静男・宮武杏名・小松原絵里・新宮濟・中澤哲也・古川真理奈・幸田早苗)。

不動明王立像

岩手県陸前高田市小友町字上の坊二四 常膳寺

木造 一軀 像高七四・〇 cm

形状

もと頂蓮(または莎髻)をいたたく(円孔径〇・八 cmが遺存)。髪、髮際近くは巻髪(耳より前は毛筋彫、耳より後ろは疎彫)、背面髮際は筆先状。他は素髪。左耳前に弁髪を垂下。結上下二段。上段は長列弁・紐二条・長列弁、下段は上から細二条・反花(間弁付)。先端は筆先形。水波相は陽刻四条。眉を寄せ、鼻根にこぶ。右眼瞼目、左眼も瞼目でやや細める。鼻孔を凹ませる。口はへんの字に結び、右下牙上出、左上牙下出。耳垂環状不貫。三道相をあらわす。条帛・裙・腰布を各つける。条帛は左肩から右脇腹にかけて懸け、一端は左胸上で上端から折り込み下端で環状を呈したのち鳩尾で上端より垂下。もう一端は背面左肩下りで垂下。裙は右脚前で右前に打合せ。正面ほほ中央に舌状の折返し、腰布は一段折返し付。背面では折返しが反転する。胸飾・臂釧・腕釧・足釧を各つける。胸飾は概形波形。列弁文・紐一条・列弁文。正面中央に花飾。臂釧は基本帯紐・珠繫・紐。外側に花飾、副帯は帯一条でもと花飾から結びが出たか。

腕釧 列弁文、紐二条、列弁文。足釧 列弁文、紐二条。

右腕屈臂、右腹前で三鈷劍の柄を握る。左腕屈臂、左腰脇で掌を上をに綱索を執る。頭をわずかに右に向け、両肩をそびやかし、腰を左にひねり、右足を踏み出して立つ。

法量(単位cm)

本体

像高	七四・〇		
髮際高	六九・八		
髻頂一類	十四・八	面長	一〇・七
面幅	一〇・五	耳張	一四・三
面奥	一五・〇	胸奥	十三・八
腹奥	十五・八	腋張	十六・二

宝鉢手手首先、脇手のうち右後列上第一手、第二手の肘先、その他の脇手の一部、左脇手背面に懸かる天衣、天衣垂下部、上背部に打つ左右
一個の壺金具、以上後補。
台座 後補。

備考

一、実査 平成二年八月(山岸公基)。平成二四年六月二十三日・二十四日(山岸公基・加藤久雄・中澤静男)。九月七日・八日(山岸公基・中澤静男・宮武杏名・小松原絵里・新宮済・中澤哲也・古川真理奈・幸田早苗)。

光背

高 二二三・五 最大張 一三一・〇

二重円相部高一四五・〇 頭光径 五一・五

身光張 六五・五 光脚高 二〇・〇

光脚張 六三・三

台座

高 五四・一

品質構造

本体

針葉樹。樫か。寄木造。素地。

頭体別材。頭部は両耳上を通る線で前後二材、別に後頭部に背板一材。体部は両肩前を通る線で前後二材（したがって前後矧ぎ目は両肩前で正面から見える）、後面材の肩から腰下にかけてさらに背板を矧ぐ。

両肩以下別材。現在合掌する手は肘、手首で矧ぐ。この手は古写真で同位置に構える手と同一かと思われるが、合掌する左右の手先を別材で造っており、現在掌間に開きがある。

合掌手と宝鉢手は共木の上膊部を前中後の三列にまとめて各一材を矧ぎ、それぞれに各臂の肘先を矧ぐ。脇手背面の天衣は左右分とも各左右二材を矧ぎ裾折返し部の突出部矧ぎ付け。両足先矧ぎ付け。

伝来

一、常膳寺観音堂前立尊として伝来した。

保存状態

本体 白毫亡失。

千手観音菩薩立像

岩手県陸前高田市小友町字上の坊二四

常膳寺

木造 素地 一軀 像高一六三・〇cm

形状

本体 髻頂に頭上面を表さない。髻周囲の環状の髪束に四面、地髪部に七面をあらわす(地髪部七面のうち正面中央一面のみ作風が異なり、古いか)。頭髮は束ね目入りの毛筋彫りとする。鬢髪二束が耳をわたる。天冠台は紐二条の上に列弁文、正面・両耳上でその上層に菊座をあらわす。白毫相をあらわす。現状五十二臂を数えるが、左右で臂数を異にしている。当初は四十二臂か。条帛・天衣を懸け、裙・腰布を着け、腰廻りに帯状の布を巻く。裙・腰布はいずれも右前に打ち合わせ、裙は上縁を折り返す(折り返し部は左前に打ち合わせ)。臂釧は紐・珠繫・紐で帯一条の副帯をわたす。腕釧は列弁・紐二条・列弁とする。両足をやや開いて直立する。

光背 二重円相光。頭光は中心に八葉蓮華をあらわす。圈帯は内縁、外縁とも紐・珠繫・紐を配し、無文。身光は中央を空とする。圈帯も内縁、外縁とも紐・珠繫・紐を配し、無文。光脚は仰蓮・反花・蕊から成り、仰蓮・反花は七弁(仰蓮は二重間弁付)とその間の蕊をあらわす。周縁部は概形連弁形、外縁圈帯が紐・珠繫・紐。内区は上半に雲、下半に唐草を配す。

台座 蓮華四重座(仰蓮・敷茄子・反花・框座)。

法量(単位cm)

本体

像高	一六三・〇(五尺三寸八分)
髮際高	一四〇・五(四尺六寸四分)
面長	一六・〇
面幅	一四・五
耳張	一八・五
面奥	一九・〇
胸奥	二四・〇
腹奥	二二・八
合掌手肘張	三九・五
裾張	四二・二
足先開外	三三・八
足先開内	二一・九

伝来

- 一、常膳寺観音堂本尊として伝来した。

保存状態

現在、この像の左手首から内側に垂下する天衣部材は、材の厚みや全体の大きさが天衣垂下部より薄く短い。元は千手観音像の合掌手肘先の左右いづれからか垂下する天衣であったか。

備考

- 一、実査 平成二年八月(山岸公基)。平成二四年六月二十三日・二十四日(山岸公基・加藤久雄・中澤静男)。九月七日・八日(山岸公基・中澤静男・宮武杏名・小松原絵里・新宮濟・中澤哲也・古川真理奈・幸田早芭)。

〔参考文献〕

大矢邦宣「北奥の豊饒華麗な仏の世界―岩手の仏像」『仏像を旅する 東北線』所収。平成二年一月、至文堂

十一面観音菩薩立像

岩手県陸前高田市小友町字上の坊二四 常勝寺

木造 素地 一軀 像高三二五・〇cm

形状

本体 髻頂に仏面、髻中段に三面、地髪部に七面の計十一面を頭上に戴く。頭髮は髻および地髪部天冠台下を疎彫、他は平彫とする。鬢髪二束が耳をわたる。天冠台は紐二条の上に列弁をあらわし、その上層に正面で左右に雲形の附属する菊座、・両耳上に円形飾をあらわす。白毫相をあらわす。条帛・天衣を懸け、裙・腰布を着ける。裙・腰布はいずれも右前に打ち合わせ、裙は上縁を折り返す。胸飾・臂釧・腕釧を各つける。胸飾は概形被形。列弁文・紐・珠繫・紐・列弁文。正面中央に円形飾。臂釧は紐・珠繫・紐で外側に円形飾をつけ、帯一条の副帯をわたす。腕釧は列弁・紐二条・列弁とする。両足をやや開いて直立する。

台座 方座。

法量(単位cm)

本体

像高 三二五・〇(二丈八寸三分)

品質構造

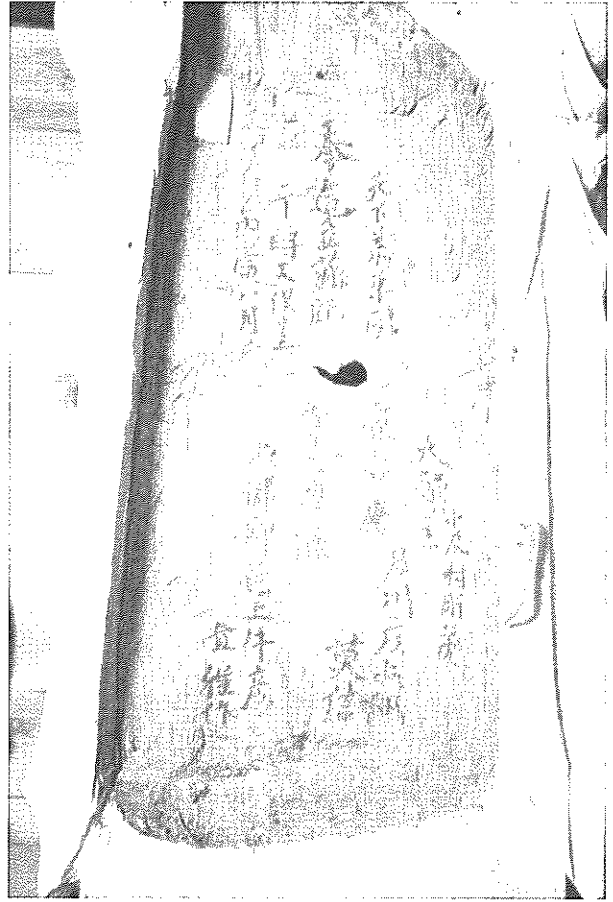
本体

針葉樹か。寄木造。素地。

頭体別材。頭部は両耳上後を通る線で前後二材。体部は両体側を通る線で前後二材。頭部は前面では三道の最下縁で、背面では襟際で体部に差す。この頭体幹部材に髻、頭上面、両肩以下(共に肘、手首矧ぎ)、天衣垂下部、両足先を各矧ぐ。

表面は素地。

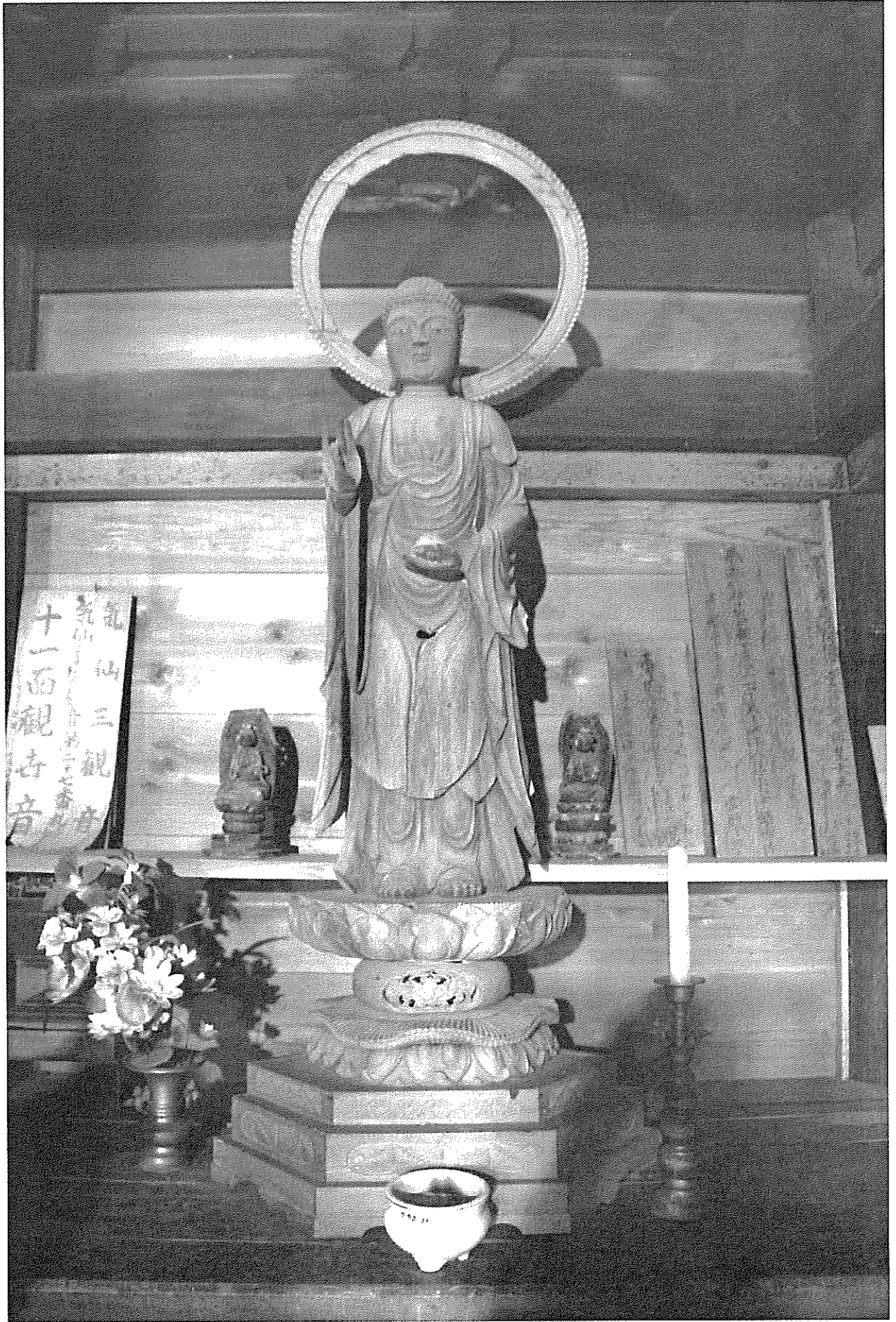
台座 方座、前後二材。



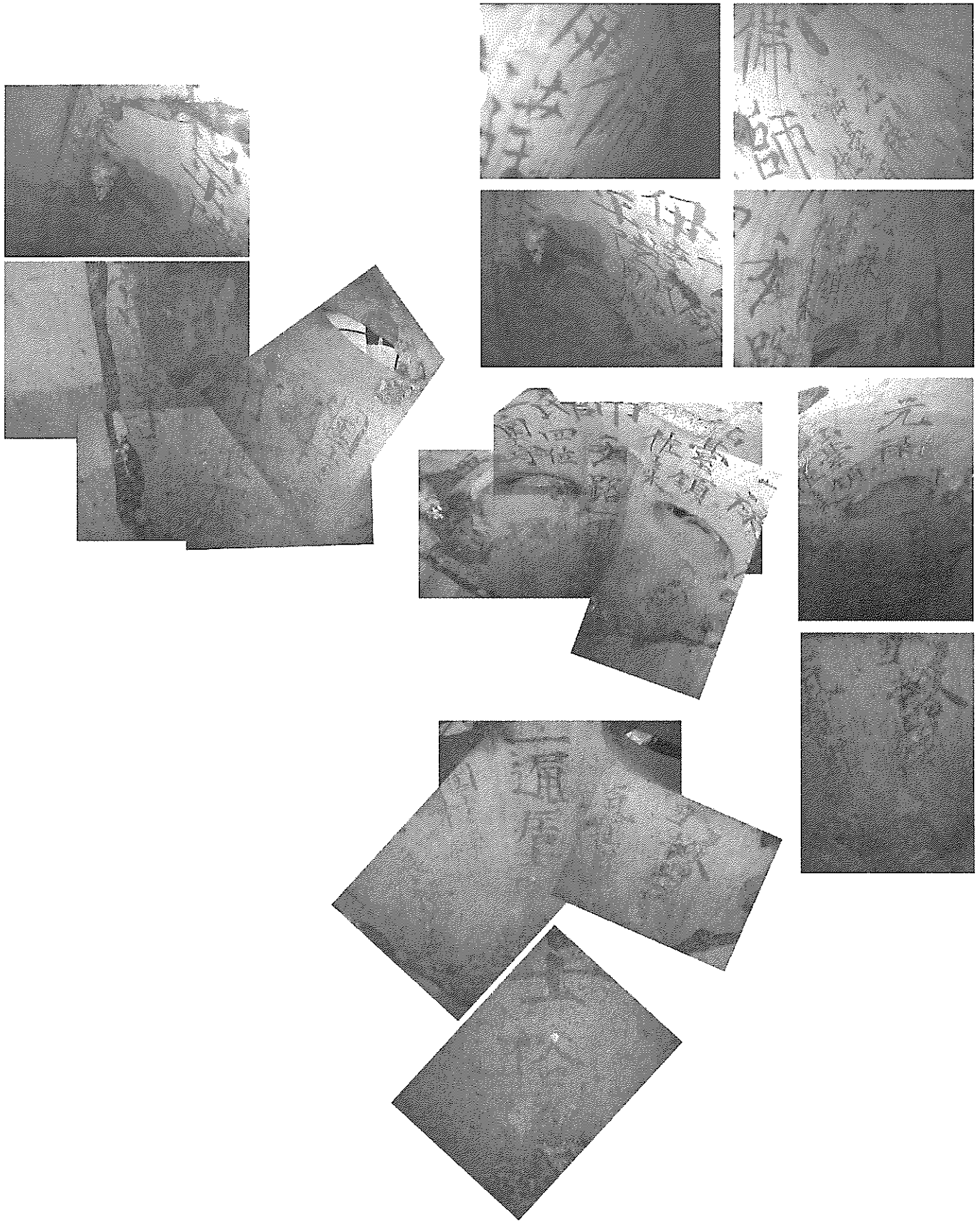
常膳寺 薬師如来立像 全身背面（背板を外す。左写真）・体部前面内銘記



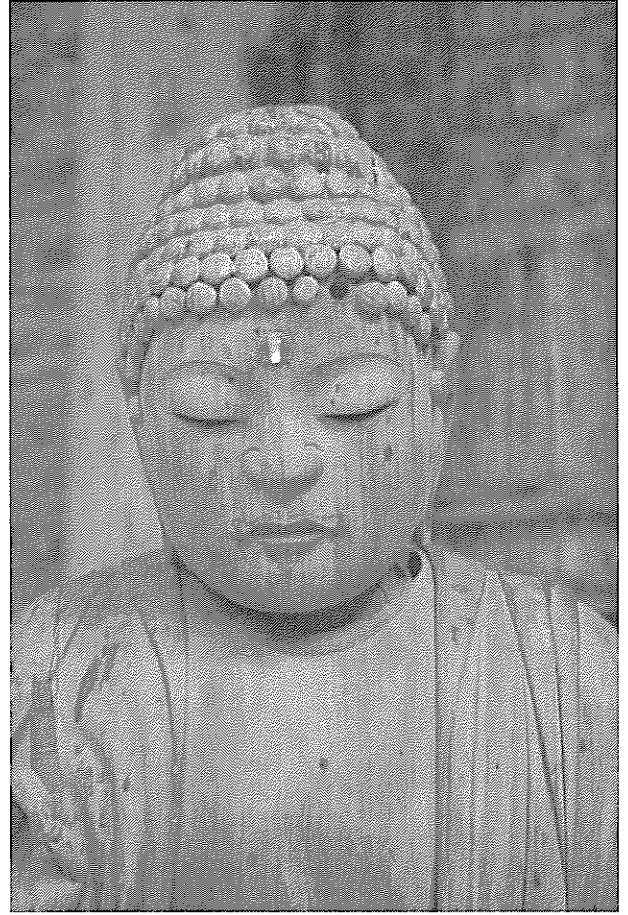
常膳寺 薬師如来立像 背板内面銘記



常膳寺 薬師如来立像 全像正面



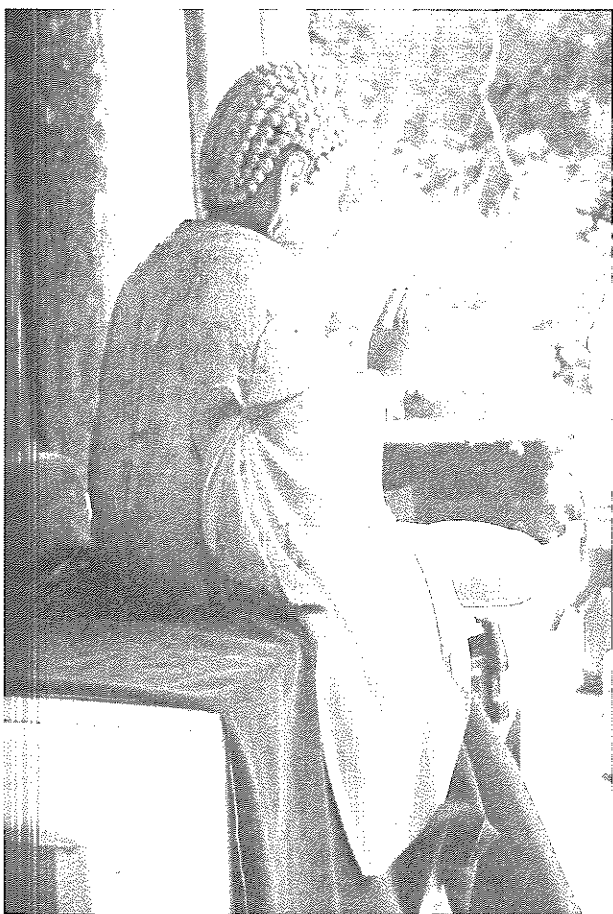
常膳寺 阿弥陀如来坐像 頭部内銘記



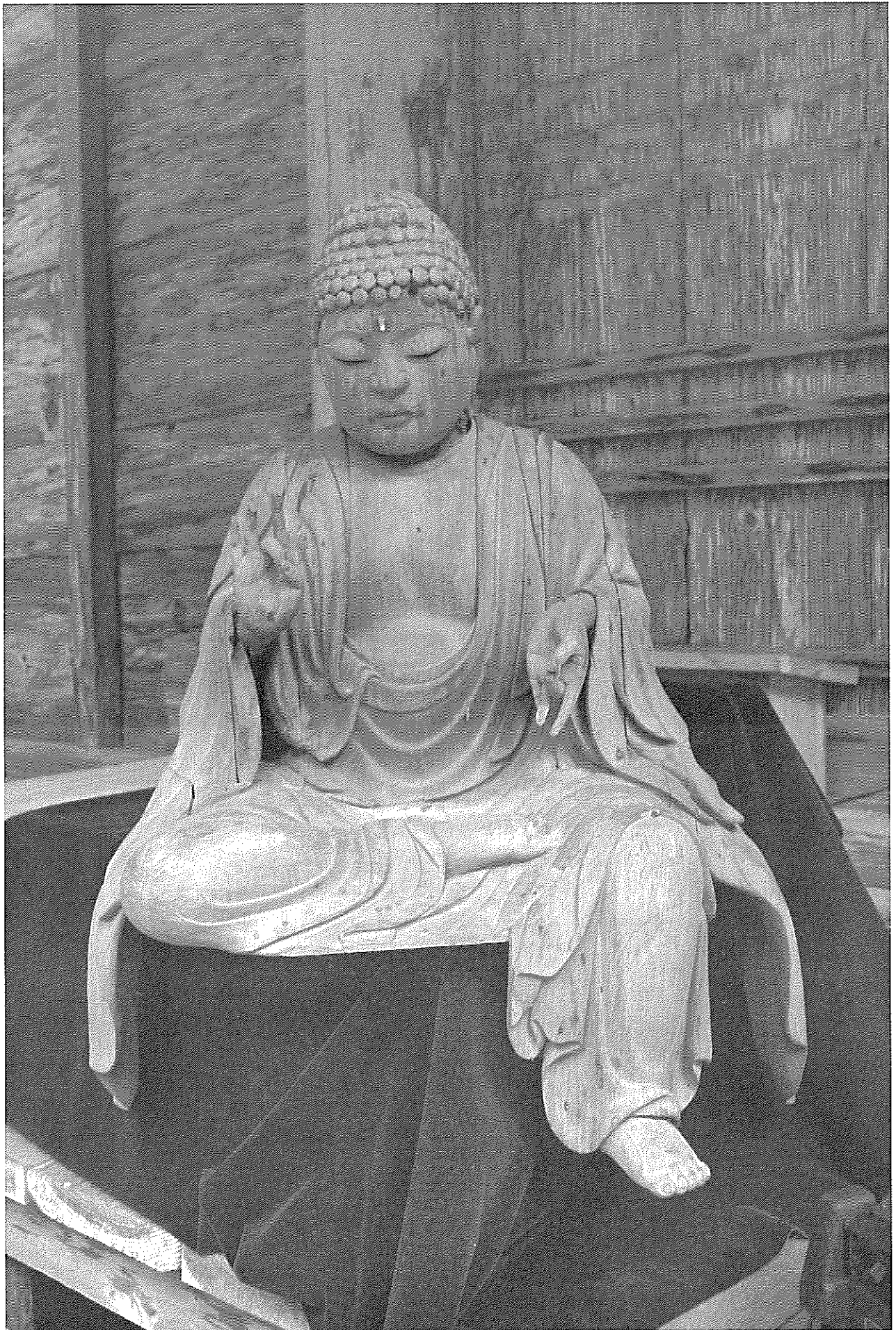
常膳寺 阿弥陀如来坐像 頭部右斜側面 (左写真)・頭部正面 (右写真)



常膳寺 阿弥陀如来坐像 全身右斜側面（左写真）・全身右側面（右写真）



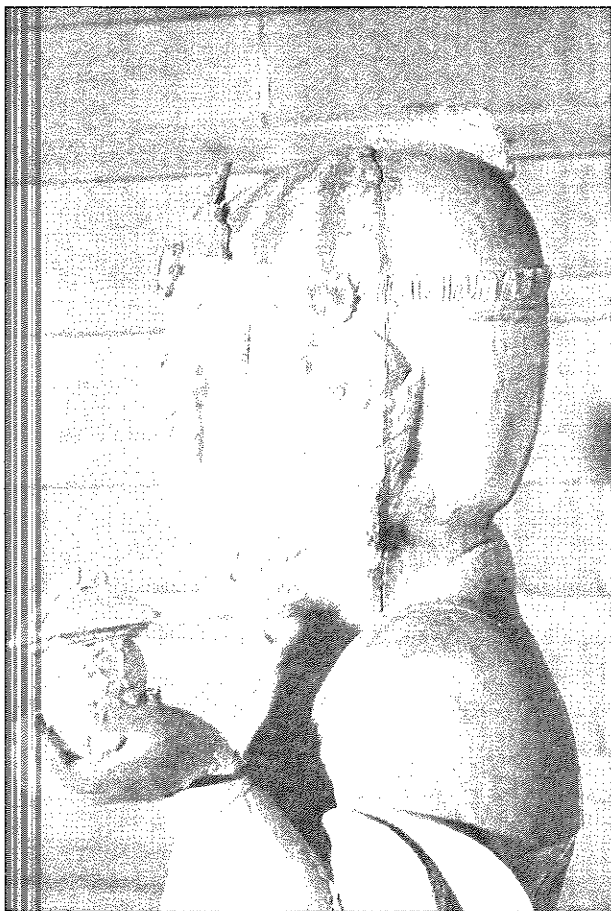
常膳寺 阿弥陀如来坐像 全身背右斜側面



常膳寺 阿弥陀如来坐像 全身正面



常膳寺 毘沙門天立像 頭部左斜側面 (左写真)・頭部正面 (右写真)



常膳寺 毘沙門天立像 邪鬼

常膳寺 毘沙門天立像 頭部左側面



常膳寺 毘沙門天立像 全身右側面 (左写真)・全身左側面 (右写真)



常膳寺 毘沙門天立像 全身背面 (左写真)・全身左斜側面 (右写真)



常膳寺 毘沙門天立像 全身正面



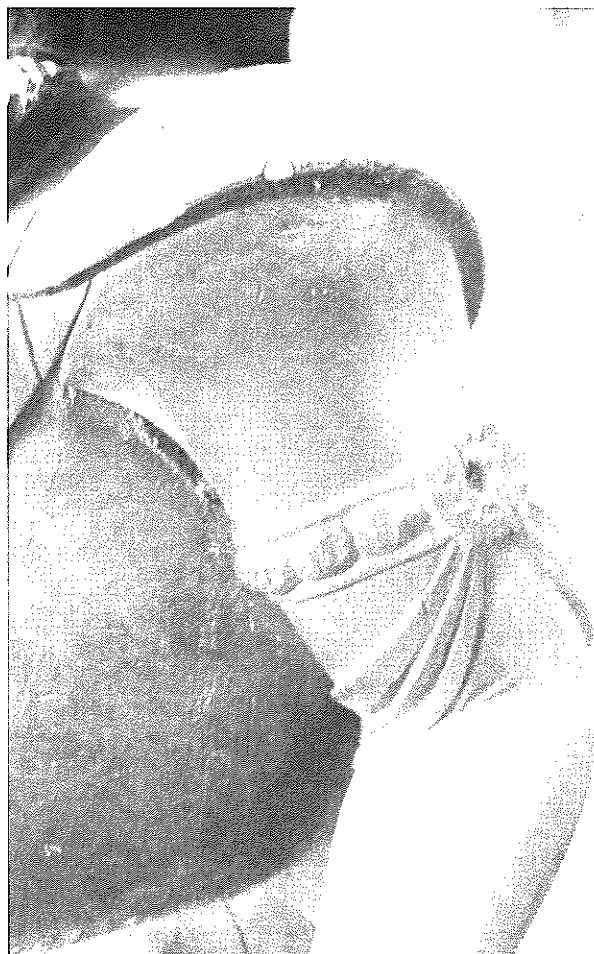
常膳寺 不動明王立像 頭部左斜側面 (左写真)・頭部正面 (右写真)



常膳寺 不動明王立像 頭部右側面 (左写真)・頭部左側面 (右写真)



常膳寺 不動明王立像 全身右側面 (左写真)・全身左側面 (右写真)



常膳寺 不動明王立像 全身背面 (左写真)・左腕臂釧 (右写真)



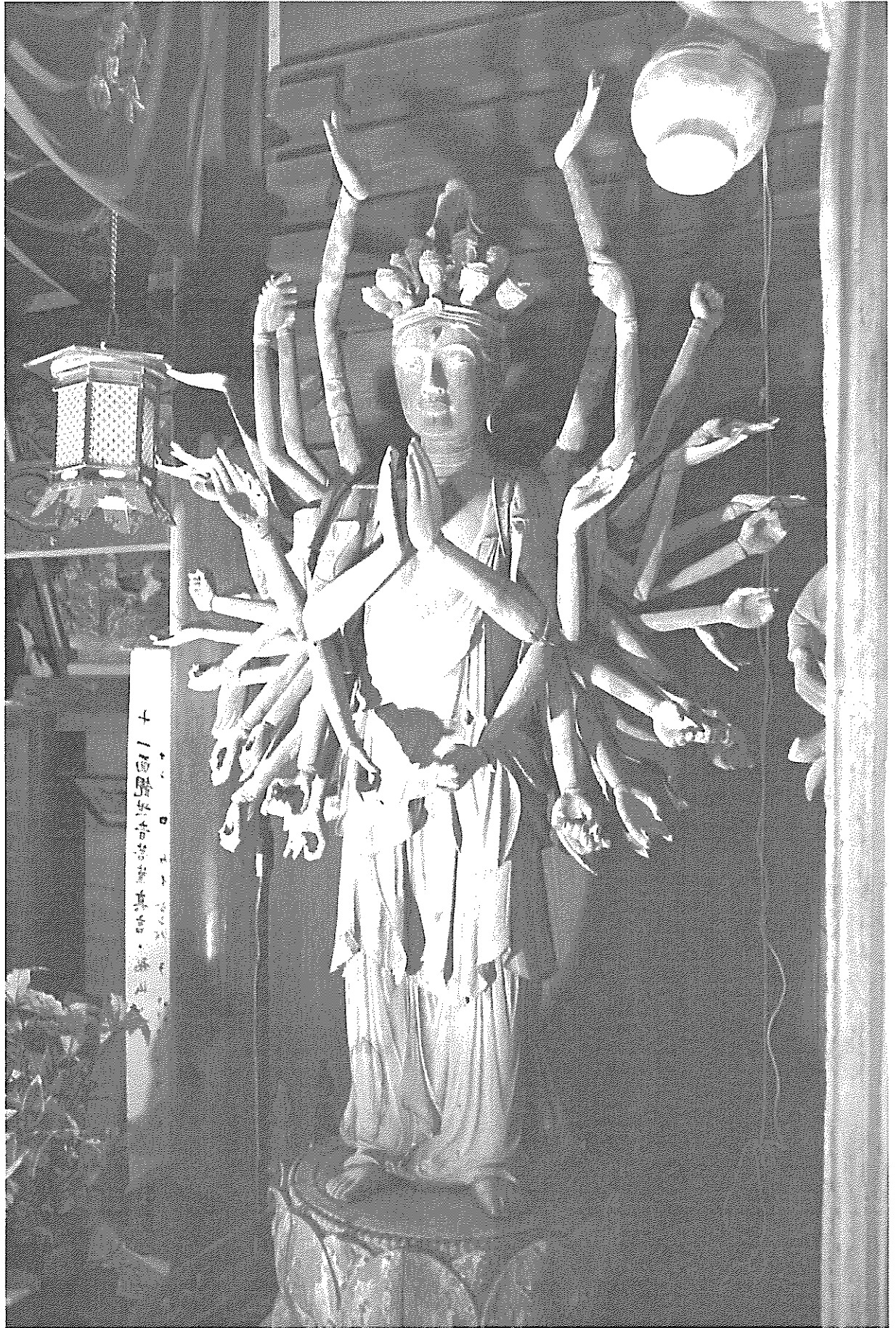
常膳寺 不動明王立像 全身正面



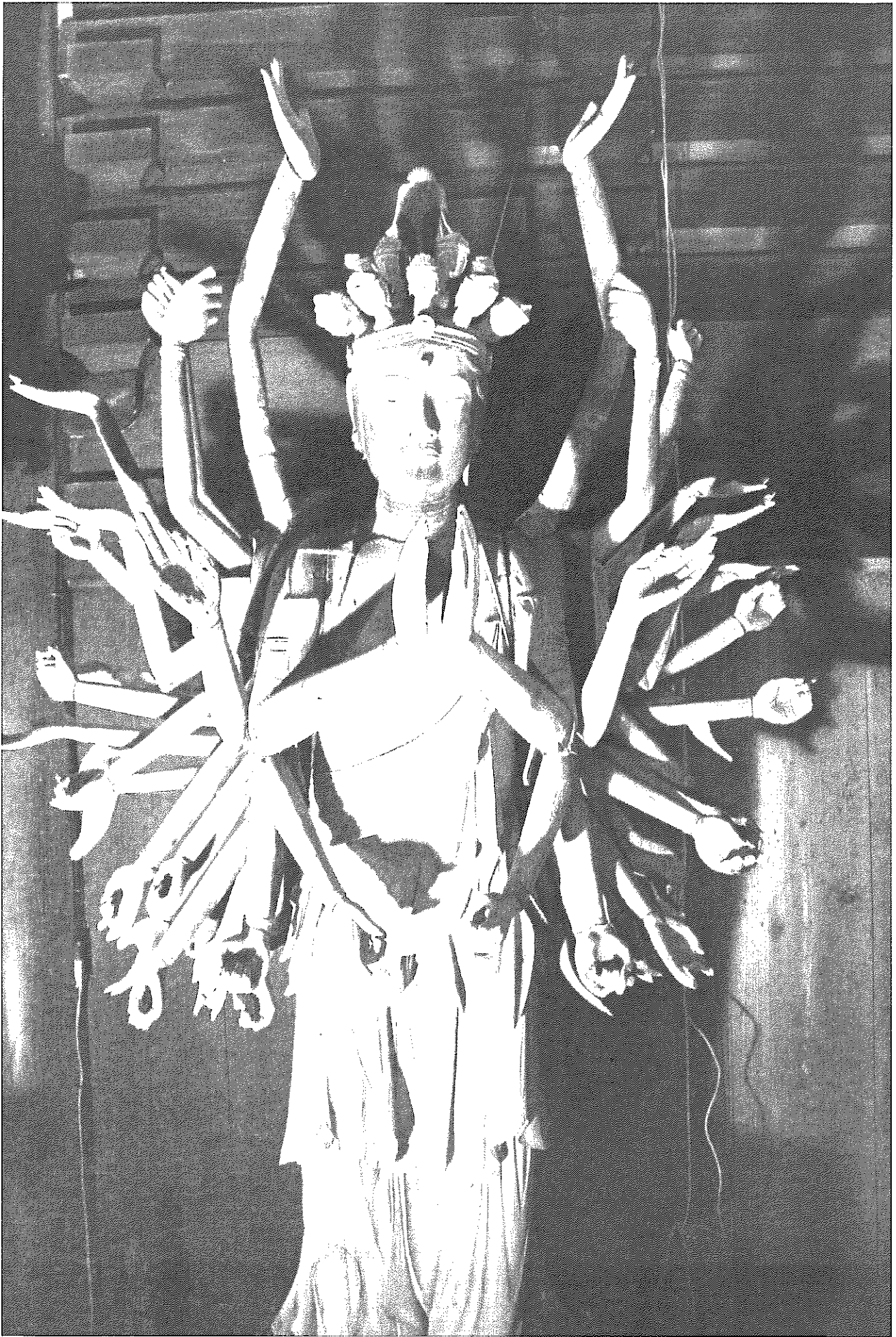
常膳寺 千手観音菩薩立像 頭部右斜側面 (左写真)・頭部正面 (右写真)



常膳寺 千手観音菩薩立像 頭部右側面 (左写真)・頭部左側面 (右写真)



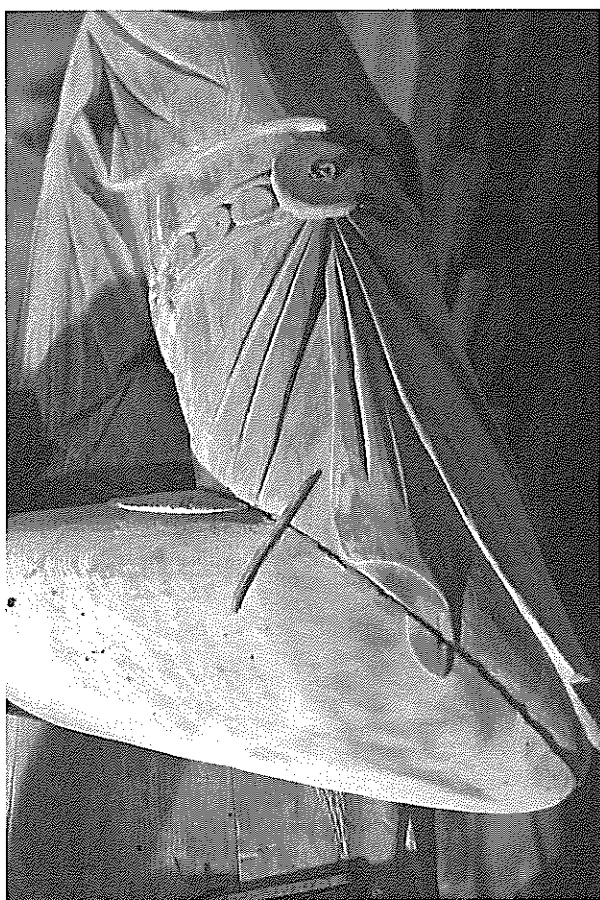
常膳寺 千手観音菩薩立像 全身左斜側面



常膳寺 千手観音菩薩立像 全身正面 (膝より上)



常膳寺 十一面観音菩薩立像 頭部正面（左写真）・頭部左側面（右写真）



常膳寺 十一面観音菩薩立像 左腕臂剣



常膳寺 十一面観音菩薩立像 全身正面

岩手県陸前高田市常膳寺
仏像調査報告書

2013年3月
奈良教育大学

「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」

教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

テーマ2

附属学校の「学び合い・育ち合い」機能の強化のための研究開発

五、中国农村合作化运动

1. 农业合作化运动的发展过程

（一）农业合作化运动的发展过程

奈良教育大学附属学校園報告概要

1. 内 容

附属学校園全般にわたっては「学びあい・育ちあい」の機能の強化のための設備・環境の充実である。それらから、人々や自然への感謝の気持ち、生物界のつながり、人間と自然との共生などについて学び取ることを行った。また、韓国の公州大附設中学校との相互交流、平和学習等の充実深化を図っていった。これら附属学校園の諸活動に本学学生の参加を見たことは、大変意義深いことである。学校現場では、常に子供を真ん中において考え、行動している教師の姿は、「教育者とはこういうものなのか」「教えるとはこういうことなのか」を学生たちに無言で語っていたものと思う。

2. おもな取り組み (○報告書掲載 ☆学生も参加)

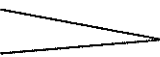
幼稚園

- 7月 4日 (水) どんごワークショップ ☆
- 11月 16日 (金) 糸電話で遊ぼう ☆
- 11月 30日 (金) やきいも大会 ☆
- 1月 10日 (木) アスレチックのできるまで ○
- 1月 23日 (水) 気分のいい“時”の話 ○
- 2月 6日 (水) 影絵鑑賞会 ○ ☆

小学校

- 8月後半より ビオトープ作り ○ ☆
- 11月 7日 (水) 授業及び研究討議 ☆
- 11月 17日 (土) 教育研究集会 ○ ☆
- 1月 31日 (木) 天体望遠鏡制作の事前説明会 ☆
- 2月 5日 (火) 平和集会 ○ ☆
- 2月 16日 (土) 天体望遠鏡制作・星を見る会 ○ ☆
- 保健指導及び器機の取り扱いについて ○ ☆
- 特別支援学級の充実 ○ ☆

中学校

- 通 年 中庭プロジェクト ○
- 8月 6日 (月)～9日 (木) 韓国公州大学附設中学校と交流 ○ ☆
- 8月 17日 (金)～21日 (火) 韓国公州大学附設中学校訪問 ○
- 9月 15日 (土)～18日 (火) 防災教育研修 ○
- 10月 21日 (日)～23日 (火) 韓国公州視察 ○
- 10月 25日 (木) 教育研究会指導案検討会 ☆
- ESD 先進校視察 (沖縄県北谷町立北谷中学校) ○
- 11月 2日 (金) 教育研究会 ○ ☆
- 12月 25日 (火)～27日 (木) 沖縄修学旅行の事前調査と現地団体との話し合い ○
- 1月 11日 (金) 平和の集い ○
- 12月 3日 (月)
- 1月 15日 (火)・29日 (火)  特別支援学級での読み聞かせ活動 ○ ☆

【附属幼稚園 子どもの森プロジェクト】

『子どもの森のアスレチックで遊ぶ』

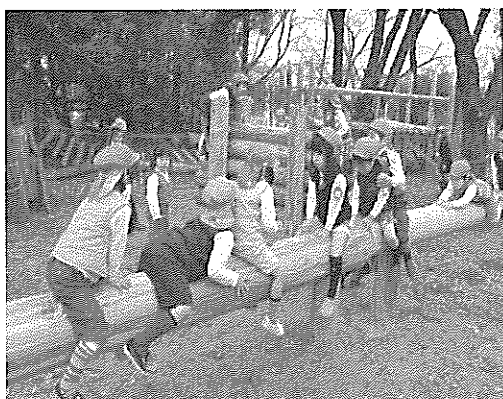
「人と自然との共生につながる」「持続可能な生活につながる」保育

① アスレチックができる過程を写真を見ながら説明する（1月10日）

- ・森にできたアスレチックは何でできているか、その木はどこからきたか、どのように山から切って、どのように幼稚園まで運んできたか、などを話す。
- ・目の前にあるものが、いろんな人の手を経て今の形になっていること、いろんな人の「子供たちに楽しく遊んでもらいたい」というやさしい思いから成り立っていることなどを伝える。
- ・山の木がアスレチックとなって子どもたちの遊具となっていること、古くなった木もまた虫の住み家になったりキノコが生えたりしていろんな命がつながっていることも伝える。

② 子どもの森のアスレチックで遊ぶ

- ・思い思いの場で喜んで遊ぶ。繰り返し乗ったり繰り返し挑戦したりする姿が見られる。
 - ・友達同士教えあったり、助け合ったりする。
 - ・木をなでたり木のおいを嗅いだりして、木そのものにも親しみを感じている子がいた。
- 子どもの声「すごく楽しかった」「作ってくれてうれしかった」「山の木がこんなになってすごい」「木のいい匂いがした」「いっぱい遊べてうれしい」「手や足が強くなりそう」



③山から木を切ってくれた森林組合の人、アスレチックを作ってくれた建設会社の人にお礼の絵を描いて渡す

考察

- ・子どもの森は以前から大好きな場所であったが、アスレチックができることによってさらに愛着のある居場所となった。毎日のように全身を使ってダイナミックに動いて遊ぶ子どもたちの姿が見られ、自然の中で身も心も癒やされながら過ごす心地よさを体感している。
- ・ただ新しい遊具で遊ぶのではなく、それができてくるまでの過程を説明することが、子どもたちの遊具に向かうときの気持ちを変化させた。より大切に思い近親感をもてたと思う。
- ・目の前にあるものを当たり前と思うのではなく、どこからどのようにしてつくられてきたかなどを考える良いきっかけとなった。身の周りの物すべてに思いを寄せ、感謝の気持ちをもつことなどが、今の子どもには必要であると考えた。自然界には不必要なものなど何もなく、何でも誰かの役に立っているという見方をするようになることは、持続可能な社会をつくっていくには、大切な素地となるであろう。

【附属幼稚園 子どもの森②】

『子どもの森のアスレチックで遊ぶ』

「人と自然との共生につながる」「持続可能な生活につながる」保育

- ① 子どもの森から見えるソーラー時計を設置する
- ② 子どもたちに、太陽の光で動く時計であることを話す
- ③ 保護者のための大学講座を開催し本学持続発展・文化遺産教育研究センター専任講師の中澤静男先生に「気分のいい“時”の話」をしてもらう。(1月23日)

40名を超える保護者が参加し、まず持続可能な社会をつくる必要性について聴いた。本題に入り、物理的時間の特性、考え方、歴史などについて学び、最後には心理時間にふれ、時の経つのを忘れるフロー体験の大切さというものを示唆してもらえらる講義となった。



保護者の感想

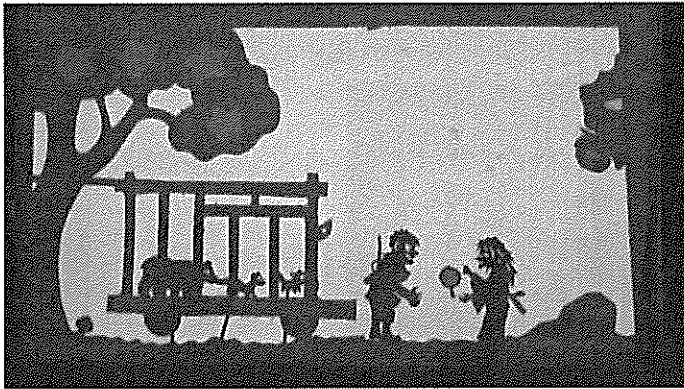
- ・先生のお話が楽しくてもっと聞きたかった。人柄も楽しくて興味深く聞いた。
- ・テーマが漠然としていて、どんな話になるだろうと思って参加したが、学生時代に勉強した内容もあり、子どもに教えてあげたい豆知識もあり、いい勉強になった。とにかく勉強するって楽しいと思えた。まさにフロー体験できた半日だった。
- ・親が楽しい“時”を過ごしていることが子ども・家族へつながるかなあと思う。
- ・フロー体験について、周囲の人としゃべっている3分間があったという間だった。自身のフロー体験について考えられて面白かった。主人にも聞いてみます。
- ・フロー体験の大切さを感じた。すごく気分のいい時間を過ごせた。
- ・今後の家族の時間の過ごし方の中でフロー体験を増やしていきたい。
- ・子育てのストレスの多くは、時間で管理しようとする自分と物理的時間に全くとらわれない子どもとの違いから生じるのかもしれないと考えさせられた。生産性を大切にしつつお互いが疲れない生活を目指して、子育てを見直してみようと思う。
- ・ボランティアとか世話係とかすることがあるけど、それが意味のあることだとまとめられると余計やりがいがあるものを感じられそう。
- ・ボランティアで良い気持ちになる経験を子どもにもこれからしてほしいと思った。無償の喜びをたくさん感じた子どもは素敵な大人になると思う。
- ・最初は難しい話だったけど、同じ時間をいかに有効に気分よく使うかわかって、「今」を大切にしたいと思った。
- ・今の世界状況もわかりやすく説明していただき良かったし、時間に追われるのではなく同じ時間を気分良く過ごせるようになれたらいいなと思った。今回の続き、もっと深く知りたい。

【附属幼稚園 影絵プロジェクト】

『学生制作の影絵劇を見る』

「影絵をとおして伝承文化にふれる」保育

- ①幼年教育 2 回生の学生が園児に向けた影絵劇を企画制作する（題材選びから始め、制作、練習等を繰り返し、当日を迎える）
- ②影絵鑑賞会「てんぐのうちわ」を実施する（2月6日）
年長児年中児合わせて 118 名が鑑賞する。影絵の持つ美しさと独特な雰囲気をも十分に味わいながら、昔話を楽しむことができた。日頃のテレビやビデオで見るのとは違う生の文化に触れる良い体験となった。また演じてくれた学生とのふれ合いも喜びとなった。



学生の感想

・影絵を演じるのは今回が初めてで、何もかもわからない状態からのスタートだったのですが、9人で一つの作品を作り上げることができ、今は達成感でいっぱいです。作品を作り上げる過程のほぼ全てを学生に任せていただいたおかげで、効果音の設定や魅せ方の工夫など多くの実践的な学びがありました。また、「真っ暗な部屋で一つの世界に入り込む」という影絵ならではの良さに気づくことができました。ぜひまた違った作品も演じてみたいと思っています。

・今回初めて影絵に取り組みました。みんなで試行錯誤をしながら制作し、準備が整うと後は練習あるのみと考え、授業と授業の合間の時間を見つけ、練習しました。影絵は1人でも欠けると行うことができず、みんなで一致団結することによってできるということが分かりました。練習を重ねる度に、団結力が高まっていったと思います。本番直前は、発表会前のような少し懐かしい緊張感を味わいました。本番は、子どもたちが予想以上に興味津々になって見てくれ、無事成功することができました。終わった後は、達成感とこのメンバーで影絵という1つのものを作り上げた喜びがありました。またこのような機会があれば、ぜひもう一度行いたいと思います。

・今回の影絵では、私は背景とピアノの伴奏を担当しました。どのように背景を構成すれば、あるいは、どのように切り替えればよりわかりやすく物語の世界観を子どもたちに伝えられるかについて全員で意見を出し合えながら練習を重ねました。子どもたちが影絵に見入ってくれていたのが印象的でした。準備から練習、そして本番までの一連は初めての経験だったので大変でしたが、とてもいい機会になりました。ありがとうございました。

考察

・普段テレビやネットの映像に慣れている子どもにとって、人が演じる生の影絵を見ることは新鮮な良い経験になった。大きな画面で見る色の美しさや不思議さに引き込まれて影絵独特の雰囲気を味わうことができたと思う。今後も昔話の良さなどを影絵で伝えて行ければと思う。

・学生にとっても子どもたちのことを考えながら自分たちで1から制作する経験、実際の子どもへの反応を肌で感じることでできる経験は、貴重なものだったと思う。

附属幼稚園での影絵の感想（2013年2月6日(水)）

何も分からないところから、影絵を始めて、背景や人形の動き、何が必要かというのは、全て、やりながら手探りで考えていきました。だから、本番直前まで、ここはこうしようと改善を重ねていました。私は声と背景を担当しましたか、背景があるかないかで、雰囲気ガラッと変わることを感じました。また、場面転換で、見ている人が、おおっ！と思うようにするには、どうしたらいいか、考えながらやりました。今回は時間が限られていたため、背景をかなり削減しましたが、さらに工夫することで、もっときれいなものになっていくと思います。

幼年教育2回生 阿部 円香

影絵の人形を作るのは本の型紙通りにしたのですが、動かすためのしかけが難しかったり、背景をいかに簡単に、でも本格的に作るにはどうしたらいいかを考えたり、たくさんの工夫が必要でした。でもそれも9人で意見を出し合って、先生に協力してもらいながらうまくすることができました。発表当日も子どもたちがどういう反応を見せてくれるか心配だったのですが、とても静かに見入ってくれていたのも、子どもたちなりに影絵の世界に入って話を理解してくれていたのではないかと思います。緊張しましたが、皆と力を合わせて一つのことをするのはとても楽しく、いい経験になりました。また機会があればやらせていただきたいです。ありがとうございました。

幼年教育2回生 小川 幸子

私は、獺師と山姥の人形を主に動かしていたのですが、手足や顔の動きをより本物らしく見せることや、場面ごとに人形を変えたり、人形の持ち物が変わったりするところが難しく、工夫すべきところだと感じました。影絵を作る上で重要なのは、それぞれが役割をしっかりと持ち、自分のことだけでなく、隣の人が手いっぱいになっていけば持つてあげるといった、みんなで作り上げるという意識なのだと感じさせられました。大人数の子どもたちに何かを発表する場は初めてだったので、とてもよい経験になりました。ありがとうございました。

幼年教育2回生 久保 瑛江子

私は今回登場人物を動かすのをしました。思った以上に難しかったのですが、場面に合わせて動きを工夫するのが楽しかったです。演じているとき、子どもたちはとても静かに聞いてくれていて、顔は合わせていないのに子どもたちのドキドキ感がこちらにも伝わってきました。貴重な体験をさせて下さってありがとうございました。

幼年教育2回生 小西 佑紀子

今回の影絵では、私は背景とピアノの伴奏を担当しました。どのように背景を構成すれば、あるいは、どのように切り替えればよりわかりやすく物語の世界観を子どもたちに伝えられるかについて全員で意見を出し合えながら練習を重ねました。子どもたちが影絵に見入ってくれていたのが印象的でした。準備から練習、そして本番までの一連は初めての経験だったので大変でしたが、とてもいい機会になりました。ありがとうございました。

幼年教育2回生 芝田 麻未

今回初めて影絵に取り組みました。初めのうちは、台本は先生が用意してくださったものの、そこからどのように制作し、練習すれば良いのかが分かりませんでした。とりあえず、人形は型があったので人形から作ったのですが、背景が全く無く、背景はみんなで試行錯誤をしました。準備が整うと、後は練習あるのみと考え、授業と授業の合間の時間を見つけ、練習しました。影絵は1人でも欠けると行うことができず、みんなで一致団結することによってできるということが分かりました。練習を重ねる度に、団結力が高まっていったと思います。本番直前は、発表会前のような少し懐かしい緊張感を味わいました。

本番は、子どもたちが予想以上に興味津々になって見てくれ、無事成功することができました。終わ

った後は、達成感とこのメンバーで影絵という1つのものを作り上げた喜びがありました。またこのような機会があれば、ぜひもう一度行いたいと思います。

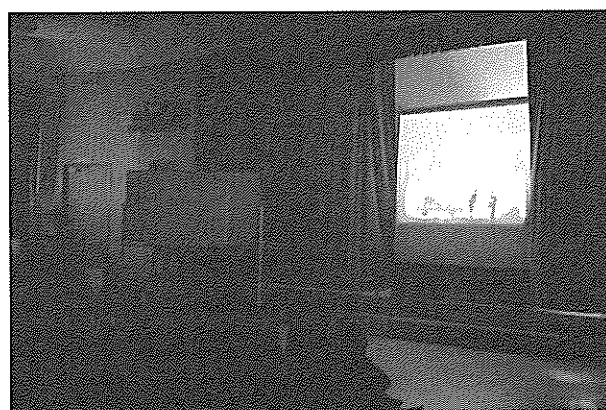
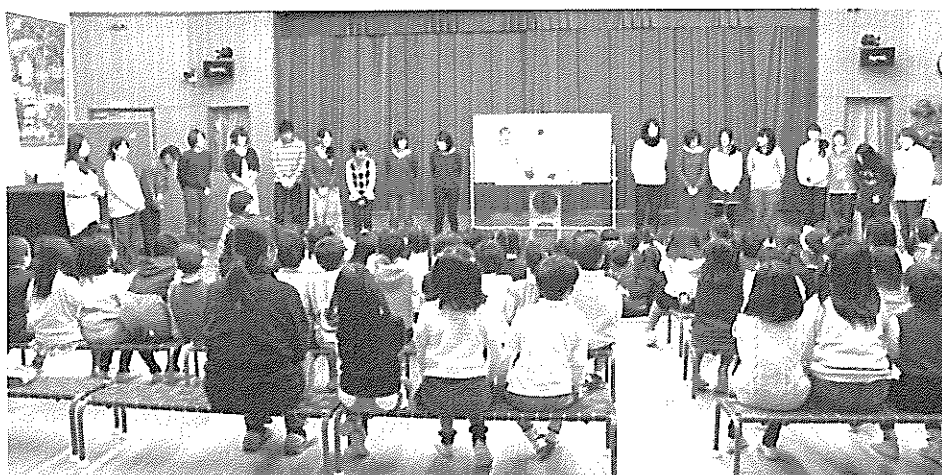
幼年教育2回生 杉山 友理

影絵を演じるのは今回が初めてで、何もかもわからない状態からのスタートだったのですが、9人で一つの作品を作り上げることができ、今は達成感でいっぱいです。作品を作り上げる過程のほぼ全てを学生にらせていただいたおかげで、効果音の設定や魅せ方の工夫など多くの実践的な学びがありました。また、「真っ暗な部屋で一つの世界に入り込む」という影絵ならではの良さに気づくことができました。ぜひまた違った作品も演じてみたいと思っています。

幼年教育2回生 田中 美帆

準備期間がとても短かったので、どれだけのものできるか心配でしたが、なんとか当日に間に合わせることができました。完成はしましたが、まだまだ改善できる点はたくさんあると思います。しかし、子どもたちが静かに見入ってくれたことがとても嬉しかったです。とてもいい経験になりました。

幼年教育2回生 濱田 舞

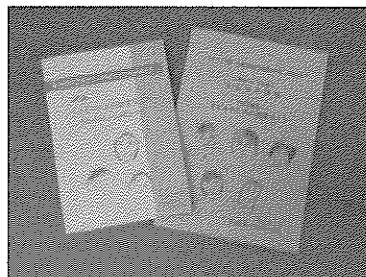


○プロジェクト名 『教育研究会への参加』

○プロジェクトの内容

教員養成を担う本学の学生にとって、教育現場を積極的に訪れ、児童、教員と直に接することは、必要不可欠である。大学での理論のみの学習では、現場の実態は計り知れない。

現場を訪れるための機会の一つとして、学校の教育研究会に参加することは大きな意味をもつ。なぜなら、言うまでもなく、教育研究会で行われる授業、発表等は、その学校での最高水準の実践であり、教員集団で論議を重ねたりしたものであるからである。そうした実践に学生が触れることで、学生自身が学んできたことと比較し、その課題も自覚することになる。また、今回のプロジェクトでは、教育研究会当日の参加だけでなく、事前に、教育研究会のテーマ等のオリエンテーションを受ける機会を設け、一層学生が、教育研究会への参加、観察の視点が分かりやすくなるように工夫した。



当日の参加学生が、予定より少なかったのは残念であったが、今後充実をさせていきたい取り組みである。



学生感想

・体育「たまりっこベース」

たまりっこベースは、ベースボール型ゲームであると同っていたので、野球をイメージして見に行っていたが、全く違う物であった。

まず投手がない。ティーにボールをのせてある状態で打者が打つので、ボール競技が苦手であっても参加が可能である。また、ベースの位置が特殊で、進塁することが目的で作られていた。あいにくの雨で屋内になってしまったので塁は二方向にしかなかったが、普段は三方向で行うためより幅広いプレイが可能である。試合は二チームずつ行われたが、試合がないときは、審判をしたり、作戦会議をしたりするので何もしていない児童はいなかった。試合は長すぎず退屈しない。試合に臨む児童たちはとても楽しそうにしていた。それと同じぐらい作戦会議が盛り上がっていた。次はどう攻めどう守るか。特に守備に児童たちは注目していた。作戦内容を聞いてみると、とてもよく考えており、試合の経験もあわせてどこにボールがきても対応できるようにそれぞれ工夫していた。

この授業は、その場の判断とそれに合わせた運動、またチームプレイを学習できる魅力的な教材であった。

国語教育専修4回生 清水 阿弓香

・先日、附属小学校の教育研究会に参加させていただきました。1時間目は実習でお世話になったクラスの図画工作の授業を、2時間目と分科会は算数に参加させていただきました。

図工では、木版画を行っており、児童が自由に彫るのではなく、過去の作品を見て、顔の版画から分かること（性格や版画の技法）を考えていたのが印象的でした。私が小学生の時、どの種類の彫刻刀で彫ると良いか、立体的に見せるためにはどのように彫ると良いかなどの指導を受けた記憶がなく、何力を用いるとイメージしているように彫れるのか知りませんでした。今回参観させていただいた授業のように、過去の作品を観察して、どのように彫ると良いのか児童が考えながら作品作りをすることで、苦手な児童も考えながら作品作りができるので、私が授業する時の参考にさせていただきたいです。

算数の授業では、ただ計算するだけでなく実物を持ってみて重さを計算するという授業でした。アルミや銅など、班に1つずつ準備をし実際に持ってみることで、児童は興味を持って参加していました。

分科会では、「単位量あたり」と「単位あたりの量」の違いにこだわって授業をされていたこと、学年をまたいだ学びの連続性を意識されていることなどがわかりました。質疑応答では、様々なところから参加されている先生方の日頃の実践や授業で気になった視点を聞くことができました。今後、授業を見学させていただく機会に活かしていきたいです。

奈良教育大学教職大学院 竹田 隼也

○プロジェクト名

自然環境教育の充実（ビオトープづくり、天体観測の会）

○プロジェクトの内容

①ビオトープづくりは、6学年の専門部の児童が中心になり、本校の自然環境を充実させると共に、それを使った環境教育を進めていくために行ったものである。

職員室の横にある、使用されていないあき空間になっていたところを利用し、ビオトープ作りをおこなった。専門部の児童が土掘りから始めると、他学年の児童も参加するようになり、ビオトープづくりが広がった。本学の学生も参加し、学校にお



ける環境の意義などについても学んだといえる。現実にビオトープが出来上がっていく様子を児童が自然に見ることによって、自然を大切にする思いも培うことができていると考えている。

また、ビオトープが出来上がった後、魚、水生植物の学習をおこなったり、全校にビオトープづくりについて、専門部の児童が発表したりしている。

②天体観測の会は、PTAの保護者と本校理科部が計画したものである。天体望遠鏡づくりの後、暗くなってから天体観測をおこなった。本学の学生も参加し、望遠鏡作りの手伝い、天体観測時の安全確保を行った。この取り組みでは、月や星を観測することで、自然の大きさや不思議さを児童に感じとってもらえた。地域ボランティアの協力も意義があった



学生の感想

・「親子で天体望遠鏡を作ろう」では、天体望遠鏡作りの講師の方々と小学校の先生方のサポートをさせていただいた。そこで気づいたことは、まず先生方の子どもたちへの配慮である。私が入らせていただいたクラスは低学年であったので、長時間集中して一つの作業をするのは少し難しかった。1時間もすると、子どもたちの集中力は切れ、作業がうまくいきにくくなっていた。そこで、先生が休憩を入れて疲れた子供は図書室へ移動させようと提案された。このような子どもたちへの配慮は、作業を続けていくうえでとても大事なことだと思った。

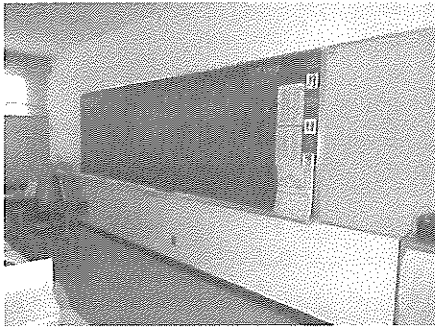
英語教育専修1回生 糸 綾香

・低学年の教室を担当した。説明をする先生の声がとても大きく、ゆっくり話をされていたり、他の先生たちが子どもにもう一度繰り返して言っていたりして、配慮が感じ取れた。また、途中で作業にあきた子どもを図書館に連れて行き気分転換をさせやる気を再度起こさせるなど、普段見逃してしまいそうなところがみられてよかった。

数学教育専修1回生 幸田 早苗

○プロジェクト名
通級指導教室の充実

○プロジェクトの内容



本校には、校内操作によって校内児童に「通級による指導」を行う通級指導教室を設置し、専任の教員を配置している。そこには、近年、通常学級に在籍し、発達障害と称される児童が通い、学習を行っている。文部科学省の中でも、通常学級に在籍する発達障害の児童への教育については、大きな課題の一つとして位置付けている。本学の学生がこうした通級指導教室を参観することは、今日的な教育の課題に触れることになる。

通級指導教室は、本校でも、独自の校内操作によって設置したものであり、教室等の教育設備等は十分なものだとはいえない。教室の黒板、教具な充実させることによって、児童の教育の充実はもちろん、学生が参観しやすい教室づくりを行うこともできる。

○プロジェクト名
特別支援教育の充実

○プロジェクトの内容

本校は、附属学校としては珍しく、知的な障害をもつ児童の特別支援学級を設置する学校である。特別支援学級では、本学の学生ボランティアが多く訪れ、特別支援学級の児童と接する機会を多く持つようにしている。

特別支援学級の児童と接することで、学生は教育の原点を感じ取ることができるのみだけでなく、将来教員になる意思を確かなものにする。

こうしたことを進めるためには、特別支援学級の児童と学生が遊ぶための遊具や木製積み木など、教育玩具等充実させていくことは欠くことができない。



○プロジェクト名

平和教育の充実

○プロジェクトの内容

本校では、年間を通して平和教育を行っている。とりわけ、6年生のヒロシマ旅行を契機にして、ヒロシマに投下された原子爆弾のこと、その被害、後遺症等を全校児童で取り組んでいる。

その中で、1年生～6年生までの6名のグループ（通称絆グループと呼ぶ）をつくり、その中で、6年生が1年生～5年生の下級生に、ヒロシマのことを伝える取り組みを行った。

そこでは、ヒロシマの原爆に関わる絵本などの読み聞かせすることも少なくない。原爆関連絵本等を充



実させることで、平和への取り組みが広がっていく。

また、今年度は、年度の後半で、「世界平和子ども像」建立の経緯を、全校で学ぶことによって、児童の平和への願いを高めていくこともおこなった。

こうした一連の取り組みは、6年生の卒業式の言葉はもちろん、卒業式の中身にも平和への願いを取り込んだものとなっている。



○プロジェクト名

保健教育の充実

○プロジェクトの内容

近年、保健室に来る児童が多くなっている。それは、けがや病気の来室だけでなく、「なんとなく頭が痛い・お腹が痛い」など、心の問題を含んだ児童が多くなっているからだと考える。そうした児童に、積極的に保健室の機能や役割を伝えることで、自分の病気やけがはもちろん、心の問題も見つめなおす機会となることを願い、各学級へ、養護教諭が授業を行うことをしてきた。

また、本学学生、とりわけ養護教諭の免許を取得しようとしている学生に、保健室に実際に来させ、養護教諭が、講話することを行った。今年度は、若い保健室の養護教諭からの講話を行い、身近に養護教諭の仕事や役割が見えるものとなった。

今回、「視力検査機器」「聴力検査機器」を導入し、その使用方法も含め、学生に実際に経験をさせることも積極的に行った。



『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた

持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

[テーマ2] 附属学校園の「学び合い・育ち合い」機能の強化のための研究開発

2-1 附属学校園における教育課程の基本方針としてのESDの研究開発

項目名 ①「『未来を創る子ども』を育むESD」(2年次)～ESDカレンダーの実践を通して～

1. 事業の内容 (教育研究会)

本年度は、ESDの学びの構造化をすすめるべくESDカレンダーの改訂を視野に、昨年からの継続研究をすすめ、「未来を創る子ども」を育むための「共に響き合う」つながりの構築のための「対話型学習」の推進をより進めていくこととし、教育研究会での実践発表となった。

公開授業は、「未来を創る子ども」を育むための「共に響き合う」つながりの構築をめざし、「対話型学習」の推進をすすめ、「対話」を意識しながら、「批判的思考」「当事者意識」などESDの学びに不可欠な能力や態度を培うことを通して、「学びの意味」や「問いかけ直し」を実践する「探究・創造の主体」の形成を目標とした。本年度は、国語科・家庭科・特別活動・特別支援学級(音楽科)の4教科を公開した。分科会では、参会者から、「生徒と指導者の学習基盤が出来ていることがよくわかる学びの場であった。」「対話を成立させる学習材の在り方」とは何かを具体例を通して提言していただいた。」「5名のメンバーが集中力をとぎらせることなく班活動に取り組む姿勢は圧巻であった。」等の意見をいただき、有意義な討論ができた。

ESDカレンダーの核となる「総合」の取り組みの再検討をとおして、2年生の「臨海実習」の取り組みから3年生の「沖縄修学旅行」の取り組み、そして3年間の学習の出口とも位置づけている「卒業研究」の取り組みについての報告を行った。「卒業研究」の成果発表をポスターセッションのかたちで参会者に見学していただいた。教科での学びが、生徒のなかで教科の枠を越えた「領域」として実践的な知となるプロセスを、2年の臨海実習での「共同研究」の技法を学ぶ社会科や理科の実践の成果と課題から3年の沖縄修学旅行での「事前学習」「タクシープランづくり」の取り組み、そして「卒業研究」のテーマ設定にいたる流れのなかで、生徒の成長として明らかにした。

講演は、国立教育政策研究所総括研究官丸山英樹先生をお招きし、文科省の方で展開してきた方針が、「誰でもESDができますよ」「ユネスコスクールになってください」というもので、なんでもESDになるというようなアプローチが続いてきたことへの懐疑が提起された。際限なくどの教科でもESDと広げていくと、結局何がESDなのか、今までと何が違うのかとなり、誰も何もわからないままESDの活動があったり、実践が語られるということがあったりした。そこで、共通認識としてどういうものが大事だったのか、みんなで考え構築するための基盤と個人ベースでのそれぞれの意識化が必要だとし、①「学力のとらえ方」と②「学習社会・生涯学習」③「教育と経済」の3点についてお話された。



2. 事業の成果と課題

ESDの求める子ども観を「未来を創る子ども」ととらえ、ESDで育む力の要素として、「感性」「認識・思考」「参加・参画」の3つが互いに関連し合って成長していく子ども像を提起した。本研究会では、「ESDカレンダーの実践を通して」を副主題に、各教科の授業実践がESDの学びとして「総合」などの活動場面にどう転嫁され、生徒がどう変容・成長していくか、また、学習場面での「対話型学習」が、異なる価値観や、学習の意味をふまえ、自己理解を深めていく活動に有効に働いたかどうか提起できた。今後なお提起の内容を検証していく継続研究が課題である。

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)
[テーマ2] 附属学校園の「学び合い・育ち合い」機能の強化のための研究開発
2-1 附属学校園における教育課程の基本方針としてのESDの研究開発

項目名 ②「ESDへのホールスクールアプローチを推進する学校としての環境づくり
～中庭プロジェクトの展開～」

1. 事業の内容

「裏山と中庭の活用の歴史から学校環境を考えるとともに、中庭をホールスクールプロジェクトのシンボルゾーンとして積極的な活用(環境、人権、平和など)を図る」を目的にした。

①緑のカーテン：宇宙フライト実験をしたアサガオの種を使い、緑のカーテンを育てた。地球の環境について、宇宙視野から考えると共に、中庭や校舎端でアサガオを栽培することで、附中の環境についても考えた。また、植物を世話することで、委員だけでなく附中生同士のつながりも広めた。取組を文化のつどいでの発表、環境ニュースで広報した。課題：この実験はJAXAの奨励実験としておこなうため、データは全国で集約されるが、今年度は種まきが遅れ、他機関との比較ができないので栽培観察のみとした。



②アンネのバラ：アンネのバラに水や肥料をやるとともに、文化のつどいでの発表や環境ニュースで広報を行ったが、接ぎ木でつくったバラだったので、先祖返りをしてしまった。来年度は接ぎ木に再挑戦するとともに、アンネのバラ教会と交流をもち平和学習を基盤にした人的つながりを再構築したい。

③水田づくり：中庭の2カ所を耕し、田として割り当て、水田を作り、稲作の工程を学んだり、水田の生き物の様子を観察しながら米を収穫し精米までを体験した。



主食としての米作りの工程を体験することで昔から行われてきた稲作の文化的価値や米作りの難しさを知ることができた。中庭水田という身近な場所で生徒がより身近に稲作を感じ、水田に住む様々な生物のつながりについて学ぶ機会にできた。

④中庭の整備：中庭設置の経緯を鑑み、学校植物園として活用できるように整備を始めた。平城山周辺の植生を踏まえた学校植物園として必要な植物を栽培育成すると共に、古代万葉集に歌われる植物を栽培育成し、生徒たちに古代人の息吹を感じさせ、古代から続く植物と人間との関わりを実感させるための調査および用地確保のための伐採、整地を行った。今後、季節、植生を踏まえ、年次ごとに整備していくが、だいたいの形にするためには5年ほど必要である。また、身近に観察・実験に資する理科教材園があることで、理科学習についての意欲を喚起できると考え、理科の授業等に活用できる植物を栽培し、観察・実験に資する理科教材園コーナーを設置した。今後、どのような植物が必要なのかを調査研究し、時節年次に基づき設備を充実していきたい。

2. 事業の成果と課題

○成果：①～④は、生徒の身近で目に付く場所での取組だったので、担当の生徒以外にも興味を喚起することができ、多くの生徒が取組に関わった。季節により、天候により移り変わる植物の姿を日常的に目にすることで、生徒の心に安らぎを与え、環境問題への関心が高まった。

○課題：①～④の項目でも述べたが、年次を考えた取組が必要であるため、水やりや日々の世話などの粘り強い継続的な関わりが必要で、これを支える人的、物質的支援体制づくりが課題である。また、学校植物園の名札付け、巣箱作り、ウッドデッキ増設は来年度の課題にしたい。

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた

持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

[テーマ2] 附属学校園の「学び合い・育ち合い」機能の強化のための研究開発

2-1 附属学校園における教育課程の基本方針としてのESDの研究開発

項目名 ③「国際理解教育・多文化共生教育の推進 ～韓国公州大学校附設中学校との交流
切り口として～」

1. 事業の内容

平成 23(2011)年 7 月、附属中学校と韓国公州大学校附設中学校との交流事業に関する協定が結ばれ、様々な準備を経て、平成 24 年度、双方の生徒・教員の相互訪問を軸とする交流が開始した。

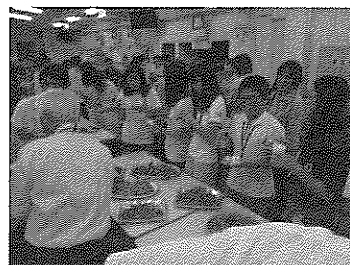
国際交流は、ユネスコスクールの重要なミッションの一つであり、また国際理解教育はESDの主要カテゴリーの一つとなっている。以前から本校でも海外の交流先を模索していたところ、本学と公州大学校との大学間交流を受けて、その附属校どうしの交流が実現したものである。

4 月当初に訪問生徒 7 名を決定し、それら生徒や生徒会役員を含む交流実行委員会を立ち上げ、事前学習をおこなうとともに、当日の交流の主体とした。教員側はユネスコ委員会が交流の企画と運営を担当した。

事前学習では、「奈良外国語観光ガイドの会」の方々のご協力で韓国語や韓国の文化を、また本校のALT教員に英会話を学び、7 月には「韓国フェア」を開いて国際交流の輪を校内に広げた。

8 月 6 日、公州附設中学校の生徒 7 名、先生 3 名が来日し、翌 7 日には附属中学校を訪れ、交流委員会の生徒や教員との交流をおこなった。その後、公州の生徒たちは、訪韓する附中生の家にそれぞれホームステイし、日本の家庭の雰囲気を体験した。また、その翌日には斑鳩方面の見学と奈良の「燈花会」を楽しんだ。

つづいて、8 月 17 ～ 21 日、附属中生徒 7 名と教員 3 名が韓国公州を訪問した。訪韓初日に附設中学校を訪問し、校長をはじめ全教員、全校生の歓迎の中、交流のひとつときを持った。



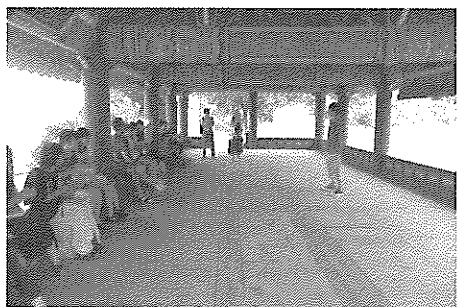
韓国語での自己紹介、英語での学校紹介、練習していた「故郷の春」の披露などの後、校内を案内された。

翌日、附設中の生徒や教員とともに公州市の史跡を見学した。百済の古都公州をとうとうと流れる錦江を見下ろす公山城の楼閣で、互いに歌を交換したり、記念写真を撮ったりと楽しい時間を過ごした。

訪問した生徒たちはそれぞれのペアの生徒の家にホームステイし、各家庭で温かく迎えていただいた。

最終日は公州からソウルに移動し、景福宮やパゴダ公園、中央博物館、南大門市場などを見学し、多くの思い出を胸に四泊五日の韓国訪問を終えた。

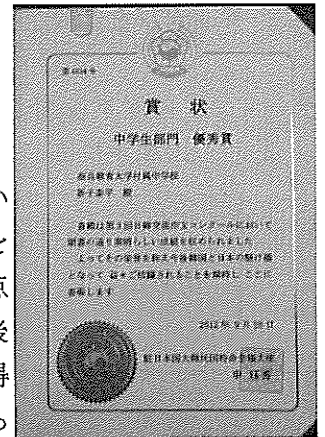
帰国後、訪問生徒は在日本韓国大使館主催の交流作文コ



ンクールに応募したが、そのうち1名(新子泰平君)が全国二位にあたる優秀賞に選ばれ、韓国大使館で表彰されるという栄誉を得た。

2. 事業の成果と課題

本校で長く希望してきた国際交流事業を実現させ、軌道に乗せるという今年度の目標を達成できたことは大きな成果であった。互いの違いを認め合い受け入れながら、合意できるところを模索し、より良い到達点をめざし WIN,WIN の関係を構築しようとする資質を育てる営みは、今後ますます重要になる。今回も本学に留学していた韓国人学生の協力を得たが、国際理解教育の実践の場であるこの取り組みに、今後は韓国からの留学生のみならず、本学の学部生や院生にもこの取り組みに参画してもらいたいと考えている。



『学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける』教員の養成に向けた

持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

[テーマ2] 附属学校園の「学び合い・育ち合い」機能の強化のための研究開発

2-1 附属学校園における教育課程の基本方針としてのESDの研究開発

項目名 ④「人権教育・平和教育の展開 ～『平和の集い』の実践を通して～」

1. 事業の内容

1年生には初めての、2、3年生にとっては昨年からの学習をさらに発展させた形の平和の集いである。震災を忘れないことや被災者を助けようという気持ちをもつことは、昨年度の平和の集いの中で学んだ。今年度は、9月に気仙沼市で行われた「防災教育研修」に参加した小嶋、富山両教諭から現地の様子と子どもたちの現状についての報告を聞いた上で「私たちには実際に何ができるのか」を考えるにあたり、互いに支え合うこと、生きる喜びを分かち合うことが大切であることを考える機会にした。その際、震災だけにとどめず、長年に亘ってカンボジアで支援活動をされている栗本英世氏の著作や講演を通し、支援のあり方を地球上の様々な問題にも広げて考える力を学ぶことにした。今年度の平和の集いの取組は次の3つの行事を中心に実施した。

- ①第1回事前学習(1/7)…栗本氏の講演を聴くにあたり、カンボジアについての地理や歴史についても簡単な知識を学習するとともに、栗本氏の支援に対する考え方や支援の形を知り、自分たちも持っている支援(ボランティア)のイメージを改めて捉えなおした。
- ②第2回事前学習(1/10)…「東北で見たこと、出会った人々、考えたこと、そして、あなたに伝えたいこと」をテーマに、2012年9月に小嶋、富山教諭が参加した防災研修(宮城県気仙沼市、岩手県陸前高田市)の報告を聞き、被災地の現状、現地の人々のがんばりを生徒自身の具体的な行動やがんばりにつなげられるように考えを深めさせた。翌日の「平和の集い」において、本当の支援とは何かを考えさせる契機とした。
- ③平和の集い(1/11)…栗本英世さんの講演を聞き、事前学習での疑問点や今まで知らなかったことを対話形式で質疑応答し考えを深め合うとともに、他の生徒たちとの意見の交流も行い、自分たちのできる支援を新たに考える機会とした。

2. 事業の成果と課題

- ①成果…生徒は、栗本氏の支援に対する考え方や具体的な行動を知ることにより、自分の価値観にとらわれるのではなく、相手の現状に深く学びながら、支援を行うこと、そのためにはまず、「友だち」になることが大切であることを学んだ。
- ②課題…支援に対する考え方は理解できたが、それを実際に行動に移すこと、また、被災地だけでなく、まず自分たちの身の回りから、問題を解決していく行動力の育成が課題となる。



【 講演中の栗本英世氏 】



【 生徒たちとの対話 】

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)
[テーマ2] 附属学校園の「学び合い・育ち合い」機能の強化のための研究開発
2-1 附属学校園における教育課程の基本方針としてのESDの研究開発

項目名 ⑤研修旅費(気仙沼・公州・沖縄北谷中学校・沖縄)

1. 事業の内容

「沖縄修学旅行の事前調査と現地団体との話し合い」

(1)参加者 山本広大 松田孝史

(2)日程 2012年12月25日(火)～27日(木) 二泊三日

(3)目的

- ・来年度の修学旅行を円滑、安全に行うために、主な活動場所について、現地で最新の状況を得ること。
- ・今後の沖縄修学旅行の発展を目指して、新しい活動場所や施設について、調査、開拓をすること。
- ・現地の宿舎や関わりのある団体との事前の調整や打ち合わせを行うこと。

(4)行程 【1日目】

- ・見学予定地の調査(南部戦跡、魂魄の塔、ひめゆり平和祈念資料館、沖縄平和祈念資料館、糸数豪、南風原文化センター、陸軍病院豪跡など)

【2日目】

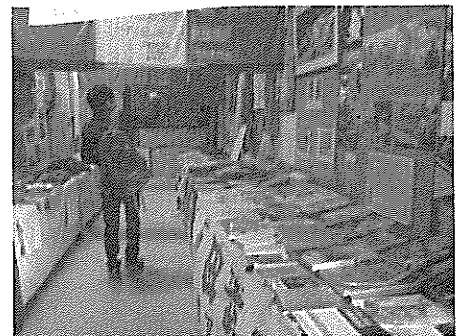
- ・見学予定地の調査(中部戦跡、嘉数高台、泡瀬干潟など)
- ・読谷村の民泊先予定の民家を視察、打ち合わせ
- ・コザインフォメーション(基地学習プログラムを支援している団体)

との話し合い

- ・伊江島の民泊村と話し合い

【3日目】

- ・伊江島島内視察(戦跡、ガマなど)
- ・国頭方面の民泊村の視察(東村)
- ・沖縄平和ネットワークとの話し合い(平和ガイドの依頼や情報の入手、夜の講話の講話者の依頼など)



2. 事業の成果と課題

本校の沖縄修学旅行で実施している民泊泊について、今年度利用した読谷村だけでなく、伊江島、東村での民泊泊について調査および実体験し、それぞれの特徴や利点について広く情報を得ることができた。また、来年度の修学旅行を安全で充実した内容のものにするために、関係する団体や施設と直接話し合えたことにも大きな意義があった。特に基地の町にあるコザネットワークから得た情報は、来年度の生徒たちの活動に大いに活用できる可能性を感じた。

一方、行程が若干過密であったため、いくつかの訪問先での行動が時間的に限られたものになってしまったので、事前の計画のさらなる精選が必要であると感じた。

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた

持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

[テーマ2] 附属学校園の「学び合い・育ち合い」機能の強化のための研究開発

2-1 附属学校園における教育課程の基本方針としてのESDの研究開発

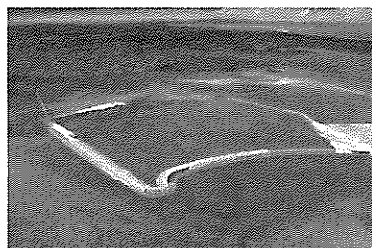
項目名 ⑤研修旅費（気仙沼・公州・沖縄北谷中学校・沖縄）

1. 事業の内容

「沖縄県北谷町立北谷中学校のユネスコスクールとしての取り組みに関する視察、交流」



奈良教育大学附属中学校では、3年生の修学旅行で沖縄を訪問しており、その事前学習として、2年生2学期から、沖縄の平和や環境、文化について学ぶ。平成23年度の3年生は、泡瀬干潟についての学習を行い、沖縄をとりまく環境問題や、基地問題について学習を行った。



今後、沖縄修学旅行でどのような取り組みを行っていけば、生徒たちにとってよりよい学びになるか、という観点で、沖縄県で唯一のユネスコスクールである北谷町立北谷中学校の取り組みの視察を行った。北谷中学校では、環境問題に対する学習として、北谷町漁協組合と協力してサンゴの苗を育て、海に戻す取り組みを行っている。地域の方々と北谷中学校との関係や、地元の問題に真正面から向き合う学習のあり方など、今後の本校の学習にとって示唆に富んだ内容であった。

2. 事業の成果と課題

沖縄返還40周年にあたって開催された、中学生サミットに北谷中学校も参加するということについてもお話を伺うことができた。これは、基地が返還された跡地に住みたくなる街づくりを計画しよう、という趣旨で、基地周辺の中学生を対象に跡地利用計画を考えるワークショップを開き、復帰40周年事業として、将来のまちづくりの担い手となる中学生の跡地利用計画への関心を高めようとするものである。平成25年2月2日に開かれる「中学生サミット」で、北谷中学校を含む、基地周辺の中学校の生徒たちが発表を行うとのことであった。基地問題は、沖縄の学びにおいて必ず考えなくてはならない課題であり、本校の生徒会リーダー研修会でも話し合いの題材として取り上げている。どのような発表が行われるか、今後の参考にできればと考えている。北谷中学校側からも、本校のESDの取り組みについて活発な質疑があり、互いに交流しあうことで、よりよい学びの場が形成できるように思われた。

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)
[テーマ2] 附属学校園の「学び合い・育ち合い」機能の強化のための研究開発
2-1 附属学校園における教育課程の基本方針としてのESDの研究開発

項目名 ⑤研修旅費(気仙沼・公州・沖縄北谷中学校・沖縄)

1. 事業の内容

- 事業名 奈良 Univnet 教員研修 in 気仙沼
- 日程 平成24年9月15日(土)～18日(火)
- 参加教員 小嶋祐伺郎 富山敦史
- 目的
 - ・気仙沼市のユネスコスクール活動の概要を知り、交流活動の推進を図るとともに奈良ASPネットワークの今後の活動の参考にする。
 - ・気仙沼市の防災教育が今回の震災に果たした役割を理解し、本校の防災教育に生かす。
 - ・震災後の気仙沼の子どもたちの地域での取り組みに学び、本校のESD実践に生かす。
 - ・震災直後に支援活動でつながった学校を訪問し、教師や子どもたちの声を聞くことによって、ともに助け合って生きるために何をすべきか生徒とともに考え行動する示唆を得る。

○活動の概要

- ・9月15日(土) 夕刻 奈良から仙台へ移動
- ・9月16日(日) 南三陸町の実情を視察し、気仙沼市教育委員会へ
 - ・大谷小学校のハチドリ計画、階上中学校の防災教育の実践報告
 - ・防災教育ラウンドテーブル
- ・9月17日(月) 被災地視察・唐桑半島ビジターセンター訪問
 - ・気仙小中高校の跡地視察、地域の方や卒業生のお話を聞く
- ・9月18日(火) 本校と交流のある下記の学校を訪問、教職員や子どもたちの話を聞く
 - ・松岩中学校 ・小原木中学校 ・中井小学校夕刻 仙台から奈良へ帰着

2. 事業の成果と課題

気仙沼市とは震災以前からユネスコの活動による関わりがあり、震災直後に支援物資を送ったことから、具体的にいくつかの学校とつながることができていた。しかし、今回実際に現地を訪れることによって、子どもたちが大人を困らせないよう精一杯仲間とともに生活している姿に接し、胸を打たれる毎日であった。彼らの生き方から学んだことを、学級活動に生かし「文化のつどい」の活動につなげたり、全校活動である「平和のつどい」の事前学習に生かす取り組みを行った。手紙や写真を交換する中で、生徒は自分たちが励ましてもらっていることを強く感じるようになった。

その結果、物やお金を送るだけでなく、互いにそれぞれの地でがんばる姿を報告しあうことも支えあうことになると思うようになってきている。今後は、こうした気持ちを日々の生活に生かし、「互いに励ましあって」「自分の道を探して精一杯生きている」気仙沼の子どもたちの姿に学ぶとともに、街づくりの担い手としての自分の役割を自覚できるような取り組みにつなげていきたい。

『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた

持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)

[テーマ2] 附属学校園の「学び合い・育ち合い」機能の強化のための研究開発

2-1 附属学校園における教育課程の基本方針としてのESDの研究開発

項目名 ⑤研修旅費(気仙沼・公州・沖縄北谷中学校・沖縄)

1. 事業の内容

■韓国公州視察

- (1) 日程・・・ 2012年10月21日(日)～10月23日(火)
- (2) 目的・・・
 - ・公州大学校附設中学校との次年度以降の相互訪問に関する打合せ
 - ・公州大学校附設中学校の授業観察
 - ・次年度生徒引率に向けての下見(ソウル・公州)
- (3) 費用・・・(予算) 教員2名派遣 200,000円 (決算) 教員2名派遣 153,134円
- (4) 協議について
 - ・交渉日時: 2012年10月22日(月)
 - ・場所: 公州大学校附設中学校
 - ・参加者: 公州大学校附設中学校 校長、Shin 教頭、Park 先生、Kwak 先生
奈良教育大学附属中学校 中島、吉田
通訳 亀山さん
 - ・協議内容:
 - ①今年度の交換交流についての感想・意見
 - ②来年度以降の相互訪問の時期について
(2013年度) 公州→奈良 8月上旬 奈良→公州 8月中～下旬
(2014年度以降) 公州→奈良 1月 奈良→公州 8月中～下旬
 - ③活動内容の確認
4泊5日のうち、生徒宅ホームステイは2泊とする。
生徒人数は、男子3名・女子3名とする。
 - ④今後、日常的な交流活動もさかんに行っていく。

2. 事業の成果と課題

- ・経費面でお互い再度確認していく必要あり。
- ・日常的な交流活動の内容について検討していく。
- ・2013年2月のESD学会開催時に公州大学校附設中学校から教員が来日される際に引き続き協議を行う。



『学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける』教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書(附属中学校分)
【テーマ2】附属学校園の「学び合い・育ち合い」機能の強化のための研究開発
2-1 附属学校園における教育課程の基本方針としてのESDの研究開発

項目名 ⑥教職大学院と附属中学校の協働プロジェクト

1. 事業の内容「特別支援学級での読み聞かせ活動～アニメーションの手法を取り入れて～」
『たかばたけ・ほんがく(本楽)倶楽部』

①実施日時：第1回2012年12月3日『だるまさんが』、第2回2013年1月15日『おおきなかぶ』
第3回2013年1月29日『これはのみのぴこ』、第4回2013年2月25日『昔話』

※教職大学院の本プロジェクトスタッフと、特別支援学級の本プロジェクト担当教員とで、
各回の約10日前に打ち合わせ会議を実施している。

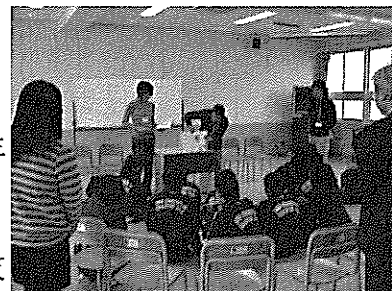
②実施時間：昼食後の昼休み、約20分間(12:50～13:10)

③実施場所：特別支援学級 多目的教室

④スタッフ：松川利広(教職大学院、附中校長) 教職大学院の学生
6名、特別支援学級教員5名、

⑤対象の生徒：附属中学校特別支援学級の生徒(17名)

⑥事業のねらい：アニメーションの様々な手法を活用して、生徒の反
応をさぐりながら、知的障害や発達障害のある子どもたちに有効な読み聞かせの実際やあり方について、学級の教員とともに深める。



2. 事業の成果と課題

①企画立案において

障害のある子どもたちへの読み聞かせ活動、とりわけ本学級の生徒への関わり方について、双方のスタッフが各回の実施前にまず打ち合わせをした。このことは、「障害がある」ということと同時に「中学生」でありながら、その生い立ちにおいて「落ち着いて読み聞かせを楽しむことが困難であったであろう」こともあわせて、特段の配慮と工夫が必要であるという、活動の柱を立てることに有益であった。障害のある子どもへの読み聞かせの経験がなかったスタッフからも、毎回実施後に「手応えがあった」と実感できたことは成果のひとつである。



②当日の場面において

数名の生徒以外は、昼休みの外遊びなどをやめて会場に集まり、楽しむことができています。活動のポイントは主に次の3点であるが、すべての回に取り入れることができた。

- ・受け身的にただ座っているのではなく、体を動かすなどの動きをいれる
- ・全員が主体的に参加できるように工夫する
- ・遊びの要素を取り入れ、そこから読書へとつながるような楽しい雰囲気と取りくむ

実施後の生徒の感想には、スタッフのニックネームを挙げながら、おもしろかったと感じた具体的なエピソードが日記に綴られていたなど、一定の成果であるといえる。また、派生的ではあるが、同じ大学構内にいるスタッフに出会い、お互いに声を掛け合い、挨拶するなど、生徒らの人間関係の広がりも確認できた。

③確認された課題

生徒らの語彙不足や経験不足についてよりていねいな実態把握につとめ、加えて季節感や行事に関連した題材という観点をもちながら、絵本やお話の内容の選択や方法論について深めることが今後の課題である。

「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」

教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

テーマ3

大学と附属学校の連携による教員養成機能の充実

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS, 5 EAST LEXINGTON AVENUE, NEW YORK, N.Y. 10017

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS, 5 EAST LEXINGTON AVENUE, NEW YORK, N.Y. 10017

大学と附属学校の連携による先進地域・先進校視察報告概要

「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクトの4つのテーマの中から、サブテーマ3「大学と附属学校の連携による教員養成機能の充実」の一環として、教育学部、大学院教育学研究科（修士課程・専門職学位課程(教職大学院)）と附属学校園の連携による教員養成機能の高度化と充実を目的に、教育のグローバル化・ICT活用に対応するため、附属学校教員、教育学部学生、大学院教育学研究科（修士課程・専門職学位課程(教職大学院)）大学院生、及び本学教員による国内研修を実施した。

平成 24 年 11 月 30 日 ユネスコスクール東北大会

平成 24 年 10 月 24 日 広島大学附属幼稚園「森の日フォーラム」

平成 24 年 10 月 26 日 全国生涯学習ネットワークフォーラム 2012

平成 24 年 11 月 14 日 岡崎市立新香山中学校研究発表会

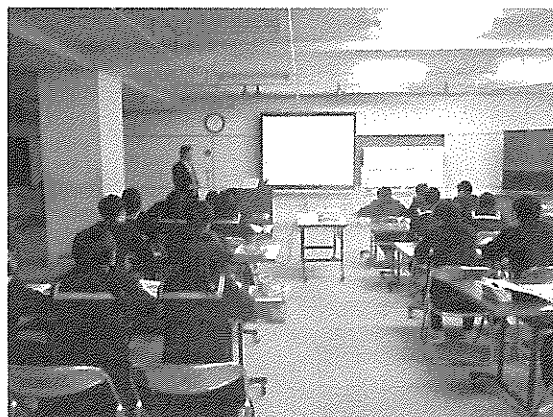
平成 24 年 11 月 29 日 エキスパート教員公開授業兼世界遺産教育出前講座 in 米子

平成 25 年 01 月 11 日 ユネスコスクール地域交流会 in 九州

平成 25 年 01 月 19 日 ユネスコスクール研修会 in 多摩

平成 25 年 02 月 02 日 第 37 回全国教学教育学会

本国内研修のねらいは3つある。一つは、大学教員・附属学校教員・教育学部学生・大学院教育学研究科（修士課程・専門職学位課程(教職大学院)）大学院生の人間関係の構築である。人間関係を構築することが、今後のプロジェクトの推進と研究に寄与すると考える。二つ目は、ESDの先進事例の視察である。2014年の最終年合も間近になり、全国各地でシンポジウムやフォーラム、実践事例の報告会等が開催された。それら先進事例を視察することで、プロジェクトにおける研究の深化を図った。三つ目が全国のESD授業実践の見学による、授業開発への寄与である。授業実践を見学することは学部生・大学院生にとって、刺激になる。また附属学校園の教員にとっても、自らの授業実践を振り返る契機となった。



ユネスコスクール東北大会の参加報告

奈良教育大学「学ぶ喜びプロジェクト」 北村 恭康

本大会は仙台市の福祉プラザで行われた。午前の部は「ユネスコスクールの概要—実践と連携」というテーマで、特に未加盟の学校に向けて今取り組んでいる実践を紹介しながら広がりを図りたいという趣旨であったと思われる。その中でも、気仙沼市の①自助②共助③公助+④N助(NPO/NGO+Network)の考え方はこれからの防災・復興教育につながるものと考え。多様な主体が連合する避難所などにおいて連携の重視は、上記の4つが効果的に機能して避難行動、避難所運営に役立つものと考え。「何をしてもらえるのか」ではなく、「何ができるのか」という考えが必要である。

午後の部はパネルディスカッション「ユネスコスクールの教育の特徴と魅力」・分科会「情報交換と学校間交流」が行われた。分科会は「1 地球的課題・国際連携」・「2 持続可能な循環型社会」・「3 地域遺産と文化多様性」の3分科会に分かれて行われた。参加した「3 地域遺産と文化多様性」の分科会について報告する。

○ 気仙沼市立月立小学校

① 地域に伝わる民俗芸能の伝承【早稲谷鹿踊り・塚沢神楽】②栽培・制作活動【そば・さつまいも・大豆・蚕・炭焼き・木材を使ったキーホルダー】の2点を学習過程に位置づけ取り組んでいる。これから活動では地域の人々が指導者や助言者として活動し子どもたちとの絆を強くしている。子どもたちもこれらの交流を通して、自分たちの故郷への誇りを持ち地域の人を大切にしていける心が育まれてきている様子がよく分かった。また、発表する機会を多く持つことで表現力の向上や繭の飼育 糸紡ぎ マスコット作りといった飼育から物を作り出す喜びや資源の大切さを体験を通して実感してきている様子が見えた。

○ 角田市立角田小学校

「角田の歴史を次の世代につなぐ—2つのリーフレット作成を通して—」という題で、社会科の副読本（地域の発展に尽くした先人の働き）の在り方についての実践発表であった。よく調べられた発表内容であったが、完成したリーフレットや現副読本の提示がなかったため、何とも言いえないように思えた。また現副読本のどこがいけないのかとの質問には、「読み物内容になっている」との返答であったが、イメージするしかなかった。発表には、①現副読本の提示②作ったリーフレットの提示③現副読本のどこがよくないのか④リーフレットでどこが補えるのか⑤子どもの活動がどう変わるのか⑥その成果 等を参加者にわかるようにしなければならないというのが感想である。このリーフレットが次回の改訂の時に入るのかが楽しみである。

○ 金沢市立浅野川小学校

金沢「絆」教育を推進することは、持続発展教育・ユネスコスクールの趣旨にも合致しているとの考えで進められている。当日の発表は「地域遺産を発信する楽しさと学びの実感を伴う協働学習」であった。地域の伝統や文化財、自然環境などを調べ発信・交流（友人・家族地域の人々・県外をの児童・外国）することを通して、金沢絆教育の考えに迫り、特に子供たちの相手意識を持つ表現異文化の理解、地域の捉えなおす等良さを実感することができる子どもたちが育ってきている。

アートマイルプロジェクトへ参加し協働で絵を完成させることは、喜びと同時に外国の子どもたちとの交流にもつながり、絵を通して心と心をつなぐ活動であると思う。発表者の「地球人を育てる」という言葉にも当てはまるのではないだろうか。

ユネスコスクール東北大会の参加報告

奈良教育大学附属中学校 竹村 景生

奈良教育大学附属中学校では、E S Dを意識して教育課程を見直し、教科ならびに教科外活動のつながりを考えてE S Dカレンダーを作り、今年で取り組み7年目になりました。

取り組みながら「学校現場にとってE S Dって何だろうか？」って、自分なりに、そしておそらく本校の教職員個々もまた、考え続けてきました。そして今、私自身が本校の実践の中で確信を得たのは、「E S Dとはグローバルな学びの実現である」という捉えです。自分たちの住む足元、即ちローカルな「空間の履歴」に深く学び、今ここに新たな空間の履歴を自分たちも刻んでいくことによって未来を創造していく。ローカルを掘り下げていくとグローバルな学びに転換され、持続可能な社会を物語れる、共生き・共生みの共生の知を育てていくと考えます。そのような学力、物語れる学力を育てるところに私たちの学校はあると考えてE S Dに取り組んでいます。

グローバルな学びに必要なのは物語る力であり、語り継ぐことの価値に出会い直すことです。このローカルのテーマは何かと問われれば、それは社会的共通資本と私たちのあり方、関わり方であり、コモンズという持続可能な社会を共同体の中で成立させてきた幸せを産出する暮らしの智慧、協働の仕組みです。空間の履歴に学ぶとは、コモンズの声を聴くことであり、その応答であり、物語です。その物語は、語り継ぎ（時には祈りやマツリの形をとって）によって次世代に受け渡されてきました。本発表では、「語り継ぐ」実践の教育的意味は何か？を概観し、それを動かしていく原理・働きは何かを、学校における3つのステージ（教科、教科外活動、特別活動ならびに総合的な学習の時間）で示していきました。教科におけるE S Dとは、本校ではインフュージョンアプローチ（染み込ませ型）を採っています。ポイントは教師の「問い」と「語り」です。物語の端緒となる問い、そして応答です。ここでは数学を物語る実践例を紹介しました。次にクラブ活動である裏山クラブの実践例を紹介し、最後に臨海実習、沖縄修学旅行の取り組みを紹介しました。

従来 of 学校教育は、知識を増やす、将来の職業を選択していく学力をつけるという意味では、横軸に広がりを持つ教育をイメージしますが、私たちのめざすE S Dは自分の存在（あること）の深み・高みの軸をそこに育みたいと考えています。

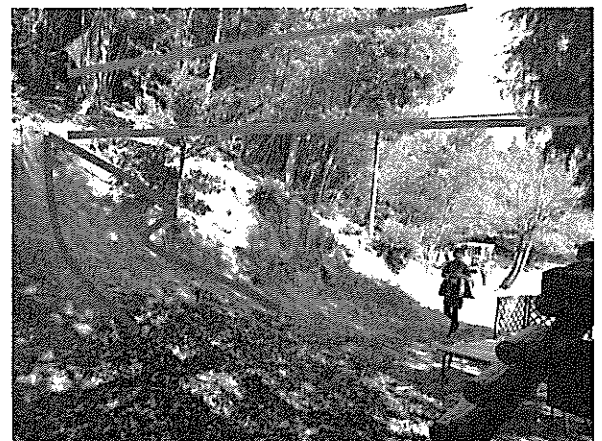
広島大学附属幼稚園「森の日フォーラム」に参加して

奈良教育大学 幼年教育 掘越 紀香

去る10月24日(水)、自然の豊かな広島大学附属幼稚園を、附属幼稚園の長谷川教諭、幼年教育の学生3名、掘越の5名で訪問し、主に年長児の「森の日」のようすを見学した。

子どもたちは森に集合して支度をすると、それぞれ遊び場へ散っていった。アスレチックのような遊具の他、木の枝を利用した縄がたくさん用意されている。ぶら下がって跳ぶための縄であったり、伝って渡るための縄であったり、ブランコのように揺らす縄であったり、上へよじ登るための縄であったり、と様々に活用されていた。それぞれの縄もすぐ近くに複数用意されていることが多く、少し簡単なものと高度なもののように、子どもが選んで挑戦できるように配慮されていた(図1)。

また、この日の森には、たくさんの基地がつくられており、男の子グループと女の子グループでの戦いも見られた。箱を組み合わせたものだったので、先日までに保育室で製作したのだろう。途中でその武器が頭にぶつかった男児が泣き、保育者も入って話し合いの場が持たれた結果、「頭(胸から上)は無し」のルールが確認された。再開すると、女の子は人数が少ないこともあり、一旦基地へ作戦タイムで引き上げた。それが図2である。布にお城のようなお家の絵を描き、木や星、鳥、



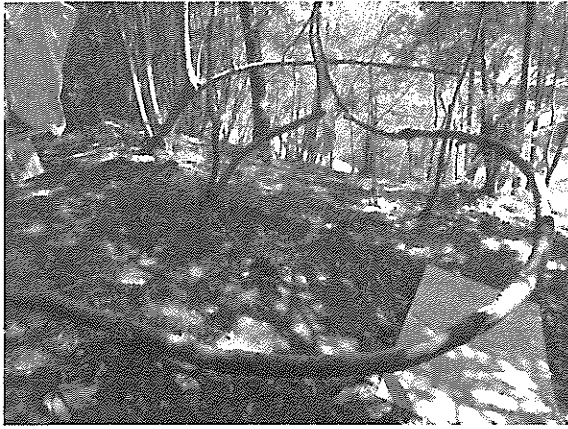
池などの他に、ハートやリボンが描かれている。入口には、赤い郵便ポストまで用意され、お手紙も受け付けるようになっており、可愛いお家のような感じだった。一方、男の子の基地は、屋根に枝が敷かれ、はしごがかけられたり、ロープでぶら下がれたり、そばに落とし穴があったり、と機能重視の構造だった(図3)。



図2 女の子グループの基地



図3 男の子グループの基地



面白い形の木の枝も有効に活用されており、ゆらゆら揺れる遊具や腰かけ、物干し竿、基地の柱などになっていた(図4)。その形状自体がイメージを促すだけでなく、木の枝のしなりが子どもにとって心地よい揺れや、少しスリルのある目眩(イリンクス)を感じる揺れを与えているのだろう。

午後は、かえで幼稚園園長の中丸元良先生から「野生回帰：多様な自然が子どもを

育てる」と題する講演があった。かえで幼稚園の森で遊んでいる子どもたちを見ていると、次第に森に慣れ、急傾斜の崖などを遊び場にするようになる。しかし、怪我することも少なく、森の中での喧嘩もとても少ないようだ。また、自然環境は多様である。この多様性は何によってもたらされたかと言えば、そこにいる生き物が、長い時間をかけてそれぞれ生きるための工夫を重ねてきた結果であり、「自然の知恵」と言えるのではないかとのことだった。さらに、子どもの遊びには、以下の6つの要素があるという。

- 1) 作ること
- 2) 考え、工夫すること
- 3) 挑むこと
- 4) 空想すること
- 5) 競うこと
- 6) 共感すること：「私」が「私たち」に広がる楽しさ

人間らしい活動・没頭する活動は、この遊びの6要素に当てはまる。この人間ならではの力を育て伝えていくことこそ「教育」である、と力強く語られていた。

その後、班に分かれて園の自然から「自然の知恵」を探し出すフィールドワークが行われた。「自然の知恵」がどうして生まれたのかについて、自然科学にこだわらず、空想を働かせて説明する、楽しい発表会となった。現場の先生や学生とともに体も頭も動かしながら、自然への興味、保育に取り込む可能性を実感できた充実した研修だった。



図5 基地の布を使って、おなもみの当て

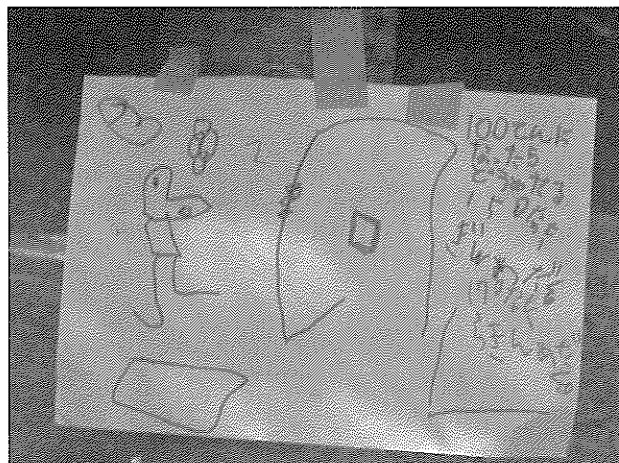


図6 「100点なら銅メダル」の説明

「森のようちえんフォーラム」 参加報告

奈良教育大学附属幼稚園 長谷川 かおり

場所 広島大学附属幼稚園

日時 2012. 10. 24 (水) 9:30~14:00

公開保育 (9:30~11:30)

この日は「森の日」で全園児が森で遊んでいました。

年長児は十数人で鬼ごっこをしたり、くじ引き屋さんやひつつきむしゲーム大会をしたりなど友達と相談したり工夫したりしながら遊ぶ姿が見られました。森の木を上手に生かし、そこに枝や板や布を加えた基地があり、この日はそこで遊ぶ姿は見られませんでした。子どもたちが工夫して作った様子うかがえました。「つどい」の時間には4, 5人のグループで珍しい木の実を探しに行く活動をしていました。傾斜のあるところで鬼ごっこをしたり、土手を上がったところをおうちにしたり、木の実を探しに行く時もわざわざ傾斜の強いところを歩いたり、森という環境を使いこなし、森ならではの面白さを自然に選び取る力が備わっているように感じました。

年中児は思い思いの場所で気の合う数名の友達と、木の実や土や枝などを使ってジュース屋さんやままご的などをしていました。自然のものと向き合い黙々と遊ぶ姿が印象的で、土や木の実の特性をうまく利用していて「森の住人」のようでした。

年少児は先生と一緒に散策したり斜面を転がったりなどをしていました。3歳児らしい森との関わり方だと思いました。

どの学年も森ならではの環境を生かし、存分に森の恵みを得ながら遊んでいるように思いました。

自然から得る、学ぶということがESDの理念につながるのだろうかと思いながら観察しました。

休憩 (11:30~12:50)

- ・森の散策
- ・森、保育室の撮影

講演 (13:00~14:30)

講師 学校法人有朋学園かえで幼稚園 園長 中丸元良先生

演題 「野生回帰」

自園の写真を変えながら論理的に自然から学ぶこととその重要性を話してくださいました。

前半の公開保育で見た子どもの姿と重ね合わせて聞くことができ、理論と実践を結びつけて学ぶことができました。

「農業のすすめ」の部分では、食物連鎖が学べる、命の大切さが分かるという内容で、ESDと関連が深いことも学ぶことができました。

フィールドワーク (14:45~16:00)

前半は5人ずつのグループに分かれて森を散策して、不思議な形をしているものを見つけてその理由を自分たちなりに考え、後半はグループごとに「ほら吹き大会」で発表するというワークショップでした。

私たちのグループは木の実について大変詳しい方がおられ、いろいろな木の実を見つけては口にしました。その中でも、一瞬甘いが、すぐに吐き出したくなるほどまずくなる「ひさかき (インクの木)」を取り上げ、動物が甘さに誘われ口にしていなくても、すぐに吐き出すことで種子を地面に落とすためにそのような味がすると言う理由をこじつけました。

どのグループも勝るとも劣らぬ想像力と表現力で発表され、聞いていて面白く勉強になりました。

森の幼稚園から学んだ自然環境の大切さ

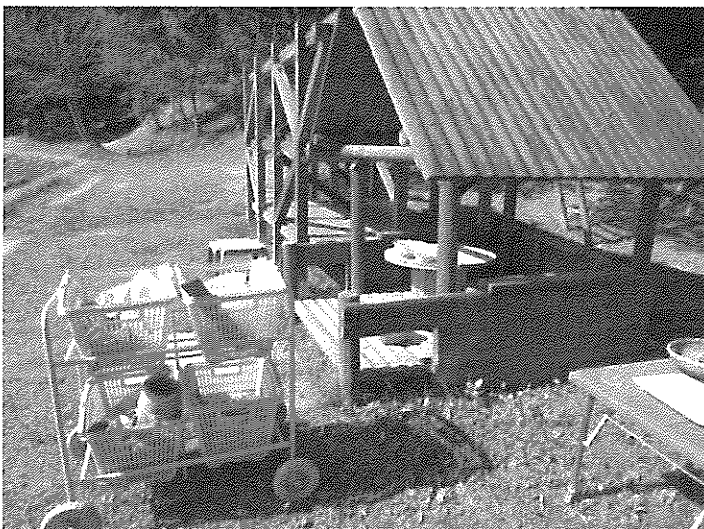
学校教育教員養成課程 幼年教育専修 木村美由紀

広島大学附属幼稚園へ行き、自然と関わって生き生きと遊ぶ子ども達の姿を見て、自然環境の大切さを改めて実感しました。森の中では、紫や青の実を採ってままごとに使ったり、採った実を食べて甘さや種の粒の感触を感じたりと、実だけでも様々な遊びに発展していくことが分かりました。紫の実を潰してブルーベリーソースに見立て、砂の上にかけて、茶色の土と紫色のソースがとても綺麗に見え、ままごとも色が入ることで子ども達の想像力も膨らむのではないかと感じました。

森の中へ進んでいくと、枝が真横に生えている木がいくつかあり、その枝に数名の子ども達が乗り、体を上下に動かしながら木を揺らして電車ごっこをして遊んでいました。傍にあった細い木も揺らして踏切に見立て、電車ごっこを楽しんでいました。枝が真横に生えているといった意外性が子ども達の遊びをさらに面白くしており、どんどんと遊びが広がっていく面白さを感じました。珍しい形の枝や色々な色をした木の実など、自然が多様であり、同じ森の中でも遊び方は様々であると学びました。

また、ご講演の中で中丸先生は、「森には遊びが沢山あり、つまらなさそうにしている子どもがいない。ケンカや怪我も少ない。」とおっしゃっていました。確かに、上り棒やジャングルジム等はできない子どもはつまらないと思います。しかし、森には他の遊びが沢山あるので、子ども達が好きな遊びを見つけて楽しむことができるのだと思いました。また、森の中は地面もゴコゴコしており、不安定であるにも関わらず、怪我が少ないことには驚きました。思い返してみると、保育観察をしていた時にも、子どもが何度も転ぶ姿が見られましたが、泣いたり保育者を呼んだりすることもなく、何事もなかったように起き上がって走り始めていました。自然の中では転ぶことも多いとは思いますが、その分体も強くなっていくということも学びました。

自然環境が豊かにある幼稚園で、その環境を存分に活かして遊ぶ子ども達や、森の達人と一緒に連携しながら保育を行う保育者の姿を見ることができ、初めはとても圧倒されました。しかし観察をしているうちに、自然と関わって遊ぶことが、子ども達の本来の姿なのではないかと思うようになりました。たとえ、自然環境が豊かではなくとも、子ども達が関わった自然の一つ一つ大切にし、素朴なことにも関わって、保育を広げていけるような保育者になりたいと感じました。



(公開保育)

以前見学に行ったころよりも、子どもたちの行動範囲が広がっていました。布のカーテンで仕切られた場所や、木材でつくられた基地のようなスペースなどが多く見られました。森に少し入ったところで、倒れている木に5, 6人がのっかり、電車ごっこをして、揺れる感覚を楽しんでいました。

設定保育では、森にある木の実をグループごとに探すというものでした。つぶすと手が汚れるインクの実を見つけたグループや、とても小さな実を見つけたグループなど様々でした。担任保育者は「春に~やったのが秋には〇〇の実をつけるんやな」と子どもたちが見つけてきた実を発表するときにおっしゃっていました。森での保育は、季節ごとに姿形を変化させるものを継続して見て、採って、食べてなどして経験できる良さがあるのだと感じました。

(講演)「野生回帰」~多様な自然が子どもを育てる~ かえで幼稚園・中丸元良

講演会の中で特に印象的だったのは、世の中の環境は「花壇系」「野草系」2つに分けられるということです。「花壇系」とは、人間が意志や目的をもって作り、管理している環境のことです。プールや積み木、折り紙などの例が挙げられていました。「野草系」とは、人間の意志や都合に関係なく存在する環境のことで、例として、川や雑木林、空箱などが挙げられていました。

どちらも大切ではありますが、「花壇系」ばかりが重要視されています。それは、成果が目に見えて分かるために、教育する側も手応えを得られるということと、管理がしやすいからです。しかし、「野草系」は人間が意図しない環境であるために、子どもたちがかかわる場合に自分の力で考え、判断するという行為を伴います。だからこそ、後者を重要視していく必要があると感じました。

また、自然が多様であるのは、進化の過程で得られた産物のおかげです。私たちは、小学校以降の教育で、正しいということ、正解に辿り着くことを必要とされてきました。しかし、幼児期の教育は決してそうではありません。

「間違ってもいいからやってごらん。」つまり、正しいとは限らないことを考えたり、実践したりしているのです。その中で、多様性を兼ね備えた自然と、五感を通してかかわることが自然の知恵そのものを感じ取ったり、系統的に学ぶときの基礎を学んだりするのでしょう。

(フィールドワーク)

フィールドワークでは、実際に園内の森に繰り出して、「自然の知恵」を探すというものでした。「なぜ、この葉っぱは大きくなったのだろう?」「なぜこんな色をしているのだろう?」など、正しいとは限らないけれどもそれらの理由を考えて、みんなに知らせることがテーマとしてあげられました。

いざ、自然の知恵を見つけようとして森に入ると、見え方が随分と変わってきました。普段見過ごしてしまいそうな小さな葉っぱや、陰に隠れているキノコ、木の根っこなどさまざまなところに目をやることができました。

どのような園環境にあっても、そこにある自然環境とじっくり向き合うことから、保育に自然環境を取り入れた保育が始まるように感じました。



環境の多様さから生まれる子どもの育ち

幼年教育専修 田町 幸子

広島大学附属幼稚園に行き、もっとも印象に残ったのは環境の多様さでした。森があつて敷地が広いだけでなく、その広い環境にある豊富な自然に子ども達が生き生きと主体的に関わっている姿が、この幼稚園では多く見られました。観察を通し、私は森や山、自然の中で遊ぶことで、

- ・自然と体を存分に使うことができる
- ・自己肯定感が高まる
- ・自然を大切にしようという気持ちが芽生える
- ・少し難しいことにも挑戦してみようという気持ちが育つ
- ・友達と遊びを見つけ、展開していこうとする力が育つ

と、観察を通して感じました。



写真左は、ただ見ただけでは「遊びに使える」と感じないかもしれません。しかし、木が横に伸びていることを利用して、友達と木にのってバスごっこのようにして遊んでいる子どもがいました。「遊びを見つけ共有し、自分たちで遊びを展開させようとする姿」は自然の中だからこそより生まれると考えました。

写真右は、左の遊具と右の木がロープで結ばれています。子ども達は、そのロープを渡って向こう側までいこうとしていました。楽に行くことができる子どももいれば、やりたいけれど怖くて一歩は踏み出すけれども、戻ってくる子どもなど「自分の力を出して、頑張ってみようとする姿」「少し難しいことにも、やってみようかなあとする姿」が見られました。

このような子どもの姿は、豊富な自然の中だからこそ生まれるものだと考えます。自然に抱かれて生活することで多様な関わり方が生まれ、遊びも生活も豊かになるのだと思います。幼児期に主体的に生き生きと生活し遊びこむ経験が、生きる力を養い、将来にわたり心身ともに豊かな人間を育てることに繋がると学びました。

全国生涯学習ネットワークフォーラム2012
ICT分科会（2012年10月26日～27日）参加報告書

奈良教育大学附属小学校 櫻本 豊己

宮城教育大学附属小学校・附属中学校において、全部で6つの授業が公開されたが、私は4年社会科と2年体育科の授業を参観した。いずれも子どもたちに端末の Ipad を持たせて、前の電子黒板に子どもたちの活動を反映させながら授業を展開していくものであった。

4年社会科ではグーグルの地図を使いながら宮城県内の交通網について深めていこうとする授業であった。グループで考えたことを端末の Ipad のソフトに記入するとそのまま前の電子黒板に反映されるので、他のグループの子らも見やすい。

2年体育は、2年生が Ipad のいくつかの操作をしないでよいように、カメラ機能だけを使って自分たちの運動を撮影し、それをグループで見合って評価していくという授業であった。これまでも従来のビデオで撮影したものをテレビでみんなで見るということはしてきているが、グループごとに Ipad の大きさの画面で動きを確認できるのがよい。

それぞれの学年の子どもたちを配慮した使い方をしていると感じた。

授業参観と全体会討論（二日間）を含めて、私が学んだことは次のとおりである。

- ①今回のプロジェクトにおける ICT 機器の導入は今年の6月ごろから始まり、遅い時期で10月初めになってしまったようであるが、機器を使いながら授業が進められていたことから考えると、道具（機器）がそろえばどの学校でもそれなりに使えるようになるのではないかと。
- ②機器の使い方としては、教材提示・子どもたちが考えた内容を表示・子どもたちの考えの交流など、授業内容を深めていくための便利なツールとして使える。また、全体会の発言でもあったが、子どもたちの機器への使いこなしは先生より速いだろうし、子ども同士で教えたり、使い方を見つけたりするので、思ったより困らないかもしれない。
- ③しかし、端末をそろえたとしてもメンテナンスがたいへんだということが改めてわかった。宮城教育大の附属学校でも、数人の先生が担当する授業ですべての子どもが端末を使えるようにしたが、毎回、起動しないパソコンや端末があったということである。幸い、この日の公開授業ではすべての機器は正常に動いたが、これは初めてのことであった。不具合が出たときには、すぐに大学から担当者がかけてきたり、業者の人が来たということだが、本格的な ICT 導入にはそのようなサポート体制が欠かせない。そこが脆弱であると、せっかく入れたのに使えないということになり、現場での利用は遠ざかるであろう。
- ④より強固な LAN 環境の構築が必要である。いくつかの教室で同時に子どもたちが端末を使ったときに、「先につないだほうが勝ち」にならないような環境である。
- ⑤一気に端末までそろえるというよりも、まず電子黒板と書画カメラを導入し、教師が提示する内容を研究していき、次第に子どもが使う端末を導入していくのがよいと思われる。
- ⑥これまで本校が進めてきている研究テーマを前進させるために機器を活用するという方向で今後論議したい。
- ⑦教育実習で機器を活用することは進めていかなければならないが、大学の授業でも活用して、学生が日常的に使えるということが大事である。教育実習では「何を」「どう」教えるのかに時間をかけて考えることを指導しているので、ICT活用までまわらないのが普通である。日常的な大学の授業の中で使える力を培っていれば、実習でも生かせるだろう。

岡崎市立新香山中学校研究発表会の参加報告

奈良教育大学「学ぶ喜びプロジェクト」北村恭康

新香山中学校は、平成22年岡崎市教育委員会より「環境教育の推進」を委嘱され現在まで3年間研究を進めている。市教育委員会より出されている環境教育プログラムに従い「環境を見つめ・考え・働きかける生徒の育成」を研究主題としてあげ実践に取り組んでいる。そして、環境プログラムをESDの視点から見つめなおし、生徒が「未来をイメージし、自分にできることを考え主体的に働きかける、自分の生き方を高める」ことができることを目指している。その実現のための手立てとして、①地域教材を開発する ②探究学習での教師支援の在り方を工夫する ③「ESD新香山プラン」を取り入れる を挙げ、1年生から3年生までの共通として、社会事象を「自分事」としてとらえ「何ができるのか」に視点を当てている。

ESD新香山プランは資料として添付しているが、その中にある CATCH ACTION REFLECTION は、環境プログラムで使用されている言葉である。

私は2年1組の「企業のエコって利益のため?」～職場体験の事業所で見たこと～の授業を参観した。授業開始前15分間はどの学年・学級でも話す力を高めるためにMDT(ミニ ディスカッション タイム)として一つの話題に対して自分の意見を述べ合っていた。2年1組の話題は、「明日地球が滅亡するとしたら今日何をする」であった。

本授業は13/16時間目であり、課題は【企業のエコって何のため】であった。前時に【利益のためにエコ活動をしてはいけないのか】の問いかけに生徒が考えを書いた座席表を副資料として配布されていた。その内容は、

① 利益重視派か反利益重視派か ② ①の根拠 ③職場体験学習や身の回りの事業所でのエコな取組について記されていた。利益重視派は19名、反利益派は17名でありほぼ拮抗している。教師は利益重視派の生徒を意図的に指名し討論が始まった。個々の生徒の意見を聞き、自分の意見を述べることの繰り返しであるが、発言者の意図を自分なりに解釈し自分の意見を述べる姿勢は、単なる反対、賛成ではなく、ESDの7つの能力・態度としてあがっている、「コミュニケーションを行う力」がついており持続可能な社会の実現に向けての全員による深みのある討論となった。

しかし、課題として残ったものもあると思われる。それは、【企業のエコって何のため】という課題解決に向かうためには、企業も持続可能な未来を社会と共に作っていくものであるという「CSR」【Corporate Social Responsibility】の概念に気づかせるための発問が抜けていた。よって、せっかく配られた資料から生徒が気付くのではなく、教師による資料記述の「CSR」指摘に終わり、体験活動や調べ学習を通して生徒自身の考えを基にした討論を練り上げてきたのが残念に思われた。さらに付け加えれば、職場体験で「事業所のエコの取り組みを探す」という課題ではなく、「なぜ、企業はエコに取り組むのか」という課題を挙げておけば、生徒は、「エコの様子とエコに取り組む考え」を調べてくるのではないだろうか。そうすれば、企業のエコは利潤追求の善か悪かの討論から企業の「CSR」に気づく生徒の発言もみられるようになると思う。教師は、その発言をとらえて討論の中心課題に持っていけば「企業の持続発展」ではなく、「持続可能な未来社会を作っていく」という企業の姿も見えるものにしつつ、本時の目標にも近づけたのではないだろうか。

出張報告書

提出日： 2012 年 11 月 22 日

所 属	奈良教育大学附属中学校	氏 名	山本 浩大
出張先	岡崎市立新香山中学校		
期 間	2012 年 11 月 14 日 (水) ~ 年 月 日 ()		
目 的	新香山中学校で行われている環境教育（人間と動物の共生、環境家計簿、未来の地球を守るために）の取り組みを知り、奈良県（特に春日山）で行える環境教育を進める方針を知りたいと考えたため。		
内 容			
<p>ESDの考えを取り入れた環境教育、特に人間と自然との共生を考える授業の展開を知りたいと思い研究会に参加した。</p> <p>新香山中学校では、「環境を見つめ、考え、働きかける生徒の育成～環境学習を基盤としたESDの展開～」という研究主題でアプローチしていた。目的は、世界の環境変化・問題を身近な問題と結びつけるために系統的学習を行い、主体的に働きかけることが出来るようになるためである。学年によってテーマが異なり、それぞれ「できるのか？人間と自然の共生(1年生)」「未来の地球を守るために私たちが出来ること(2.3年生)」であった。</p> <p>1年生の授業では、人間と自然の共生は可能かを子どもたちに討論させていた。4月の総合の時間から、身近な自然を考える機会を設けており、獣害は動物によるものだけでなく、人間の活動が多面的に影響していることを学習している。そのなかで、身近な獣害例やそれぞれの立場(動物や農家など)の気持ち、獣害の原因を考え、駆除するべきか保護するべきかを考えさせていた。</p>			
所 感			
<p>1年生の4月から環境教育を行っており系統的な学習が立てられていた。外来種問題、在来種、在来種問題、学区の環境地図、猟師さんの話、人間と自然との共生というように学習が進む。身近なことから環境を考え、そして、自らの体験と結びつけている取り組みは素晴らしいと感じた。また、生徒からの意見で授業が成り立っており、事前学習が十分に行われていたことがうかがえた。</p> <p>ただし、共生は可能かどうかという題材で、最終的なまとめが生態系のバランスが崩れてきているということだった。生態系のバランスが崩れている理由は道路工事や地球温暖化などの人間の活動のためと考えさせているので、駆除や保護に結びつかないと感じた。それならば、ヒトも動物もともに共存できる社会を作っていくためにはどのような工夫が必要か考え、そして、駆除か保護かを考えさせる必要があると感じた。</p>			

エキスパート教員公開授業兼世界遺産教育出前講座 視察報告書

奈良教育大学教職大学院	1回生	中澤 哲也
物質科学専修講座	2回生	後藤田 洋介
文化財造形専修講座	2回生	横井 まどか

1. 視察日時 平成 24 年 11 月 29 日 (木) 13:50-17:30
2. 会場 鳥取県米子市立淀江中学校

3. 内容

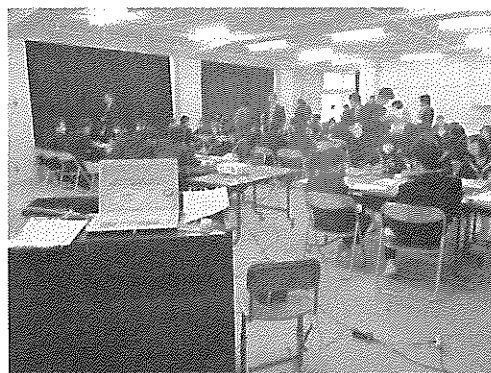
- (1) 公開授業「世界遺産学習：持続可能な社会をめざして」(社会科 3 年公民的分野)
米子市立淀江中学校 教諭 山下欣浩先生
- (2) ESD 講演会「世界・地域遺産で ESD に迫る」
奈良教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター 中澤静男先生
- (3) 地域遺産・世界遺産学習講演会「世界遺産教育」から「地域・世界遺産教育」へ
福山市立大学 田淵五十生先生

4. 考察

鳥取県のエキスパート教員である山下先生による中学校 3 年生社会科公民的領域の授業を参観させていただいた。新しい学習指導要領になって、中学校の社会科のまとめとして「よりよい社会をめざして」という、ESD に関わる内容が加わったが、その授業を見させていただいたのは初めてのことだったので、非常に参考になった。フィリピンで世界遺産に登録されているコルディリエーラの棚田群において、若者が出て行ってしまい、棚田が維持できなくなっているという事例と淀江中学校で取り組んだ地域の祭り(これも過疎化で継続が危ぶまれている)を比較し、地域の文化とは何か、それを守るために必要なことは何かを考えさせる授業であった。9つの政策をダイヤモンドランキングをつかって比較検討させるなど、参考になった。エキスパート教員ならではの、周到的な授業準備、生徒との双方向の意見交換のテンポのよさ、授業の展開など、大変勉強になった。

本学の中澤先生の ESD 講演会は、先生が作成された世界遺産教育教材キットを用いた事例紹介であったので、授業実践における世界遺産の活用の仕方などがよくわかった。特に付属の DVD 教材は、生徒の集中力や ESD への関心を高めることができると思った。

福山市立大学の田淵先生の講義は、福山駅前の銅像から岡倉天心の生涯や業績、日本美術界への影響などへと広がり、教材研究の広さと深さに感動した。身近なものを題材にした教材開発を目の当たりにし、自分も何か ESD 教材の開発ができないものかと考えている。



「ユネスコスクール地域交流会 in 九州」参加報告

「学ぶ喜び」プロジェクト 加藤久雄

2013年1月11日（金）に、福岡県大牟田市（オオムタガーデンホテル）で開催された「ユネスコスクール地域交流会」に参加させていただいた。ユネスコスクール地域交流会は、文部科学省、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターの主催で行われているもので、昨年度の金沢市、気仙沼市での開催に引き続き、今年度は多摩市に引き続き4回目の開催であります。多摩市での開催に引き続き、二度目の地域交流会への参加となりました。大牟田は、2012年3月に、市立の小学校（22校）、中学校（11校）、特別支援学校（1校）の市立全34校が、ユネスコスクールに加盟しています。このような加盟の仕方は他地域にはみられないもので、大牟田でのユネスコスクール活動の視察は意義があると考えての参加となりました。

当日の参加者は、学校関係者が約200名、地元小中学生約50名ということで、大変な盛会でした。プログラムは、開会行事、文部科学省基調講演、吉野小学校の環境学習についての発表、ユネスコ国内委員会広報大使のさかなクンさんの「特別講演」、手鎌小学校郷土学習発表「濁いね踊り」、テーマ別分科会（4分科会 大牟田市12校、他地域の学校12校）、パネルディスカッション、閉会行事、の構成で行われました。

さかなクンさんの「特別講演」は、個人的には三度目の聴講でしたが、毎回、興味深いものです。大牟田ということで、有明海の魚をテーマに、子どもたちとのクイズ形式で進められました。子どもたちからの質問は、話の展開から何が飛び出すか分からないわけで、それをうまくまとめていくさかなクンさんの力量は、毎回感心してしまうものがあります。子ども们的外れな質問を受けてどう展開するか、決して素通りしないで、次へとつなげていく。子どもの見事な意見をどうとりあげるか、その進行と話術は、大いに参考になるものがあります。そして、最後には、ESDに講演は集約していく。

分科会は、いつもどおりの形式で、各地の熱心な取り組みについての発表がありました。同じ奈良の地と言うことでは、奈良市立月ヶ瀬中学校のアルミ缶回収の長年の取り組みが目を引きました。全国で、ユネスコスクール活動に地域ぐるみで取り組んでいる地域は、気仙沼市、多摩市、金沢、奈良市、大牟田市ではないかと思います。それぞれに特徴がありますが、市立学校の全てがASPに加盟にしているのは大牟田市のみで、全市をあげての取り組みということが言えるわけで、このあたりの体制に参考になることが多々ありました。

依頼され閉会の講評を担当しました。また、翌日、大牟田文化会館で開催された「大牟田市ユネスコスクール子どもサミット」（教育委員会 学校教育課指導室 主催）にも参加させていただき、小学生、中学生の日頃の学習成果発表を知ることができました。大牟田は、近代化産業遺産として、三池炭坑関連施設の世界遺産登録を推進していますが、世界遺産の観点だけではなく、福祉、環境、生きもの調査、水質調査、エコライフ、クリーンアップ作戦など、さまざまな充実した学習活動が行われていることを知りました。

今回、学生、院生、教員のチームでの参加となり、現地で相互に意見交換などもでき、有益な学びの機会となりました。

「ユネスコスクール地域交流会 in 九州」参加報告

社会科教育講座教授 岩本廣美

1 概要

(1)開催日時 : 2013年1月11日(金) 9:30~17:00

(2)開催地・会場 : 福岡県大牟田市・オオムタガーデンホテル

(3)参加者 : 主として学校関係者約200名のほか、地元小中学生約50名が特別参加

(4)プログラム骨子 :

午前 全体会(挨拶、基調講演、大牟田市の取り組み紹介、さかなクン特別講演)

午後 分科会(1~4 ※4に参加)、全体会(各分科会からの報告)

(5)第4分科会について

分科会全体テーマ:校内体制(学校全体で取り組む)

事例の構成:地元大牟田市および他地域からそれぞれ3事例ずつで構成。次の2事例については、実践の意義や背景などを後述する。

◆大牟田市立駛馬北小学校:「かかわろう」「つながろう」きらめく駛馬

◆奈良市立月ヶ瀬中学校:持続可能な発展のための持続可能な取組

2 所見

(1)地域の教育課題と「資源」を活用した大牟田市立駛馬北小の実践

福岡県南端部に位置する大牟田市の人口は、現在約12万人であるが、昭和30年代には人口20万人以上を有する地域であった。大牟田市には、明治時代以降の日本の近代化を支えた三池炭鉱があり、昭和30年代までは多くの人々に就業先を提供してきた。しかし、その後国内産石炭の需要は大幅に減少し、平成9年には閉山に至る。炭鉱をめぐる状況変化により大牟田市の人口は激減し、地域は活気を失っていった。こうした事情から近年の大牟田市では、地域で誇れるものを見出しにくい状況となり、子どもたちに地域の優れた面を学ばせ自信と誇りを取り戻させることがきわめて重要な教育課題となってきた。そこで、注目されたのが、大牟田市に残る炭鉱関連施設など近代化産業遺産群である。これらを単に過去の繁栄を偲ぶ対象としてではなく、「九州・山口の近代化産業遺産群」と称する世界遺産への登録候補として再評価する考え方で取り組むことになった。大牟田市では、平成23年3月に全小中学校・養護学校がユネスコスクールとして承認を受け、市を挙げてESDに取り組むようになった背景には、大牟田市の抱える切実な教育課題があったと見ることができる。

駛馬北小の実践は、地域の資源である炭鉱関連施設など近代化産業遺産群を社会科などの学習で取り上げ、子どもたちの郷土愛を育てることをめざした実践である。大牟田市の教育課題に正面から取り組もうとするものであり、こうした課題意識は、どの地域でも持つべきものであろう。

(2)継続性を重視した奈良市立月ヶ瀬中の実践

学校がユネスコスクールとしてESDの実践に取り組む場合、当該の学校教員が、何か特別な取り組みを新たにしなければならない、という意識を持つ場合は多々あると考えられる。しかし、新たな取り組みを進めた年度は学校が活性化され、成果をもたらすが、核となる教員の異動などにより、継続されない場合もあるといわれる。

こうした問題点の解決のために、確実に継続できる実践を意識して取り組んできたのが、奈良市立月ヶ瀬中学校である。平成21年2月にユネスコスクールに加盟した月ヶ瀬中は、ESDの実践として、アルミ缶回収、地域清掃、ふるさとウォーク、梅干作りなどに取り組んできた。これらのうちアルミ缶回収は、平成7年度から継続してきたものである。烏梅(うばい)を使った紅花染色のように最近始めた実践もあるが、多くはこれまで取り組んできたものをESDとして捉え直し、継続させたものである。継続性は、どの学校でも重要な課題であるといえよう。

ユネスコスクール地域交流会 in 九州報告書

奈良教育大学教職大学院 島 俊彦

1. 大牟田市の ESD Part. 1

大牟田市が取り組んでいる ESD の特色の説明や、大牟田の小学生による教育実践事例発表が行われた。大牟田市の ESD の最大の特徴は、全公立小中学校及び特別支援学校（計 34 校）がユネスコスクールに加盟していることである。ユネスコスクールのまちとして、ESD を推進してゆこうとしている。「子どもが自ら学び、共に学びあう」ことを理念に掲げ、各校にユネスコスクール担当者を配置し、教材・人々・能力・態度をつなげる核として ESD が機能する環境づくりを進めている。

大牟田市立吉野小学校では、環境教育を ESD の核として実践している。「みんなが楽しく過ごせる住みよい町になるように」という願いを叶えるため、低学年では生活科のまち探検などを通して「知る」事を、中学年では総合的な学習の時間を中心に、ビオトープ作りなどを通して「守る」事を、高学年では「自分たちにできること」という視点で、吉野地区の環境を「守る」そして「育てる」事を目指し、小学校の 6 年間を見通した、一貫性のある環境教育を行っている。自分たちの住む地域や身近なものから学び、地域に住む社会の構成員としての責任感を養い、地域を守り育てるために行動できる子どもを育てている。

2. 特別講義

特別講義では、さかなクンが、有明海に生息する魚 30 種を、ユーモアを交えながら紹介してくれた。講義の最後に「今日から僕たちに出来る事」として、①石鹸を使う、②食べ物に感謝する、③ものを大事に使う、の 3 点を心掛けて生活することを参加者に薦めていた。

3. 大牟田の ESD Part. 2

大牟田市立手鎌小学校の 5 年生が、地域伝統の「渦イネ踊り」を披露してくれた。「子ども大牟田検定」及び「子どもサミット」の紹介では、自分たちの住む地域への理解・興味や、地域愛育成のために「子ども大牟田検定」を、年 2 回実施していること。学校間の相互理解や ESD 理解を目的として「子どもサミット」を行っていること、説明を受けた。

4. 分科会

第 4 分科会「はぐくみたい力・学力」に参加した。小中高 6 校が、各自 ESD に関する特色ある取組を発表すると共に、その取組を通して子どもたちに 育ませたい力を示していた。6 校に共通して言えることは、国研の最終報告書に記載された、持続可能な社会づくりの構成概念や、ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の育成を狙っていることである。また「つながり」を主題に、人や環境、文化などといったものへの「つながり」や「かかわり」を重視する学校が多かった。

5. 全体会

全体会では各分科会のまとめを行い、学びの全体共有を図った。地域について知ること（郷土愛）、自分の頭で考えること（批判的思考）、行動変容につなげることを ESD のポイントとし、地域をベースに ESD を推進し徐々に視野を外へ広げていくことの確認を行った。

6. 総括

今回のユネスコスクール地域交流会 in 九州に参加したことで、奈良以外の地域で ESD がどのように推進されているのかを知ることが出来た。奈良で ESD を学んでいる私にとって、今までは、ESD と言えば「世界遺産を切り口とした ESD」のイメージが強かった。しかし、他地域が行っている実践事例などから、ESD には多様な視点や手法があるということを知ることが出来た。ESD に対する視野を広げる良い機会となった。ここで得た学びを、ユネスコクラブの部員や他の学生に還元すると共に、自身の学生生活に役立てて行きたい。

ユネスコスクール地域交流会 in 九州 参加報告書

奈良教育大学大学院 社会科教育専修 上地 翼

全体会を通して

今回、ユネスコスクール地域交流会がおこなわれた福岡県の大牟田市は、世界遺産暫定リストに載っている「九州・山口の近代化産業遺産群」の中の三池炭田を抱える町である。この大牟田市の特徴としては、市内の私立学校 34 校全てがユネスコスクールとなっていることに代表される町を挙げてのユネスコスクール推進の町であるという事だ。また、ただユネスコスクールに加盟しているだけでなく、地域の伝統文化を活かした ESD を実践している。今回のユネスコスクール地域交流会でも、大牟田市立の小学校の実践発表が行われ、その教育プロセスなどを学べたことや、発表をする子ども達の表情を見る事で、充実した ESD の効果を体感することができたという点が収穫と言える。私自身、今年 4 月から大阪市の中学校で社会科を教えるにあたって、今回の地域交流会で学ぶことのできた実践例を参考にしながら、様々な角度から ESD に取り組んでいきたいと考える。

テーマ別分科会「地域との連携」

今回の私が参加した分科会のテーマは「地域との連携」である。このテーマを選択した理由は、自らが教師という立場で ESD の活動をおこなっていく上でとても重要視する問題だからである。ESD の実践例をみると、その多くが地域と連携することでより充実した学びとなっていることがわかる。しかし、地域との連携した活動をする為には、地域から信頼される必要がある。この信頼関係をどのように構築していくのかを主な観点として、今回のテーマ別分科会を選び参加した。

地元大牟田市の学校をはじめ多くの実践例が紹介された中で、私が興味を持ったのは、東京都多摩市立東愛宕中学校の発表である。ボランティア活動やグリーンカーテン作りなど様々な実践を通して、豊かな人間性を育てることを目標に ESD の実践をおこなっている。その東愛宕中学校の発表で心に残った言葉として、地域から信頼を得ようとするのではなく、まずは健全な学校作りをしていけば地域も学校やその活動を理解してくれ、学校と地域との連携も深く進めていくことができるといった言葉である。また、この発表の中で、学校と地域での連携は、子どもたちがその後の地域での行事に参加する意欲やボランティア活動への意欲の変化など、アンケートを基に、しっかりとフィードバックされていることが、よい活動に繋がっているのではないだろうか。

全体を通じて

今回のユネスコスクール地域交流会を通して私が一番感じたことは、まずは実践してみる事の大切さである。私自身様々な ESD の取り組みを紙面だけでしか見る事がなかったので、私は ESD に関する実践をおこなうことは無理ではないかという勝手な考えがあったのだが、春から教師となり ESD に関する自分なりの実践を子どもたちと創り上げてみたいと思うようになった心境の変化こそ、今回ユネスコスクール地域交流会に参加したことでの最大の収穫だと考える。

ユネスコスクール地域交流会 in 九州 参加報告書

奈良教育大学大学院 社会科教育専修 2 回生 木之下 昇平

本報告書を作成するにあたり、まずは今回の研究会に参加させていただいたことに深く感謝申し上げたい。ESD については私の専門外の内容であったため、これまであまり学習機会がなかった。しかし、本研究会に参加し、たくさんの学校の実践事例を見聞きすることを通して、少しではあるがその見識が広がったと感じる。このような貴重な経験を今後教師になる上で是非生かしていきたい。

さて、本研究会では ESD とは何かという根本的な点の確認から、昨年度市立 34 校すべての学校がユネスコスクールの承認を受けた大牟田市における ESD の実践事例の紹介、さらに全国のユネスコスクール承認校における事例報告と、1 日で ESD の実践事例をたくさん見聞きすることができた。世界遺産を県内に多数有する奈良県の学校現場においては、ESD はとりわけ世界遺産教育と結びつけて捉えられることが多い。県内のこうした事例を見ていたため、私は ESD とは例えば世界遺産に代表されるような地域の持つ独自性・特殊性について理解を深める学問であると考えていた。しかし、今回発表された事例では、こうした世界遺産・地域遺産に限らず、環境教育やエネルギー教育など、地域の独自性・特殊性に限らないあらゆる分野について教育に取り入れている事例が多数紹介された。例えば、分科会で発表されていたある小学校の実践事例では、「子ども民生委員」という取り組みを通して地域に住む高齢者のもとに何度も足を運び、地域に住む高齢者と定期的な交流を計ると同時に福祉の仕事の大切さ・大変さに気づくという学習があった。この場合、民生委員という仕事は地域特有の仕事ではないため、全国どこでも実践することが可能である。実際、子ども達にとってこのような体験はその後の職業体験に繋がってくるだけでなく、近年の核家族世帯の増加によって高齢者との関わりの少ない子ども達にとっては、高齢者との触れ合いが非日常の貴重な体験となる。私はこの取り組みが非常に面白いと感じ、教壇に立った時には本事例をぜひ参考にしたいと思った。

このような活動を行っていく上で、当然留意すべき点も何点かある。ひとつは、単元として取り扱う総時間数の問題である。近年では総合的な学習の時間が設置され、ESD も当然この時間を中心に展開されるものである。しかし、継続的な取り組みが必要であるという観点から、年間総時数で考えたときに総合的な学習の時間の中だけで扱うには内容として少し苦しいものがあるように思う。だからといって時間数をむやみに拡大すると、他の教科の学習に多大な影響が出る。ゆえに、このような活動を行うにあたっては、他の教科と合科的な学習にしつつ、各教科の学習にあまり影響を与えないよう、カリキュラム編成を工夫せねばならない。

もうひとつは、どのような事象を取り扱うにしても、必ず子どもの興味に即した授業を展開しなければならないということである。教師がどれだけ作り上げた教材に対する熱意を持っていても、肝心の子どもが「知りたい、考えたい」と思わなければ学習意欲もわかず、せっかく興味深い素材を用いても子ども達にとってはただ「やらされている」だけの授業にもなりかねない。このような意味で、カリキュラム編成の工夫、子どもへの興味付けということは、ESD にとって非常に大きなウェイトを占めていると感じた。

ESD が本当に子ども達のためになる学習になるためには、カリキュラム編成の段階から教師があらかじめ明確な目標意識を持っておくことが求められる。何を学ぶことが子ども達にとって意味があるのかを第一に考え、その他の教科の学習にあまり影響を与えないようにカリキュラム編成を工夫しなければならない。奈良県における ESD がしばしば世界遺産学習と結びつけて捉えられている事実は既述の通りであるが、教師が本当に熱意を持ってカリキュラム編成すれば、素材になるべき「生きた教材」は何も世界遺産だけではない。私は、教員となった後も何を学ぶことが子ども達のためになるのかを第一に考え、興味深い学習素材を追求しカリキュラム化していきたいと考えている。

ユネスコスクール研修会 in 多摩 報告書

数学教育専修 2回生 親木 翔平

1. 所属 数学教育専修

2. 研修名 ユネスコスクール研修会 in 多摩

3. 受講場所 多摩市立多摩第一小学校 東京都多摩市関戸 3-2-23

4. 受講期間 2013年1月19日 10:30~17:00

5. 研修内容

(1) 公開授業

(2) 公開シンポジウム

-1 ESD 授業実践の全国展開

-2 多摩地域での ESD 授業の取り組み

(3) パネルシンポジウム

6. 講習の成果／感想

午前中の公開授業は生活科と総合学習の時間であった。授業は、いわゆる、問題解決型学習であり、児童らが自ら問題を見つけ、それを解決していく姿が特に目立っていた。その中でも一番興味深かった授業は、5年生の「米作りから世界を知ろう」という授業である。私が小学生であった頃にも、調べ学習を行い、米作りは行った。その時の授業との違いを考えてみた。その違いとは、授業はあくまでも「児童自身が疑問に思ったこと」を中心に進められているという点にあるのだと思った。

また、午後からの ESD 授業の取り組み紹介でも、「Rice プロジェクト」についての話があった。私は当初「なぜ米なのか」という疑問があったが、理由を知って、納得した。あらゆる地域と密接に結びついており、様々な分野との関連があるこのテーマは、優れているのである。

そして、本学でも、家庭科教育講座の学生らが、米粉のクッキー配布などを通して、お米について知ってもらう活動を行っていた意味もわかった。

しかしながら、今回の研修で私の疑問がすべて解消されたわけではない。たとえば、「ESD と環境教育との違いは何か」や、「総合学習との違いは何か」などは、いまだにぼんやりとしており、明確な答えを持っていない。今後はそういった点についても考えていきたい。そのために、最近開設された大学図書館の ESD 図書のコーナーなどを有効に活用していきたいと思う。

第 37 回全国数学教育学会報告書

① 日程表

奈良教育大学大学院教育学研究科修士課程

教科教育専攻数学教育専修

安藤三央

a113301@student.nara-edu.ac.jp

第 37 回全国数学教育学会に下記の日程で参加したことをここに報告致します。

1. 日時

2013 年 2 月 2 日 (土) 12:00~18:20

2 月 3 日 (日) 9:00~16:20

2. 場所

広島大学大学院教育学研究科・教育学部 (東広島キャンパス)

〒739-8524 広島県東広島市鏡山一丁目 1 番地 1 号

3. 日程表詳細

日時	内容
2 月 2 日	広島へ移動
9:00	
13:30	研究発表聴講
16:30	開会行事・総会・学会賞授与式
18:15	懇親会
	宿泊
2 月 3 日	研究発表聴講
9:00	
10:15	全体会 (シンポジウム)
13:10	研究発表
13:40	研究発表聴講
16:10	閉会行事
16:30	奈良へ移動

以上です。

第 37 回全国数学教育学会報告書

②活動内容

奈良教育大学大学院教育学研究科修士課程

教科教育専攻数学教育専修

安藤三央

a113301@student.nara-edu.ac.jp

第 37 回全国数学教育学会において研究発表を行ったことをここに報告致します。

1 はじめに

私は、修士課程における数学教育学研究として「和算の教材化による算数科授業の開発」を行なってきた。本研究は、近年重視されている教育の目標「我が国の文化に親しむ態度を養う」ことや、数学教育固有の目的の一つである「文化的目的」に貢献するものである。

本研究では、児童自身が和算という我が国独自の数学に親しむ態度を身につけること、和算という我が国独自の文化を教授し、発展させながら次世代へと継承していく担い手であるという実感をもつことができるように、それに親しむための授業の開発を行った。

本研究の内容は、全国数学教育学会の「数学教育に関する研究の発表、情報の交換を行い、会員相互の連絡を図ること」という目的に則しているため、今回の第 37 回大会において研究発表を行った。

2 活動内容

2.1 和算とは何か

本研究では一般的な和算の定義である「日本独自の数学」に従う。和算は、我が国で独自に発展した数学である。鎖国時代の江戸時代において最も大きく発展し、その水準は世界一とも言われている。しかし、明治維新によって西洋数学が導入されたことを機に消滅した。本研究は「和算に対して文化史的解釈を下すことはそれ自身に、はなはだ趣味ある問題でもあるし、またかくすることによりて将来の発展を期する上に大いなる参考となり得べき当然の性質を有するものであると信ずる。こうして教育上の参考に役立つものともなるのである」(三上, 1999) という立場に立ち、和算発展当時の社会における和算の特徴を明らかにしたうえで教育への活用の価値を見いだす。

2.2 和算における学びの姿勢

江戸時代、もとは生計を立てるために必要な計算等の内容が発展したが、経済や文化の成長に伴い“数学を楽しむ”ための内容が飛躍的に増加した。遊戯的な問題の存在や、和算の問題と解答を描いた「算額」を寺社に奉納する算額奉納という風習などがそれに当たる。これらは実用を離れており、生活に直結するものではない。それでも学ぼうとする姿

¹三上義夫著、佐々木力編 (1999) 『文化史より見たる日本の数学』、岩波書店、p.47

勢には、純粋に学ぶことを楽しみ、学ぶことができることへの感謝の念が込められている。仲間と協力する姿、新たな問題を作成し、他者への挑戦状として奉納した算額、それに答えを記した算額など、学びを楽しむ姿勢や継承し発展させる姿勢が当時の資料や現在残る資料からも確認できる。

2.3 今日の教育への和算活用の意義

今日の教育への和算活用の意義として「児童が和算という我が国独自の文化を実感すること」「和算の遊戯的な問題によって児童の算数への情意面を向上させる」ことを挙げる。そのための具体的な手立てとして江戸時代の「学びの姿勢の追体験」、「原典の提示」を提唱する。具体的には児童に「当時の人々のように仲間と協力しながら和算の問題に取り組む」、「新たな問題を作り友達に挑戦状を出す」場面を設定した。これらの活動を取り入れた授業を組み立て、実践と検証を行った。

公立小学校第6学年96名を対象に3時間構成の授業を行った。扱った内容は「さっさ立て」、「鶴亀算」、「油分け」、「入れ子算」である。現行の算数の内容と関連のあるもの、児童の学習段階との関連から問題を選定し、教材化した。

算数の情意に関する事前・事後調査は右の通りである。得られた意見として「今まで算数は『難しいからやめよう』だったけど、和算をやって『難しい。でもやってみよう』と思えるようになった。」、「遊びを通して和算を学んでいたことを知った」「家族にも教えてあげようと思う」など、算数への情意の変化や和算の文化を実感している様子がみられた。また、原典によって「すごく昔の人と今の人がつながった気がした」などの感想を得たことから、原典を示すことには効果があると思われた。

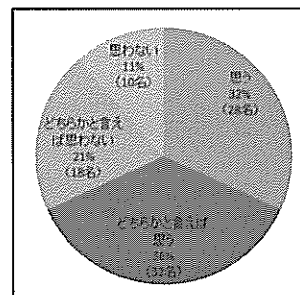


図1 「算数は楽しい・面白い」への回答

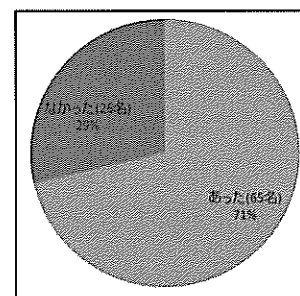


図2 「和算を学んだことで算数への気持ちの変化があった」への回答

3 おわりに（本学会に参加して得たもの）

質疑応答で「学校の中のカリキュラムに位置づけることは和算における学びの姿勢を損なわないか、和算としての学びの姿勢とずれないか。」という意見を得た。「和算の学びの姿勢は自由な学びであっ

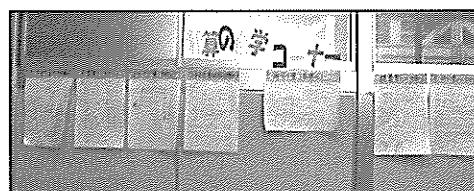


図3 和算の自学コーナー（学びの場の設定）

た。算額奉納が行われた寺社は当時の人々の交流の場であった。和算の学びの追体験においても、授業においては強制することなく楽しく取り組むことを重視し、また授業外においても学びの場が存在するように寺社にあたる場を設定することで、問題は解決できると考える。」と回答した。本実践においても、授業外における学びの場の設定として自主的に問題を作成してきた児童たちの学びを自由に閲覧できる場を設定したが、このように授業を離れたところでの和算の可能性についても研究の余地があると考え、研究を継続する。

「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」

教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

テーマ4

大学と地域の連携のためのセンター校的機能の拡充

《中国农村合作化运动》（中共中央文献研究室编）

《中国农村合作化运动》（中共中央文献研究室编）

《中国农村合作化运动》（中共中央文献研究室编）

平成 24 年度奈良教育大学学ぶ喜び・ESD 連続公開講座（18 時～20 時）

第 1 回 5 月 29 日

講師 奈良教育大学副学長 加藤久雄 「ESD はじめの一步」
奈良教育大学専任講師 中澤静男 「ESD 概論」

第 2 回 6 月 28 日

講師 奈良市立都跡小学校長 植島佳子 「私の学級経営 そして授業のコツ」
十津川地域雇用創造協議会事務局長
北村啓司 「世界遺産:紀伊山地の霊場と参詣道の現状とボランティア」

第 3 回 7 月 26 日

講師 奈良教育大学教授 谷口義昭 「森林環境教育と ESD」
奈良県立野外活動センター 吉藤行二 「野外活動の A—Z」

第 4 回 8 月 27 日

講師 奈良教育大学教授 頓宮 勝 「環境と文化の表現形に関わる思考基盤」
奈良市教育委員会教育推進係長 東畑年昭 「あなたの琴線にふれるもの」

第 5 回 9 月 21 日

講師 奈良教育大学教職大学院教授 山本吉延 「指導主事という仕事」
～教育行政における教員のもう一つの役割～
奈良県立法隆寺国際高等学校教諭 祐岡武志 「世界遺産を学ぶことから ESD を考える」

第 6 回 10 月 18 日

講師 奈良教育大学准教授 和泉元千春 「言語と文化の統合教育実践における文化的気づきに関する考察」～留学生の語りから見えてきたこと～
奈良市立三笠中学校長 長浜博巳 「元気 勇氣 本気 そして根気」

第 7 回 11 月 30 日

講師 奈良教育大学教授 山岸公基 「陸前高田市文化財調査報告」
奈良市立済美小学校教諭 大西浩明 「地域遺産教材化のコツ教えます」

第 8 回 12 月 20 日

講師 奈良市立飛鳥小学校教諭 松浦 慎 「仲間づくりの実践的手法について」
奈良教育大学准教授 渡邊 伸一 「奈良のシカ」をめぐる二つの謎を考える」

第 9 回 2 月 6 日

講師 奈良教育大学研究員 北村 恭康 「「忘れられた資産」を教材に」
奈良市教育委員会主幹
石原 伸浩 「「おもろいで、センセ。かわいいで、子ども」と語れる教師になるために」

第 10 回 3 月 1 日

講師 奈良教育大学副学長 伊豆蔵 好美 「リベラルな民主主義」社会の持続可能性について」
奈良市教育委員会指導主事
西口 美佐子 「「学校が楽しい」私にとってそれが最大の褒め言葉」

【ESD概論】

持続発展・文化遺産教育研究センター 専任講師 中澤 静男

1. ESDで育てたい力

(1) ESD実施計画(2011.6.03改訂)

「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議

ESDにおいては、問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方を重視した体系的な思考力(システムズシンキング(systems thinking))を育むこと、批判力を重視した代替案の思考力(クリティカルシンキング(critical thinking))を育むこと、データや情報を分析する能力、コミュニケーション能力、リーダーシップの向上を重視することが大切です。

また、人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重といった持続可能な開発に関する価値観を培うことも重要です。

このような技能や価値観を培い、市民として参加する態度や技能を育むことが大切です。なお、小中高等学校の総合的な学習の時間は、体験を通じて学校等で学んだ知識の定着、思考力、判断力、表現力、問題解決能力の育成、調べ方やまとめ方、発表の仕方などを身につけさせることを目指して行われており、ESDにおいて重視すべき点と重なるため、その充実が必要です。

(2) 日本ユネスコ国内委員会(文部科学省:2011.11)

- ① 持続可能な発展に関する価値観(人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等)
- ② 体系的な思考力(問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方)
- ③ 代替案の思考力(批判力)
- ④ データや情報の分析能力
- ⑤ コミュニケーション能力
- ⑥ リーダーシップの向上

(3) ESD-J(認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議)

ESDでつちかいたい 「価値観」

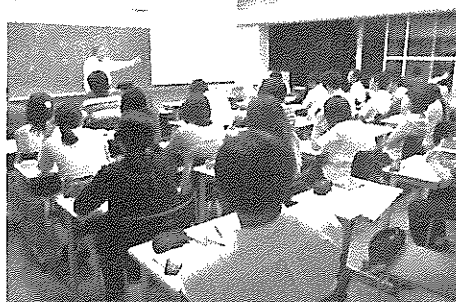
- ① 人間の尊厳はかけがえがない
- ② 私たちには社会的・経済的に公正な社会をつくる責任がある
- ③ 現世代は将来世代に対する責任を持っている
- ④ 人は自然の一部である
- ⑤ 文化的な多様性を尊重する

ESDを通じて育みたい 「能力」

- ① 自分で感じ、考える力
- ② 問題の本質を見抜く力/批判する思考力
- ③ 気持ちや考えを表現する力
- ④ 多様な価値観をみとめ、尊重する力



- ⑤ 他者と協力してものごとを進める力
- ⑥ 具体的な解決方法を生み出す力
- ⑦ 自分が望む社会を思い描く力
- ⑧ 地域や国、地球の環境容量を理解する力
- ⑨ みずから実践する力



(4) 国立教育政策研究所

「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究【最終報告書】」

- ① 批判的に考える力
合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、代替的に思考・判断する力
- ② 未来像を予測して計画を立てる力
過去や現在に基づき、あるべき未来像（ビジョン）を予想・予測・期待し、それを他者と共有しながら、ものごとを計画する力
- ③ 多面的・総合的に考える力
人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり（システム）を理解し、それらを多面的、総合的に考える力
- ④ コミュニケーションを行う力
自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力。
- ⑤ 他者と協力する態度
他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協調してものごとを進めようとする態度
- ⑥ つながりを尊重する態度
人・もの・こと・社会・自然などと自分とのつながり・かかわりに関心を持ち、それらを尊重し大切にしようとする態度
- ⑦ 進んで参加する態度
集団や社会における自分の発言や行動に責任を持ち、自分の役割を踏まえた上で、ものごとに自主的・主体的に参加しようとする態度

2. 本日の中心

- ① クリティカルシンキング
今ある社会やシステムを所与のものにとらえるのではなく、批判的に改善可能なものにとらえ、代替案を考える力。
- ② システムズシンキング
つながりを意識した、多面的、体系的に考える力。
- ③ 持続可能な発展に関する価値観
 - ・ 世代内の公正と世代間の公正
 - ・ 日本人の自然観 ・ ・ 自然に対する態度
 - ・ 本当の豊かさ ・ ・ 「ある」様式

「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト
第2回「学ぶ喜び」・ESD連続公開講座 概要報告

1. 日時 平成24年6月28日(木) 18時—20時
2. 主催 奈良教育大学
3. 会場 奈良教育大学201号教室
4. 参加者 学生・大学教職員、及び近隣小中高等学校教員 60名
5. 内容

講演1「私の学級経営、そして授業のコツ」

奈良市立都跡小学校長 植島 佳子 氏

講演2「世界遺産：紀伊山地の霊場と参詣道の現状とボランティア」

十津川村地域雇用創造協議会事務局長 北村 啓司 氏

4. 講演概要

- (1) 講演1「私の学級経営、そして授業のコツ」植島 佳子 氏

【先生に必要な力】

① コミュニケーション力

子どもとのコミュニケーションはもちろん、保護者対応や職員室での教師間においても、コミュニケーション力は重要である。特に保護者対応時の電話における話し方にも留意する必要がある。

② 整理整頓力

③ 演技力

先生は四者互入と言われる。医者、易者、学者、そして役者である。悲しいときは一緒に泣いてあげる、うれしいときはびっくりするほど喜んであげる演技力が必要である。

④ 聴く(×聞く)力・心遣い

聴くは十個の耳と四つの心からできている。子どものうたえを、心で聴く。また、子どもにも保護者にも、先生方にも、色々な部分で心配りできるように。子どもには、「目と頭とおへそで聴きなさい」と指導している。

⑤ 繊細さ

⑥ 見通し・段取り力

先を予想し、うまく流れるように組み立てを考える。

⑦ 多角的運営力

学級担任は、授業だけしているわけにはいかない。色々なことを同時に進行する力が求められる。

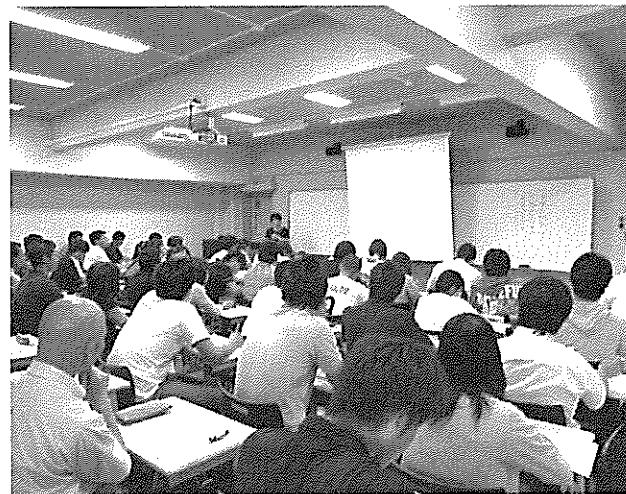
【学級経営で配慮すること】

① 心の教育の充実

学級みんなで一緒に喜んだり、悲しんだりできる雰囲気をつくっていく。

② 集団の質を高める

子ども同士の影響力は大きい。個々を伸ばすことも大事だが、全体として前に進もうという積極



性のある雰囲気をつくる。

③ 自分の居場所があると感じることができる

④ 学び方を学ばせる

こういう力をつけたいと、教師は持つておくことが大切。

【教員としての心構え】

① 教育するときに必要なことは、「活気があること」「楽しさがあること」「先生が明るいこと」

② ほめるより喜ぶ。しかるより悲しむ。

③ 学級が楽しいと、子ども一人一人が安心して自分を表現できる。全力を出し切って活動できる。

④ 子どもにとっての喜びは、一生懸命したことが先生や友達に認められ、ほめられたとき。自分がいきいきと発揮できる喜び。

⑤ 教科指導よりも、大事なことを先にする。

⑥ 授業の組み立ては、「読ませる」「聞く」「書く」の3つを組み合わせる。

⑦ 子どものちょっとした反応や行動をメモしておくことが、評価につながる。

⑧ やんちゃな子には、最初に「頼りにしているよ」と声をかけ、信頼関係を築く。

(2) 講演2「世界遺産：紀伊山地の霊場と参詣道の現状とボランティア」北村 啓司 氏

① 共働から共創、そして共感へ

共働 … 先人が残した資産をとともに整備し、

共創 … 今の、そして次世代につながる機会に磨き、

共感 … 共に豊かな自然と命のつながりを感じたり、地域に根差した伝統文化や人々とふれあい、人と自然、人と人の共存や多様な生き方を知る。

② 道普請ツアーの企画の目的

ボランティア参加者に地元の風習「道普請」を体験してもらい、同時に観光資源の整備を行ってもらおう。

- ・ 被災した世界遺産の道の修復
- ・ 参加者の宿泊促進

③ 道普請ツアーの気づき

- ・ 道普請を行うことに意味を見出す人がリピートしている。
- ・ 道は手段であって目的ではない。
- ・ 地元の人々は、「世界遺産の道」に対して関心が低い。
- ・ 村内資源を地元視点で意味づけすることで、郷土の誇りを養うことができる。

④ 道普請の今後

- ・ 地元の人とも交流しながら、道、屋敷跡、集落跡の整備活動をする。
- ・ 集落跡で過ごし、自然の中での営み、古人の生き方を学ぶ機会をつくる。

【道普請からESDへ】(中澤)

道普請には、ESDで養いたい価値観に関わって3つのことを学ぶ機会となっている。

① 不便さを楽しむ

十津川村では携帯電話も使えないことが多い。携帯電話がないと生きていけないと感じている人も多いかもしれない。でも、本当に携帯電話はそこまで大切なものなのだろうか。現代のわれわれは、便利さと豊かさをはき違えてしまっている。十津川村で過ごしていると、自動車の騒音の代わりに鳥

のさえずりが聞こえる。着信音の代わりに谷を渡る風の音が耳に気持ちがいい。人にとって本当に大切なものを考える機会になると思う。

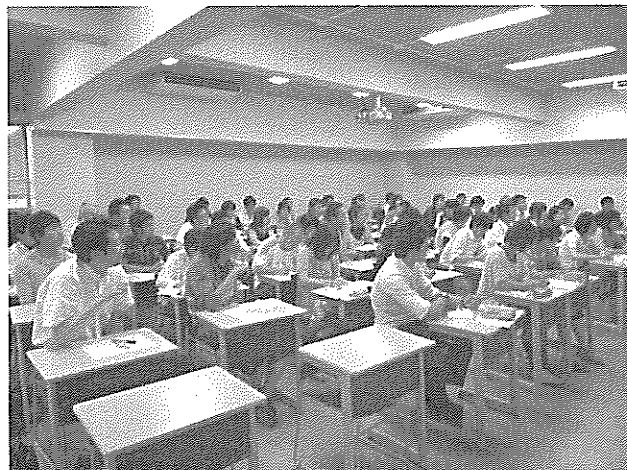
② 人のつながりを考える

第2回の道普請の帰り道、「道普請大変やったねえ。」と、村のおばさんがおはぎを作って、待っていて下さった。町に住んでいてこのような経験があるだろうか。今我々は、隣に住む人が誰かも知らない、話したこともない社会に住んでいる。道行く人とはできるだけ視線を合わせないようにしている。一緒に活動するときも、できるだけ肌がふれあわないように細心の注意をしている。それでいいのだろうか。人は社会的動物だといわれる。人だけが孤独をさける。つまり、信頼できる人と共にいることが「人だけの幸せ」である。道普請ではそういう「本当の幸せ」について考える機会にもなると考える。

③ 経済優先の市場原理を超えた大切なもの

ボランティアは、無報酬である。自分の力量に見合った参加のしかたでよい。参加する上での公平性が保たれている。無報酬であるため、参加者は互いの働きを認め合える。つまりボランティアを駆動しているのは損得勘定ではなく、善悪である。日ごろ私たちは損得を基準にして行動することが多い。自分にとって利益になることはするが、そうでないことには見向きもしない。身近に困っている人がいても、関わろうとしない。しかし心のどこかでは、それではいけないと思っており、損得を基準とした行動では、心がしだいに疲れていく。

喜びには、何かを「もらう喜び」と「与える喜び」がある。どちらが本当の喜びであるかを考えることが大切だと思う。



「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト
第3回「学ぶ喜び」・ESD連続公開講座 概要報告

1. 日時 平成24年7月26日(木) 18時—20時
2. 主催 奈良教育大学
3. 会場 奈良教育大学 201号教室
4. 参加者 学生・大学教職員、及び近隣小中高等学校教員 28名
5. 内容

講演1「野外活動のA-Z」

奈良県野外活動センター 吉藤 広二 氏

講演2「森林環境教育とESD」

奈良教育大学 教授 谷口 義昭

4. 講演概要

- (1) 講演1「野外活動のA-Z」 奈良県野外活動センター 吉藤 広二 氏

【小学校長期自然体験活動について】

- ・ 平成20年中央教育審議会答申

「子どもたちの社会性や豊かな人間性をはぐくむため、その発達段階に応じ、集団宿泊活動(小学校)、職場体験(中学校)、奉仕体験活動や就業体験活動(高等学校)を重点的に推進する」

- ・ 新学習指導要領(道徳)

「道徳教育を進めるに当たっては、(略)集団宿泊体験やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない」

- ・ 新学習指導要領(特別活動)

「学校の実態や児童の発達の段階を考慮しつつ、一定期間(例えば1週間(5日間)程度)にわたって行うことが望まれる」

- ・ 実態(平成21年度「全国学力・学習状況調査」)

1泊2日(53.2%)

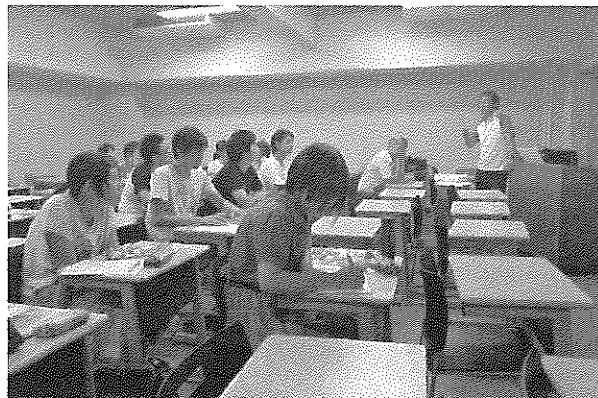
2泊3日(32.9%)

3泊4日以上(7.3%)

奈良県内の小学校はすべて1泊2日

- ・ 今後の方向性

総合的な学習や特別活動だけでなく、野外活動のプログラムに教科学習の内容を組み込むことで、長期が可能になる。



【野外活動の可能性】

① 防災教育の視点を組み込む

防災教育の基本はいかにリーダーを育てるかであり、それには野活が有効である。

最近自然の猛威を肌で感じる事が少なくなった。自然を甘く見る傾向が強くなった。自然に対する日常生活的知恵が衰退し、自然への理解が弱まっている。体験することで、イメージすることができるようになる。サバイバルキャンプは、自分で判断できる力をつけることができる。

楽しさの中で防災意識を育てる。

非常食ばかりを食べさせた後、職員による炊き出しを行ったことで、感謝の心や命の大切さを学ばせることができた。

② 体力向上への効果（奈良県の子どもの体力は低い）

野活という短期間で体力をつけることはできないが、体を動かすことの楽しさを感じさせることが大切。

③ 規範意識を育てる

データからも、子ども時代に自然体験をたくさんした方が規範意識が高い。

④ その他

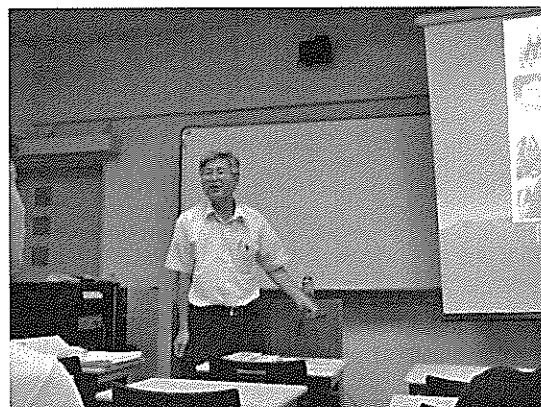
自然体験が多い子ほど、道德感が強い。また体力に自信がある子が多い。環境問題への関心が高い、生きる力がある、好きな教科が多いという傾向が見られる。

先生方の世代交代と共に、自然体験の少ない先生が増えている。

(2) 講演2「森林環境教育とESD」 奈良教育大学 教授 谷口 義昭

【森林のはたらき】

- ① 水源涵養機能
- ② 土砂災害防止／土壌保全機能
- ③ 快適環境形成機能
- ④ 生物多様性保全機能
- ⑤ 保健・レクリエーション機能
- ⑥ 地球環境保全機能
- ⑦ 物質生産機能
- ⑧ 文化機能
- ⑨ 魚つき林機能 「森が消えれば海も死ぬ」松永勝彦



【森林を取り巻く現状と課題】

○世界の森林

自然のサイクルを無視した伐採や開発による森林減少が問題。

○日本の森林

国産の木材が利用されないため、森林の手入れがされないことで、森林が荒れていることが問題。二次林も、まきや堆肥として利用されないため荒れている。森林が荒廃すると、下草が生えず、土砂災害を誘発する。

→ 世界的には伐ることが問題、日本では伐らないことが問題。

【奈良県の森林環境教育】

平成18年度から森林環境税として一人500円が課税されている。年間3億円。

奈良県内の全小中学校で森林環境教育が行われることになった。

【森林・林業・木材利用とESD】

吉野杉の利用が少なくなっている。酒樽、割り箸（国産割り箸の70%）

シベリアの永久凍土が融けて、木が倒れている。

ニュージーランドのラジアータパイン（持続可能な林業）

マングローブ林が伐られ、エビの養殖場になっている。

マレーシアのゴム林が伐られ、パーム農園になっている。

ドイツの黒い森の酸性雨被害

持続可能な開発には、環境と自然利用の調和が必要である。



「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト
第4回「学ぶ喜び」・E S D連続公開講座 概要報告

1. 日時 平成24年8月27日(月) 18時—20時
2. 主催 奈良教育大学
3. 会場 奈良教育大学201号教室
4. 参加者 学生・大学教職員、及び近隣小中高等学校教員 35名
5. 内容

講演1「あなたの琴線にふれるもの」

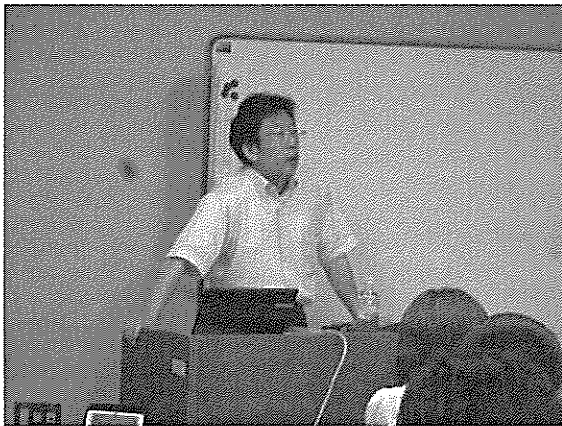
奈良市教育委員会事務局学校教育課 教育推進係長 東畑 年昭 氏

講演2「環境と文化の表現形に関わる思考基盤」

奈良教育大学 教授 頓宮 勝

4. 講演概要

(1) 講演1「あなたの琴線にふれるもの」 東畑 年昭 氏



東畑氏は、金子みすゞ(1903年～1930年)の詩と人生を紹介された。

平成23年3月11日の東日本大震災を機に「こだまでしょうか」という金子みすゞの詩が、繰り返し放送された。大震災という未曾有の悲劇に、金子みすゞの詩が求められたのかもしれない。

「私と小鳥と鈴と」という作品は、小学校の国語の教科書にも掲載されたこともあって、教員にとっては一番なじみのある詩だ。最終行の「みんなちがって、みんないい」が強調されるが、東畑氏はこの

詩をもとに金子みすゞという詩人は「あなたと私という視点をもった人」であるという、切り口から説明された。「あなたがいるから、わたしがいる」「子どもがいるから、先生がいる」このあと、東畑氏は金子みすゞの様々な詩を紹介しながら、感動する心を育てる大切さを述べられた。

「蝉のおべべ」
母さま、
裏の木のかげに、
蝉のおべべが
ありました。
蝉も暑くて
脱いだのよ、
脱いで、忘れて
行ったのよ。
晩になったら
さむかろに
どこへ届けて
やりましょか。

「露」
だれにもいわずにおきましょう。
朝のお庭のすみっこで、
花がほろりとないたこと。
もしもうわさがひろがって
はちのお耳へはいったら、
わるいことでもしたように、
みつをかえしにゆくでしょう。
※言っていること、そっとしておいた方が
いいこともある。

「土」
 こつつん こつつん
 打（ぶ）たれる土は
 よい土になつて
 よい麦生むよ。
 朝から晩まで
 踏まれる土は
 よい路（みち）になつて
 車を通すよ。
 打たれぬ土は
 踏まれぬ土は
 要らない土か。
 いえいえそれは
 名のない草の
 お宿をするよ。
 ※すべてのものに存在する意味
 があることを教えられる。

東畑氏は金子みすゞの「土」とともに、ビートたけし作「騙されるな」を紹介された。両方の作品の共通点として存在そのものを肯定することの大切さを述べられた。

金子みすゞは、没後 52 年でやっとその墓が見つかったことからわかるように生前はほとんど評価されなかった。詩人で作家でもある矢崎節夫氏が学生時代に西条八十が出版した詩集の中にあつた金子みすゞの「大漁」に出会い、3 冊の遺稿が存在することを知り、16 年もの間、その遺稿を探し続け、みすゞの弟の上山雅輔が持っていることをつきとめ、それを「美しい町」「空のかあさま」「さみしい王女」として世に出した。

金子みすゞは捕鯨の町である仙崎に育った。仙崎は鯨墓があるように、生き物の命について感じる人が多い優しい風土である。結婚し、一人娘ふさえをもうけるが、家庭的にはつらいことが多く、離婚し、ふさえを手放すこととなる。

1930 年 3 月 9 日 写真館で写真を撮る。
 3 月 10 日 ふさえを残して服毒自殺
 （ふさえが引き取られる日）

「騙されるな」
 人は何か一つくらい誇れるもの持っている
 何でもいい、それを見つげなさい
 勉強が駄目だったら、運動がある
 両方駄目だったら、君には優しさがある
 夢をもて、目的をもて、やれば出来る
 こんな言葉に騙されるな、何も無くてもいいんだ
 人は生まれて、生きて、死ぬ
 これだけでたいしたもんだ

「大漁」
 朝焼け小焼けだ
 大漁だ
 大羽鰯（いわし）の
 大漁だ
 浜は祭りのようだけど
 海の底では何万の
 鰯（いわし）のとむらい
 するだろう

東畑氏からは、教材研究の深さを教えられると共に、国語科における ESD のヒント、そして感動する心を育てることが ESD であるということを提示していただけたと思います。

(2) 講演2「環境と文化の表現形に関わる思考基盤」 教授 頓宮 勝

頓宮先生からは、現在のわれわれが当たり前を感じている現代社会のあり様を問い直させられる講義をうかがうことができた。ESDについても、重要になってくる価値観の一つが、実は日本にあるという示唆に富むお話をうかがった。

「大和」と書いてなぜ「やまと」と読ませるのか、「土産」はなぜ「みやげ」と読むのか。言葉の一つ一つに疑問を感じたら、その背景を探ることが大切だ。

日本は極東の国となっている。極東とは地の果てのこと。

Buddhism (仏教)、Hinduism(ヒンズー教)はism、Christianity(キリスト教)はityである。これはismは人がつくったことでityは神がつくったことであることとして違いをつくっている。

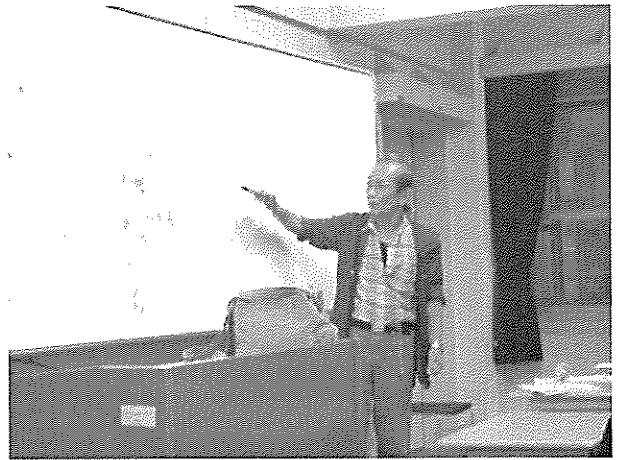
文化の根底には宗教がある。現代は科学文明であると言われるが、換言すれば西洋文明である。欧米では宗教と科学は兄弟。つまり、現代文明を理解するためには、キリスト教を理解する必要がある。宗教とは環境の下における生死の解釈だ。死んだあとどうなるか、いかに生きるべきかを教えるのが〇〇教といわれるもの。

キリスト教では、性のない世界にいた者が性の知恵を得てしまったことにより追放され、贖罪の場所としての人生がある。キリスト教世界では始まりがあるから終わりもある。どの人にも生死は一度きりのチャンス。生き返ることはない。一方、仏教世界においては生死は繰り返す。

日本のもともとの宗教は神道だった。神道は〇〇教ではない。それは論理的な教えがないから。経験則から生まれたもの。教えがないのにどうして文明を築き上げえたのかが、欧米の日本に対する関心の中心だ。

では、ESDはどうか。ESDのDはDevelopmentである。Developmentを文部科学省では発展と訳しているが、destroyではないのか。開発とは自然破壊である。自然破壊によってESDが必要になってきているのであるから、環境論が第一に来る。かつての日本ほど、自然と一体だったところはない。縄文社会においては、森林は食・水の貯蔵庫であった。縄文遺跡は山にある。それは津波被害をさけるための知恵だった。縄文人の文化を読み解くカギは訓読みにある。自然は恵みを与えてくれる。自然が猛威をふるうのは、我々が開発したからだ。

culture (文化) は手を加えるという意味だ。文化の基本は食である。自然を開発し改良することによって食をあがなうという意味がある。そして自然からの恵みを多くし、被害を少なくするために行うのが祭りだ。できるだけ自然には手を加えないようにしよう、論理ではなく情感で自然に対峙しようとするのが近代化以前の日本人だった。日本人は自然を論理的客観的に説明しなかった。明治期に欧米に追い付くために、意識的に人と自然が切り離されてしまったが、潜在的には受け継がれている。Sustainableとは支えるという意味だ。これからの世界を支える世界観は「極東の自然と共生してきた自然観」である。



「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト
第5回「学ぶ喜び」・ESD連続公開講座 概要報告

1. 日時 平成24年9月21日（金）18時—20時
2. 主催 奈良教育大学
3. 会場 奈良教育大学201号教室
4. 参加者 学生・大学教職員、及び近隣小中高等学校教員 30名
5. 内容

講演1「指導主事という仕事」

奈良教育大学教職大学院 教授 山本 吉延

講演2「世界遺産を学ぶことからESDを考える」

奈良県立法隆寺国際高等学校 教諭 祐岡 武志 氏

4. 講演概要

(1) 講演1「指導主事という仕事」 山本 吉延



山本氏からは、教育行政にかかわる教員のもうひとつの役割について、ご自身の経験を踏まえたご講演をいただいた。山本氏は、学園ものといわれるテレビドラマに言及しつつ、学校・教員は世間に理解されているようには思えないと切り出し、そのステレオタイプは夏目漱石の「坊ちゃん」のイメージであろうとおっしゃった。すなわち、校長＝たぬきおやじ（腹黒）、教頭＝赤シャツ（いけすかない奴）であり、教育委員会の人間は、100%冷たい悪役である。しかし、テレビと実際は違い、指導主事もいい

と思ってもらうのも、本講演の一つの目的だと述べられた。

本連続公開講座の参加者は、学部生、院生、そして若手教員であることから、まず教育委員会とはどのようなものであるのかについて、その歴史、法律等を紹介していただいた。

【歴史】

明治5年 学制発布以降、地方制度が確立される中で督学局に視学が設けられ、教育の指導監督を行うだけでなく、教育人事も握っていた。

敗戦後、教育委員会制度や指導主事制度が確立されていく。

地方教育行政の組織及び運営に関する法律（平成19年6月改正）により、すべての教育委員会に指導主事を置くこととされる。

【職務】

- ・ 学校に対して、教育課程の編成（特に授業時数）や実施等について指導する。
- ・ 校長・教頭、教員に対する研修を実施する。
- ・ 研究指定校の研究や校内研修について助言する。
- ・ 教員や児童生徒に起こった問題の解決に向けて指導・助言する。
- ・ 教育委員会事務局の事務分掌を担当する。

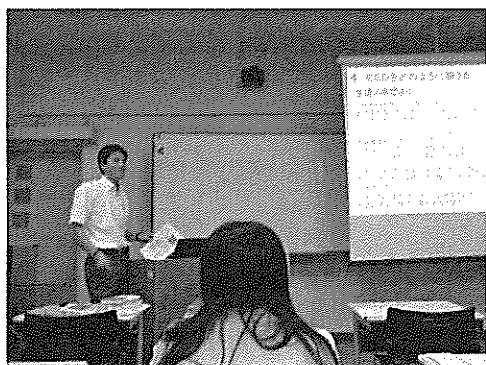
山本氏は、自ら中学校理科の教員として、理科や生徒指導、視聴覚などに携わっていたのが、ある日突然指導主事に任命され、当初は何をしていいかわからず困ったことや、校長会で指示伝達をしなければならないため必死に勉強した話、阪神淡路大震災に関わり苦勞された話などを、ユーモアをまじえて話された。そして、学校現場はいろいろ困ることがあり、それを支えアドバイスするのが指導主事の仕事であり、学校が苦しんでいるときは教育委員会も苦しんでいる、指導主事も苦しんでいる。それでないと、一緒にやっていけないと指摘された。

さらに、指導主事に求められる資質や能力は、教員に求められるものと同じであり、いい先生はいい指導主事になれる。そしてこれからの10年で、教員の半数が入れ替わり（50代が52%）、指導する立場の者がいなくなるため、指導主事の役割は大きいと、それを養成するシステムはなく、基本はOn the Job Trainingであると述べ、自らの経験をもとに「指導主事7つの法則」を紹介し、講演をしめくられた。

いい教員はいい指導主事になれる。教員と指導主事は職務は異なるが、目指すものは同じであり、誰もがいつか突然指導主事になる可能性もある。いい教員を目指しておられる参加者にとって、参考になる講演であった。

(2) 講演2 「世界遺産を学ぶことからESDを考える」 祐岡 武志 氏

祐岡氏からは、ご自身の高等学校世界史教員として考えてこられたこと、そして世界遺産教育の実践を通して獲得された授業のマネジメントについてご講演いただいた。



まず、E・H・カーの「歴史とは何か」から「ESDとは教育者と学習者との間の相互作用の不断の過程であり、現在と未来との間の尽きることを知らぬ対話なのではないか。」と述べられ、世界史の教員としてこれまでの大量生産・大量消費・大量廃棄の世界から、次の持続可能な社会の構築を目指すにあたって、世界史教育が寄与できることを考え、世界史教育とESDの融合について、高等学校での授業実践を紹介していただいた。特に祐岡氏はESDの感覚的アプローチに注目され、ラスコー

の洞窟画の実践、インダス文明に関わる実践など、最先端の授業実践が紹介された。

また、祐岡氏は世界遺産教育の意義について、①つながりに気づく力、②多様性を理解し、受け入れる力、③変化に対応する力、④持続可能な未来のために主体的に関わる力の育成を挙げられた。さらに①つながり、②多様性、③変化のキーワードは

- ①テーマ設定により、世界遺産と学習者をつなげる
- ②世界遺産教育を通して、文化や価値観や人類の多様性を理解させる
- ③多様性を理解することにより、変化に対応できる能力を育成する

という、世界遺産教育の学習プロセスにリンクしているとし、世界遺産教育の概念図を提示された。

また、世界遺産教育の学びの構造として

- ①世界遺産から何を学ぶのか（事実）
- ②世界遺産を何から学ぶのか（本物：人や物）
- ③世界遺産の学びから何を学ぶのか（顕著な普遍的価値）

を明らかにするなど、世界遺産教育についての研究の一端を紹介していただいた。

さらに、世界遺産「法隆寺地域の仏教建築物」を教材化した法隆寺国際高等学校での具体的な授業実

践（「木の文化」）を通して、理論と実践の往還を示していただけました。

最後に ESD の D は心の Development であると述べて、講演を閉じられた。

ESD のひとつの指導・学習方法である世界遺産教育について、実際の授業に即しながら、しかもその裏付けとなる理論を示していただけましたことで、今後、学校での授業実践が必然である ESD・世界遺産教育の教材開発・授業化への意欲が高まったのではないかと思います。

第6回学ぶ喜び・ESD連続公開講座（概要報告）

1. 日時 平成24年10月18日（木）18時 - 20時
2. 会場 奈良教育大学201教室
3. 参加者 30名
4. 講演

「言語と文化の統合的教育実践における文化的気づきに関する考察 ―留学生の語りから見えてきたこと―」 奈良教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター 准教授 和泉元 千春
「元氣・勇氣・本氣 そして根氣！」 奈良市立三笠中学校校長 長浜 博己 氏

5. 講演内容

- (1) 「言語と文化の統合的教育実践における文化的気づきに関する考察」 和泉元 千春
- ・ 県内には100か国から11,135名の在住外国人がいる。(2011.12)
 - ・ 本学には22か国83名の留学生がいる。
 - ・ 留学生は一定期間終了後帰国する。生活者として滞在する外国人と留学生は違う。
 - ・ 来日前に奈良に対して抱いていた「古都・奈良」=伝統というイメージが、来日後においても、文化的気づきあまり進化していない者も多いのではないかと考え、「現代日本論」を開講する。
- テーマ「伝統をキーワードとする協働学習（プロジェクトワーク）によって文化的気づきはどのように深まるか」

① 文化と言語を統合して学ぶことについて

○ 外国語学習における「文化」の捉え方

- ・ 文化には見える文化 (largeC) と (smallC) があり、バランスよく教えていくのがよいとされていたが、言語学習との関連で述べられてはいなかった。
- ・ 個人の解釈が常に介在するため、社会・文化事象には客観的姿がない (1999)。

○ 外国が学習における「文化」の扱い方

- ・ 文化的気づきを採り入れることは、言語学習にも効果がある (2004)。

② 異文化間コミュニケーション能力のモデル (1997 Byram)

- ・ 異文化間コミュニケーション能力には、「言語能力」「社会言語能力」「談話能力」+「異文化間能力」が含まれる。
- ・ 異文化間能力は、「批判的文化アウェアネス (気づき・認識) と「解釈と関連付けの技術」「発見とインタラクション (相互作用) の技術」によって、知識の獲得だけでなく、個人の態度にまで影響を与える。文化的気づきは、その人の価値観にまで及ぶもの。
- ・ 異文化間コミュニケーション能力の学習の場は、教室だけにとどまらず、フィールドワークなど特に自立学習において効果的である。

③ 世界の外国語教育と「文化」(オーストラリア) 言語と文化の統合学習の5つの原則

- ・ 言語的、社会文化的な事象を意識化するための様々なタスクを行う。
- ・ 学習者がすでに持っていた知識と新たに学んだ知識、違う教科で学んだ知識などを、学習者が繋ぎ合わせるようにする。
- ・ 異なる言語間、文化館のやりとりが促進されるタスクを行う。教師はさまざまな考え方や行動を



示し、学習者が自分でタスクを遂行できるきっかけをつくる。

- ・ 自言語や自文化と学習言語や学習文化の類似点や相違点についての気づきや議論から、メタレベルでの深い考察を促す。さらに自分の学習方法、態度、信念、価値観も批判的に分析させる。
- ・ 学習者が、自分が目的としているコミュニケーションが成功したか、目標としている文化間理解を深めることができたか、学習者自身が責任を引き受ける態度を養う。

③ 「現代日本論」概要

15人の受講者が小グループをつくり、4つのテーマにわかれてインタビュー調査を行った。

- ・ 自分たちのイメージがいかに表面的なものであるかを認識するなど、文化的気づきの深化に、協働的ディスカッションが効果的であることがわかった。
- ・ 文化的気づきが表面的な段階で終わるか、価値観にまで及ぶ文化的気づきに至るかにおいて、教師の役割が重要であることがわかった。特に、プロセスにおいて介入することで文化的気づきの切り口となるヒントを与えることが重要である。

(2) 「元気・勇氣・本気 そして根気！」 長浜 博己 氏

平成 22 年に文部科学省から生徒指導提要在示された。

① 生徒指導の 2 つの意義

- ・ すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指す。
- ・ 教育課程の内外において一人一人の児童生徒の健全な成長を促し、児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す。



② 生徒指導が必要な場面

長浜校長は、自らの経験を踏まえ「生徒指導は困った子にだけするものではない。すべての学校ですべても子どもに対して行うべきものである」とおっしゃったが、それには 2 つの意味があると思われる。1 つ目は、子ども一人一人を見つめ、一人一人に応じた指導ということである。生徒指導の必要性は学校にあるのではなく（学校の運営上するもの）、生徒にある（生徒の個別な必要性）ということである。2 つ目は、事前の生徒指導の重要性である。問題が発生してから背景や関連の把握を始めるのではなく、日常的に生徒の実態を把握し、指導することの大切さである。

③ 金八先生から見る生徒指導上の問題の推移

80 年代 「学校の荒れ」 暴力・いじめ・女子非行

90 年代 いじめ・不登校・発達障害・学習障害・性同一障害

00 年代 学級崩壊・校内暴力・不登校・ひきこもり・虐待

最近 いじめ

学校がよりしんどくなる方向に進んでいる（深刻化・過重労働）

★2000 年頃からは、インターネットや携帯電話の普及に伴い、出会い系サイト（援助交際）や学校裏サイトなどの問題も加わって、生徒指導の重要性が増している。また保護者からの理不尽な苦情が寄せられることもある。しっかり事実を把握し、事実に基づいた指導を行うことが重要である。

④ 事実に基づいた指導を行うために

問題が生じたら、その日のうちに指導を開始する。問題が複数の生徒に関わっている場合、メール

や携帯電話で情報が伝わり、事実が分からなくなることもある。迅速な対応が解決の決め手となる。また、必要と判断される場合は、警察等の機関や地域とも積極的に連携する。学校だけで解決できない場合も多い。

⑤ いじめを起こさせない事前指導例

- ・ 価値観教育 いじめは絶対に許さないことを明言する。
- ・ ブロークンウインドウ理論 学校環境を常に美しくする。
- ・ エネルギーの正しい方向付け 活動や仕事を企画する。
- ・ 態度教育の徹底 「時を守り、場を清め、礼をただす」
- ・ 一番おとなしい、勉強できない、運動が苦手・・・などの生徒が安心、信頼してそばに寄ってくる担任になる。

⑥ 生徒指導の4つの鉄則

最低・最悪の状態を予測し、最高の準備でのぞみ、楽観的に対応する。

- ・ チームワーク 一人で解決しようとするのではなく、チームで解決する。
- ・ フットワーク 情報を把握するために、こまめに素早く動く。
- ・ ヘッドワーク 知恵をしぼる。
- ・ ネットワーク 教師間、地域や関係機関との密な連携

生徒指導は、教員に採用されたその日から必要となるものである。生徒指導の話というと、重くなりがちであるが、長浜校長は自らの体験を踏まえ、ユーモアを交えながら、明るい生徒指導について語ってくださった。「その時、担任・学校はどうする?」「いじめに関して親や地域が知りたいこと」など、これから教壇にたつ学生諸君、また現在悩んでおられる先生方にとっても、わかりやすく、元気の出る話であった。

第7回学ぶ喜び・ESD連続公開講座（概要報告）

1. 日時 平成24年11月30日（金）18時 - 20時

2. 会場 奈良教育大学306教室

3. 参加者 24名

4. 講演

「地域遺産教材化のコツ教えます！」 奈良市立済美小学校 教諭 大西 浩明 氏

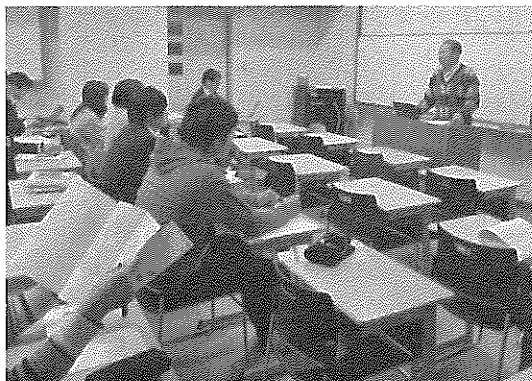
「陸前高田市文化財調査報告」 奈良教育大学 教授 山岸 公基 氏

5. 講演内容

(1) 「地域遺産教材化のコツ教えます！」 奈良市立済美小学校 教諭 大西 浩明 氏

済美小学校の大西先生からは、「私が大切にしていること」として、若手教員や教員を目指す学生にとって、「できる教員」への道を示していただいた。大西先生は、教職経験30年というベテラン教員で、20代から奈良県教科等研究部会社会科部会（県社研）の専門員として、小学校社会科を中心に研究されており、小学校社会科及び世界遺産学習の実践家として有名である。

まず、社会科では地域素材を教材化することが大切であると述べられ、その理由と効果を3つ示された。



- ① 地域教材を学ぶことで、地域を身近に感じながら学習でき、学習意欲も高まる。またそれによって子どもは地域を好きになる。
- ② 身近な地域を教材としているため、現地に足を運んだ五感を使った学習ができる。自分というフィルターを通した学習によって、その成果を実感として感じることができ、自分が好きになる。
- ③ 地域人材など、人と出会う学習ができるため、学習目的以外にもその方の人となりなどにふれ、いろんなことを感じとる機会となる。そのことで、地域の人との関係も築くことができると共に、人が好きになる。

次に教材化において配慮することを小学校社会科における教材化と世界遺産学習における教材化にわけて説明していただいた。まず、社会科では、学習指導要領に記載されている単元の目標や内容が、取り上げる地域教材で達成できるということを検討しなければならない。一方、世界遺産学習では総合的な学習として行うため、その内容等の規定はないが、その地域教材が子どもの興味を持続させる力のある教材であることと、子どもが自分の力で追究できるものであることが必要不可欠であると述べられた。

そして、社会科と世界遺産学習について、大西先生が開発された教材を紹介してくださった。

【多聞城と松永久秀】（小学6年生社会科）

大西先生は、奈良にも教材にしたらおもしろいことはないかと探しておられ、現在奈良市立若草中学校になっている多聞城に着目された（当時、大西先生は若草中学校の校区の小学校に勤務）。「今も当時の名残が見える」「キリシタン宣教師の手紙が残っている」「大仏を焼いた」「信長と関係がある」「下剋上の体現者」など、学習指導要領上の単元目標・内容などを十分にクリアできると判断し、教材化に取り組みされた。主な学習の流れは次の通りである。

- ① 現地に足を運び、城から見える奈良のまちを見るなど、まず五感で感じる。

- ② 現地でキリシタンの言葉を紹介し、調べたいという意欲を喚起する。
- ③ 人物・出来事をそれぞれ調べさせる。
- ④ 調べたことを交流し、関係図を作成する。
- ⑤ 信長の生き方について発問する。
- ⑥ 松永久秀の生き方について発問する。
- ⑦ ⑤と⑥の違いをもとに思考を深める。

【大仏鉄道と旧 JR 奈良駅舎】(小学 5 年生世界遺産学習)

奈良市の社会科副読本「わたしたちの奈良市」に大仏鉄道についての記事があり、当初から、何かに使えないかと温めていた。そして大仏鉄道研究会の存在を知り、身近なところに、残しておきたいものがあることに気付いてほしいと考え、鉄道跡を歩かせた。

旧 JR 奈良駅舎についても 10 年前に取り壊し計画が出され、市民の反対運動によって、駅舎は北東に 18 メートル移動されるものの保存されることになったときから、いつか教材化しようと調べていた。学習活動としては、保存運動の中心人物であった方の熱い思いを聞き取る。また現地見学を行い、誰かが声をあげないと残っていなかったかもしれないという切実感を持たせることから、学習を展開した。

【まとめ】

- ・ 教材化は難しいけれど、教員にとって一番の醍醐味。
- ・ 日ごろから、「何かに使えないかな」という気持ちで、色々なものを見る。
- ・ ストックしておいて、教材化するときに深く調べる。
- ・ いつも子どもの姿をイメージし、思いをめぐらす。
- ・ 失敗してもリベンジが大切。

(2) 「陸前高田市文化財調査報告」

奈良教育大学 教授 山岸 公基 氏

山岸教授からは、『「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化」プロジェクトの一環として、陸前高田市で行った文化財調査についての報告があった。

周知のとおり、2011 年 3 月 11 日に宮城県沖で発生した巨大地震とその後の津波により、陸前高田市では大きな被害があった。市役所を始め、市民体育館、市立博物館などの公共施設や多くの民家が流されただけでなく、市民の約 1 割に及ぶ人的被害があった。



このような中、「なんとか町の人を元気づけたい」「残った文化財を調べて何かがわかれば、町の人を元気づけることになる」という思いから、陸前高田市在住の方が、文化庁に陸前高田市小友町にある常膳寺の文化財調査を依頼された。主な調査対象である十一面観音菩薩立像を山岸教授は大学院生時代に一度調査したことがあることから、文化庁から山岸教授に再依頼があり、今回の調査を行うこととなった。

常膳寺の十一面観音菩薩立像は気仙三観音(大船渡市長谷寺、陸前高田市観音寺、常膳寺)の一つで、胎内に文書、あるいは墨書があるとの言い伝えがあり、もしそれを発見することができれば、陸前高田市の人たちを元気づけることができるとのことから、今回はじめて、ファイバースコープによる調査を行うこととした。

【調査の概要】

① 事前調査

実施月日 平成 24 年 6 月 22 日～25 日
参加者 山岸教授、加藤副学長、中澤

② 本調査

実施月日 平成 24 年 9 月 6 日～9 日
参加者 教員 : 山岸教授、中澤
大学院生 : 小松原、宮武
教職大学院生 : 新宮、中澤
学部生 : 古川、幸田

【調査結果】

① 十一面観音菩薩立像（観音堂本尊）

木造、素地、像高 324.5 c m、安土桃山時代か
頭の上の顔が変化に富んでおり、仏像の性格を考える上で重要。
今回の調査では、胎内文書、墨書を見つけれなかった。

② 千手観音菩薩立像（観音堂前立）

木造、素地、像高 163.0 c m、安土桃山時代か
今回の調査では、胎内文書、墨書を見つけれなかった。

③ 不動明王立像（客殿本尊）

木造、素地、像高 74.0 c m、安土桃山時代
今回の調査では、胎内文書、墨書を見つけれなかった。

④ 毘沙門天立像（観音堂脇尊）

木造、素地、像高 72.3 c m、安土桃山時代
今回の調査では、胎内文書、墨書を見つけれなかった。

⑤ 阿弥陀如来坐像（阿弥陀堂本尊）

木造、素地、像高 48.5 c m、江戸時代（元禄 10 年）
佐々木某、等の墨書

⑥ 薬師如来立像（観音堂脇尊）

木造、素地、像高 100 c m前後、江戸時代（天保 13 年）
邑上牛彦 作等の墨書

※⑤⑥の墨書の内容について、今後検討を行う。

第8回学ぶ喜び・ESD連続公開講座（概要報告）

1. 日時 平成24年12月20日（木）18時 - 20時
2. 会場 奈良教育大学 201 教室
3. 参加者 36名
4. 講演
「仲間づくりの実践的手法について」 奈良市立飛鳥小学校 教諭 松浦 慎 氏
「奈良のシカを」めぐる二つの謎を考える 奈良教育大学 准教授 渡邊 伸一 氏

5. 講演内容

(1) 「仲間づくりの実践的手法について」

奈良市立飛鳥小学校 教諭 松浦 慎 氏

松浦先生から、学級経営にもすぐに応用できる仲間づくりの手法をご紹介いただいた。仲間づくりの大切さはよく耳にするが、具体的な手法まで教えていただけることはほとんどない。日本ユネスコ協会青年部理事としても、キャンプの企画運営などに活躍されている松浦先生から、本当に効果のある仲間づくりの手法の数々やその背後にある考え方について、アクティビティを交えながら教えていただくことができた。



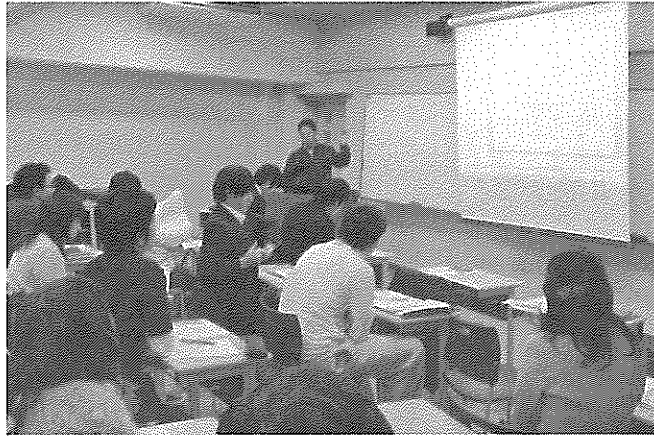
まずレクリエーションのとらえかたである。レクリエーションというと、遊び・楽しさというのが先に浮かびがちであるが、ただ楽しければよいというものではなく、なぜそれをするのかという意図がまずあり、そのために何をどのようにするのかを考えていくことが原則である。また、D o → L o o k → T h i n k → G r o w という体験学習のサイクルが大切である。これは総合的な学習の時間の反省としてよく言われる「体験あって学びなし」に陥ることのないようにするということと通底するものであろう。活動するだけでなく、その活動を振り返り、何を感じたか、自分はどう動いたか、動けなかったか、など自分を観察し、活動から得る事ができた学びを定着させるフィードバックこそが重要である。

また具体的なアクティビティの場面では「さあ、ゲームしましょう」では、かえって場の雰囲気をつぶしてしまうため、できるだけ自然に始まるようにすべきであると、まず知り合いになることを目的としたヒューマンビンゴ2012を紹介された。参加者全員でヒューマンビンゴ2012を行った後、「自分から声をかけたか、それともかけてもらうのを待っていたか」「質問されたら、どんな気持ちになったか」「お礼が言えたか、言われるとどういう気持ちになったか」などを心の中で振り返り、自分の学びにするという具体例を示していただいた。そして、子どもの良い行動を指摘することで行動の変革を促す、そのためには教員は適切な質問を考えたり、よいところを見逃さない感性を身に付けたりすることが大切だ。

その後、学級開きゲーム、先生からの手紙ゲームなどのアクティビティを通じて、活動後の振り返りの大切さを再度指摘されたほか、体験して「おもしろい」と感じたものは、目の前の子どもに合わせてアレンジしたり、色々なゲームを組み合わせて、自分なりのゲームを作ったりしてほしい。レクリエーションは「あの先生だからできる」ものではなく、「やる」か「やらないか」という教員の主体性の問題であり、学生の間にも、また若い間に積極的に取り組んでほしい。

(2) 「奈良のシカを」めぐる二つの謎を考える」 奈良教育大学 准教授 渡邊 伸一 氏

渡邊先生からは、奈良教育大学紀要第 61 巻に掲載された論文「<半野生>動物の規定と捕獲をめぐる問題史 —なぜ「奈良のシカ」の規定は二つあるのか?—」に即して、奈良のシンボルともいえるシカをめぐる問題点をご紹介いただいた。



まず、この公開講座の「学ぶ喜び」について、新しいことを知ることが喜びだが、当たり前だと思っていたことが当たり前でないことがわかったときの喜びもあり、そのため

にはまず常識を知ることが大切であり、奈良で当たり前の風景となっているシカについて、参加者の当たり前を崩す質問を出された。

- ① 奈良のシカは野生か?
- ② どれが奈良のシカ?

奈良公園の看板には「野生動物です」と書かれているが、野生動物には見えない。野生動物の意味を辞書で確かめると「自然に生息する。人に保護されずに生活する」とある。人に保護されているのが家畜であるが、野生と家畜は連続しており、人間の関与の度合いの違いがあるだけである。野生も家畜も動物自体に違いがあるわけではなく、人間によるカテゴリーである。そして、中間的な性質をもつものとして半野生があり、奈良のシカはこれにあたる。1952 年にシカの所有者として春日大社から提出された天然記念物指定申請書にも、半野生動物として規定されている。シカの所有については、農業被害の問題が発生した時に、春日大社は所有権を放棄し、現在、シカの保護管理は愛護会が行っている。つまり、奈良のシカは無主物であり、所有者はない。法律上は野生動物と家畜（ペット）に二分されているため、所有を放棄した春日大社には、農業被害に対する責任はなく、対応策として見舞金だけで解決できている。でも関与の事実があるので、半野生動物としての管理責任があるのではないだろうか。

奈良のシカとはどれなのかという問題について、天然記念物の指定のありかたに「地域指定」と、「地域を定めず指定」があり、奈良のシカは後者となっている。ところが、県の鳥獣保護課では奈良のシカは旧奈良市内のシカと明記されており（地域指定）、二重規定が発生している。文化庁はシカはどこにでも住めるため、生息地に学術的価値がなく、地域指定できないと述べる。仮に地域指定しようとする、それによってその地域内ではシカを保護するために様々な規制が発生することとなるため、指定地域内のすべての人の同意が必要となるが、奈良市内でそれは不可能である。そもそも、申請書提出時には、奈良のシカの頭数が少なく、奈良公園以外にはいないものと、誰もが思っていたことから、地域を定めず指定することとなったのが原因である。

奈良のシカをめぐる二重規定は、一般の観光客等には問題になることはないが、ハンターなどの捕獲者にとっては、処罰されるかどうかの問題である。京都府下で捕獲されたシカに角きりの跡があった場合、それを捕獲したハンターは処罰されるのだろうか。この問題は現在も続いている。

第9回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座（概要報告）

1. 日時 平成 25 年 2 月 6 日（木）18 時 - 20 時

2. 会場 奈良教育大学 201 教室

3. 参加者 21 名

4. 講演

「忘れられた遺産を教材に」 奈良教育大学 研究員 北村 恭康 氏

「おもしろいで、センス。かわいいで、子ども」と語れる教師になるために

奈良市教育委員会学校教育課 主幹 石原 伸浩 氏

5. 講演内容

(1) 「忘れられた遺産を教材に」 奈良教育大学 研究員 北村 恭康 氏

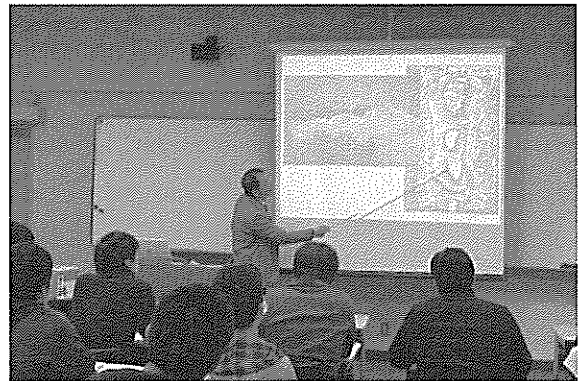
- ・ 城跡は、どの地域にもある。奈良教育大学の近くにもあるが、アンケート調査では、教員にもほとんど認知されていないことがわかる。
- ・ 今はなくなってしまった見えないモノを教材化するアンテナをもつことで、ESD の教材開発の可能性が広がる。

【城跡について】

- ・ 現在、天守閣をもつ城は全国で 12 か所ある。他にも 20 か所あったが、空襲で焼失した。
- ・ 12 か所の天守閣はすべて修復されたものである。
- ・ 国宝に指定されている松本城の明治初年の写真をみると、ひどく傾いていたことがわかる。誰かが、これを「文化財」あるいは「地域の宝もの」というとらえかたをしたので修復されて現存している。
- ・ 現存天守は 4 つに分類できる。①復元天守、②復興天守、③模擬天守、④天守風建物
- ・ 三大平城は、名古屋城、岡山城、広島城である。
- ・ 三大平山城は、姫路城、津山城、伊予松山城、あるいは和歌山城である。
- ・ 三大山城は、高取城、備中高松城、岩村城である。
- ・ 城跡として一般的なイメージとなっている石垣は、実は後世のものである。戦国時代の各地の城は、土や木材で造られていた。城跡も土のものが多く、つぶされてしまい、見えなくなっている。それが、教材化を難しくしている。
- ・ 城の構造（縄張り）を見ることで、失われた城が見えてくる。その構造の巧みさを感じさせることで、文化財として見る事が可能となる。

【教材化の手がかり】

- ・ 各地の歴史博物館が、発掘や資料の整理をしている場合がある。
- ・ 葛城市歴史博物館－布施城のしおりから
 - ① 縄張り図をもって、現地見学。
 - ② 人工的な建造物の位置と道の関係から、その役割と効果を考える。
土塁（横堀）と城道（じょうどう）
曲輪（くるわ：城内の平坦面）や城道の敵を上から攻める櫓台（やぐらだい）



堀切（尾根を掘り窪めて、通過する敵を上から狙う）

切岸（きりぎし）：曲輪下の斜面を急こう配にし、登りにくくする。

畝状堅堀群（畝状空堀群）：攻められやすいゆるやかな尾根に造られた、畝のように土塁と堀が交互にあらわれる構築物。敵兵は、畝の上だけしか通過できず、狙われやすい。

- ③ 主郭（城の中心機能）に至るまでに以上の人口構築物を組み合わせて、防御効果をアップさせている。
- ④ 登山道の両側で同じ高さの曲輪（平坦面）がある。これらをつないでいくことで、縄張り図にある曲輪が復原できる。（見えないものが見えてくる）

【奈良教育大学の近くにある城跡】

鬼菌山城：現奈良ホテル

1444年 安位寺経覚が築城

1445年 落城

1458年 廃城

西方院山城 奈良市高畑町 瑜伽神社の北側・奈良ホテルの東側

1479年 9月29日 古市胤仙が築城

10月 2日 筒井順尊・順盛のために落城

北村先生からは、城跡を具体例として、見えないものを文化遺産として教材化することを教わることができた。見えない城跡は、全国どこにでもあるものとして、教材化する価値は大きい。また、見えないものが現地調査を通して見えてくるといふ、「学ぶ喜び」を体感できる素材であろう。「探検、発見、ほっとけん」である。一方、教材化には教員の専門的知識が必要である。専門的知識の獲得方法としては、文献調査が一般的であるが、北村先生が指摘されたように地域の歴史博物館を利用したり、北村先生のような方に「聞く」「弟子入りする」という方法も効果的である。

(2) 「おもしろい、センス。かわいいで、子ども」と語れる教師になるために

～ 子どもから学んだ“教師にとって大切なこと”～

奈良市教育委員会学校教育課 主幹 石原 伸浩 氏

① 教職の魅力

- ・ 子どもの思いや考えにふれることができる。
- ・ 子どもらしい発想にふれられる。
- ・ 笑顔と出会える。
- ・ 子どもの成長を、結果だけでなくリアルタイムで、プロセスも含めて現場で見ることができる。
- ・ 何年か後でも声をかけてくれる。



② 教員のスタートラインで子どもから学んだこと

- ・ 子どもは正面から向き合してほしいと思っている。
- ・ 子どもと真剣に向き合うこと、「子どもから逃げたらあかん」を大切にしている。

③ クラスの子でなく、クラスの個

- ・ 「クラスのみんな」というものはない。
- ・ お誕生日会の実践を通して感じたこと

自分の将来の夢をみんなの前で発表するための作文は、誰も忘れない。

お家の方からお祝いの手紙を書いてもらうのだが、忘れる保護者はいない。

→ 一人一人がかけがえのない存在であることを実感した。自分も寄せ書きと先生からの手紙は決して忘れなかった。

自分の将来の夢や保護者の思いをみんなの前で読むことは自尊感情を高め、互いに大切な存在であることに気づくことができる、一人一人を見つめ直す機会となっていた。

④ 授業の大切さ

小学校 270/450 中学校 300/450

450 というのは、学校生活の時間、270・300 というのは授業時間。学校生活の半分以上が授業時間である。授業で子どもをひきつけることができるよう、授業力の向上を目指してほしい。よい授業とは、先生自身も面白がってすることが大切なポイントだが、それだけではだめだ。学習指導要領に示された学力が確実につくものでなければならない。

○よい授業とは道筋づくり

子どもの実態を学習指導要領に示された学力にもっていくために、まず子どもの実態を把握する。それを学習指導要領まで高めていく道筋づくりをする。ベストではなく、ベターを見つけていく気持ちで。

○よい授業の型 ベーコンレタスバーガー

導入：めあて → 展開：中身はひとつだけ → 終末（振り返り）

○ダイヤモンド型授業への転換

若手教員にありがちな扇形授業。子ども同士の対話を活性化させ、ダイヤモンド型へ。

○よい授業のキーワードは対話

なんでもいいではなく、条件を出すことで対話が活性化する。

対話は考える時間。テキストとの対話、友達との対話、自分との対話、先生との対話。授業は考えさせるところが面白い。

○よい授業の作り方

授業研究等でよい授業を見たら、自分ならどうするか、学級の子どもの思い浮かべて、アレンジする。発見・感動・共感があるのがよい授業だ。授業づくりに大切なものは、創造力・アレンジ力・想像力である。

石原先生からは、一人一人を大切にすることは具体的にどうすることなのか、そして特に授業づくりの大切さを教えていただいた。どちらも受け身のままでは気が付きにくいという共通点がある。毎日、学校から帰るとご飯が用意されていること、あるいは学生諸君にとっては家から毎月の仕送りがあること、これらは本当に当たり前のことなのだろうか。自分が家族からどのように思われているのかを、再認識してもらいたい。また、授業を受ける側と授業をする側では、これほどにも違いがあるということを示していただいた。授業において、教員と学生の意欲の差である。教員は1回1回の授業をいい加減にはしていない。教員養成において重要なことは、学生に授業する視点を持たせることであろう。

第10回学ぶ喜び・ESD連続公開講座（概要報告）

1. 日時 平成25年3月1日（木）18時 - 20時
2. 会場 奈良教育大学201教室
3. 参加者 20名
4. 講演

「リベラルな民主主義」社会の持続可能性について 奈良教育大学副学長 伊豆蔵 好美 氏
「学校が楽しい」私にとってそれが最大の褒め言葉 奈良市教育委員会指導主事 西口 美佐子 氏

5. 講演内容

(1) 「リベラルな民主主義」社会の持続可能性について ―思想史の観点から考える―

奈良教育大学副学長 伊豆蔵 好美 氏

- ・ 持続可能な発展の可能性と持続可能性は異なる。物質的資源や環境に限界がある限り、「発展」にも原理的に限界があり、持続不可能なものである。「発展」ではなく「定常状態」なら、持続可能かもしれない。一方、人間的能力（知性、感性、想像力など）の「発展」は物質的資源の限界に制約されないため、もしかすると持続発展が可能かもしれない。



○フランシス・フクヤマ『歴史の終わり』（1992）が提起した問い

哲学者ヘーゲルの歴史観における人間社会の進歩としの終わりに関して

ヘーゲルは人間精神の本質は「自由」とし、人間社会の歴史は、自由の理念がさまざまな障害を乗り越え、完全な自己実現を目指して進んでいく運動であるとする。そして、世界史を4つの段階に分けた。

第1段階：歴史以前の未開社会

第2段階：東洋・オリエントの世界（王や皇帝一人だけが自由を実現）

第3段階：ギリシア・ローマの世界（一部の人々が自由を享受し得る段階）

第4段階：ナポレオン「世界精神」（すべての人が自由を自覚し、自由の理念のもとで共同体を構成している社会）

さらに、第二次世界大戦後にはリベラルな（自由な、自由を大切にする）民主主義を標榜する国々が出現した。さらにソ連の崩壊と冷戦構造の終結があった。これはリベラルな民主主義が勝利したのであり、これでもう発展はなく、あとは持続があるだけである？

○民主主義は必ずリベラルなのか

民主主義の基礎にあるのは「自律」である。その自由を否定することは民主主義の自己否定となる。しかし、民主主義社会において「自由」が否定される可能性がある。例えば、自由を放棄する自由の行使。（ナチズム）また、多数決の原理による少数派の制限も生じる。この危険性を指摘し、個人の自由を尊重することの重要性を説いたのがミルである。

○ジョン・スチュワート・ミル

功利主義では、「最大多数の最大幸福」が原理。つまり、少しでも多くの人々が少しでも幸せになるということが、善悪の基準である。人によって幸せの価値観は異なるため、自らが選ぶ幸せを追

求できる自由があるが、それによる危険性もある。最大多数の最大幸福によって、不平等な立場にある多数の人々の利益や幸福を図る手段となる。しかし、ある程度平等化が進んだ社会では、多数者の専制と少数者の犠牲を正当化する手段にもなってしまう。

社会の権力から個人の自由を守ることがリベラリズムの中心課題である。→立憲主義
立憲主義：憲法で人権の尊重を国家権力に義務付けるもの。

リベラルな民主主義は基本的人権を守ることについては、多数決を認めない制限付きの民主主義である。では、その憲法や基本的人権の内容は、誰がどうやって決めるのか。→民主主義の不安定性

○民主主義は価値観の多様性を尊重できるか。

価値観の多様性を最大限尊重するのが倫理的リベラリズム（文化的多元主義）

しかし、価値観の違いは結局のところ克服できないという諦め。→倫理的相対主義

→人それぞれだ（場当たり主義）→権力のある人にまかせる

○ホブズ逆説

人は生まれながらに自由で平等である。この自然状態における自由で平等な人々による「社会契約」徹底した倫理的相対主義では、善悪の判断が下せない。倫理的リベラリズムが絶対君主制を擁護してしまう。

○プラトンの民主主義批判

プラトンは2300年前に民主主義はだめだと予言している。民主主義は必ず衆愚政治から僭主独裁制（民主的手続きによりなった独裁者：ヒトラー）に陥っていく。

→我々の民主主義もそうになっていくのであろうか。民主主義が持続可能となる条件は何か？

○トクヴィル（1805-1859）

フランスの民主主義の問題点・危険性をアメリカの民主主義は克服しつつある。

民主主義の問題点

①マスコミによる世論操作

②個人主義の拡大による政治的無関心・個人の無力化

トクヴィルがアメリカ社会に見た安定した民主主義の条件

①地方分権と地方自治による政治への積極的参加と関心

②多様なアソシエーション（共通の目的のために自主的に組織され、自治的に運営される団体）

結社、組合、教会、ボランティア団体など

アメリカ人はアソシエーションが大好き 心の広がり

人民が自分でつくらなければだめだ

☆ リベラルな民主主義社会が持続可能であるためには、アソシエーションの技術の発展が必要だ。アソシエーションでの「人々相互の働きかけによってのみ、勘定と思想があらたまり、心が広がり、人間精神が発展」することが可能となる。

(2) 「「学校が楽しい」私にとってそれが最大の褒め言葉—子どもから教えられたこと—」

奈良市教育委員会指導主事 西口 美佐子 氏

○なぜ教員になったのか

女性にとって安定した仕事だから。嫌になったらいつでもやめればいいという軽い気持ちで教員

になったが…

○不登校傾向の児童から学んでこと

不登校になったのには、いろいろな要因があったと思うが、振り返ってみて、学級の中にその子の居場所はあったかを問い直した。

→ 子どもは多様な存在。一日の中で、すべての子どもが「学校が楽しい」と思える学級をつくらうと思った。



○楽しい学級をつくるために（学級担任の工夫）

- ・ いろいろな頑張りカード
- ・ 学級のキャラクターをみんなで作ろう。←西口さんの得意分野を生かして
- ・ みんなで遊ぼう（1回/週：外で）
- ・ お楽しみ会（1回/月）
- ・ ドラゴンボール：いいことができれば、ドラゴンボールが増えていく
- ・ アンケート結果を受けて一言日記を始めたが、子ども理解にも役だった。

○子どもとの関係について

- ・ 子どもとの信頼関係をつくる基本はギブアンドテイク
- ・ 子どもの意欲を高めたり、責任感を育てたりするためには、子どもが決める場面を多くする。
- ・ NGワードを決め、その理由を考えさせることで、責任感や自己肯定感を育てる。
「だって、〇〇もやってた。ぼくだけじゃない。」（他人のせい）
「どうせぼくなんか…」（全否定しているのじゃなく、よいところもいっぱいあるよ）
- ・ 叱るときは厳しく、ほめるときは思いっきり
子どもだからといって容赦しない。ダメなことはダメとはっきり言い切る。そして何が悪かったのかをわからせる。
- ・ 正直に話すことの大切さをほめる。正直であることはよいことという価値観を育てる。
しかられたときは、反省することの大切さを伝える。

○学級開きでは

「教室はまちがうところだ」まきた・しんじ

「朝がくると」まど・みちお

- ・ なぜ勉強するのかを考えさせる
- ・ 働かざる者食うべからず
- ・ 勉強は自分でするもの この3つをしっかりと伝える

○授業の中で

- ・ 教師は意欲を引き出す環境を整えるのが仕事。授業は導入が大切。興味・関心をもたせる導入を工夫する。
- ・ 考える、書く、話す、作業する、教え合うなど、子どもの出番を増やす。
- ・ 名前を出して褒める。特に、間違った意見を言ったときには、間違った意見を出してくれたおかげで、話し合いが深まったことを指摘し、褒める。

○子どもから教えられたこと

- ・ 文字は心の鏡
文字には子どもの性格があらわれる。文字を丁寧を書くようになると、成績もあがる。文字から子のもの生活の変化に気がつくこともある。
- ・ 信頼関係の大切さ
信頼関係があつてこそ、指導ができる。指導が効果を発揮する。
- ・ まわりから指導しても、子どもにその気がないと効果は薄い。子ども自身に勉強することの大切さをわからせることが大切。
- ・ 一生懸命努力しているのにできない子がいたときには、発達障害の可能性も考える。原因がわかると指導方法も工夫でき、子どもを伸ばすことができる。
- ・ 運動会では勝ち負けよりも心をひとつにすることの大切さを伝える。
- ・ アンケート調査をもとに一年を振り返り、次年度に生かす。

○終わりに

- ・ 目の前の子どもを大切に。子どもは先生が一生懸命に取り組んでいたことはわかっている。
- ・ 今、世界遺産学習の担当だが、仕事に呼ばれたと思って取り組んでいる。
- ・ ESDは大切だと思っている。発展とは何なのか、本当に人間は発展しているのかを考えている。
- ・ あらゆるものの中にESDを反映させていく子が大切だと思う。

平成 24 年度奈良 ASP ネットワーク活動報告概要

1. 活動の位置づけ 「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト」

テーマ 4 有機的な地域連携の上にたつての大学のセンター校的機能の拡充

2. 奈良ASP連絡会議の開催

第1回：5月10日（木）、第2回：5月31日（木）、第3回：6月4日（木）、第4回：7月3日（火）、
第5回：7月24日（火）、第6回：8月24日（金）、第7回：9月25日（水）、第8回：10月31日
（水）、第9回：12月6日（木）、第10回：1月30日（水）、第11回：3月4日（月）

3. 奈良ASP子どもキャンプの開催 開催費用：564,450円（テント代含む）

【事前準備について】

5月10日（木）第1回連絡会議：大学でのESD子どもキャンプの提案

教員と学生によるブレインストーミング

5月31日（木）第2回連絡会議：キャンプの開催要項、日程表、事前準備（後援申請・募集）の提案

プログラム担当教員・学生の決定と打ち合わせ

6月14日（木）第3回連絡会議：各担当学生・教員からのプログラム案提案、募集チラシの提案

担当教員・学生によるプログラムの再検討

7月03日（火）第4回連絡会議：キャンプ参加者募集の依頼

7月18日（水）キャンプ参加者の決定と学校への連絡

7月24日（火）第5回連絡会議：各プログラム再案の提案と検討、各担当教員・学生による再検討

8月01日（水）自治会長訪問：あいさつ・周知依頼

8月17日（金）保護者あて案内郵送

8月27日（月）キャンプしおり郵送

8月27日（月）～29日（水）学生による直前準備

(1) 開催日 平成24年8月30日（木）～31日（金）

(2) 会場 奈良教育大学キャンパス等

(3) 参加者 106名

奈良ASP校児童生徒 45名（小学生30名・中学生15名）奈良教育大学学生スタッフ 25名、

奈良ASP校等教職員 32名、奈良ユネスコ協会青年部 2名、看護師 2名

(4) 参加料 2,500円（食費・入浴料）

(5) ねらい

① ESD（持続可能な発展のための教育）についてみんなで学び合う。

② 奈良のよさを見つける活動を通して、地域よさを見直す目を養う。

③ みんなで仲良く活動し、友情を育てる。

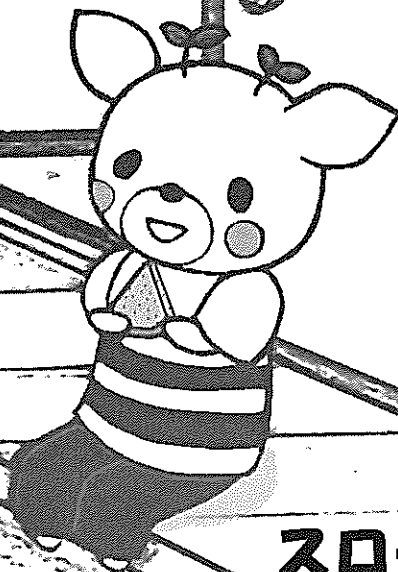
4. 奈良ASP県外研修

9月15日～17日 参加教員：8人

概要は別紙参照

2012奈良ASPネットワーク

ESD子どもキャンプ



スローガン

「奈良の町となかまの

いいところを見つけよう」

「夏休み最後の思い出

大学でキャン

学校

学年

名前

奈良ASPネットワークESD子どもキャンプと「学ぶ喜び」プロジェクト

このキャンプは、3年目を迎えます。平成23年度は曽爾高原で、平成22年度は淡路島で行われました。これまでは、文部科学省のユネスコパートナーシップ事業の中で行って来ました。平成24年度も、ユネスコパートナーシップでの実施を計画し申請しましたが、この部分は残念なことに採択されず、大変困ったことになりました。ESDの事業が「持続」できないという状況に陥ってしまったのです。奈良教育大学は、平成24年度から、「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト」をスタートさせました。ユネスコパートナーシップ事業は、ASP活動、ESDを主目的にした事業ですが、「学ぶ喜び」プロジェクトは、＜教員養成の高度化＞をめざしたものです。その概要を示したのが次ページの図です。その名称に見られるように、両者は重なる部分も多く、ESDの理念に合致するものでもあります。そこで、私たちは、この「学ぶ喜び」プロジェクトの中に、このキャンプを位置づけ、2年続いた事業の3年目の実施を試みました。このような経緯の中で、見えてきたものがふたつあります。

ひとつは、この「学ぶ喜び」プロジェクトも、次の平成25年度の実施が確約されているものではありません。いかに持続させるかということの方策です。これまでは、バスを借り上げ現地まで移動していました。また、公共の宿泊施設を利用してきました。これに必要なお金の工面が最大の課題です。みなでいろいろ考える中で出てきた案は、テントを購入し大学でキャンプを行うという「奇策」でした。テントは大切に使えば5年はもつだろうし、他にも活用の道がありそうです。また、防災上の観点からも所有していても良いのではないかと。大学で行えば、交通費はほぼゼロ。いわば、キャンプの究極のローカリゼーションです。しかし、大学構内でテントはって宿泊する。夜にはキャンプファイヤーも行う。本学にとって前例のないことです。特に、キャンプファイヤーについてはハードルが高そうです。みなさんが、いろいろ知恵を出し、動いてくださいました。特に、キャンプの会場となる附属小学校が動いてくださいました。夜のトイレの問題、運動場でのキャンプファイヤーの問題、急な雨の問題、ひとつずつ解決して行きました。近隣の自治会へのご挨拶もし、ご理解をいただきました。消防署への連絡はもちろんです。こういった作業の中で、キャンプの夜、私も学校に泊まろうと言ってくださる先生もおられました。これで、来年もキャンプを行うことができます。まさに、ESDです。

もうひとつは、過去2回のキャンプなどの経験から積みあげられた、「学び」に関するある考え方です。私たちは、これをいつの間にか、「テトラモデル」と呼ぶようになりました。図の中に、いくつも三角錐（テトラ）があります。本学院生、学生が、現場の先生方の打合せに出席させていただき、企画段階から参加するという、いわば「協働の学び」であります。このESDキャンプは、このテトラモデルの実践の場であるわけです。

ここまで、「わたしたち」と書いてきました。この「わたしたち」は、テトラモデルにある、メンバー全員が「わたしたち」なのです。最後になりましたが、参加の学校の先生方をはじめ、奈良ASPネットワークの学校、先生方の暖かいご支援とご協力に、心より感謝いたします。本学院生、学生諸君も、本当によくやってくれました。また、たくさんのごことを学ぶことができたキャンプだったと思います。ありがとうございました。

奈良教育大学 副学長 奈良ASPネットワーク代表 加藤 久雄

【日程】

8月30日(木)

時刻	活動内容	備考
9時	集合	101教室
9時～10時	オリエンテーション あいさつ(加藤) 自己紹介しよう。 ※コンパスを配ります。	101教室 司会:新宮、松浦
10時～12時	キャンパスフィールドワーク ・テント設営 グループの仲良し度をアップするのが目的だよ。涼しい場所も見つけよう。テントもたてよう。	101教室 【先生方】 池見、大坪、中川、深澤 【ニセなつきょん】誰? ※荷物は101に置いていていいです。
12時～13時	昼食(持参した弁当) スタンプの相談 ※チャレンジタイムのマップも配ります。	テント周辺 ゴミ袋:新宮、松浦 ※荷物をテントに移動 ※おフロに入れない子を確認・連絡してください。
13時～ 16時30分	テーマ別フィールドワーク ミッションは2つ 交通事故には十分注意。 ※16時には、飛鳥小学校に向かって移動開始。 ※キャンプファイヤーの準備をします ので、お手伝いください。	特別支援会議室(2階) ※チャレンジタイムの持ち物(お風呂セット)など、グループでまとめて持ってくる。飛鳥小学校に届けておきます。 集める係:新宮・松浦 【巡回】※腕章配布 三木、石原、竹本、福岡、仲西、大坪、河野
16時30分～ 18時30分	チャレンジタイム(夕食・銭湯体験) 飛鳥小学校に集合。 ※一人2000円を渡します。さいふの管理は学生。	飛鳥小学校 ※テーマ別フィールドワークの持ち物と交換します。 【巡回】野瀬、石原、仲西、田中桂田、※腕章配布
18時30分～ 19時	ひぐらしの集い	テント周辺 司会:新宮、松浦
19時～21時	キャンプファイヤー 星座観察	附属小学校運動場 篠田、松浦、中澤哲 後藤田、横井、渡辺
21時 22時	就寝 スタッフミーティング	プレハブ体育館

8月31日（金）

時刻	活動内容	備考
6時	起床	洗面など ※門をあける
6時30分～ 8時00分	朝の集い、 早朝散歩とゲーム 時間は臨機応変に (雨天時は附属小体育館) (大なわとゲーム)	テント周辺で集合 司会：松浦、新宮 奈良公園周辺 児島、上村、山口、 竹本、池見、松本、福岡 ※ ポータブルマイク2つ
7時30分	朝食受け取り	北村・中澤
8時00分～ 8時30分	朝食	テント周辺 ゴミ袋：新宮、松浦
8時30分～ 12時	テーマ別映像作品の作成 撮りためた写真を使って、ESDをテーマとした映像作品をグループごとに作成します。	情報館 濱崎、大山、田端、土海 三木、西口、大西、奥西、九鬼 長山、高谷
12時～13時	昼食（大学生協）・テント撤収 時間があれば、グループで楽しく、涼しくすごしてね。	撤収したテントは国際交流室へ 確認：今西、村上
13時～15時	ESD勉強会（活動の振り返り） グループごとに作成した映像作品の紹介と、それをういた勉強会。ミニESD講演会もあるよ。	310教室 三木、松浦、中澤 ※ICレコーダー、スピーカー、マイクを用意する。
15時～16時	さよならの集い ※おこづかい帳とさいふの中身を確認します。 ※コンパスを回収します。	310教室 司会：新宮、松浦
16時	解散	後片付け：全員

奈良ASP子どもキャンプにかかわって

教職大学院 新宮 済



ユネスコスクールのメリットとして学校間交流がある。奈良ASPではESDの学びの場であるとともに学校間交流の場として子どもキャンプを行っており、本年度で3回目を迎えた。昨年度は教員をめざす奈良教育大学生ユネスコクラブ(5名)の一員として企画段階から参加させていただいた。昨年度の参加メンバーによる「講義では学べない貴重な体験」という宣伝効果もあり、本年度はユネスコクラブ学生26名が2日間のキャンプに企画段階から参加した。学生26名は7班にわかれて、各グループのリーダーとなり子どもたちと一番近い距離で2日間をすごした。

私は学生代表という立場で学生本部の役割とキャンプの総合司会をさせていただいた。団体を引率していくポジションを託されて臨んだキャンプは、一番汗をかいていたのではないかと思えるくらい緊張の連続であった。「キャンプを終えて自分に残ったものは何か。」そう考えると私は「講義では得ることができなかった自信」と答えたい。理由として3つある。以下その3つ「理論と実践の往還」「教員に近い立場にたつて団体を率いた経験」「心起こせる人へ」について述べていく。

理論と実践の往還

総リーダー役の自分が、子どもたちとより早く信頼関係を築くために、子どもたちに安心感をもたせたいと考えた。そこで大学院の講義「子どもの心をつかむコミュニケーション」から学んだ、「学級開き理論」を「オープニングセレモニー」に置き換えて、実践することに挑戦した。オープニングセレモニーでは、子どもたちにユネスコスクール同士の特別な出会いへの感謝の気持ちとともに、「キャンプをみんなで作ること」「僕らの合言葉 パンパン(拍子)奈良イエイ!」「全力で楽しもう」といった集団のルールを伝えた。子どもたちの心をつかみ、緊張をほぐすための「テーマソング 奈良の風」「教室のデザイン」「アイスブレイクゲーム」を通じて一緒に笑顔になる活動に挑戦した。学生リーダーがお手本となって歌い・笑い・盛り上げてくれたことで、子どもたちが全力を出せる環境をオープニングセレモニーからつくることができた。実践中、理論と同じようにいかずアドリブを加えたところや、力足らずで子どもたちを混乱させてしまった場面もあった。しかしながら、ステージから見た子どもたちの表情が次第に明るくなっていったことで、安心感を与えることができたのではないかと振り返る。また理論と実践が上手くいかなかった場面をふりかえることで、再びアイスブレイクゲームの理論へ立ち戻る機会となった。

教師に近い立場にたつて団体を率いた経験

総合司会を松浦先生とさせていただいたことで実感したことはリスクマネジメントである。また現場の先生方の後ろ姿から学んだことは裏方としてのチームプレーである。

まずリスクマネジメントであるが、天気、時間、リーダーの姿勢、子どもたちの動き方、整列の形、プログラムの善し悪し、そのひとつひとつに、進行役の自分の呼びかけが大きな影響を与えることを実

感じた。キャンプのような長時間の集団行動では教師役の言葉掛けが特に大切である。熱中症や交通ルールのことは大切だが、プログラムやタイムマネジメントの注意が希薄だったことが、進行に影響してしまったことを反省する。中澤先生や松浦先生、三木先生のように子どもたちに届く言葉をかけること、三手先を読んだ進行ができるように日頃から意識して動いていきたい。

また裏方で私たちのキャンプをサポートしてくださった先生方の後ろ姿を、一番近いところから見せていただいた。児童の健康状態に気を配りながら、安全で楽しいキャンプのために一瞬一瞬を最善の判断で行動して下さる姿は、私が目指す学校現場での One for all All for one のお手本となった。

心起こせる人へ

プログラムの企画では、学部生と教職大学院生の混成チームを組織し、担当プログラムの企画にあたった。ほとんどの学生が一度もキャンプを経験したことがないこと、担当企画だけに集中して全体がつかめていなかったことが影響して、キ



ャンプ2週間前、小さな衝突が生まれた。そこで参加学生全員が一度に集まる機会を増やし目指すゴールを設定した。「子どもたちの思い出に残るキャンプにするために、みんなでキャンプをつくること。そのためには、一人ひとりの本気が必要。一人ひとりの本気を作るために必要なことは何か？」私たちは時間をかけて話し合った。「子どもたちが『自分を出してもいいんだ』と思える安心できる環境をつくっていこう。」「学生がチームとしてキャンプをつくっていこうとする本気の姿から、子どもたちの心を起こしていこう。」と私たちはゴールを設定した。

前々日、前日と参加学生全員が子どもキャンプのために集まって準備に明け暮れた。奈良の風を歌う一人ひとりの声、はじめて出会った子どもたちを全力で引っ張る本気の姿、ファイヤーでの学生の力、その一つひとつの思いが伝わったからこそ、二日目のESD学習の発表会で子どもたちから最高のプレゼントをもらったのだろう。さよならのつどいで大学生・中学生・小学生・教員の方々が見せてくれた笑顔こそが「みんなでつくったキャンプ」を証明してくれた。「心起こす人」になるにはとにかく自分から動くことが大切であることを、子どもキャンプの成功体験から学ぶことができた。ユネスコクラブのチームとしての力を伸ばすことができただけでなく、組織のリーダーとしての自分も磨かれたのではないかと感じている。

ユネスコスクールのなかまと一緒に過ごせた2日間は、どの講義にも負けないくらいの学びがあり、一生の思い出となるキャンプになった。現場の先生と一緒に運営させていただいたからこそ、自分をもっと磨いていかなければならないという気づきもあった。プログラムの終盤で子どもたちに「もっともっと君たちとかかわりたい」と話したが、この気持ちを大切に大学院生活を実のあるものにしていきたい。私たち学生に、このような機会を与え指導していただける幸せを噛みしめて、今後の学びに生かしていきたい。奈良教育大学の方々、奈良ASPの先生方ありがとうございました。

はじめに

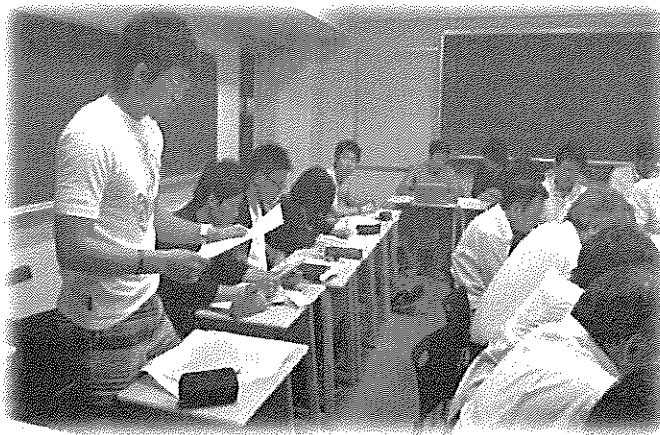
今回 8 月 30~31 に行われた、『奈良 ASP 子どもキャンプ 2012』は私自身として、また、ユネスコクラブとしても大きな成長であったと考える。それはこの二日間だけでなく、キャンプを創る段階から始まっていたのではないだろうか。特に実感できたと、感じたことを三つあげて述べたい。一つ目にキャンプファイヤーをマネジメントしたことについて、二つ目に後輩たちの姿について、三つ目に子どものかかわりの中で気づけたことについて、の三つである。



【奈良でしかできないステキな学び】

共につながろう、友とつながろう

まず一つ目にキャンプファイヤーをマネジメントしたことについてである。なぜ私がキャンプファイヤーをマネジメントすることに手を挙げたかという、今回のキャンプは 2 日間で構成されている。一日目は班ごとにフィールドワークを通して、班の仲間とつながっていくことをねらいとしている。そして二日目は ESD 学習を通して、参加者全員とつながることをねらいとしている。このつながりをスムーズにできるためにキャンプファイヤーというプログラムがキャンプ参加者全員をつなげることができる大きな役目となると考えたからである。



【現場の先生方と念入りの打ち合わせ】

私がファイヤーをマネジメントするにあたって、常に心掛けたことは、子どもたちの明日へとつながる意欲をさらに高めることである。一人一人が自然と笑顔になれるようにスムーズにゲームに持っていったり、子ども全員が主役になれるようにスタントの場を設けたり、先生方にもスタントをお願いしたりした。みんなでファイヤーを創り上げることを意識したおかげで、すばらしいものになったと感じる。

もちろん、まだまだマネジメントしていく上での構成や、全体的な運び方は経験が足りないところがあり、課題も多々あげられる。次回はさらに子どもたちに、友だちとつながる大切さ、楽しさを実感してもらえるように改善したい。

見違えた一面

二つ目に後輩たちの姿についてである。ユネスコクラブは去年と比べ新入生のメンバーがかなり増えた。一方、子どもとあまり関わったことがない者や、キャンプをしたことがない者も多数おり、キャンプの企画や、学生リーダーという重役を任せられることができるか心配な面もあった。しかし、私の心配と

は逆に、活動場所の下見や、しおり作りといった事前の準備だけでなく、当日は学生リーダーとしてふさわしい活躍であったように思える。

私自身、子どもと常に関わっているわけではないので、今回のキャンプにも不安はあったが、新入部員はとくにそれを感じていただろう。しかしこのキャンプの成功に自信を持ち、次の活動にも活かしてもらいたい。また、

事前の準備や当日の活動の中で、普段関わることのなかった部員と関わることができ、さらなるチームワークを高めていければいいと考える。



【吉本を超えた後輩たち】

子どもの学習環境

三つ目に子どもとのかかわりの中で気づいたことについてである。今回、『子どもは学ぼうとしている』ということが本当に実感できたキャンプであった。



【初めてのテント作り】

例えば、テントを組み立てる際に、それが初めてであっても、今日の自分たちの寝床になると思えば、初めて顔合わせした者同士でも、チームワークを発揮し、懸命に組み立てていく。また、フィールドワークでどの道を通れば目的地に早く行けるか、プレゼンではどのように話せば相手に伝わるのか、といったように学生リーダーの催促がなくても自然に行動していた。つまり、子どもは自然に学ぼうとするものであり、教師はその環境を創ることに力を入れなければならないと考える。

そのためには、子どもは何に興味・関心があるのか、その興味・関心をどうやって学習につなげていくのか、といったことをこれからも学んでいきたいと感じた。

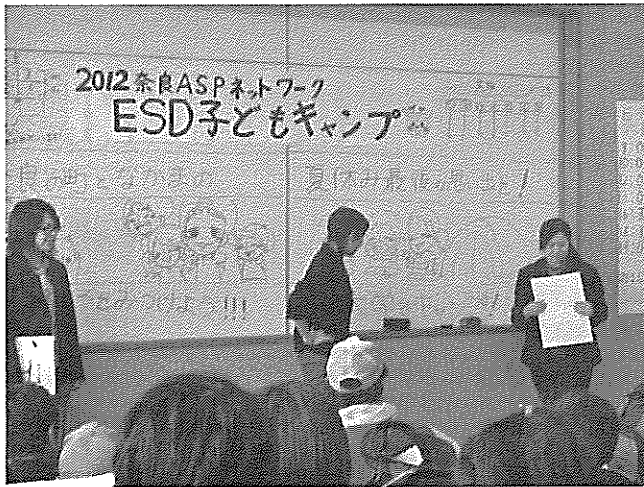
以上の三つが今回のASP子どもキャンプを通して私が実感したことである。

キャンプの力

国語教育専修 4 回生 清水阿弓香

ESD 子どもキャンプは、私にとって生まれて初めてのキャンプでした。奈良 ASP 会議にも参加して、一部企画の段階からかかわることができたことはとてもいい経験になったと思います。先生方のご指摘やご指導を受けながら、子どもたちのためにどうしたらよいかということたくさん考える機会となりました。

ここからは無事にキャンプを終えて、私が覚えておきたいことを3つにまとめていきたいと思います。第1にみんなで作ることの楽しさ、第2に子どもたちのまなざしの尊さ、第3にキャンプの力についてです。



第1のみんなで作ることの楽しさというのは、準備やキャンプ当日の活動を通して感じたことです。キャンプ当日のことは第3の部分にもかかわるところなので、ここでは主に準備のことについて書きたいと思います。企画の段階で先生方やユネスコクラブのみんなといろいろと考えながら意見を交わしあったことが印象深いです。私は教員採用試験中ということで、企画のおおまかな部分は同じ担当の仲間にかかせていました。その分企画準備に参加したときには積極的に発言したり、他の企画のお手伝いをしたり自分にできる限りのことをやろうと努力しました。企画の大まかな流れが見えてきて、キャンプ当日が近づいてくると期待半分不安半分でした。子どもたちをイメージしながら、どうしたら喜んでもらえるか、またどう工夫すれば子どもたちに実りのある活動を提供できるかを考えるのはしんどくもあり楽しかったです。みんなでああでもないこうでもないという時間が長くなってくると、当日が楽しみになっていくのを感じました。私はキャンパスフィールドワークの担当で、打ち合わせも当日ギリギリまでやっていました。やってみるまで不安でしたが、同じ担当の3人と企画を無事にやりきることができて本当によかったです。私の力はとても微力だったけれども、企画に参加した達成感がありました。これは1人では決して味わえない気持ちだったと思います。



第2に子どもたちのまなざしの尊さについては、準備やキャンプ当日の活動を通して感じたことです。キャンプ当日のことは第3の部分にもかかわるところなので、ここでは主に準備のことについて書きたいと思います。企画の段階で先生方やユネスコクラブのみんなといろいろと考えながら意見を交わしあったことが印象深いです。私は教員採用試験中ということで、企画のおおまかな部分は同じ担当の仲間にかかせていました。その分企画準備に参加したときには積極的に発言したり、他の企画のお手伝いをしたり自分にできる

第2に子どもたちのまなざしの尊さについてです。私はキャンプで、6人の子どもと私を含めて3人の学生リーダーがいる3班で活動しました。これは、2日間の活動のまとめとしてムービー作ったときのことで、私の班はムービー作成以外のほとんどを子どもたちにまかせました。写真を選び、それに言葉をつけるのは時間がかかりましたが、何を未来に残していきたいかということ子どもたち1人ひとりがしっかりと考えていたように思います。ムービーを作る前に子どもたち同士で考えていることを交

流してほしかったので、発表させ合いました。すると、同じ写真を選んでいても、考えていることは全く違うのです。子どもたち同士の意見を比較しながら聞いていると、よく見ているなど感じました。自分の経験と比べたり、新しいものの発見であったり、もともと大切にしている気持ちであったり、それらを表わすために最もいい写真がどれなのかをしっかりとわかっているようでした。そして、人の考えを聞きながら、確かに受け止めていました。それが私の心に響きました。なんていいものを持っているのだろうと羨ましくなりました。私はこの子どもたちの感じたものを残したいと強く思いました。

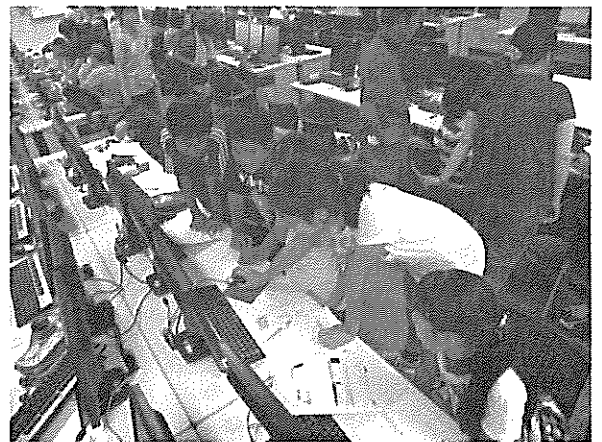
第3にキャンプの力についてです。今回のキャンプを通して、キャンプにはすごい力があると思いました。キャンプ初日、初めて班で顔合わせをしたときは子どもたちも私たち学生リーダーも緊張していました。オリエンテーションのゲームで、子どもたちの描いたイラストを当てられなかったときなど、この班は大丈夫だろうかと不安が増す場面もありました。そんな場面を乗り越えながら、私と同じように不安を感じていただろう班のメンバーも活動をこなすにつれて徐々にお互いに慣れていきました。初めは言葉を交わすことすら難しかったのに、別れる前には笑顔で「楽しかった」「来てよかった」という声を聞くことができ、感動しました。実際にはたった2日間でしたが、とても長い時間ともに過ごした人と別れるように寂しくて仕方なかったです。短い期間でこのつながりの強さをつくってしまう、それもキャンプの力のひとつなのだと思います。



以上の3つ以外にも感じたことや学んだことはたくさんありますが、うまく言葉にできません。ただひとつ言えるのは、キャンプに参加していく中で自分が生き生きしていると感じる瞬間が多くあったということです。それは、子どもたちの表情を見ていて私だけが感じていたことではないと思っています。このキャンプを終了してみて、個人的に反省する部分、後悔した部分は多くありました。けれど、私は私の全力でこのキャンプに取り組めたと自負しています。この反省や後悔を次回に、また別の場でも生かせるようによく覚えておきたいと思います。

企画には、なかなか参加出来なかったが、良いキャンプリーダーの経験が出来たと思う。スローガンが、「奈良の町となかまのいいところを見つけよう」「夏休み最後の思い出：大学でキャンプ」で、早くメンバーが仲良くなって、協力してキャンプ生活が送れるようにサポートを心がけた。私の班はリーダーが四人であったが、他の班と違って大学院の先輩がおらず、四回生二人がしっかりしないとという気持ちを常に持っていた。また、なかなか会議に参加出来なかったメンバーの集まりだったため、リーダーの中でリーダーは作らず、それぞれが意見を出し合い、状況に応じてまとめ、補うことでなんとか成り立ったように思う。班の子どもたちは六人で、女の子三人がとても緊張しているようで、おとなしく、まわりに合わせているように感じられることが多々あった。男の子は、同じ小学校の二人は、すぐに仲良くなったようで、もう一人の男の子は中学生ということもあり、自ら少し距離を取っているように感じられた。二日間しかないキャンプで、リーダーと子どもたちがどれだけ仲良くなり、協力し合える仲間として一緒に活動が出来るか、そして一人一人が心から楽しめるキャンプを目指そうという課題が出来た。

一日目、班での活動中、小学生の男の子二人はさくさく進んで行き、自分たちの意見や思ったこともすべて口に出して言い、また他の子は合わせるといった感じであった。文句もたくさんあったが、なんとかフィールドワークをこなすことが出来た。チャレンジタイムで、銭湯体験後の晩ご飯が、人数と時間の関係で思った所に行けず、結局すき家に戻って食べることとなった。その頃には、子どもたちに少し変化が見られ、リーダーに対して冗談を言うようになった。大学へ足早に向かいながらスタンツのための替え歌を作る際には、リーダーだけでなく子どもたちからもたくさん意見が出て、班全員が納得出来る歌詞になった。キャンプファイヤーでは、サザエさんの曲に載せて自分たちで作詞した曲を歌った。子どもたちも一生懸命に歌っていたようで、リーダー共々満足な様子であった。また、他の班のスタンツも面白く、今後の参考になるものばかりであった。



二日目の早朝散歩では、与えられたミッションを子どもたちで協力して考えている様子が見られた。朝食の時間は、しょうもない話をたくさん言い合い、子どもたち一人一人が良く笑うようになり、良い雰囲気になったと安心した。テーマ別映像作品の作成では、メンバーの中にパソコン操作が得意な子がいたため、私たちリーダーは手を出さず、その子を中心に子どもたちで完成させた。「未来に残したいもの」というテーマは、一人一人考え方が違って、さまざまな写真があがった。全部の写真を残したいという子もあり、嬉しく感じた。緊張しながらも頑張って自分たちが選んだ写真について発表する様子に、感動し、子どもたちの力はすごいと感じた。

二日間を通して、リーダーと子どもたちとの距離がグッと縮まっていくのを実感することが出来た。至らない点はたくさんあったが、班の他のリーダー達に支えられ、なんとか無事に終わることが出来た。子どもたちにキャンプの感想を聞くと、「楽しかった。」と言ってもらえ、ホッとするとともに、次への

キャンプへの励みになった。私自身、精一杯楽しむことが出来、お別れがほんとに辛かった。子どもたちがどう思っていたかはわからないが、この気持ちが一方的ではなく、お互いが思えるようなキャンプを目指したいと思った。



今回のキャンプで、難しいと思ったのは、恥ずかしがっているのか、自分の意思をなかなか伝えられない子に対して、どう接していくかであった。見るからにまわりと合わせているように見え、また、応答も声にはほとんど出さず、首を動かすだけといった感じであった。本人が本当にそう思っているのかといつも心配であった。リーダー同士で話し合い、今回は気を遣いながら色々話しかけ、少しでも気を許してくれたらいいなと思いながら接することにした。また、アレルギーに対する意

識が低かったと反省した。リーダーが四人もいたにもかかわらず、アレルギーがある子どもにも声をかけられずに確認が遅くなってしまった。体調を崩してしまう子もおり、気を遣って水分補給をこまめに促したり、帽子をかぶるように注意したりもしたが、防ぐことが出来なかった。また、水筒をテントに忘れてきてしまう子もおり、口では確認したが、見て確認するように促したら良かったと後々思った。他には、もっとリーダー同士で事前に話し合えたら良かったと思った。その場になって、焦ることも何度かあり、確認の大切さをつくづく感じた。今回のキャンプは、あちこちの学校の先生方の協力があって無事終わることが出来たと思う。このキャンプがきっかけで、リーダー同士も仲良くなることが出来、スローガンどおりリーダーや子どもたちのさまざまないいところを見つけることが出来たと思う。キャンプ中、キャンプ後にさまざまな反省や課題が残ったが、次に活かせるように準備していきたいと思う。また、このようなキャンプに参加する機会があれば積極的に参加し、さまざまなスキルを習得したいと思う。

ESD子供キャンプを終えて

国語教育専修講座 1回生 児島 佑美子

8月30日、31日に奈良ESD子どもキャンプが行われた。奈良のユネスコスクールから小学校高学年から中学生が集まり、初日は大学内でのフィールドワーク、ならまち巡り、サバイバルチャレンジ、キャンプファイヤーをし、2日目はムービーメーカーを使っての映像作成を行った。

今回のキャンプを通して多くのことを学ぶことができた。第一に企画力の難しさ、第二に子どもとの接し方、第三にキャンプリーダーとしての責任の重さについてである。

まず初めに企画力の難しさについてである。私は朝散歩担当のリーダーだったのだが、私は企画をするのも、リーダーのような立場をするのも初めてで、当初は何からやってよいのかわからなかった。しかし担当の竹本先生からアドバイスをいただいたり、他の班のやっていることを見たりしながら企画を進めていった。今まで人前でしゃべる経験もほとんどなかったので会議での経過報告も緊張したが、かなりよい経験になった。だが担当



内でのメンバー変更や、準備不足などで皆に迷惑をかけてしまい、一時すごく悩んだときがあった。しかしそのとき先輩から何がいけなかったのか、これから何をすればよいのか、そして悩んで頑張ったぶんだけキャンプが楽しくなる、ということを教えていただき心機一転頑張ろうと思えることができた。その後も多くのユネスコメンバーに協力していただき、何とか当日までに準備することができた。朝散歩の企画では本当に初めての体験ばかりだったが、私はこれのおかげですごく成長することができたと思う。企画は一人ではできない、時にはいろいろな人に頼ることも大切だということを知ることができた。

次に子どもとの接し方であるが、私は正直あまり子どもと接するのは得意ではなくキャンプまで不安だった。そして小学校5年生から中学校3年生までの、学年も性別もばらばらなグループをどうまとめていけばよいのかも全くわからなかった。キャンプが始まってからは班全体のまとめは先輩がしてくださっていたので、私は個々のサポート役のようなことができるように行動していた。中学生の男子がいつも馴染めなさそうにしていたので、なるべく話しかけるようにしていた。年も性別も違うので話題作りが難しかったが、キャンプに来たからにはできるだけ楽しんでほしかった。なんとなく私も中学生のころはこのような場所は苦手だったので、来たくなかったのが仕方なく来たのかなと思った。最後に聞いたやはりそうであったようだ。でも予想外に楽しかったと言ってくれたのでとてもうれしかった。先輩方から聞いたり、恩師訪問の時に恩師の先生も言っておられたのだが、なるべく飾らない自分を出していったほうが打ち解けることができるというのを実際にやってみてよくわかった。

最後にキャンプリーダーとしての責任の重さについてであるが、やはりリーダーという立場で子供の命を預かっているという経験は初めてであった。学校外でのフィールドワークの時に、小学生の男子は目当てのものをを見つけると走って行ってしまったり、みんなが遅いからと言って一人で先に行ってしまう

ったりして危ない場面が何度かあった。時にはこちらの目が行き届かず、中学生の女の子が止めてくれた時もあった。集合時間が心配な時は急がせてしまったときもあった。途中からは自分が先頭を任されたときは、自分より前を歩かせないようにした。また、歩道のない道も多かったので、キャンプの前から班でしっかり確認が必要だったと思ったし、全体を見て、体調の良し悪しも気にしながら行動するのはかなり難しいことだとわかった。今回はグループに学生リーダーが3人いたので役割をしっかり決めて行動すべきだった。自分たちだけで行動するのではなく、子供たちの命を預かって行動する責任の重さを知ることができた。

今回のキャンプに参加して、私にとっては初めての体験ばかりだった。今まで責任を負う役割はしたことがなかったので、自分なりにすごく成長できたと思う。当日は自分で役割を見つけて、自分で考えて行動しなければならなかったが、それもこの先自分の役に立つことであると思う。現職の先生と一緒に企画し、アドバイスをいただいたのも貴重な機会であった。何より相談に遅くまで付き合ってくださいたり、アドバイス、叱咤激励をくださったユネスコ部員全員に感謝である。このキャンプで学んだ全てが自分の大きな糧になったと思う。来年参加したら、今回のことを活かしてさらによりよいキャンプにしたいし、先輩に今年していただいたことは後輩にもしてあげたいと思う。



「キャンプに参加しての新たな気付き」

教職大学院 1回生 田端 浩多

2012年8月30日から31日の2日間、私は参加するユネスコクラブ内で行われた「ESD子どもキャンプ」に参加した。「奈良でしかできないこと」でESDについてみんなで学び合うということをテーマにしたこのキャンプには、市内の小学5年生から中学3年生までの子ども達45名が参加した。



私がこの「ESD子どもキャンプ」に参加して、感銘を受けたことは主に2つある。まず1つ目は、地域の目を見直す目を養うことの大切さ、そして仲間作りの重要さである。

第1の地域のよさを見直す目を養うことの大切さですが、このキャンプ中、子ども達は奈良町を歩き回り、ポイントをゲットする“テーマ別フィールドワーク”や、自分達で晩ご飯を食べる場所や入浴する場所を決める“チャレンジタイム”などのプログラムを通して奈良の町を歩き回りました。実を言うと、プログラム中は、なかなか目当てのものが見つからずに四苦八苦する場面も多々ありました。しかし、キャンプの締めくくりである“映像作品作成”の場面では、一人一人がキャンプ中に撮影したお気に入りの写真を選ぶ際、「シカがたくさんいる奈良を守っていきたい」「現代的な町並みの中に、歴史的な建物が見えると安心するから守っていきたい」などと発言しており、しっかりと地域の良さを発見し、自分なりに考えを持っているのだと感心しました。自分達が住んでいる地域に帰っても、この奈良の町を探検したことを思い出し、地域の良さを見つけて欲しいと強く感じました。

第2の仲間作りの重要さですが、やはり人間は誰かと関わることで笑顔になるのだと感じる場面が多々ありました。それぞれ人には思いや意見があるものですが、時には自分の思い通りにならなくても、仲間と相談しながら答えを出している瞬間を目にすると、胸が熱くなりました。そして、仲間で相談し、そのことを成し遂げた瞬間には、比べものにならない程のはじけるような笑顔を見ることができました。例えば“キャンプファイヤー”のスタンプです。当初は意見がなかなかまとまりませんでした。それぞれが案を出し続け、最終的にはメンバーが納得する形に仕上げることができました。ここにこそ、人間が関わり合う面白さがあると思いました。



このESDキャンプは、“自然の中で仲間同士関わり合う”自然教育的な要素と、“地域のよさを見つける目を養う”という学習要素を上手く組み合わせたものだと感じました。以上の理由から、私は自分のキャンプ観を広げる、素敵な機会に巡り合えたと確信しています。これからも、学びや失敗、試行錯誤を続け、子ども理解を深められる魅力的な教師になれるよう、奮闘したいと思います。

「ESD子どもキャンプ」

教職大学院 1回生 島 俊彦

8月30・31日の2日間、市内のユネスコスクールの小学校5年生から中学校3年生約50名の子ども達を集め、奈良教育大学の学内を使ってキャンプを行いました。

ESD子どもキャンプは私にとって、この夏最大の学びを得る良い機会となりました。その理由は3つあります。第1に様々な子ども達と関わったこと、第2に企画から携われたこと、第3にESDについて学べたことです。

第1の様々な子ども達と関わったということですが、今回のキャンプでは私達学生が各班のリーダーとして、班内の子ども達を中心に約50名の子ども達と関わりました。そこで子ども達一人一人の個性や良さにふれる事が出来ました。またキャンプ中多くの時間を共にした自分の班の子ども達については、より深く関わったこともあり、キャンプを通じての子ども達の成長を見届けることが出来ました。良きお兄さんお姉さんとして小学生をまとめ私達を支えてくれた中学生や、全てのプログラムに全力で挑んでくれた小学生、それぞれの子ども達が輝く瞬間を見る事ができました。これは講義を受けているだけでは分からない、実際に子どもと関わったからこそ見る事が出来た、生きた学びだと思えます。

第2の企画から携われたということですが、今回のキャンプでは中澤先生をはじめとする教職員の方々、現場の先生方の努力によって、学内でのキャンプが実現しました。ASP会議でキャンプについて真剣に話し合う先生方の姿に刺激を受けるとともに、このキャンプをより良いものにしようという使命感を持つことが出来ました。先生方にアドバイスを頂き自分の担当する企画について、子ども達が楽しく学べる時間にするにはどうすれば良いのか、何度も話し合いを重ね時間をかけて作り上げる事ができたので、自分達の企画を成功させることが出来たと思えます。キャンプが成功したか失敗に終わったかという結果も勿論重要ですが、キャンプを作り上げる「過程」に携われたことが、自身そしてユネスコクラブの学生にとっての学びに繋がったと思えます。

第3のESDについて学べたということですが、私はユネスコクラブに入りESDという言葉を知りました。様々な体験や講演会に参加させて頂き、少しずつESDを学んできたつもりですが、まだまだESDについて知らないことだらけです。今回のキャンプは名前に「ESD子どもキャンプ」とあるように、子どもたちにESDの理念を伝える事がひとつのねらいでした。キャンプを通して子ども達は自然とESDにふれ学ぶことが出来たと思えます。同時に私も子ども達と共にキャンプを通じてESDを学ぶことが出来ました。特に映像作品発表の勉強会では、子ども達一人一人が考えるESDを私達に発表してくれました。子ども達の視点から捉えたESDは、私にとって非常に新鮮で、子ども達の発表からもESDを学ぶことが出来ました。

以上の理由からこのESD子どもキャンプが私にとって大きな学びの場となりました。私はこのような生きた学びを今後も続けていきたいと思っています。キャンプで得た経験を無駄にせず、より上手に子どもと関わる、子どもの良さを引き出せる教師になれるように、日々の学校生活やユネスコクラブでの活動から学び、求められる教師となる為に必要な力を身に付けていきたいと思えます。

小中学生にとって夏休みの最後のお楽しみ企画として、8月30日・31日にESD子どもキャンプが、奈良教育大学のキャンパスを会場に開催されました。これまでも子どもキャンプは行われていましたが、今年は初めて大学にテントを設営してのキャンプということで、計画を進めていくうちに課題や準備が色々ありました。大変だった分だけ、やりがいも大きく心に残るキャンプとなりました。

私がこのキャンプで学んだことは3つあります。一つ目は集団行動の難しさ、二つ目に打ち合わせの重要性、三つ目が人と関わることの楽しさです。

1つめに集団行動の難しさを学びました。オリエンテーションで、班員と一緒に奈良まちを散策しました。そこで暑さの影響で思うように足が進まない子や、次のポイントが楽しみで先に進んでしまう子など、さまざまな子どもがいました。そのとき7人のこどものモチベーションや体調を配慮しながら同じ速さで歩くことの難しさを感じました。

今回は学生リーダーが3人いたので、7人の子どもに目を配ることができたと思います。集団で行動することは難しかったですが、他の学生リーダーたちと協力することでその気持ちが緩和されました。言葉にしなくても、一人一人が相手のことを思いやって動いていたので、大きな怪我や事故もなくキャンプを終えることができたと感じています。

そして2つめに、打ち合わせの重要性を学びました。私は今回のキャンプの打ち合わせにほとんど参加できませんでした。そしてその状態のままキャンプを迎えました。内容は理解できても、理解してどう学生リーダーのサポートをすればよいのかまでは考えることができませんでした。打ち合わせに参加して、企画の内容を把握し、どうサポートできるのかを事前に考えることができたなら、もっと積極的に活動できたのではないかと思います。

最後に、人と関わることの楽しさを学びました。今回キャンプに参加して改めてこの楽しさを感じました。はじめは初対面でお互い緊張していましたが、一緒にオリエンテーションや食事などをしていくうちに緊張がほぐれ、自然に笑顔がでるようになりました。それはキャンプという特別な空間だからでもあったと思いますが、学校実践とはまた違う感覚で新鮮でした。キャンプを通して、子どもたちのいろいろな表情を見ることができ、さらに学生リーダーの新しい一面も見ることができて、とても楽しかったです。

このキャンプでは人の存在を強く感じました。どこを見てもお互いを思いやる気持ちにあふれていて、とても居心地がよかったです。この素敵な空間を共有できたことに感謝の気持ちでいっぱいです。今回挙げた3つ以外にもたくさんの学びがありました。この学びを整理し、次回からの活動に生かしていきたいと思っています。



ESD 子どもキャンプに参加して

数学教育専修 1回生 濱崎 千華

8月30・31日、奈良教育大学キャンパスおよびその周辺において、奈良ASPネットワークESD子どもキャンプが行われました。このキャンプのねらいは、奈良のよさを見つける活動を通して、地域のよさを見直す目を養うこと、ESD（持続可能な発展のための教育）についてみんなで学び合うこと、そしてなにより、みんなで仲良く活動し、友情を育てることです。私はユネスコクラブのメンバーとして、奈良市ユネスコスクールの先生方と共にキャンプの運営に携わりました。

さて、私はこのキャンプを通して学んだことが3つあります。まず「運営すること」、次に「対応すること」、そして「ESDについて」です。

1つ目の「運営すること」です。1泊2日のキャンプの間で、子どもたちにより多くのことを学んでもらうためには、プログラムをどう組み立てるかが重要になります。限られた時間をどう使うか、準備物や使用する部屋の確保、フィールドワークにおいては地図の作成、危険場所の把握など、考えるべきことがたくさんあります。子どもの安全を最優先し、あらゆる状況を想定しなければなりません。運営することは決して簡単ではありませんが、松浦先生が言われたように、こちらが力を入れた分だけ結果はかえってくるので、とてもやりがいがありました。仲間と協力して1つのことに取り組むのがこんなに楽しいものだと知りませんでした。

2つ目の「対応すること」ですが、予想外の出来事にも臨機応変に対応することが大事だと学びました。予想外の出来事というのは、チャレンジタイムの時に起こりました。私の班は銭湯に行った後、晩御飯を食べる計画を立てていました。ところが、ごはんに行こうとしてあらかじめ話し合っていたお店に8人分席が空いているか確認の電話をしたところ、残念ながら空いていませんでした。その後5軒目にしてようやくOKが出たのですが、料理が届くまでに時間がかかり、子どもにゆっくり食べさせることができませんでした。大学への帰り道、予定の時間を過ぎてしまったと焦って歩くスピードを速めました。男の子は早歩きで先先進んでいたのですが、女の子が1人体調を崩してしまいました。子どもに無理をさせてしまったことはこのキャンプにおける1番の反省点です。また、キャンプファイヤーのスタンプを考える時間を十分にとってあげられなかったのですが、子どもたちは短い時間でたくさんアイデアを出してくれて、スタンプは大成功でした。子どもたちの笑顔には大きな力をもらいました。

3つ目は「ESDについて」です。班のみんなで作成した映像作品に子どもたちが「未来に残したいもの」というテーマでセリフをつけ、発表しました。子どもたちが未来に残したいものは何だろう。鹿が生きるための町、協力できる嬉しさ、綺麗な朝顔、朝日、伝統、食の大切さ、自然、絆、そして笑顔。2日間を通して子どもたちがこんなに深く感じてくれたことに感動しました。中澤先生の「ESDで未来の人も笑顔に！」という言葉は子どもたちの胸に大きく響いたことと思います。私も子どもたちを見て、みんなが笑顔でいられる未来を創りたいと強く思いました。

以上の3つを学ぶことができました。私がユネスコクラブに入ろうと思ったきっかけは、先輩にこの子どもキャンプの話聞いたことでした。人との繋がりを学び、自分の住む町のよさを見つけ、そして楽しみながらESDを学ぶ、こんな素敵なキャンプを実施できたことに感謝するとともに、参加できたことを誇りに思います。一緒に作りあげた仲間、いろんな場面で支えてくださった先生方、突然の来店にも快く対応してくださった地域の方々、そしてキャンプに参加してくれた子どもたち、みなさんに感謝の気持ちを伝えたいです。夏の終わりに最高の思い出ができました。今日からまた新たなスタートを切るつもりで頑張っていきたいです。本当にありがとうございました。

ASP 子どもキャンプ

奈良教育大学教職大学院 大山満弘

今回のキャンプでは子ども達と子ども目線で触れ合ったことで、子ども達からの予想以上の反応や能力を発見することができました。特に、次にあげる3つの経験から子どもへの理解力を私自身も身につけることができました。

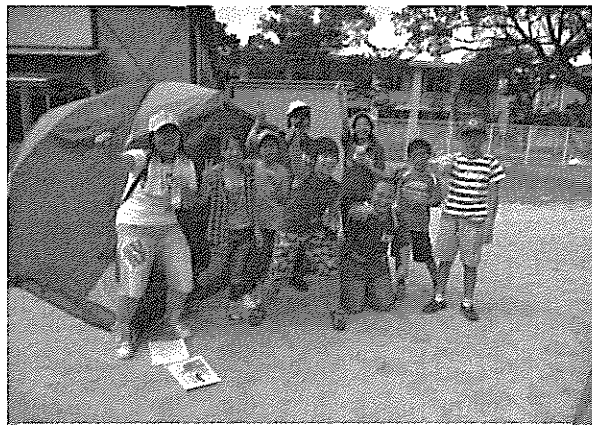
まず1つめは、集団生活における順応性です。子ども達の性格はまさに十人十色で、リーダーシップのある子・リーダーになりたい子・やんちゃな子・控えめな子・甘えん坊の子・思いやりの強い子など様々でした。グループで行動するために、どの学生がどの子どもを担当し、どのように統率するかなどを考えましたが、いざ集団行動が始まると年長者は面倒見のよさを発揮し、年少者はわがままを言いたい気持ちを抑えるようになり、何も指導しない状態でも自然にそれぞれが適材適所に役割を果たし、スムーズにフィールドワークを行うことができました。子ども達の協調性の高さには驚かされました。

2つめは、子ども達の集中力です。子どもは楽しいと感じた瞬間、集中力が上がり、楽しければ楽しいほど集中力は増していくことに気がきました。一日目のテーマ別フィールドワークでは、1日中見知らぬメンバーと歩き回っていたため、集中力が低くなりがちでした。そのためポイントへの移動中なども楽しめる仕掛けを作らないと、事故にもつながると感じました。一方、キャンプファイヤーではその場の雰囲気や迫力

に圧倒された子ども達の目が輝いていました。フィールドワークでは引き出すことが出来なかった子どもたちの関心や集中力に気づき、正直悔しく思いました。しかし、子ども達が輝いている瞬間に立ち会えたことで次への目標が出来ました。

最後は、子ども達の笑顔です。本当にキャンプに参加して良かったと思えました。初めは人見知りもあり顔がこわばっていましたが、心が打ち解けるにつれて最高の笑顔を見せてくれました。おかげで楽しく、疲労も吹き飛びました。私自身も笑顔を決やさない人間になりたいと思い、笑顔の大切さに気づかされました。

私にとってスタッフとしてのキャンプ参加は、人生初の経験でした。キャンプでは上記で述べたこと以外にも多く学びがあり、子どもたちの新たな一面を発見することができ、また今までにない自分にも気づけ自分自身の成長を実感することもできました。キャンプに参加し心から良かったと思えました。



テントが完成！



フィールドワークで奈良町資料館発見の図



ゴールの飛鳥小学校に到着

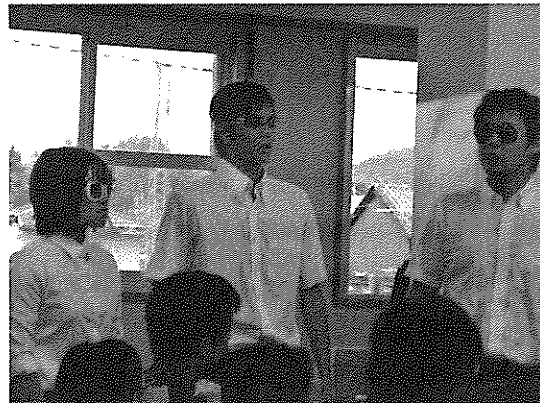
ESD キャンプに参加して

教職大学院 竹田 隼也

ESD キャンプに参加させていただきました。2日間、子ども達とフィールドワークやキャンプファイヤーを通して向き合いました。このキャンプでは、子どもたちと向き合う中で多くのことを学びました。

私が ESD キャンプで学んだことは3つあります。第1に企画することの難しさです。第2にグループで活動することの難しさです。第3にグループで活動することの楽しさです。

第1の企画することの難しさですが、私は今まで企画するという経験をしたことがほとんどありませんでした。そのため、何をすればよいのか分からず困っていました。また、ゲームやフィールドワークなどの企画に参加したこともなかったので、意見もほとんど出すことができませんでした。今回のキャンプでは企画から携わらせていただき、貴重な経験ができたので、次に何かを企画するときは今回の経験を活かして、意見を言えるようにしていきたいです。



第2のグループで活動することの難しさですが、当然ですが、人は考え方も性格も人それぞれ違います。その人たちが集まってひとつのことをするという事は、非常に難しかったです。私のグループには体力のない子がいました。歩くのがどうしても遅くなってしまい、グループがバラバラになってしまうことがありました。また、一人だけ違う意見を言ってなかなかグループの考えをまとめることができないこともありました。そのようなときにどのような声かけをすればよいのかわからず、困ってしまいました。今後、これらのような時にどのような声かけが有効なのか、考えていきたいです。



第3のグループで活動することの楽しさですが、今回のキャンプは市内の小、中学校から子どもが集まり、グループを作っていました。そのため、初めは誰も知らないところから始まりました。しかし、フィールドワークや食事の中で、次第に打ち解け、最後はみんなが別れを惜しみながら帰って行きました。このように、短い時間でも人と人はつながることができることが分かりました。子ども達や私自身もたくさんの人とつながることのできるような企画にこれからも携わっていきたいと感じました。

以上のことから、ESD キャンプでは多くのことを学び、多くの人とつながることができました。誘っていただいた先輩に感謝するとともに、今後も多くの人とつながることができるように様々な企画にかかわっていきたいです。



奈良ASPネットワークESD子どもキャンプを通して感じたこと

文化財専修講座 1回生 上村 優奈

8月30日から31日にかけて奈良教育大学キャンパスとその周辺でESD子どもキャンプが行われました。奈良ユネスコスクールの児童生徒と教職員の方、そしてユネスコクラブが参加しました。1日目は、大学探検やならまちにおけるフィールドワーク、キャンプファイヤーなどがありました。2日目では早朝の奈良公園散策や班ごとにつくる映像作品、ESD勉強会が行われました。

さて、私がこのキャンプで感じたこと、学んだことを3つ述べたいと思います。

1つ目は、企画の大切さについてです。私は子どもと接する機会があまりなく、また初めてのキャンプということもありとても不安で緊張していました。しかし、一緒にテントを張ったり、ご飯を食べたりしていくうちに子どもも私も少しずつですが、緊張がほぐれてきました。この子はどんな子なんだろう、何を考えているのだろう、どういうふうに接すればよいのだろう、そういったことを考えながら過ごしました。一人、班から離れてはぐれてしまう子がいて、どう接すればよいのか分からなくて戸惑いましたが、隣で一緒に歩いているとその子はいろんなことに興味があるから遅れてしまうんだなとわかりました。しかし、ならまちフィールドワークのときには、みんなで写真を突き合わせて考えていくうちに彼の興味がみんなと同じ方向に向き始めて班からはぐれることもなくなっていました。このとき、子どもをひきつけるような企画をした先生はさすがだなあと思いました。この企画のお陰で子ども同士のコミュニケーションがとても増えました。また、町の中に神社があることに驚き、大切に残していきたいと話してくれた子がいました。地域を見直し、大切に思う心を育むことのできた企画だと思います。

2つ目は、子どもに投げかけた思いの分だけ子どもから返ってくるということについてです。朝5時頃、テントで寝ていると、私がタオルをかけていないのに気づいた隣の子が、自分のタオルを私にかけてくれました。私は胸がいっぱいになり、そして松浦さんが言っていた子どもに投げかけた思いの分だけ子どもから返ってくるという言葉思い出しました。子どもがより生き生きとするために、自分はどういうふうに行動すればよかったのか、もっとこうすればよかったのかなあなどと、反省すべき点がたくさんあるけれど、自分がかけた思いはちゃんと子どもに伝わる、だから安心して、考えすぎないでもっとまっすぐ向き合おうと思いました。

3つ目は、「共にある」ということについてです。テントで寝ているとき、静男先生の「共にある」という言葉を思い出し、「共にある」幸せとはこういうことなのかなと実感しました。そして二日目は、さらにお互いがお互いの存在を認めあっているという安心感に包まれているように見えました。テントの中で蹴られたり寒かったりしたけれど、みんなきっと「共にある」ということを心のどこかで感じていたのだと思います。

以上のことから、私は子どもや多くの人に「この人は自分の存在を認めてくれる」という安心感を覚えてもらえるように人と関わっていきたくです。来年も、地域を大切に思う心を育むこと、「ともにある」ことを感じるようなキャンプにしたいです。



3グループのみんなと

2012 奈良 ASP ネットワーク ESD 子どもキャンプ

技術科教育専修 2回生 篠田 潤

私は今回開催された 2012 奈良 ASP ネットワーク ESD 子どもキャンプを通じてたくさんのことを学ぶことができた。2012 奈良 ASP ネットワーク ESD 子どもキャンプとは 8 月 30 - 31 日に奈良市の小学 5 年生から中学 3 年生までを集めて奈良教育大学近辺を会場としたキャンプのことである。数々の大人の方々と我々大学生が協力して行われたキャンプであり私はキャンプファイヤーのカリキュラムを主に担当した。

今回のキャンプで学ぶことができたと感じるのは主に次の 3 つである。子どもをまとめるグループリーダーをさせていただいたこと、トーチ回し（トワリング）を行ったこと、キャンプファイヤーで司会をさせていただいたことである。

まずグループリーダーをさせていただいたことについてである。前回の ESD 子どもキャンプの際にもやらせていただいたが、普段は子ども達と実際にかかわる機会はなかなかなく、間近で子どもたちの笑っている姿や悩んだ様子を見ることが出来ただけでも意味がある。私は、子どもの願いをいかにすれば具現化することができるだろうかと常に考えながらサポートしていたつもりだが、それが実現できていたかどうかは自信がない。今後の課題である。

次にトーチ回しを行ったことである。先生方のご指導のもとトーチをつくるところから始めたので、全体が理解でき、今後も役立つと感じた。また、実際に火をつけてトーチを回したので、火を取り扱う上での危険性、リスクマネジメントについても考えるきっかけになった。こういったトーチ回しができる教員は最近少なくなっているようで、貴重な経験を今回のこの企画で体験させていただいた。来年度のキャンプファイヤーではもっとたくさんの学生がキャンプファイヤー、トーチ回しにかかわることが出来るようにこれからこの貴重な経験を共有していきたいと思う。

最後のキャンプファイヤーで司会をさせていただいたことについてである。50 人もの子どもたちの前で話をするようなことは初めての経験だったこともあり、終始緊張していた。私と違って院生の先輩方は落ち着いて司会進行をされていた。院生の先輩方、現職の先生方に少しでも近づきたいと改めて感じる事が出来た。今回の ESD 子どもキャンプは学生にそういった向上心を宿すきっかけになったのではないかと思う。

ESD 子どもキャンプは非常に有意義でありたくさんのことを学ぶことができた。こういった活動はまさに持続発展していくべきであり今回の経験を引き継ぎ来年にいかしていこうと思う。



奈良 ASP ネットワーク ESD 子どもキャンプに参加して

奈良教育大学 教職大学院 松浦 慎

8月30日～31日に奈良教育大学のキャンパスをフィールドとした「奈良 ASP ネットワーク ESD 子どもキャンプ」に参加した。このキャンプは奈良県内の小中学校のユネスコスクールのネットワークが主体となつて行うキャンプである。今回は、参加者は次の通りである。

小中学生	45名	大学生・院生	25名
教職員	31名	看護師	2名

計103名

このキャンプの特色は、教員と学生が相談しながら共にプログラムの企画立案から運営までの一通りの流れを経験するという内容だ。主なプログラムは、次の通りであった。

- ・オリエンテーション
- ・大学内フィールドワーク
- ・ならまちフィールドワーク
- ・チャレンジタイム（銭湯・夕食）
- ・キャンプファイヤー
- ・奈良公園散策
- ・映像作品作成
- ・映像作成発表
- ・さよならの集い

自分が運営に携わるに当たり、気をつけた事が3つある。一つ目が自分の立場の自覚、二つ目に都市型キャンプのよさを引き出すこと、三つ目が来年度への引継ぎである。

一つ目の自分の立場の自覚である。今回は、現場の教員と大学生・大学院生が共同で企画を作り上げるということで、どちらともつながりのある自分の動きが重要であると自覚して臨んだ。現場の先生の負担をできるだけ少なくし、大学生に適宜アドバイスしながら、お互いのよさを生かせるように考えて動いた。子どもたちは、若い大学生・大学院生とともに行動しながら、要所要所で教師がしっかりと抑えるというバランスのいいプログラムを存分に楽しんだようである。

二つ目は都市型のキャンプの良さを存分に引き出すことである。大学キャンパスをベースにするということで、普段の山の中では行うことのできない多様なプログラムを展開することができた。「ならまち」を使用したフィールドワークや、大学の情報機器（パソコン等）を使った映像作品制作などである。自然との触れ合いはあまりないが、今回の狙いである、友達と仲良くなることや、地域のいいところを知る、というねらいには迫れたのではないかと。また、何より子どもとその保護者に開催地である大学のことを知ってもらえるという利点もある。今回のキャンプは初めてづくしではあったが、可能性の秘められている取組であったと考える。

三つ目は来年度への引き継ぎである。来年度以降、こういう形の都市型のキャンプを行うに当たり、大学内の連絡調整や、町を使うにあたっての安全管理、地域住民へのフォローや公共機関への連絡など、様々な課題が浮き彫りになった。今後、それらの課題をカバーしつつ、さらにいいものにしていくために推敲を重ねたい。

今回の ESD キャンプを通して、たくさんのことを学ぶことができた。何より、このキャンプを企画・運営することを通して学生と教員のつながりが生まれたことが大きな収穫である。学生は教員の建設的な企画構成力や児童とのかかわりかたを学んだようである。また、教員は学生の子どもに対するひたむきさから教育に対する情熱を思い出したようであった。今回生まれた学生と教員とのネットワークをよりよく現場に反映させていけるような流れや取組をこれからの自分の課題として模索していきたいと思う。

ASP 子どもキャンプ

教職大学院 関川 絵里

8月30・31日と奈良教育大学での子どもキャンプに参加しました。将来小学校の教員を目指す私にとって、実際に子ども達と寝食を共にする初めてのキャンプでした。このキャンプを迎えるまでに、出来るだけ時間をかけて準備をしてきたつもりです。もちろん足りない部分はたくさんありましたが、一生忘れることの出来ない思い出を、子ども達と、そして仲間と一緒に作ることが出来ました。

朝、子どもたちが続々と大学に集合してきたところから、パルテノンの前で見送るまで本当にいろいろなことがありました。楽しいことばかりでしたが、正直な子ども達を相手にどのように対応したらよいか考えさせられる場面も幾つかありました。その都度、ほかのグループリーダーと話し合っ、子どもたちにどういうことを考えてほしいのかを基準に行動しました。そういった経験をさせていただけたことは、教師を目指す私たちにとって大変貴重でした。

最初はお互いにぎこちなかった子どもたちが、様々なプログラムと一緒にこなし、時間を共にする中で、助け合い、協力し合うようになっていく姿を見せてもらい、子ども達が持っている力に感動しました。たった二日間で、こんなにも子ども達と仲間と心をつなげることができることができるなんて思ってもみませんでした。

二日間一緒に過ごす中で、子ども達のいいところをたくさん見つけることができました。そして、それを最後にみんなに伝え、みんなで共有できたことが、私自身本当によかったと感じています。プログラムが全て終わり、別れる時には、温かい感情がこみあげてきて涙が出ました。それが私だけではなかったことが、このキャンプの結果を物語っていたのではないかと思います。

この夏休み最後のキャンプでの経験が、これからの子ども達の希望や生きる力に少しでもつながればと心から思っています。この経験を将来に生かし、子ども達のことを想って動ける教師を目指して頑張っていきたいと思えます。



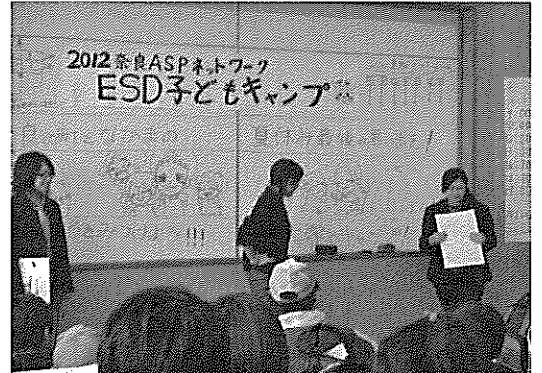
ESD子どもキャンプレポート

文化財造形専修 2回生 横井 まどか

8月30日、31日に奈良教育大学のキャンパス内で奈良ASPネットワーク主催のESD子どもキャンプが行われた。対象の子どもたちは奈良の小学5年生から中学3年生である。異年齢かつ異なる学校児童生徒によるグループ編成となるように7班に分かれ、そこにユネスコクラブの部員が入るという形で、キャンプでの2日間、寝食を共にした。

私が今回のキャンプに参加して成長したと感じたことが2つある。1つ目は人前に立った時の振る舞い、2つ目は人のために頑張ると言うことである。

1つ目の人前に立った時の振る舞いについてだが、私は元来あがり症で、人前で話すことが極端に苦手であった。ユネスコクラブに入ってから人前で話す回数は増えたが、一向に慣れない。ASP会議の際の発言の時も、どこを見ていいのか分からず、いつも下を向いて早口に喋っていた。しかしキャンプの時はそんなことを言っている場合ではなかった。一番初めのキャンパスフィールドワークを担当していた私は、大勢の子どもたちの前でゲーム内容を説明しなくてはならなくなった。重要な部分は同じプログラム担当の先輩方が言ってくださることになってはいたが、最初に話すのは私であった。失敗したらどうしようと、そればかりを考えていた。しかし、本番直前にジャケットを羽織って、先輩方がネクタイを締めている姿を見ていたら、緊張が解けた。これから喋るのは“私”ではなく“警部”。そう考えていたら、落ち着いた。実際に喋っている時もそうであった。“警部”なら、自信を持って大きな声で話すだろうし、もちろん下なんて向かない。たまに何を言うのかを忘れて言葉に詰まることこそあったが、頭が真っ白になるということはなく、最初のゲーム説明を終わらせることができた。喋っているのが役だと思えば、きちんと言葉を伝えることができるということを知り、その先で話すときも落ち着いて話すことができた。これは私にとっては大きな前進であった。



2つ目の人のために頑張ると言うのは、普段の私ならできないことが人のためにならできると言うことである。ユネスコクラブの部員なら知っているが、私は体力がない。道普請に行って最初に音を上げるのはいつも私であるし、直ぐに体調を崩す。なんとも頼りない部員なのだが、奈良町フィールドワークの際、そんな私がスクールバックに2リットルのお茶を詰め込んで二時間近い時間誰かに代わってもらうこともなく歩き回っていた。そのことを言うとみんなは驚いていたが、むしろ一番驚いたのは私自身である。どうしてそんなことができたのかと考えてみると、“私の飲むお茶”ではなく“みんなが飲むお茶”であったからだろう。あの炎天下の中、お茶を飲まずに行動しては絶対に誰かが熱中症になってしまう、置いて行くわけにはいかない大切なものであった。それに、子どもたちのいる手前、お茶を持つのを変わってほしいとも言えず、ずっとお茶は私の鞆の中であった。自分のためだとできないことが、みんなのためだとできる。それがわかっただけでも今回のキャンプは意義あるものであったと思う。

キャンプの準備の際は本気で先輩に怒ったり、後輩をフォローしたり、同回生に愚痴を零すこともあった。色々な人に助けをもらい、そして自分が誰かを助ける場面もあった。参加したそれぞれが成長し、自分の課題を見つけることのできたキャンプだった。今回の学びを大切に、また来年も奈良教育大学でキャンプが出来たらと思う。

ESD キャンプを終えて

物質科学専修 2 回生 後藤田 洋介

8月の終わりに奈良教育大学で ESD 子どもキャンプが開催されました。このキャンプは「奈良町と仲間の良さを見つけよう」という目的で行われ、ユネスコクラブでは五月の中ごろから準備を開始しました。子どもたちを受け入れるためにいろいろな注意をはらいつつも、子どもたちに楽しんでもらえるようなプログラムを考えました。その中で、私が感じたことは以下のとおりです。



ユネスコクラブ集合写真

私がこのキャンプを通して気がついたことは3つあります。1つ目に準備の大切さ、2つ目に新たに始めることの難しさについて、3つ目に仲間の大切さについてです。

1つ目の準備の大切さについて。今回のキャンプでは、自分たちが担当してきた星座観察のコーナー以外の仕事も数多く見てきました。その中で、試行錯誤したもの（チャレンジタイムの地図や、コーナー開始の寸劇など）が多く、自分の担当コーナーの刺激になりました。また、他にも準備の大切さを感じたことがありました。それは、事前に連絡することの大切さです。キャンプ中に子どもと晩御飯を一緒に取るコーナーがありましたが、そこで、私たちは事前連絡をしないまま、ある店に入り、断られてしまいました。事前に確認等の準備があれば、このような手違いが起きなかったのではないかと感じました。

2つ目に新たに始めることの難しさについて。今回のキャンプは前々から行われていましたが、会場に大学を用いたのは今回が初めてでした。ほとんどの学生スタッフは企画段階からキャンプを行ったのは初めてであり、「初」が多く揃ったキャンプだったのではないかと思います。初めて行うことにいろいろ戸惑いながらも様々なコーナーをこなして、今回のキャンプを終わらせことができたのではないかと思います。今回のキャンプを行うことで大学でキャンプを行うテンプレートができてしまいましたが、私は次にキャンプを行うときも「初めて」にチャレンジしていきたいと思います。

3つ目の仲間の大切さについて。私は一日目キャンプの目的である「仲間の良さを見つけよう」を忘れていたような気がしました。さよならの集いのときに、私は子どもたちの良さを振り返り、二日間得た仲間の良さを感じた気がしました。また、ユネスコクラブ部員間でもいろんな良さを見つけました。

最後に、私は今回のキャンプに参加してよかったと思っています。それは、色々な難しさや難問に直面し勉強になっただけではなく、いろんな人の良さ、子どもたち一人一人の良さを実感しただけではなく、ユネスコクラブの部員の良さも多く発見できたことが、よかったことだと感じています。また、色々な失敗や、感じたことを次に活かしていけるようにできればと感じました。

ESDキャンプを終えて

数学教育専修 1回生 幸田 早苗

2012年8月30日31日にユネスコスクールに加盟している奈良県内小中学校の子どもたちと奈良教育大学でキャンプをした。このキャンプはESDについて学び合い、奈良の良さを見つける活動を通して、地域の良さを見直す目を養うとともに、みんなで仲良く活動し、友情を育てるというねらいのもと行われた。

このキャンプで私は3つのことを学んだ。1つ目はスタッフの心構え、2つ目は子ども達のパワー、3つ目は自分達のESDの実践である。

1つ目はスタッフの心構えである。私はスタッフという立場で参加するキャンプはこのキャンプが初めてだった。キャンプが始まる前にスタッフとしての心構えを教えてもらった。その中に「楽しむこと」とあった。当日、スタッフそれぞれができるだけ声を出し、場を盛り上げようと努力した。そうすると、はじめは緊張していた子ども達も一緒に盛り上がってくれた。スタッフの楽しむ姿、盛り上げようとする気持ちは言葉が無くても、言葉以上に早くストレートに届くのだと学んだ。来年からはそういった子どもの視線も意識してスタッフとして盛上げていきたいと思う。



やっとテントがはれましたの図

2つ目は子ども達のパワーである。1日目は歩きまわるプログラムがたくさんあり、熱中症などが心配された。しかし、しっかり水分を取らせたこともあり、熱中症などは少なかった。むしろ、子どもたちの方が大人より元気で驚いた。各班のスタンツでも、子ども達はみんなの前なので恥ずかしがっていたが、堂々と発表できていたのでまた驚いた。ほかにも子どもたちのパワーに驚くことがたくさんあった。これからはそんな子ども達のパワーをもっと活かせるように頑張りたいと思う。

3つ目は自分達のESDの実践である。今回、子どもたちにESDを学んでもらうためにいろいろなプログラムを考えてきた。子ども達だけでなく、スタッフの一員である私もESDについて改めて学ぶことができ、よかったと思う。このよかったこと、学んだことをたくさんの人にこれから伝えていくことがこれから私達のESDを実践するための課題だと思う。しかし、キャンプをする上で身近にできるESDを忘れていたと思う。キャンプを終えた次の日、ゴミ出しに行ってみるとゴミ箱の中にはキャンプ中に出された大量のお茶などのペットボトルが洗われもせず、分別もされずに捨てられていた。子どもたちにESDを学んでほしい、実践してほしいという思いでキャンプをしてきたが、まず自分達が身近に出来るESDを実践しないといけないと思った。そうでないと、ESDキャンプは子どもたちにESDを知ってもらうだけで、ESDキャンプ自体がESDではないことになってしまう。だから、これからは自分達ができるESDも実践しつつ、子どもたちにESDを学んでもらえるようにしていきたいと思う。

今回、何もかもが私にとっては初めてで、学んだことも、反省も、これからの課題も思い出もたくさん得ることができた。この得たものをもったいないことのないように、1つ残らず、これからは活かしていきたいと思う。そしてまた、来年はより良いキャンプになるように頑張りたいと思う。

ESD 子どもキャンプを経て

家庭科教育専修 2回生 黒田 千尋

ESD 子どもキャンプとは、小学生高学年から中学生を対象とし、ESD を体験する場としてキャンプという形で設けられたものだ。今回は奈良教育大学を拠点とし、1泊2日の子どもキャンプが開催された。子どもたちは学校という日常生活の場で、非日常の事柄であるテント張りやキャンプファイヤーなどの各プログラムを楽しんだ。最後のプログラムでは二日間の体験をムービーメーカーでまとめ、各学校に持ち帰る。終わった後もつながりを広げていこうという活動だ。

私がこのキャンプを通じて、感じたことが2つある。一つはキャンプでの成長、二つ目が仲間との結束力である。

一つ目に、キャンプではスタッフを含め、参加者全員が成長出来るということだ。キャンパーらは初めこそ緊張してなかなか声を出して話したり、意見を言ったりすることがままならないことが多々ある。しかし、各プログラムを経ていく内に、同じ班の他のキャンパーと力を合わせて物事をこなし、仲良くなるにつれてだんだんと声が出てくる。これは、1日目のキャンプファイヤーの子どもスタンプや、2日目のムービーメーカーの発表時に良く表れていた。人前で声が出しにくかった子どもが、大きな声で発表している様子は、出会った最初のことからは想像も出来ない凛々しさがあった。物事を進めていくメンバーの一人だと感じられ、自分を出せられる環境があれば、自尊心が育まれ、大きな声で発表したり、自分の意見を言えるようになったりする。キャンプはその自尊心を育むことに非常に長けている。

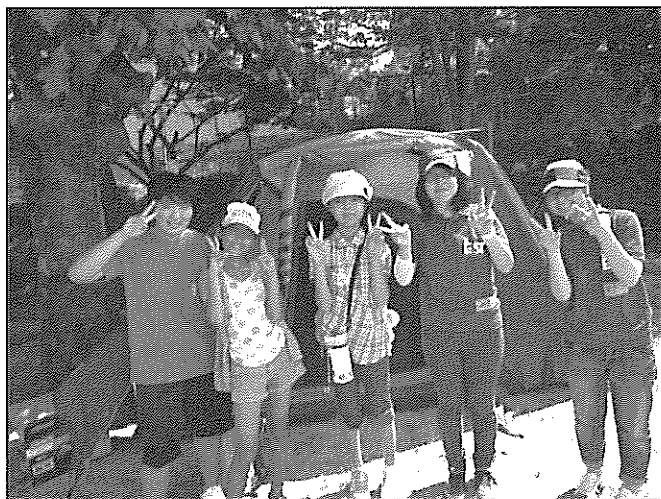
スタッフ側もキャンパーと同じように成長が見られる。キャンパーを預かる身としての責任感、運営していく上で必要となる判断力と班を引っ張っていくリーダーシップなどが育まれる。今回は1班3～4人態勢だったので、班内での結束力も強くなった。

2つ目は仲間との結束力が非常に強くなるという点だ。寝食をともにすれば仲間意識はそれだけでも得られる。しかし、キャンプはそれだけではない。加えてプログラムをこなすという、ある意味試練のようなものに立ち向かうことにより、キャンパー同士の交流が深くなり、連帯感が生まれる。もちろんキャンパーとスタッフとの間でもそうだし、スタッフ同士もそうだ。

キャンプは総じて人の自主性を高める。地図を片手に案内するキャンパー、スタンプを積極的にまとめるキャンパー、ムービーを作る中心となったキャンパーなどを見て非常に感じた。また、スタッフ同士が盛んに意見を出し合い、改善すべき点や子どもの命を預かる身として心得ておくことなどを、共有し、自ら意識して動くことで、スタッフである私たちが人間として成長できたように感じる。

ユネスコ子供キャンプ2012を通して

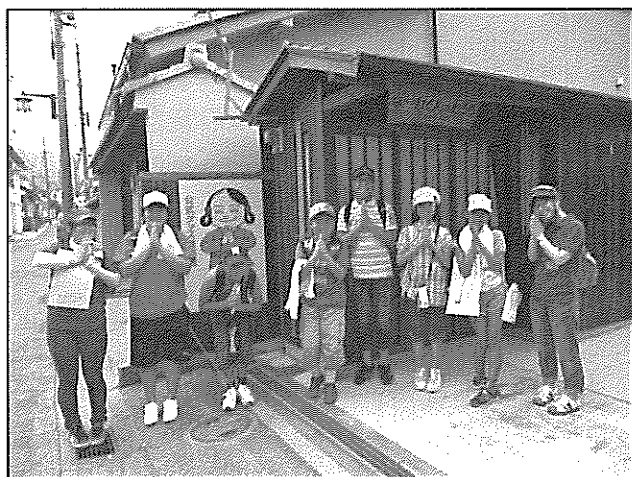
英語教育専修 1回生 山口 絵理香



今回、私は初めて子供キャンプというものを経験しました。まず、すごいと思ったのは、自分の通っている大学内でテントを建ててキャンプができるということです。このようなことは、大学生でもなかなかできない貴重な体験だったと思います。奈良教育大学でキャンプができるようになるまでには、ユネスコの部員のみならず、奈良教育大学の副学長、先生方、他の学校の先生方、保護者の方々、さらに、このキャンプに行きたいと思ってくれた子どもたちの力が合わさってできたことだと思います。いろ

んな方々の協力で実施できたキャンプに参加することができて、私は本当に幸せ者だと思います。みなさんに感謝しています。さらに、キャンプの終わりに、キャンプを通して学んだことがしっかり活かして、「未来の平和のために残しておきたいもの」というテーマでプレゼンテーションができるまでになっていることに驚きました。たった2日間でここまでできるというみんなの協調性にも感心しました。

しかし、反省すべき点もいくつかあったと私は思います。このキャンプは、プログラムが盛りだくさんでした。学生は、参加してくれた子どもたちにたくさんの経験をしてもらおうと必死に考えていましたが、結果的には、みんなが疲れてしまい、時間が足りないということになってしまったように感じました。学生の側からすると、変に時間が余ってしまい、せっかく楽しかった雰囲気が台無しになったり、子ども達に手持無沙汰な感情を抱かせたくないという思いもあったのだろうと思いますが、少し、細かくプログラムを立てすぎていたのではと思います。これは私の考えですが、もう少しプログラムに余裕を持たせて、余った時間は子ども主体で、各班の子どもたちがしたい事を積極的に推し進めていくという感じにするのもいいかなと思います。あまりにハードな計画を立てすぎて、最終的に子どもたちも学生たちも疲れがかなり出てしまったというところが残念だと思いました。



最後に、私がこのキャンプを通して学んだ事を書こうと思います。それは、たった2日間のイベントの計画をするのに、何か月もかかり、たくさんの人たちの協力が必要だということです。そして、すごく細かいところまで注意して、万全の安全を確保しなければならないということです。私がいままでに参加してきたイベントはこんなにもたくさんの時間と労力を使って作られていたのかと思うと感動しました。この経験を活かして、今後の活動に役立てていきたいです。

ESD 子どもキャンプを終えて

英語教育専修 1 回生 糸 綾香

8月30、31日。私たちユネスコクラブにとってこの夏一番のイベントである、ESD 子どもキャンプが行われた。春から準備、企画を始め、至らないところもたくさん有り、苦しい思いをしたこともあった。しかし当日は天気にも恵まれ、子どもたちととても楽しい時間を過ごすことができた。

このキャンプは、私に大きな変化とかけがえのないものを与えてくれた。具体的には、第一に「人に頼る」ということについて、第二に「仲間」という存在についてである。

まず第一の「人に頼る」ということについてである。私は今まで、他人に何かを尋ねたり、お願いすることが苦手であった。授業でなかなか解けない問題があっても、先生や友達に聞くことは恥ずかしいかと思っていたし、相手の迷惑になるかもしれないと怖くもあったからだ。キャンプの準備を開始した当初も、この偏屈な性格のまま取り組んでいた。「私がお店調べます。」「私が地図描きます！」という風に、人に任せるより、自分で全部した方が確実に早くできるだろうと思っていたのだ。しかし会議を重ねていくうちに、やらなければいけないこと、もっと詰めて考えないといけないことがたくさん出てき、一人では回らなくなってしまった。焦るがどうにもならない。どうにもならなくなってまた焦る。完全に悪循環に陥ってしまっていた。そんなとき、同じプログラム担当で、一回生の友人が地図を描いてきてくれた。先輩が銭湯について調べてきてくださった。会議で出た問題点について、メンバー全員が意見やアドバイスを出してくれた。そうすると段々と仕事が片付いて行った。キャンプ当日も、少しゴタゴタはあったものの、無事にプログラムを終えることができた。今振り返ってみると、メンバー全員で協力することも、自分ができそうにない仕事を誰かにお願いすることも、とても当たり前なことなのだなと感じる。しかしその当たり前が今までできていなかったのだと気づけたことが、私にとって大きな変化となった。

次に「仲間」という存在についてである。今回のキャンプの企画を通して、私はたくさんの人に助けももらった。会議の後、落ち込んでいた私に先輩が「君が頑張ってること、ちゃんと分かってる。見えてる人には、見えてるんだから自信持ちなさい。」とメールをくださった。他にも色んな先輩が励ましてくれ、アドバイスをくださった。先輩方の励ましが無かったら、落ち込んだままでキャンプを乗り越えることなどできなかつただろう。そしてさらに私を助けてくれたのが、同じ一回生の友人たちである。春からずっと、一番近くで共に頑張ってきた人たちだ。彼女たちの前で何回も弱音を吐き、何回も励まされ、時には厳しい意見も言ってくれた。彼女たちの存在が無ければ、やはりキャンプを乗り越えられなかつただろうし、成長もできなかつただろう。一回生、先輩方は私にとって本当にかけがえのない「仲間」であると思う。キャンプが終わり、国際交流室に全員が集まって「お疲れ様！」と言いつつとき、そう実感することができた。ただ一つ気がかりなことがある。私は一回生の前で弱音を吐くばかりで、彼女たちの話を十分聞いていなかった。彼女たちも同じように悩み、苦しく思っていたこともあるだろう。今まで支えてもらった分、これからは「仲間」を支えていけるようになりたいと思った。

今回のキャンプは、本当に私に大きな変化を与えてくれた。その過程では、苦しいこともたくさんあったが、「仲間」のおかげで全て乗り越えることができた。そして何より、子どもたちの笑顔で全て報われた気がする。同じ班だった女の子が「もう一泊したいな」と言ってくれたことが、とても嬉しかった。来年のキャンプはもっともっと楽しいキャンプにしたい。

～ESD子供キャンプ参加者の声～

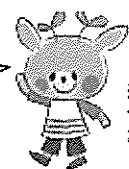
今回は、この奈良 ASP ネットワーク ESD 子どもキャンプに参加させていただき、ありがとうございました。最初、初めて、皆さんにお会いしたときは、とても不安な気持ちで、やっていけるのか、とても心配でした。ですが、大学生の皆さんが積極的に話して下さり、一気に不安な気持ちがなくなりました。テント設営からテーマ別フィールドワークなど、色んな企画を考えてくださり、ありがとうございました。とても楽しかったです。特に、キャンプファイヤーが、とても心に残っています。各グループで考えたスタンプを発表したり、歌を歌ったり、とても楽しかったです。普段の学校生活では学べないことをたくさん学べた良いキャンプでした。また機会があれば、是非参加させてください。このキャンプでさまざまな企画を考えて下さった皆様、本当にありがとうございました。これからも都南中学校を宜しく願致します。

教育大学 ESD の皆様

8月30日・31日は、本当にありがとうございました。思っていたよりも、すごく楽しくて、もう1日泊まりたいって思うくらい、充実した2日間になりました。キャンプに行ったら、分かったことが、たくさんありました。初めて会った人たちと、こんなに仲良くなれるとは全然思ってもいませんでした。みんなで作ったキャンプだけど、こんなに楽しく過ごせたのは、みなさんのおかげです。(^^) ありがとうございました。たった2日間だったけど、すごく楽しくて、思い出がいっぱい、つまってて、忘れられないくらい大切な2日間でした♪ありがとうございました。

お久しぶりです。先日のキャンプでは、大変お世話になりました。私は先日のキャンプで、「仲間に頼り、助け合っていくことの大切さ」を学びました。私は、あまり人の力を借りず、一人で何かをしようというところがありました。しかし、キャンプの班の活動では、みんなと協力して、何かを考えたり行動したりする中で、仲間と協力することの大切さに気付きました。また映像制作では、年下の色んな子達から頼られました。普段、こんなにたくさんの年下の子達から頼られることが無いので、とても嬉しかったです。もちろん、頼られた事ばかりではありません。私が年下の子達に頼った事もありました。私は、このキャンプで困った時には、自分一人で悩まず、誰かに頼ることも大切だと感じました。最後にすばらしいキャンプを企画して下さいました大学生の皆さん、本当にありがとうございました。私も皆さんの様な、誰にでも優しく接する事ができる大人になれる様に、キャンプで学んだ事を活かし、毎日を大切に過ごしていこうと思います。本当にありがとうございました。

参加してくれて、ありがとう☆
来年も会おうね！



奈良教育大学
イメージキャラクター
なっきょん

[奈良ASPネットワーク教員研修 in 気仙沼] 研修スケジュール

月 日	時刻	場 所	研 修 内 容	参 加 者	備 考
9月15日 土曜日	10:50	仙台空港	奈良教員仙台空港着	奈良市教員 (附属中除く) 奈良教大	レンタカー
	15:00	気仙沼	被災地視察研修Ⅰ(気仙沼港・階上地区・龍の松)		
	17:30	ホテル	ホテルチェックイン		ホテルー景閣
	18:30	市内	夕食(市内で)	有志	
9月16日 日曜日	9:30	教育委員会	『ESD/ユネスコスクール研修会』 コーディネーター:奈良教育大学 中澤先生 ・講義1「気仙沼市のESD/ユネスコスクールの展開」 気仙沼市教委 及川副参事 ・講義2「気仙沼市のユネスコスクールの実践事例」 ～大谷小学校のハチドリ計画の実践から～ ・質疑と情報交換	奈良市教員 (附属中除く) 気仙沼市教委	
	11:30	市内	<昼食(市役所の近くの復興屋台村で)>		
	13:00	教育委員会	『ESD/防災教育研修会』 【第1部】東日本大震災からの教訓 ・講義1「気仙沼市の津波防災教育の展開」 気仙沼市教委 白幡教育長 ・講義2「東日本大震災からの教育復興と防災教育」 気仙沼市教委 及川副参事 ・講義3「気仙沼市の防災教育の実践事例」 ～階上中学校の防災教育の取組から ・質疑応答	奈良市教員 奈良附属中教員 奈良教育大 市教育研究員 京都大学 SEEDS ASIA 気仙沼市教委	
	13:40				
	13:10				
	14:40				
	15:00		<休 憩>		
	15:30	教育委員会	【第2部】防災教育ラウンドテーブルミーティング コーディネーター:京都大学 ラジブ准教授 ・教育研究員からの提案 ・討議 気仙沼市教育研究員との学び合い 「防災教育推進の視点と方法～大震災からの教訓」 ・まとめと指導助言 ラジブ准教授		
	17:00		終了		
	18:00	市内	合同夕食会	研修会関係者	ホテルー景閣
9月17日 月曜日	8:30	ホテル	ホテルチェックアウト	奈良市教員 奈良附属中教員 奈良教育大	減免申請
	8:45	鹿折地区	被災地の視察Ⅱ(鹿折地区・第18共徳丸)		
	9:30	唐桑地区	唐桑半島ビジターセンター・津波体験館見学		
	11:00	陸前高田	被災地視察Ⅲ(陸前高田市・奇跡の一本松等) 又は、学校訪問(鹿折小学校)		
	12:30	陸前高田 又は気仙沼	<昼 食>		
	14:00		気仙沼発・仙台空港へ		

気仙沼市における ESD・防災教育教員研修報告書

教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター 専任講師 中澤 静男

1. はじめに

2011年3月11日午後2時46分に宮城県沖を震源とするマグニチュード9.0という巨大地震が発生した。またこの地震によって引き起こされた大津波により、東北地方と関東地方での太平洋沿岸部では壊滅的な被害が発生した。

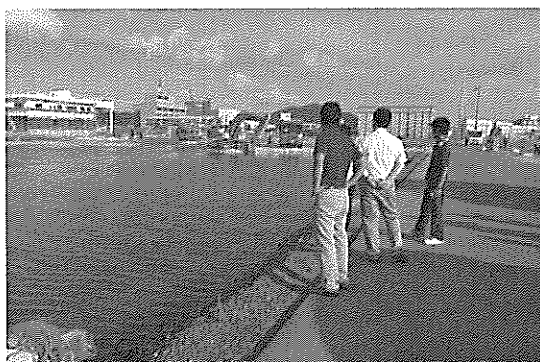
今回訪問した気仙沼市における東日本大震災・津波による被害状況は、死者数1,038人、行方不明者数259人、被災住宅棟数15,698棟、被災世帯9,500世帯という甚大なものであった。しかし、児童生徒の生存率は99.8%。学校管理下の児童生徒の死者は0人という事実が、これまでの気仙沼市の防災教育の成果を如実に表している。奈良県には津波はない。しかし30年以内に南海・東南海地震が発生するだろうといわれている他、奈良で育った子どもが将来、海の近くで暮らすこともあり、防災教育の充実は喫緊の課題の一つである。そこで、今年度、『学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける』教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化」プロジェクトの一環として、奈良ユネスコスクールネットワーク（奈良ASP）の県外研修として気仙沼市を訪問すると共に、気仙沼市教育委員会の防災教育研修会に参加させていただいた。

2. 被災地見学

気仙沼市教育委員会副参事の及川幸彦氏の案内で、被災地を見学した。海の近くでは全体的に地盤沈下しており、海水が入り込んでいるところがある。がれきは取り除かれているものの、取り壊し中の建物が見えるだけで、新しく町が建設されている様子はまだない。関西方面では震災に関する報道が少なくなり、それにつれて人々の関心も低くなってきているが、復興にはまだまだ時間がかかるということが感じられた。

鹿折（ししおり）地区は、津波で流された重油タンクに引火して火災が発生し、3日間燃え続けたと聞いた。今も津波で流されてきた大型漁船がブルーの自動車を押しつぶしたまま道路わきに残されている。気仙沼市ではこの船舶を解体するか、被災のモニュメントとして保存するかを住民も参加する形で協議を続けている。

気仙沼市立鹿折小学校を見学させていただき、小野寺校長先生から、震災発生時の状況と学校の対応について話をいただいた。小野寺校長は、昨年まで大谷小学校長をされていた。その日は年次休暇をとっていたが、

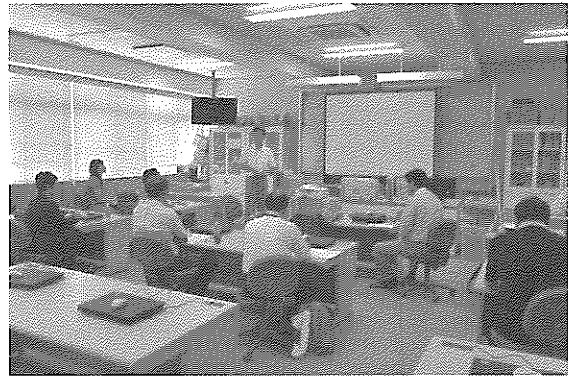


冠水したままの市街地



打ち上げられた大型漁船

たまたま学校にやってきたときに地震が発生した。電気系統に被害が出て、放送設備が使えなかったため、教頭先生が学校中を走って、全員運動場に避難するよう指示していた（一次避難）。当時、1年生は下校していた。2年生から6年生までを集めさせ、避難所に指定されていた丘に向かう（二次避難）。大谷小学校の避難場所の丘は、学校よりも海に近いところにあるため、海に向かって避難した唯一の学校ではないかと、おっしゃっておられた。避難完了してから、下校した1年生のうち4名が、海に

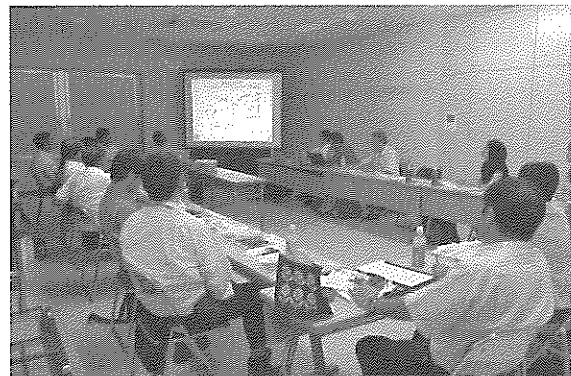


大矢校長先生のご講演

近いバス停でバスを待っているのではないかとということに気付き、教務主任をバス停にむかわせ、4名を避難させた。直後に津波が発生し、大谷小学校を取り囲む形で波が押し寄せ、水位がどんどん高くなった。避難している丘へも水が押し寄せ「自分は、ここで子どもと一緒に死ぬんだ」と観念されたという。津波の状況にあわせて、次へ次へと避難できる場所を避難場所にすべきだとおっしゃっておられた。

3. 防災教育研修会

市役所における防災教育研修会では白幡教育長自ら「東日本震災から学ぶ防災教育」と題したご講演をいただいた。その中で特に心に残ったことは「災害時の役割が規定されていなくても、頼られたとき、社会的使命が生まれる」ということである。災害に備えた防災マニュアルの作成は重要である。しかし、今回の大震災で「想定外」という言葉を度々耳にしたように、防災マニュアルは一定の災害を想定しており、実際には場面に応じた判断が求められるということである。当時、中井小学校教頭であった及川副参事は、地震発生後に多くの保護者が学校に訪れたが、一人の子どもも引き渡さなかった。学校が地域で一番高い位置にあるため、低い位置にある家庭に子どもを返すことは危険だと判断されたからである。奈良の学校では引き渡し訓練をしており、子どもを保護者に引き渡すことが避難訓練の目的化しているところがある。命を守るということを中心に、場面に応じた行動がとれるよう、教員も子どもも訓練する必要がある、防災教育の重要性はますます高まっていると感じた。



防災教育研修会

4. 終わりに

今回の研修を通じて、防災教育とESDの関わりについて2つ学ぶことができた。一つ目が大谷小中学校の「ハチドリ計画」である。大矢小中学校では以前から学校近くの田を借り、環境に即した「ふゆみずたんぼ」の取組が行われてきた。今回の津波被害でその田もがれきで埋まってしまい、今年は田植えができないとあきらめたが、地域の方々や小中学生、全国からのボランティアによって見事に復活したという報告があった。多くの方が連携協力することで、不可能も可能になるという希望を学ばせていただいた。二つ目が「住み続けられる町づくり」「住み続けたい町づくり」は持続可能な地域社会実現への取組と同じであるということである。気仙沼市では中学校が学校間交流を行いながら、将来の地域づくりの主体である中学生が、持続可能な気仙沼市の実現に向けた取組を始めている。

「学ぶ喜び」プロジェクト奈良ASP県外教員研修(気仙沼) 報告書

奈良市立月ヶ瀬中学校教頭 井本 章子

(1) はじめに

東日本大震災で多大の被害を被り故郷を喪失された気仙沼、ESDの素晴らしい取り組みを培ってこられた地、私はACCU韓国研修で共に研修した先生方のことを思い、心を痛めた。この研修で、自分の目で確かめ何をすべきか考えたいと志望した。奈良は世界遺産の宝庫であり、それを受け継ぎ、守りながらつながりを大切にしたESDを展開している。気仙沼は「海」という自然の宝庫の恩恵を受けながら、「山・森・海のつながり」環境を見据えたESDの先進地域である。その地が自然の猛威で美しい故郷を奪われた。自然と共に暮らす私たちが「防災」をいかにとらえていくべきかを学びたいと考えた。

(2) 考察

○ESD ユネスコ研修会

気仙沼教育委員会及川副参事より気仙沼ESD教育の取り組みの概要を教わる。持続可能な社会の担い手を育成する観点を持ち、グローバルな視点で全市展開されていた。学校経営の質を高め「地域再生」を目指されている。推進の背景として「海・川・森の自然を生かしたESD」、地域に根ざした探究的な総合カリキュラム型である。月ヶ瀬中学校も、奈良の世界遺産はないが、昔ながらの自然・歴史・文化・伝統を大切に地域の方の協力でESD教育を進めている。地域ぐるみのアルミ缶回収活動も18年間継続、「アルミ缶で車椅子を！」地球環境保護・リサイクル・福祉の活動を進めている。大変共感できた。またグローバルな視点で物事を考えさせ、外部資金を活用し、アメリカ研修の機会を与えられていた。これも先生方や教員の熱いpassionのたまものである。大震災への備えは津波・防災教育(ESDベース)に取り組み、被害を少なく食い止められた。学校が核となって地域防災力を培われた。大震災の後には検証され、これからの教育の可能性を追求された。階上中学校からは「自助・共助・公助」の取り組み、防災教育を見直し反省点を出されていることを知る。「自助」・自分たちの身は自分たちで守る。「共助」・知る・備える・行動する・教えていただいた。大谷小学校からハチドリ計画(南米の民話より・大火を小さくちばしでしずくを運んだ話)小さな力でも継続して、地域を守ろうと幼・小・中で浜清掃に取り組みされている。「ふゆみずたんぼ」の再生に取り組みされている。どの地域もネットワークを結ばれ、校区全体で、子どもたちの教育に取り組みされている様子、視野を大きく持ちながら、豊かな人間性の育成に努められていることを知った。

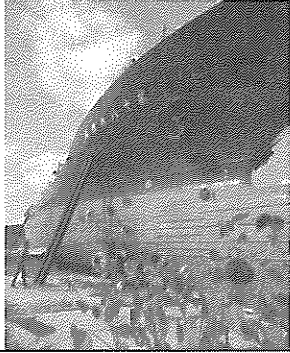
○ESD 防災研修

気仙沼市教育長より東日本震災から学ぶ防災教育を教わる。学校は「災害時の役割が規定されていなくとも、頼られたとき、すべきことがある。社会的使命が生まれる」とおっしゃっていた。防災教育プログラムの改善で 自助・共助・公助+N助(NPO NGO Network New)で命を守る体制を学んだ。奈良は海がなく、災害に対しての構えが甘い自分自身を反省した。本校の防災訓練も、行事化しており、「自分たちの命は自分たちで守る、災害の恐ろしさを知る、地域と共に助け合い有効な避難体制を作る」を構築していく必要性を痛感した。防災教育ラウンドミーティングでは京都大学のラジブ准教授から、「防災教育の推進の視点と方法～大震災からの教訓」を、学術的に学んだ。奈良でもネットワークを構築し、地域が一体となって防災教育を進める課題を持った。

○現地視察

及川副参事に案内していただき、被災地の様子、復興への努力、地域住民の思いや職員の皆さんの熱い思いを知ることができた。地盤沈下した港、市街地、道路はやっと土を盛り上げ作られている。が

れき撤去は進んではいるが、市街地や、工場跡、港はコンクリートの基礎が手つかずのまま残っている。海の豊かな自然と共に生きてきたが、7割の人が仕事を失い、子どもたちの4割が就学援助を受ける実態を知った。現実は厳しく、子どもたちの未来に押しつぶされてくる。けれども及川先生がお話されたように「教育に関わる者の使命は、子どもたちの希望や夢を育て、明るい未来に導くこと」。どんな困難にも立ち向かい、前向きに気仙沼の復興を目指されている熱意を感じた。国連や外部資金をうまく活用し、中学生のアメリカ派遣、OECDの優秀校報告等、子どもにグローバルな視野を持たせ夢を持たせる取り組みを学んだ。私も大きな視野に立ち、明るい未来を持たせる経営方針を見習いたい。



保存か撤去か？揺れる住民



森は海の恋人・海と共に生きる

災害前に実際に津波避難訓練を実施！及川氏より聞く（唐桑地区）



鹿折に花を！中学校の取組

○人・自然・食とのつながり

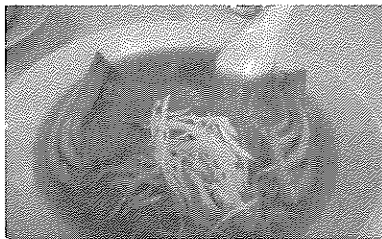


住居の跡！基礎・雑草が広がる



復興祈願コミュニティの再生を誓う紫神社の太鼓

海・川・森の自然を生かした気仙沼のESD、気仙沼の先生方に連れて行ってもらい、いただいた海の幸の豊かなこと！復興村の“ふかひれラーメン” マンボウにマグロスペアリブ、さんまの刺身、どれも新鮮で美味であった。海は猛威も見せるけれど、また“海と共に生きる！”気仙沼の心意気を知った。人のつながりやあったかさを知り、このつながりできっとまた素敵なお街を復興なされると確信した。



復興屋台村のふかひれラーメン



新鮮な海の恵み、温かい人との交流

(3) まとめ

「百聞は一見にしかず」実際に気仙沼を訪れ、見て、聞いて、海風を感じ、気仙沼の方の熱い復興への思い、教育への情熱を感じることができた研修であった。

教育の原点を見つめ直し、子どもたちの明るい未来のために、夢を実現させるように、教育者として課題を持ち、教育活動を進めていこうと感じた。子どもたちは、学校へ戻ることで笑顔を取り戻し、被災地域でも積極的にボランティア活動に取り組んだと聞く。これからは心のケアやきめ細かい対応が必要であろうと感じた。地域の一員として、地域再生のために取り組んだ子ども達、学校が復興と防災に取り組んだ姿勢を聞き、今、私のすべきことに気づかされた研修であった。先生方のご検討を祈るとともにすべきことが見えてきた。この機会を与えてくださった、中澤先生はじめASPネットの皆様にご感謝する。及川先生はじめ気仙沼で知り合った皆様にご感謝する。この経験を、学校現場に持ち帰り、子どもに伝え、前向きに夢に向かって進む子ども達の育成に取り組むたいと感じている。ありがとうございました。

ESD そのものを持続可能なものに

奈良市立済美小学校 教諭 大西浩明

1. はじめに

奈良市が世界遺産学習を視点とした ESD を立ち上げるのに先んじて、全市的に ESD プログラムを開発・実践していた気仙沼市の取組については、これまでに参加した様々な研修会などから聞いており、各校で工夫された系統的なプログラムの有意性に関心をもっていた。しかし、東日本大震災により、多くの学校がこれまでの取組を見直し、復興を含めた未来志向のプログラムをより鮮明に打ち出した ESD プログラムに取り組んでいることを聞き、自分の取組にぜひ活かしたいと思い、本研修に参加した。

2. 研修の概要と考察

①被災地視察研修 I・II (気仙沼港、階上地区、鹿折地区、唐桑地区)

自分自身、震災後に東北を訪れること自体が初めてだったので、震災から1年半を経た被災地の現状を体感することができた。瓦礫は撤去されたものの、津波の被害を受けて家屋を流されたあとはほとんどがそのままの状態、まだまだ復興どころか復旧の途上であるということを実感した。案内していただいた気仙沼市教育委員会副参事 及川幸彦氏より、震災当時の気仙沼の津波の様子や人々の



気仙沼市街地の様子

様子を詳しく話していただいたが、それでも「学校がコントロールできる時間帯であった、引き潮の時間だった」などの幸運があったという話を聞き、改めて津波の威力の大きさを感じた。また、



第18共徳丸

鹿折地区に打ち上げられたままになっている「第18共徳丸の保存か撤去か」という議論については、以前に6年生の世界遺産学習で取り組んだ「原爆ドームという負の遺産から世界遺産の意義を考えよう」に通ずるものであり、次の学習の機会に取り上げようと思った。

②ESD/ ユネスコスクール研修会

まず、及川副参事より「気仙沼市におけるユネスコスクールを通した ESD の推進」についての講義があった。奈良市は世界遺産や地域遺産に軸足を置いた ESD であるのに対し、気仙沼市の推進する ESD は各校でそれぞれが、環境教育・国際理解教育・食育・人権教育・防災教育など、様々なテーマを設定している。何より特徴的なのは、小・中・高校の連携による交流学习や地域や専門機関との連携が盛んに行われていることである。気仙沼市立大谷小学校の「ハチドリ計画の実践から」は、環境教育をテーマに地域の人材を活用した「ふゆみずたんぼ」などの取組で大きな成果をあげていたが、震災でたんぼそのものが使えなくなった。教員らが「こんなときにそれどころではない」という中で、たんぼに残った泥や瓦礫を地域の人や中学生らが懸命になって取り除き再生させた取組は、地域と小・中の連携など学ぶべき点が多くあった。

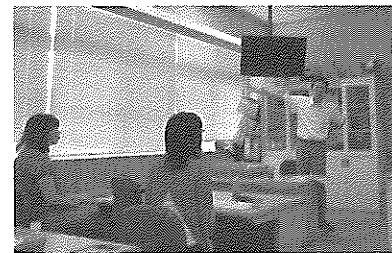
③ESD/ 防災教育研修会

気仙沼市教育委員会 白幡教育長による「気仙沼市の津波防災教育の展開」では、地震と津波による被害状況や震災後の学校再開に向けての取組、防災教育の概要などの話があった後、及川副参

事より「東日本大震災からの教育復興と防災教育」として、さらに具体的な話をしていただいた。その中で、震災後、約1ヶ月での4月21日の学校再開に向けての、教育委員会をはじめ各学校の教職員、地域の人々の、「教育の復興こそがすべての復興の第一歩」とした涙ぐましい数々の苦勞と努力は、あまりにも大きすぎて計り知ることができない。気仙沼市における小中学生の生存率99.8%という数字は、気仙沼市の教育が取り組んできた成果であるとも言えるが、及川副参事の「100%でない限りマスコミが言うような奇跡でも何でもない。実際12名は亡くなっているのだから。」という言葉には本当に重みがあった。気仙沼市の防災教育指定研究員の5名の先生方が参加し、防災教育の取組について報告があった。気仙沼市立階上中学校は、「天を恨まず」の答辞で一躍注目されることになったが、防災教育をテーマにESDに取り組んできた階上中学校でも3名の犠牲者を出したことでその内容を見直し、判断力・危機対処能力を高めるための様々な取組が新たに行われているという報告があった。

④学校訪問（気仙沼市立鹿折小学校）

鹿折小学校は、気仙沼市内では大谷小学校と並んで津波の甚大な被害を受けた学校のひとつであり、震災時は5次避難まで行ったという。1階校舎には津波が約140cm押し寄せ、約9cmのヘドロがあらゆる床面に堆積し、1階が使えるようになったのはこの2学期からということであった。学校再開に向けては、来る日も来る日も児童の安否確認と1階のヘドロ除去作業だったという。54名が転校し、現在児童数260名で、そのうち仮設住宅に入居



鹿折小学校にて

している児童が80名、就学支援率は53%ということで、児童は様々な負の要因を抱えて毎日を送っている。校長先生の「だからこそ、せめて学校では子どもたちが笑顔で過ごせるようにと、様々な行事を地域の方々と協力して行っています。」という言葉は、地域における学校という存在の大きさと教員という立場の責務の重さを感じずにはいられなかった。

3. まとめ

全体を通して大変意義深い研修であった。その成果は、再認識できた次の二つである。

○ESDで重視する「批判的に思考・判断する力」「多面的・総合的に思考・判断する力」の重要性

鹿折小学校の校長先生も、「地震が起きて避難すれば、保護者に引き渡すことしか考えていなかった。」とおっしゃっていた。すべてマニュアル通りが正しいわけではない。訓練においても、気仙沼市立中井小学校で行われているという問題解決型の防災訓練などは大変有効である。子ども自身が、そのときに自らの力で最も正しい判断ができるような力を身に付けせなければならない。これは、すべての学習においても言える大切な学力である。

○ESD そのものを持続可能なものにするために・・・奈良市では世界遺産学習の一般化を

「国連・持続可能な開発のための教育の10年」(DESD)は2014年に最終年を迎えるが、これはESDの終わりではなくスタートにしなければならない。気仙沼市の教員のESDに対する認知度がほぼ100%であるのに対し、奈良市のそれはまだまだ低い。気仙沼市のような地域に根ざした体系的ESDプログラムと同様に、奈良市が推進する世界遺産学習は、現在の学校や社会が抱える様々な問題を克服する可能性をもつプログラムである。Think Globally, Act Locallyという理念を大切にして、“どこでもだれでもできる”世界遺産学習に高めていきたいと思う。

「奈良 Univnet 教員研修 in 気仙沼」に参加して

都南中学校 松本 彩恵

(1)はじめに

東日本大震災後、教師として、また人として、何をすべきか、何ができるかを考えることはあっても実行に移す機会は少なかった。私は、本校では生徒会活動担当であり、防災教育担当ではない。しかし、生徒たちの被災地に対する支援の思いは今もあり、生徒会担当としても何か学ぶこと、できることがあるのではないかと考えた。また、ユネスコスクールとして、ESDに取り組んでいることもあり、今後のESDの活動のヒントを得るためにもこの研修で学びたかった。この研修を通して、震災の被害を実際に見ること、そして被災地以外の学校、教師に何ができるか、何をしていくことが必要なのかを学ぶ機会にし、研修後は、本校生徒や職員に研修内容を伝えていきたいと考えた。

(2)考察

1 ESD/ユネスコスクール研修会

気仙沼市は小中高34校がユネスコスクールとして加盟し、ESDの先進市、推進役として活動している。市内小中学校へのアンケート調査結果を見ても、教員のESDに対する認知度は100%、ESDの内容を説明できる教員は64%と高い。また、気仙沼市が日本のESDの推進役であるという意識も97%と高く、ESDの浸透率だけでなく、取り組みの長さ、深さもうかがえた。それは単に言葉が先行しているのとは違い、ESDプログラムの開発や実践の積み重ね、体制作り、関係諸機関との連携などが機能してできているものだということがわかった。奈良市も30校のユネスコスクールがあるが、まだプログラムの開発や体制作りまでには至っているところは少ないだろうし、また本校においても小さなESDを積み重ねている段階であるので、ここまで発達、機能するまでにはまだまだ時間がかかるように思われた。まずはどのようにして本校教員の意識レベルを上げていくのが課題であると感じた。また、1校1校の単発的な取り組みではなく、様々な公的機関や外部機関、地域との連携をしていくことも大切な要素であると感じた。

2 ESD/防災教育研修会

気仙沼市では、教科と総合的な学習の時間を中心に「小中9年間の意図的、継続的、組織的な防災教育の継続」を念頭に、防災教育を進めていた。震災後は、震災を教訓とした防災教育の改善がなされていた。自助・共助・公助という言葉が印象に残り、それらを考え方の基本として階上中学校の防災教育プログラムなどが作られ実践されていた。学校、地域、行政で命を守る体制は当たり前のように、しかしその連携や役割分担がうまく機能しなければ、本当に命を守る教育にはならないことを痛感した。行動につながる、結びつく教育＝毎日の生活環境や場面、そこに結びつくものを大切にされた教育が大切であると言われていた。奈良はどうだろうと考えたとき、私たちにとって奈良は災害が比較的少なく安全であるといった油断があり、防災教育ははたして行動に結びつく教育、命を守る教育になっているのかと考えたとき、そうではないと感じられた。形式的なもので終わっているのは、教員の危機意識のなさから来ていると痛感した。気仙沼市教委及川副参事の話の中で、和歌山の中学生に「私たちができることは何か」と聞かれたとき、自分たちがいつ被災者になるかもわからない、そうなった時、どう自分たちが動くのかを東北の教訓から学んで考えてほしい、と答えたというお話があった。まさに児童生徒の意識を高め、いざというときに命を守り、行

動できるこどもを育てるためには教員の危機意識の向上がまず必要だと感じた。

3 被災地視察

どの場所も復興しているという状況には程遠く、まだ復旧すらしていないという状況。しかし、報道等で取り上げられることが少なくなっているというだけで、被災地以外の者にとっては順調に復旧復興しているような錯覚に陥っていることがわかった。アンテナを常に張り続けることももちろん大切だが、今回知りえた事実、状況をより多くの生徒や教員に伝えることも今できる「すべきこと」のひとつであるように思う。

(3) まとめ

E S Dの推進に関しては、まだまだ本校にはクリアしなければならない課題が多い。まずは教員のE S D意識・知識の向上である。その次に具体的継続的プログラムの開発、実践である。気仙沼市の様々な実践を参考にしながらできるところからやっていかなければならない。

防災教育についてはほぼゼロからのスタートである。まずは自分の命を自分で守れる生徒の育成と、避難所で活躍できる生徒の育成があげられるだろう。単に防災知識だけに限らず、コミュニケーション力や問題解決能力などの育成も大切である。それらもまた、教員がどれだけ真剣に防災をとらえ、今回の震災の教訓を知り、生かすかにかかっているような気がした。

参加する前に抱いていた「今何ができるか」「今何をすべきか」という点に対して、いくつかの重要なヒントを得ることができた。自分一人ではできることも少ないができることからやっっていこうと思う。この研修に参加できとても有意義なものとなった。気仙沼で私たちのために協力してくださったすべての方々に感謝したい。

参考資料：気仙沼E S D共同研究紀要 持続可能な社会を担う児童・生徒の育成をめざして（宮城教育大学、気仙沼市教育委員会、気仙沼市学校教頭会）

絆を大切に「心をつなぐ」ボランティア活動

～気仙沼研修から得たものを語り継ぐために～

奈良市立平城西中学校 教諭 長山 誠也

1. 目的

被災地を訪れることにより、多くの人と出会い、語り合い、見て感じたことを生徒、地域に具体的に伝える。また防災意識の向上を図る。

(1) はじめに

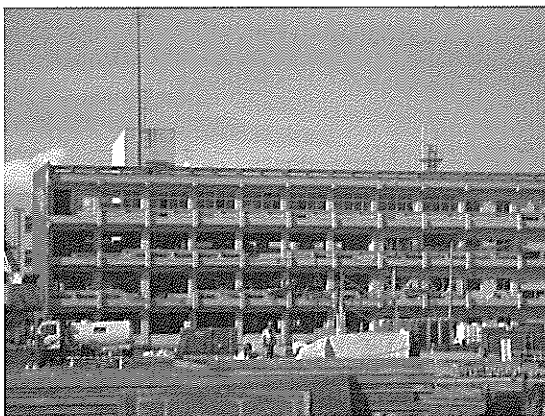
昨年の東日本大震災から、「今私たちに何ができるか」を生徒と話し合い、取り組んできたその内容の一部を紹介します。

取り組み内容

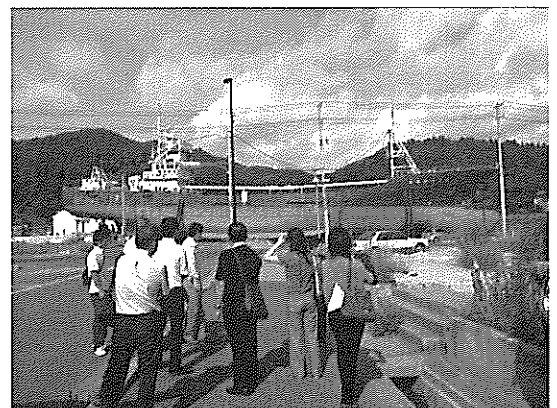
- ・昨年4月から、東日本大震災の被災地の方々に対して、今できることを考えるために学習会を行った。
- ・9月にDVDを視聴したのち、被災地の方々への募金活動を実施した。
- ・文化祭で、心をつなぐ ～絆～について考える時間を設けた。
- ・2月に気仙沼の先生方と交流し、電話、メールで現状報告をし合った。
- ・東日本大震災を風化させてはならないという思いから、もっと多くの人たちに直接、生の話を聞いてもらうために本年度、夏休みに講演会を実施する計画をした。
- ・7月27日（金）気仙沼の先生（3人）に来校してもらい講演会を実施した。100人近くの生徒が集まり、最初DVDを視聴し、現在の気仙沼の状況や復興に向けての生徒たちの取り組む様子などの話を聞き、その後3ブロックに分かれて先生方と生徒たちの交流会を行った。
- ・夏休みに学んだことを文化発表会で全校生徒に知らせるために、現地におもむき研修を受け情報を収集した。



気仙沼の先生の講演会の様子



気仙沼 向陽高校



第18共徳丸
「全長約60メートル、総トン数330トン」

(2) 考 察

生徒、地域に具体的に震災のことを伝えるための活動

今回の研修会で現地に出向き、集めた情報を生徒会本部役員の生徒に伝えるために、学習会を開いた。

文化発表会では、現地で撮影してきた写真を中心に、聞き取りをした内容を、全校生徒や地域の方々へパワーポイントでプレゼンテーションをした。生徒・地域の方々、先生方から高い評価をいただいた。

生徒と共に取り組んだ学習会で、生徒はもちろん私自身も多くの方々と出会い交流を深めることができ、より絆を深めることが出来た。この絆を絶やさないためにも、更に新たな取り組みを考え、取り組んでいきたいと考える。



気仙沼の先生とディスカッションをしている様子

防災意識を向上させるための取り組みとして

現任校の防災教育と、気仙沼市で行われている防災教育を比較すると、意識の違いに驚かされた。気仙沼市では、「積極的・発展的に、よりよい解決策を考える力」や「過去の災害を教訓に、未来に向けて、自分たちでできることを考える力」

「見通しや目的意識をもって、計画を立てる力」など、防災について、自分、地域、社会などの様々な視点から考えられていた。このことをまず教職員で研修し、地域と共にできる防災教育を考える必要があると思う。

この地域の防災教育の充実を図るためには、まず先進的な取り組みを行っている地域の教育を学び、地域に呼びかけ、他者のために惜しみない行動ができる力を、共に育てる必要があると考える。

以上の事柄を、現在勤務している校区に伝え広めていきたい。



9月18日 文化発表会の様子

(3) まとめ

今回、研修に参加させてもらって、この地域でできる防災教育を考えると、保・幼・小・中を通した一貫教育の中で何か大きな柱を立てる必要があると感じた。まず共通のテーマを設定し、体験活動や学習を通して、異年齢の児童生徒が互いの「協力」や「つながり」を大切にし、防災意識を自然に身に付けさせていくことが大切だと思う。

また、今回の研修会で学んだことをいろいろな場面で生徒一人一人に伝え、さらに地域の方々へ伝えることにより、震災を風化させない取組を継続していきたい。また、地域防災に役立てていきたい。

これからの社会は、多種多様な情報が満ちあふれそれを活用する能力が問われる。過去の災害を教訓に、未来に向けて、「一人一人が心がけること、地域に働きかけること」を探求していく。

自分にできることを明確にし、地域に働きかけていくことにより、共に学習していきたい。

最後に、多くの先生方と知り合えたこと、貴重な研修機会を与えてくださったことに感謝します。ありがとうございました。

奈良 Univnet 教員研修 in 気仙沼 研修に参加して

奈良市立済美南小学校 教諭 竹本貴美子

(1) はじめに

東日本大震災の被災地の1つである気仙沼市に行き、現地視察研修とユネスコスクール研修会に参加した。被災地の現在の様子や、防災教育でESDに取り組む気仙沼市の実践を知ること、防災やESDについて理解を深めたいと考える。

(2) 考察

現地視察研修

気仙沼港周辺の魚市場や水産加工工場があったと思われる場所には、建物の基礎のみを残した広大な土地が広がっており、所々に1階部分が損壊した建物が残っていた。復興どころか復旧もままならぬ状態である。沿岸部は地盤沈下が起こっている為、埋め立て作業を行ってからでないとな建物建てられず、埋め立て作業自体もまだ途中段階だった。

少し沿岸から離れた地区であっても、建物の基礎のみが残っている部分があった。タイルや割れた食器、炊飯ジャー、リモコンが残っており、住宅地であったことが窺える。しかし、そのすぐ近くの少し小高い場所にある民家は津波の被害を受けた様子がなかった。これは、研修中に何度も聞いた、「津波時には距離ではなく高さが安全に繋がるのだ。」ということを確認している。大津波を数十年おきに繰り返し経験してきている気仙沼では、その度に教訓として建物を高い所に建てるようにして

きているが、毎回教訓が薄れてきたころにまた津波の被害に遭うということを繰り返してきたのだそうだ。小高い場所にある民家はどれも比較的古く、津波に流された低い場所の民家は新興住宅地だったらしい。昔の津波の教訓を活かし、古い民家は小高い所に建てられ、そこから何十年と経つにつれて教訓が薄れてゆき、新興住宅地が低い場所に出来上がったのだと考えられる。

「災害は忘れたころにやってくる」とよく言われるが、この“忘れたころ”がやってこないようにする為、教育の果たすべき役割を考えることが重要であると思った。また、1年半経った今に至っても現地の復旧が進んでいない事実は、奈良に戻って子ども達に伝えなければならぬと強く感じた。災害の恐ろしさ、災害に遭っても強く生きる人々の存在、災害に対する備



沿岸部の地盤沈下している建物跡



流された民家の基礎（手前）と、残った民家（奥）

えの必要性、被災地に対して今自分たちにできることは何か、など子ども達に伝え共に考える機会を持ちたい。

ESD／ユネスコスクール研修会

最初に、ESDの必要性やメリット、今後のESDの目指す未来像、気仙沼におけるESDプログラムの開発と実践について説明を受けた。ここでは、ESDそのものを持続可能にしていくための様々な仕組み作りが重要であることを学んだ。その為に必要なものは、①プログラムの作成、②大学や地域との連携、③資金である。本校では、①のプログラム自体が不十分である。毎年総合的な学習のプログラムチャートは作成しているものの、ESD的な視点をもって、誰が担当しても持続し得る内容であるかと問われると、少し弱い。改善の為に、多くの教員が参画して意見を出し合い、無理なく継続できる内容を検討しなければならない。このことを課題として、今後プログラムの改善に取り組んで行きたい。

次に、大谷小学校での取り組みについて発表があった。気仙沼では、元々自然豊かな環境を守ることをテーマにESDの取り組みが行われていたが、震災後緊急に取り組まなければならない課題として防災教育がESDのテーマとなった。1年半という短期間で、しかも被災して十分な環境が保障されていない中、小中連携で地域の方も一緒に取り組まれたことには驚き、気仙沼の先生方の熱意と底力を感じた。しかしそれは、それだけ課題が目前に迫っており、必然性のある教育活動であったのかもしれない。

取り組みの成果として、「地震や津波について知れば知るほど絶対安全はあり得ないのだと思った。だからこそ今、何をすればよいのか、何を備えればよいのかを真剣に考えた。」「近所の人たちとのつながりが弱いと防災がうまくいかないと思う。仮設住宅のように見知らぬ人たちが集まった場所では、みんなで触れ合う場所と行事があればよいと思う。」という児童の感想が紹介された。気仙沼では防災教育でのアプローチであるが、児童の感想に見られる「未来像を予測して計画を立てる力」や「他者との協力やつながりを尊重する態度」は、奈良の世界遺産教育でも同じように育てられる力であり、ESDの目指すところである。大谷小学校の取り組みでは、事前に「ESDの構成概念と重視する能力・態度」を軸に、子ども達に防災教育を通してどのような力をつけたいのかを細部にわたって設定されていた。そうすることによって、学習のあらゆる場面でそれらの力をつけるチャンスがあることを教師の側が認識しやすくなるのだと考える。本年度の世界遺産学習を進める上で、この視点を取り入れ目標をよりはっきりとさせると、学習に深まりができるのではないかと期待する。

(3) まとめ

今回の研修で、ESDの自分の取り組みの粗さが浮き彫りになった。事前のプランや目標の細やかな設定を行い、学びのチャンスを見逃していないかを見直したいと思う。また、その取り組みを持続可能なものにして行く為、校内での検討も行いたい。

防災に関しては、被災地の復旧がなかなか進んでいないことを周囲に拡散し、風化させないよう努めたいと感じた。そして、あらゆる災害に対して、自分もいつ被害に遭うか分からないという視点で、防災について真剣に考えられるよう、今回実際に見聞きしたことを子ども達にも話していきたい。

(1) はじめに

今回の研修参加にあたり、東日本大震災からの復興の進み具合や、現地の人の思いを感じたいと考えていた。また、防災教育と ESD 教育をどのように結びつけるかについて研修を行いたいと考えていた。自分自身の目で被災地を見て、耳で声を聞き、考えたいという姿勢で研修に臨んだ。

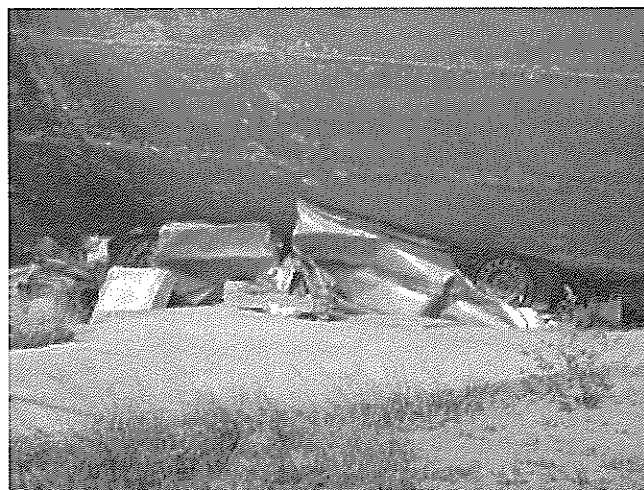
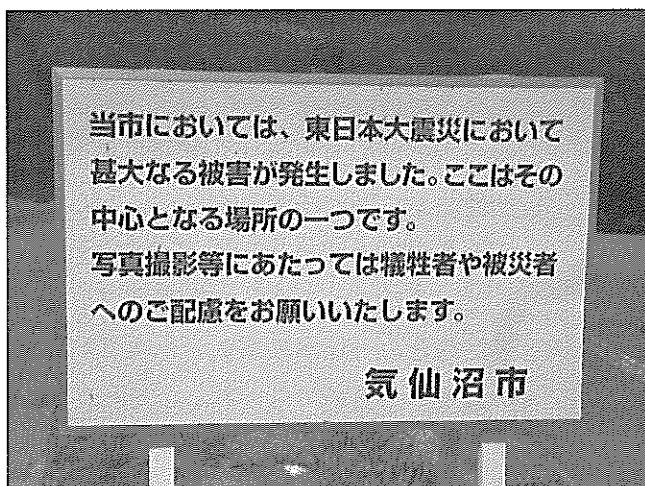
私自身、社会科の教員として、地理的な観点から、政治的な観点からも研修したいと考えている。

(2) 考察

①復興について

初日の気仙沼港付近の視察の時、観光客風の人が記念撮影を行っていた。この記念撮影の風景を見て被災した人々はどのように感じるだろうかと私は疑問に感じた。観光客が増えることでの経済効果と、被災した人々の心情はどのようなものか考えるきっかけとなった。また、鹿折地区に打ち上げられた「第18共徳丸」を震災遺構として保存するか、撤去をして以前の生活に戻すかという選択も気仙沼で議論されていると聞き、復興に向けての課題を感じた。

3日目に、その第18共徳丸の視察を行った。そこにもやはり大勢の観光客がいた。我々のそうであるが、たくさんの写真を撮影した。その中で右のような表示を見つけた。この表示を見て、我々は被災地において、また、被災した人に対し「配慮」しなければならないと気付いた。その「配慮」には、答えがなく、ひとりひとりが考えて行動することであると考えた。「配慮」というのは、被災地の人に対してだけでなく、すべての人に対して行うものであり、何も被災地だからといって特別なことをする必要はないのではないかを考えた。



②被災後の児童生徒の様子について

今回、私たちを案内して下さった及川副参事や鹿折小の小野寺校長から、震災後の児童生徒の様子について聞くことができた。その中で、震災後、不登校や問題行動が減り、「大人っぽくなった」子どもが増えたということを知った。子どもというのは、本来、問題行動などを起こし、徐々に成長していくものと考えますが、子どもたちが無理をしていないか心配になった。また、震災から1年半が過ぎ、反動が来ないか心配であるという現地の先生方の心配を聞いた。

このこと考える中で、私は次のようなことも考えた。子どもというのは、本来、我慢したり耐えたりすることができものであり、平和で豊かな社会が、子どもの「甘え」を導いており、むしろ、被災地の「大人っぽくなった」子どもたちの姿が、本来、子たちの持っている姿ではないかとも考えた。

また、保護者の状態も子どもに大きく影響していると聞いた。震災から1年半が過ぎ、仕事や生活が安定しない保護者の影響を受け、子どもたちの成長に変化が見られるという心配がある。保護者が子どもに影響を与えるというのは、どこでも起こりうることであるが、震災の影響で特有の問題が起こっているところに気付くことができた。

今後、子どもたちがどのように成長するか楽しみでもあり心配でもある。

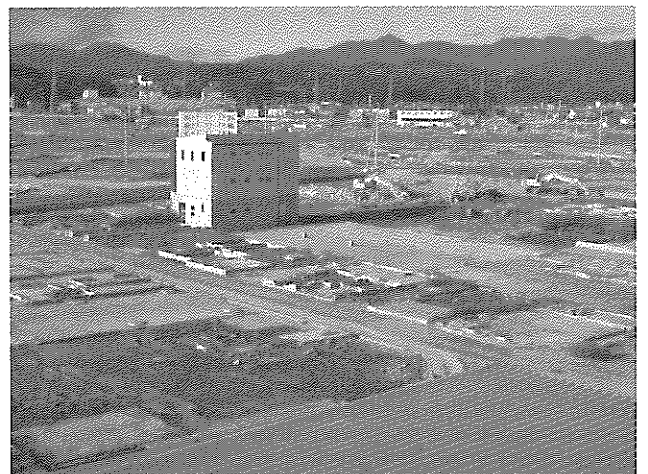
③防災教育と ESD 教育について

気仙沼地区が取り入れている地域を巻き込んだ防災教育が、ESD の観点から有効性があると考えた。生徒は大半の時間を学校外で過ごし、災害はその時間に起こる可能性も十分ある。また、学校は、避難所としての役割も果たし、災害後の人々の生活基盤ともなる。そのような観点から、学校外でも子どもの命を守る教育をおこなっていかねばならないと感じた。また、「自分の身をまもる力」・「共に助け合う力」・「行政との連携」に加え、NGO や NPO などの機関とも連携し、防災教育を行うことがより、有効であり、多様な防災意識や行動力を養えると感じた。ネットワーク・つながりを意識した防災教育を行いたいと考えた。

(3) まとめ

被災地の人々の悩みや気持ちに触れることができた。先に述べた「第18共栄丸」の保存問題についても、賛否があり、結論が出ていない状態である。復興への街づくりについて、住民の間大きな議論が交わされている。私は社会科の教員として、このような問題に直面したとき、真剣に考え、自分の意見を持ち、自分たちの街づくりに参画する子どもを育てていかなければならないと感じた。

研修に参加する前は、どのように被災地で過ごすか、被災した人々とどのように接すればよいか悩んでいたが、「配慮」するということに気づき、何も特別なことをしなくてもよいと考えるようになった。普段から心がけている周りの人々への配慮が、被災地においても同じことであると考えた。



「学ぶ喜び」プロジェクト報告書

富雄第三小中学校 河野晋也

(1) はじめに

気仙沼市における研修の目的は大きく二つあり、第一に東日本大震災後1年半が経過した現在の状況と市の取り組み、主に教育行政・教育現場での取り組みを確認し、震災の反省を生かした防災教育の様子を知ることである。第二に先進的な気仙沼市のESDの取り組みについて、その経過や市全体、または学校ごとの取り組みを学ぶことで本校がこれから目指すべきESDのあり方を探ることである。

特に二点目については、まだESDが浸透していない本校の状況にあつて、どのように取り組みが始まり、組織的な広がりを作り上げることができたのかは非常に学ぶところが多い。ESDは教員個人で進めることができないものであり、学校全体としての方向性をもつことが非常に大切である。扱う教材は差があつたとしても質が良く学びの連続性を意識した授業を進めるためには、気仙沼市の取り組みは参考になると考えた。

(2) 考察

①防災教育

東日本大震災では、市内住民1400人が犠牲になるという大きな被害を受けた。市内事業所の8割が機能しなくなり、大島が二つに割れる、というほどの津波に襲われ、命を落とした児童もいる。その中でも99.8%の児童生存率から学ぶことは多い。震災後の様子から学ぶことをいくつかに分けて考察する。

あ) これまでの防災教育

奈良ではなじみがないが、気仙沼では津波に対応できるようにするための防災教育が行われていた。児童生徒の動きにもその成果はみられるが、話の中で特に思うことは現場の教員が対応していることである。避難場所を幾度も変えるという判断や、孤立した状況でどのように命を守るか、受け渡しのタイミング、火災報知機も放送機器も使えない状況での学級対応など個々の教員や管理職に判断をゆだねられた場面も多く耳にした。地域全体を見渡した時地域のつながりがあまり強くないところでは、昼間に多くの大人がいて指揮系統がはっきりしている場所の一つとして学校は大きな役割を果たすと言える。管理職の役割や防災組織の大切さが感じられた。

い) 先人の言い伝え

気仙沼市では古くから「地震が起きたら津波が来る」と言い伝えられてきた。気仙沼市に住む人は、常にこのことを生活の中で意識していたようであり、防災教育のベースになっている。これまで実際には体験していない津波についてこれほど意識が高いことに驚かされる。体験した津波への備えは多くの人ができることであるが、子どもたちも大人もこれほどの津波は体験していないのである。一つの事件や悲劇が起きた後には、常に「風化」の問題が取り上げられる。原爆投下などが良い例である。細いものであつたかもしれないが確実に伝承されてきたことは、非常に興味深い。被災地視察に行ったときに目にした、これまでの津波の爪痕や様々な碑や「大島が割れる」という伝説など、生活の中で目にするとその伝承を裏付けるものがあることが伝えることを可能にしたのではないだろうか。これは奈良の世界遺産学習で「本物にふれさせる」という意識にも通じるところがあるように思える。

今回の震災においても新たに多くの爪痕が残っている。打ち上げられた第十八共徳丸が最も顕著な

例であろう。家をつぶされた住民や思い出したくない地域の思いは尊重すべきであろう。しかし、それを残すことで新たに伝承のきっかけとなるかもしれない。原爆ドームを残すべきか、という議論によく似た形になっている。

ここで課題として挙げておくべきことは、バイアス（偏見）のことである。今回のように想定以上の被害が起きた場合、先人の教えが個々の判断を誤らせるきっかけとなることもある。「今回はどうなのか」「前例は生かせるのか」といった判断をするためには、日ごろから批判的に物事を見る目や自身で必要な情報を集めたり判断する力を備えておく必要がある。先人の知恵があること自体が良いのではなく、それを生かしたり取捨選択できる人間がいることがESDの目指すべきところだと感じた。

う) 防災教育プログラムの改善

想定以上の被害を起こした震災であったこともあり、防災教育の見直しが急がれている。現地の教員の言葉では、「それでも、震災前の防災訓練は不十分だった」という声があった。我々が自校の防災訓練をみても、避難ルートと約束事、注意事項の確認程度でしかできていない。い) とかかわって、この教訓が生かされることが一過性のものではなく、今後も改善されながら長く続けられることが大切である。

階上中学校の防災教育は、3年のサイクルで自助・共助・公助とテーマを毎年変えて行っている。年3回の訓練で身に着けられることは限られていることや震災時の中学生の役割を考えれば、効果は大きいと思える。ただし、小学生低学年については、毎年同じものをして定着させることも大切であると思える。中井小学校のような下校中の避難を想定した問題解決型避難訓練を行ったり、突然翌日に防災靴を持ってこさせる授業、自宅での対応を考えさせる学校もあるが、小学生においてはこちらのような自身の判断力・危機対処能力を高める学習が優先的に行われるべきだと感じた。い) どころで起きるかわからないというのが自然災害の本当の恐ろしさである。鹿折小学校での講演にあったように「10回のうち8回は学校外で起きる」という事実を考えれば、「今日は避難訓練をします」と伝えたくで行う訓練や、校内だけで行う避難訓練では不十分であると感じた。

②ESDの推進

あ) カリキュラムの開発

複数の教員が手を加え改善していくことでカリキュラムはより良いものになっていく。そのためには、単年度で終わってはもったいない。及川先生の講義では①無理のないプログラム作り②多くの教員がプログラム作りに参加すること③地域や大学と連携して教員が移動してもプログラムが維持できる体制を整える、の三点がカリキュラムを持続していくために必要であるといわれた。加えて、より魅力的なプログラムにするためには、第一にESDのメリット（ねらい）を意識したものである必要がある。たとえば、近年失われている「つながり」であったり、行動や生き方を考えさせる授業であったり、児童のニーズに合ったものであることなどである。第二に地域に根差したものであること、三つ目に国際感覚を身に着けさせるなど広がり意識することも大切である。

第一に示したESDのメリットを意識した授業づくりのためには、そのカリキュラムが何を狙っているものなのかを教員がはっきりと知っておかなければならない。どのような教材を使い、どのようなことに焦点を当てるのか、そこでどのような力をつけさせたいのかをはっきりとさせたい。気仙沼市ではプログラムチャートを使ってそれを示している。プログラムチャートでは、学年のESDの取り組みを【観察や探究する内容】【体験学習の内容】【教科との関連】などに分けて示している。これにより、一年を通して身につけさせたいESDの力が明確に示され教員の理解を進めることができる。東京・東雲小学

校のESDカレンダーと似ている点もあるが、身につけさせたい事柄が明確になっている点と見やすさという点では取りかかりやすいように感じる反面、他教科との関連においてはESDカレンダーの方が詳しいようでもある。本校の様子を省みると、小学校ではプログラムチャートの活用がスタートとしては望ましいように思える。逆に中学校では教科担任制という点を考慮すれば、ESDカレンダーをベースとしてプログラムチャートの要素を取り入れていく方が全教員に浸透しやすいように感じた。

第二に示した地域に根ざした教育という点では、それぞれの学校が様々な分野に取り組んでいることがわかる。海の恵み、食育、防災、国際理解など、それぞれの学校の特色が大いに出ているように感じた。奈良市においては世界遺産学習という点で統一されているが、近年の世界遺産学習の広がりを見ると、「地域から学びを広げ、地域に学びを生かす」ということが本質であるように思える。身近であり課題を理解したり現実を理解しやすく、調査活動や考えを深める学習がしやすく、行動の効果がわかりやすいという点で地域から学ぶことは有効である。問題は、地域の遺産にこだわりすぎてしまうことではないだろうか。防災教育のところで述べたように、先人から学ぶことは教育のベースである。しかし、それに固執してただ地域の歴史に詳しいだけでは、ESDのねらいとは外れてしまう。本校のように新興住宅街にある場合であっても、古い街並みを残す校区であっても、それに詳しくなることが目的ではなく、そこから何を学び、自分の考えを作り上げることができるかが大切であることは常に言われていることである。

い) 体制づくり

小中一貫教育をすすめる奈良市においては、カリキュラムの系統性を考えていくことは重要であろう。そのためには、体制も見直す必要がある。あ) で述べたようなカリキュラム作りにはできる限り多くの教員が参加することが必要と述べたが、もちろん小中の教員が参加していくことが不可欠である。小学校で学んだことが中学校で生かされないのでは行動の変革や生き方を考えさせるには至らない。小学校に比べて授業時数的な制限が多い中学校では小学校の学習内容を理解してもらうこと、学習内容を厳選してもらうことが必要になる。また、地域や大学などの専門機関にも協力を仰ぐことでより確かな体制づくりが可能となる。外部の協力を得られれば、小中で一貫した流れを生みやすいし、単年で学習カリキュラムが大きく変わってしまうこともない。

これらのことを実践していくためには、これからESDをすすめる学校においてはどれだけ教員の理解を得られるかが焦点になる。それまでの学習内容を精査して、ESDにかかわることでより教育の効果が高まる事例から取り入れていくことが可能だろう。

(3) まとめ

以上のことをふまえ、本校のESDをすすめていくことを考えると、まずはESDのねらいやメリットを十分に教員が周知していくことが必要であろう。学びの連続性、言語活動などの本校の教育目標に沿う形でESDのカリキュラムを見直していく必要がある。そのためには、まずプロジェクトカリキュラムを作り、総合的な学習の時間で何をどう学び気付けさせるのか、はっきりさせておきたい。現在「総合的な学習の時間の重点」を作っているので、それを改定していくことで本校なりのプロジェクトカリキュラムが作れるのではないかと考えている。外部講師や専門機関との連携については、これまでもリストとして作成しているが統括する外部のコーディネーターは不在である。より円滑にすすめるためには外部のコーディネーターもこれから必要になってくることが考えられる。特に、オーストラリアのハリソンスクールとはこれから姉妹校としての連携が始まっていくので、機会を有効に活用する体制づくりが必要である。

「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

教員の資質能力向上

社会からの尊敬・信頼を受ける教員

思考力・判断力・表現力等を育成する実践的指導力を有する教員

困難な課題に同僚と協働し、地域と連携して対応する教員

教員が探究力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠である(「学び続ける教員像」の確立)

ESD の推進

学習指導要領にESDが含まれる

2014年 ESDの10年
国連ユネスコ最終年会合

グローバル化

東アジア教員養成のスタンダード構築

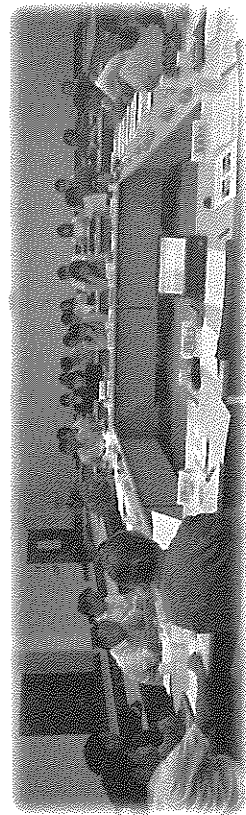
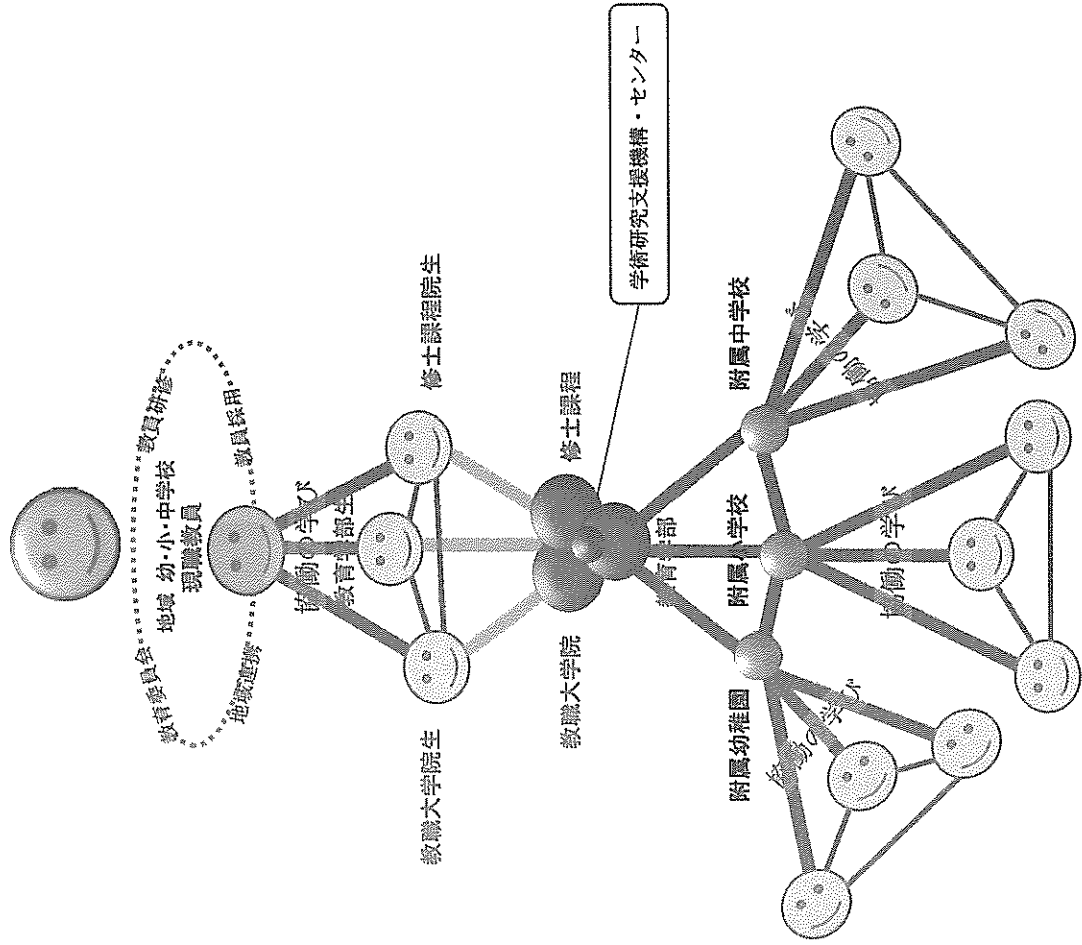
地域の有機的な連携の上になつての大学のセンター校的機能の拡充

テーマ
「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員養成・ESDの教材・カリキュラムの開発

教育学部、大学院教育学研究科(修士課程・専門職学位課程(教職大学院))と附属学校園の連携による教員養成機能の高度化と充実

テーマ
附属学校園の「学び合い・育ち合い」機能の強化のための研究開発

「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員



ACCU 日米教員交流会で感じたこと

物質科学専修 2 回生 後藤田洋介

日米間の教員の交流、学校間の交流のために、はるばる日本を訪れたアメリカの先生方を私たちユネスコクラブでお迎えしました。私たちは奈良教育大学、そして日本の良さをお伝えしようと、小グループによるキャンパスツアーを企画しました。残念ながら私はこのキャンパスツアーには参加できませんでしたが、この後に行われた交流会に参加しましたので、このレポートに感想を書き記したいと思います。

この活動を通して私が感じたことは大きく分けて三つあります。ひとつ目に、アंकロンチームについて、二つ目に身近なものの良さについて、そして三つ目に企画から関わることの大切さです。

一つ目のアंकロンチームについて。私はアंकロンチームではありませんが、前々からその活動を目にし、その練習風景をカメラに収めてきました。彼らが奏でる音は、日に日に音楽へと進化し、初舞台である交流会でその音色を耳にしたとき、私は感動しました。一つ一つの音が組み合わさることで、ここまで一つの音楽に、みんなの心を一つにすることができるのだなあと感じました。

二つ目に、身近なものの良さについて。私は、もともとキャンパスツアーに参加する予定ではなかったので、この企画に参加する必要はありませんでしたが、しかし、活動の記録を作るため、雑務を行うために、横でその活動風景をのぞかしていただきました。その中では、キャンパスツアーでどこに回るのかを決めるのに四苦八苦していたような気がします。まさに、身近な良さを知らないのだなあと思いました。そういう私もいろいろな奈良教育大学の良さに気付かされるきっかけになりました。

最後に企画段階から関わることについて。前項でも書いたように私はキャンパスツアーには事情があり参加することができませんでしたが、その様子は企画段階を知っていることだけでなく、その後の交流会での様子からもよくわかりました。まず、ユネスコクラブ員が終始楽しそうに交流会に参加していたこと、そして、交流会の名にふさわしく、みんなが国際交流できている姿を見て、私は「キャンパスツアーを成功させることができたのだなあ」と感じました。企画している段階を知ること、その成功が、まさに自分も一緒に企画していたような気がしました。

以上の三点が私がこの交流会を通して考えたことです。どの項目でも、企画や用意の段階を考えることなどに注目しました。こうして、企画には参加できませんでしたが、その姿を見ることで、見えてくるもの、得られるものがあると感じられた良い機会でした。



企画を行っている様子

ACCU 日米教員交流会に参加して

数学教育専修1回生 濱崎千華

6月26日、ACCU（ユネスコ・アジア文化センター）日米教員交流会が行われました。16時に到着後、ESD・世界遺産教育に関する講義を受け、学生の案内のもとキャンパスツアーをし、18時から交流会を始めるといった流れでした。私は5コマまで講義が入っていたので、残念ながらキャンパスツアーには行けず、交流会のみ参加しました。

今回この交流会に参加して、経験できたことが2つあります。1つはアングロンの演奏、もう1つは国際交流です。



終始緊張のアングロン演奏

1つ目のアングロンの演奏ですが、交流会のはじめに行いました。アングロンとは、インドネシアの伝統的な楽器で、竹製楽器です。1つのアングロンで1つの音が出るので、1人1つ又は2つの音を担当して、曲を奏でました。5月中旬から活動を始め、交流会に向けて練習を積んできました。その練習の成果が発揮され、演奏は大成功だったと思います。私はとても緊張したけど、楽しく演奏できました。最初にアングロンの話を聞いた時は、それがどんな楽器かも知らなくて、実物を見ても音の鳴らし方すら分かりませんでした。でも、インターネットの動画サイトで調べたり、

哲也さんや真理さんの指導を受けるうちに、しっかりと音が出るようになって嬉しかったです。演奏に参加してよかったです。

2つ目の国際交流です。食堂の方が作ってくれたごちそうを立食しながら、アメリカの方とお話をしました。私は、今まで英語が得意だと思っていたけど、それは筆記ができていただけで、実際に英語で会話をするのはそう簡単なことではないと痛感しました。大学の紹介は身振り手振りでどうにか伝えました。アメリカの方はとても簡単な英語で話しかけてくれるのに、その文を頭の中で組み立てて訳して…なんてやっていると会話がなかなか続かなくて、苦戦しました。通訳をしてもらったり、笑ってごまかしてしまったりと、反省すべきところがいくつも見つかりました。思うようにはいかなかったけど、ずっと黙っていても何も変わらないし、何事も経験なので、今回の反省をいかして次の機会ではもっと積極的に頑張りたいです。

以上の2つを経験できました。アングロン部隊として最高のスタートを切ることができたし、国際交流もできて、とても充実した有意義な1日になりました。これからもいろんな活動に参加して、ユネスコクラブと共に私も成長していきたいです。

「日米教員交流会」を通して学んだこと

英語教育専修 桑 綾香

2012年6月26日、「日米教員交流会」が行われた。アメリカ全土から12人の小・中・高の先生方が来日され、日本の現職教員と教員を目指す学生たちと交流した。当日はまず中澤先生のESDについての講義を聴いた後、6班に分かれキャンパスツアーを行った。教育資料館や弓道場などを周り一通り説明が終わったところで、生協学生食堂にてアンクロン発表、食事会を行った。

私はこの日米教員交流会の活動をする中で、強く印象に残ったことが3つある。具体的には、第一に交流会までの準備、第二にアンクロン練習、第三に食事会である。

第一の交流会までの準備についてである。私は一回生ではあるけれどもキャンパスツアー3班の班長を務めさせていただいた。しかし、まだ大学について知らないことが圧倒的に多くツアープランをなかなか立てることができなかった。そんなとき、同じ班の先輩方に話し合いの日時を決めていただいたり、「ここに行こう!」とアドバイスをいただいたりして、力になってくださった。当日のツアーはとても楽しいものになり、先生方とも打ち解けることができ、無事成功したと言えるだろう。先輩方がいなければどうなっていたらと思うと、より先輩方のありがたさを感じることができる。

第二のアンクロン練習についてである。アンクロンとは竹でできたインドネシアの伝統楽器で、一人一音担当して演奏する。このスタイルは私にとって、とても新鮮なものであった。私が中学生から続けている吹奏楽では、一人休んだところでその影響はさして大きくない。しかし、アンクロンではたった一人、たった一音欠けるだけで演奏は成り立たなくなるのである。これが私にとって新鮮なものであった。そんな責任を背負いつつ、時間のない中ちよつとずつ皆で練習していく過程は、皆で一つのものを作り上げていく喜びを感じることができた。



最後に笑顔でパチリ!

第三の食事会についてである。私はここでアチリア・ゴゴール先生とお話する機会があった。私の拙い英語と、日米教育委員会の方の通訳でなんとかコミュニケーションをとれるといった状態であったが、先生と様々なことを話すことができた。その中で一番印象的だったのは、「私は日本人の他人を尊敬する態度に感動しました。」という言葉であった。私はそんなアチリア先生に「思いやり」という日本語を教えてあげた。

以上の3つが交流会を終えた今、最も心に残っていることである。しかし、残念なことが一つある。それは、英語を使って上手くコミュニケーションを取れなかったことである。これからはもっと勉強し、いつかアチリア先生の学校を訪ねたい。

アングルンは人と人との架け橋

数学教育専修 1 回生 幸田 早苗

「アングルン」と聞いて、「なんだ、それは。」とお思いの方が多いと思います。まずはアングルンの説明をします。アングルンとは、インドネシアの竹製の打楽器です。インドネシアのジャワ島の西ジャワに起源を持つといわれています。竹の中をえぐって、オクターブに調律した 2 本の竹筒とそれをつなぐ竹枠からなり、ゆすって竹筒と竹筒をぶつけて音を出します。音程は竹の長さ・太さによって異なり、ハンドベルのように何人かで分担して音階を形成します。インドネシアの脳卒中センターでは、リハビリの一環としてアングルンを使用した音楽療法が取り入れられています。

アングルンの演奏を実際にやってみて、私はアングルンは人と人との架け橋だと思いました。その理由は 3 つあります。第一に能力・世代を越えたつながり、第二に演奏者どうしの心のつながり、第三に国境を越えたつながりです。

第一の能力・世代を越えたつながりです。アングルンは演奏がとても簡単です。ただ自分が担当しているアングルンをタイミングよく揺するだけです。だから、音楽が得意な人も、そうでない人も、年齢も関係なく簡単に演奏できますし、上手・下手の差があまり大きくあられません。アングルンは、能力・世代の差をつなぐ架け橋なのです。

第二に演奏者どうしの心のつながりです。一人ひとりが一つの音を担当するので、誰か一人が抜けると、一つの音が抜けたこととなります。そうすると、演奏が途切れてしまいます。一人ひとりが欠かせない存在となるわけです。アングルンは演奏者どうしの心をつなぐ架け橋なのです。

第三に国境を越えたつながりです。たとえば、先日の日米教員交流会では、アメリカ人の先生方のために演奏しました。このとき、間接的ではありますが、インドネシアとアメリカと日本がアングルンを通してつながることができました。このように海を越えたインドネシアのことをアングルンによって知ることができ、興味を持つことができます。このようにアングルンはインドネシアと世界をつなぐ架け橋なのです。

以上の理由から、私はアングルンは人と人をつなぐ架け橋だと信じています。アングルンでいろいろな人とつながりを持つことができるのです。私はこれからもアングルンでいろいろな人とたくさんつながっていかうと思います。



日米国際交流会での演奏

貴重な経験の数々！！日米教員交流会

英語教育専修 1回生 山口 絵理香

みなさんは、貴重な経験をしてみたいと思ったことはありますか？世界を一周したい、宇宙に行って生の惑星をこの目で見てみたい、総理大臣と話をしてみたい、見たことも聞いたこともないモノに出会いたい、等々、貴重な経験をいくつか想像しているだけでわくわくしてきますね。貴重な経験は、授業では教えてもらえない様々な学びを与えてくれます。

私もこの交流会で、たくさんのことを学びました。そこで、その中の3つを取り上げてみたいと思います。1つ目は英会話、2つ目にキャンパスツアーのプラン立て、3つ目にアングロンについてです。

1つ目の英会話についてです。私は英語科ということもあり、たくさんアメリカの先生達といっぱい話すぞ！！と意気込んでいたのですが、そう簡単にはいきませんでした。まず、声が出ない。実際にアメリカの人たちを前にすると、自分の英語は通じないのではないかと、これで本当にあっているのか？とか、聞き返された際に答えられなかったらどうしよう、と考えてしまい怖かったです。それでもとにかくやるしかない！と決め、話す次第に会話ができるようになりました。大事なことは、あっているかどうかや、フレーズを多く知っているかどうかではなく、伝えよう、楽しもう、という自分の意思なのだ学びました。また、集団で話を聞いている時にふと質問を投げかけられたときのアメリカの人達の即答ぶりには大変驚きました。まず自分の意見を伝えなければ話が進まないし、質問者にとっても失礼だなと反省しました。

2つ目はキャンパスツアーのプラン立てについてです。イベントのプランを最初から最後まで自分達だけで考えるのは初めてでした。入学してまだ3か月しか経っておらず、奈良教育大学のこともよく分かっていない中で、アメリカから来た人たちが喜んでくれそうな所を探すのは結構大変でした。結構考えて最終的にはかなり紹介する場所が決定したのですが、今度は、行くところが多すぎてしまい、少しギリギリな計画を立てたのですが、結局全ては紹介できませんでした。やはり話が通じにくいので、時間がどんどんすぎてしまいました。ここで学んだことは、的を絞ること、たっぷり余裕をもって計画を立て、盛り上がるゲームなどを用意しておくということ。ゲームなどで盛り上がると、話しやすくなり、通じやすくなると思います。

3つ目はアングロンについてです。私は生まれてこの方アングロンという楽器の存在を知りませんでした。アングロンはインドネシアの楽器で、並んでいる竹の筒をゆらして震わせることでコロコロときれいな音が鳴る楽器です。初めてアングロンを目にしたとき、一つ一つの音をばらして使うことができることに驚きました。そしてその音色の虜になりました。森林の中にある小川で転がる小石のイメージで、ほんとに癒される音でした。初めてみた楽器で練習時間も短く、本番に全員が楽譜を忘れるというハプニングも起こりましたが、先輩が(先輩も初めてみた楽器でしたが)一生懸命教えてくれたおかげでなんとか成功させることができました。弾いてやるんだという意志の強さが本番のハプニングにも負けないくらいの力を発揮させたのだと思います。

このように、貴重な経験は授業では教えてもらえない様々な力を身に付けてくれます。私は、貴重な経験をたくさんできるようにこれからもチャンスは逃さないように周りに積極的に関わっていきたいと思います。

日米教員交流会に参加して

奈良教育大学教職大学院 松浦 慎

日米教員交流会の一環で、アメリカの小中高の教師約13名が奈良教育大学を訪れた。持続発展・文化遺産教育研究センター中澤先生のESDの取り組みについての講義の後、小グループに分かれて大学構内を本学の学生がアメリカの教員を案内した。「日本的なもの」、「大学の雰囲気がかかるもの」を見てもらおうと考え、パルテノン、弓道場、国際交流室、教育資料館などを周った。その後、学生食堂でアングロン（インドネシアの楽器）の演奏を披露し、懇親会で交流を行った。

短い時間であったが、アメリカの教員と顔を合わせて情報を交換できたことはとても有意義な時間であった。アメリカ教員の中には日本語を少し話せる方もいた。受け入れ国は日本であり、相手が日本語を話し、日本語を理解しようとするべきだ、という考えはあるが、やはり共通語、相互理解ツールとしての「英語」もある程度は話せたほうがいいのかもしいかなと思った。

今回のイベントで、意識したことは3つある。1つ目は「ハプニング時の運営のサポート、2つ目はアングロンの出し入れサポート」3つ目は「現場の教員との橋渡し」である。

1つ目は、主催者の意図をくみ、臨機応変に動けるようにするという心構えだけのつもりだったが、実際にその場面は起こった。1つのグループが集合時間になっても戻ってこなかったのだ。全体は次のプログラムのために移動しなければならない。そこで、自分がそこに残り、遅れて帰ってきたときにスムーズに対応できるようにした。状況を逐一運営の代表に伝え、遅れて戻ってきた本人らにも事態を伝えて、少しでも早くプログラムに合流できるようにと気を配った。

2つ目はアングロンの譜面台の出し入れのサポートである。アングロンの数も多く、置き場所や通り道を整理する必要があった。全員が運ぶのに夢中になってしまうと詰まってしまったり滞ってしまうことがある。その状況を見て、通り道等を把握し、置き場所や動線を考慮してできるだけ混乱なく動けるように指示した。

3つ目は、現場の教員との橋渡しである。交流会には現場の教師がたくさん参加していた。意識して教師と学生が出会う場面をつくった。数年後、同じ現場で仕事をするかもしれない両者を引き合わせることで、お互いの意識が少しでも高まればと思う。現段階ではすぐに効果はないかもしれないが、数年後には何かの役に立つものと信じている。

自身のコミュニケーション能力不足もあり、アメリカ教員との継続的なつながりには発展しなかったが、アメリカ教員と出会い、時間を共有することができたことは貴重な体験となった。アメリカ教員がどんな印象をもったかも知りたい。次回こういう機会があれば、もう一步踏み込んで授業交流をしてみたり、「児童観」「教育観」についてじっくりと話をしたりしてみたい。共に、未来を創っていく仲間として、お互いを理解しようとするのがよりよい教育、よりよい未来につながるものと確信している。

日米教員交流会を通して感じたこと

文化遺産教育専修 1 回生 上村 優奈

6月26日、奈良教育大学で日米教員交流会が行われました。中澤先生のESDに関するお話を聞いた後、グループごとに分かれてキャンパスツアーを行い、そのあと生協食堂でアングロンを演奏したり、おいしいご飯を食べたりしながらアメリカの先生との会話を楽しんで交流を深めました。

さて、私が今回の日米教員交流会で学んだことは、次の2つです。一つ目は協力することについて、二つ目にアングロンの演奏についてです。

一つ目の周りの人と協力して物事をつくりあげる楽しさについてです。私は2回生と院生と一緒にグループでキャンパスツアーを企画、実施しました。生徒だけで企画すると聞いて不安でいっぱいだったのですが、先輩方と話し合いをしているうちに考えるのが楽しくなってきた、自分でも驚きました。私はあまり自分の意見を言わずに人の言うことを聞いているだけのことが多いのですが、今回の話し合いでは自分が考えてきたことや思ったことを言うことができました。そして周りの人が私の言ったことに共感してくれたり、さらに他の人の考えが重なっていくのがとても楽しく、自分が受け入れられているような気がして嬉しかったです。これから先もいろんな人と話し合う機会がたくさんあると思いますが、自分の思っていることは‘間違い’ではないだろうかと黙ってしまうのはもったいないことだと思うので、普段から意識しようと思います。

二つ目のアングロンの演奏についてです。今回の交流会ではユネスコ音楽隊でアングロンというインドネシアの伝統楽器を演奏しました。初めてアングロンという楽器を知った時、1つのアングロンで1つの音しか奏でることができないという説明を聞いてこれはESDだ!と思いました。いざ練習が始まると、自分一人が間違えたり、鳴らし忘れると皆に迷惑がかかってしまうし、チームワークの必要な楽器なんだなあということに気づき、とても緊張しました。しかし練習を重ねるごとにだんだんうまくなっていくのが自分でもわかりました。皆で1つの音楽をつくりあげる楽しさは、アングロンならではのものだと思います。

キャンパスツアーやアングロン、先生方との交流を振り返って、単純に楽しいと思うことがたくさんありました。そしてそのように思うときは必ず周りに人がいて、思っていることを言いあったり共感しているときだったなあと思います。

私はもっとたくさんの人と物事を共有したり、共感しあったりして純粋に楽しいと思えるようにユネスコクラブの一員として活動していきたいと思います。そしてそのために必要な力を身につけていこうと思います。

ACCU 日米教員交流会に参加して

奈良教育大学教職大学院 竹田 隼也

ACCU 日米教員交流会に参加させていただきました。メンバーと共に 2 名のアメリカの先生に奈良教育大学の紹介、日本文化の紹介をしました。私は一週間ほど前に誘っていたが、参加したため企画にはほとんど関わることができませんでした。しかし、当日の交流会では多くの先生方と話をさせていただき、多くを学ぶことができました。

私が ACCU 日米教員交流会で学んだことは三つあります。第一にコミュニケーションの難しさです。第二にコミュニケーションの重要性です。第三に企画段階での準備の重要性です。

第一のコミュニケーションの難しさですが、私はもともと人とのコミュニケーションが苦手でした。そんな中でも人とかかわることの楽しさを感じ、教師を目指しましたが、言語が変わるとこんなにも伝えることが難しいのかと感じました。私自身の英語に関する知識不足もありますが、先生方に上手く伝えることができなかつたり、「もういいです」と言われたりすることが何度かありました。そんな中でも先生方は笑顔でコミュニケーションをとってくださり、申し訳なかつたです。情報を共有するためにも英語に関する知識を深めていきたいです。

第二のコミュニケーションの重要性ですが、話をしなければ互いの気持ちを伝えることができません。はじめ、何を話して良いかわからずあたふたしていましたが、先生方が簡単な英語で質問してくださり、そこから話が広がっていきました。また、最後には連絡先を教えていただくなど、交流をすることができました。多くの人とコミュニケーションをとり、多くの人とつながれるようにしていきたいです。

第三の企画段階での準備の重要性ですが、上でも書いたように私は一週間ほど前から参加させていただいたので、企画にほとんど関わることができませんでした。同じ班の学生とも当日に初めて会うなど、大学案内の流れを共有することができていませんでした。その結果、時間がおしてしまい、予定通りに進みませんでした。企画段階で情報を共有し、計画を考えることが重要であると感じました。

以上のことから、ACCU 日米教員交流会では多くのことを学び、多くの人とつながることができました。誘っていただいた先輩に感謝するとともに、今後も多くの人とつながることができるように様々な企画にかかわっていきたいです。

奈良は国際都市～ACCUを通して～

奈良教育大学教職大学院 島 俊彦

奈良に来て3カ月、驚いたことがあります。「鹿も多いが外国人も多いじゃないか。」東大寺や興福寺は観光に来ている外国人が、大学内には留学生がとても多いです。このことから奈良は国際都市といえるのではないのでしょうか。奈良と言えば「古都＝和」のイメージが強かった私にとっては、衝撃的な事実でした。本学では国際交流室を中心に、国際交流に力を入れていて、留学生と接する機会を作ろうと思えば、いくらでも可能な環境が整っています。しかし、そのような恵まれた環境に身を置いているにもかかわらず、私は普段国際交流をなかなかすることが出来ていませんでした。

そんな中 ACCU の活動に誘って頂いたので、喜んで参加させていただきました。パトリックさんやマイケルさんへの大学案内や、その後の交流会に参加を通して学んだことが3つあります。一つ目に気持ちを通わせることが出来れば言語は関係ないということ、二つ目に日本や本学の良さを再認識できたこと、三つ目が幅広い視野を持つことです。

一つ目は、気持ちを通わせることが出来れば言語は関係ないということです。僕は英語を喋ることが出来ません。でも、精いっぱい単語や表情・ボディランゲージで伝えようと努力しました。すると2人がくみとってくれたので、コミュニケーションは言語よりも、伝えたいという気持ちの方が大切だということがわかりました。

二つ目は、日本や本学の良さを再認識できたことです。私たちの班では、花札で遊んだり、教職大学院棟に案内したりしました。どうすれば日本や本学の良さを伝えることが出来るのかを考える過程で、「そもそも日本や本学の良さってなんだろう？」という疑問が生まれました。それを皆で考える中で日本の文化や本学の教育に目を向けることができたのも。収穫の一つだと思います。

三つ目は幅広い視野を持つことができたことです。パトリックさんやマイケルさんとはスポーツの話題で盛り上がりました。アメリカではアメリカンフットボールが盛んだと聞きました。私は大学ではスポーツ学部所属していましたが、アメリカンフットボールについて何の知識もありません。アメリカと日本のスポーツ文化の違いを知り、彼らの国や文化を、もっと深く知りたいと強く思い、世界に目を向ける良いきっかけになりました。

ACCU の活動を通して、以上3つの点を実体験から学ぶことができました。また、今後もこのような機会があれば、進んで参加したいなと思います。国際都市奈良で国際交流を積極的に進めたいと思います。

東アジアサマースクールとESD

数学教育専修1回生 幸田 早苗

2012年8月4日、東アジアサマースクールがあった。現在、東アジア地域はいろいろな面で世界的に大きな役割を果たしている。また、世界はグローバル化が進み、国内の問題が世界的な問題につながってしまう状況だ。だからこそ、東アジアでのつながりを深め、協力していくため、お互いの国の歴史や文化、政治経済、社会事情などをよく知り理解を深めようとしている。そこで、今回、奈良県が東アジアとつながりを持ち、未来を担う人材を育成するため、今回の東アジアサマースクールが行なわれた。私達、ユネスコクラブは、参加している国内・国外の学生と交流し、フィールドワークを通してESDで重要な「地域の良さを見出す視点」を養うことを目的とし参加した。

この東アジアサマースクールを通して私が学んだことは3つある。1つ目はもてなしの心、2つ目は伝えようとする心、3つ目は楽しむ心である。

まず1つ目のもてなしの心は、交流する上でとても大切だと思った。今回、ユネスコクラブははじめにアंकロンで「ふるさと」と「アリラン」を演奏した。とても喜んでもらい、拍手をもらった。その様子を見て、この日のために練習してきた私達もとても嬉しい気持ちになった。歓迎されて不愉快になる人はいないと思うし、歓迎する気持ちは言葉が無くても伝わるんだと思った。だから、交流をする前のもてなしの心は交流をより良くするためにとっても重要だと学んだ。

2つ目の伝えようとする心は、言葉が通じなくても伝えたいという気持ちがあれば、伝わるということである。私の班には日本語が苦手だという中国人留学生がおられ、その方と交流をした。私も中国語はほとんど知らないが、一緒にフィールドワークしていると苦労はしたが、身振りや少しの英語で伝えることができた。うまく伝わらないこともあったが、私が何かを伝えたいということは伝わり、相手も何を伝えたいのか理解しようと努力してくれた。言葉が伝わらないからと言って諦めるのではなく、精一杯伝えようとする気持ちは相手にも伝わるし、お互い理解するきっかけにもなるだと学んだ。

3つ目は楽しむ心である。やっぱり交流は楽しくないといけないと思う。今回、フィールドワークでいろいろなところをまわり、いろいろなものを見て、ちょっとしたクイズに答えた。最後には答え合わせをしたときには、みんな正解すると喜んだり、たくさんの箇所を回った班に拍手をおくったり、みんなが楽しんでいた。楽しいと思うことで、もっと交流したいと語学を勉強しようとしたり、もっと文化を知ろうとしたりする意欲が湧くのではないかと思う。だから、交流においては楽しむことも重要なんだと学んだ。

今回の東アジアサマースクールで、交流をするには何より心が大事だと学んだ。相手を思いやる心はつながりを生み、そのつながりを大事に続けていくことがESDにもつながってくると思うので、これからはしっかりと心を持って積極的に交流をしていきたいと思う。

意識することのむずかしさと大切さ

国語教育専修 4 回生 清水 阿弓香

東アジア・サマースクールでは、主にグループで活動をしました。私のグループは日本、中国、韓国の方がいっしょでした。初めの挨拶をするまでは不安でいっぱいだったのですが、みなさん気さくな方ばかりですぐに打ち解けることができました。交流自体はごく短いものでしたが、国籍も年齢も関係なく活動をともにできたことで、充実した時間を過ごせたと思っています。

さて、今回の活動を通して感じたことがあります。それは、「意識する」ということのむずかしさです。私がそう感じたきっかけを与えたものとして、3つ挙げることができます。第1に日本の文化、第2に身近なもの、第3に言語の違いです。

第1に挙げた日本の文化について、自国の文化を知るむずかしさを知りました。興福寺国宝館を訪れたとき、私たちのグループはいっしょに見て回っているうちにいくつかの疑問を共有しました。その中で特に印象に残っている疑問が、木造千手観音菩薩立像の持物についてです。「持物に髑髏が見られるのですが、なぜ髑髏を持っているのですか。」中国の方がそう口にしました。私も髑髏の存在には気づいてはいましたが、それが特別不思議なものだとは感じていませんでした。「中国にはこんなものはないけれど、どういう意味があるのか。」と問われて初めて気になりました。(後に調べてわかったことですが、日本の千手観音では珍しくない持物のようです。名前は髑髏杖と言うらしく、意味には何説かありました。) このように、日本ではよく見られるものが外国で同じように見られるわけではありません。けれど、日本の中にいる私はその事実

に気づけないことが多いようです。文化を知ることとは、その国のある特徴のうち、特に他との違いを強く意識することだと思いました。今回の経験を通して、外国の方と交流することは文化を知るうえでとても大きなことだと実感できました。互いの文化を比較することで、自国の文化も他国の文化も意識することができたからです。



第2に身近なものを意識することのむずかしさを挙げたいと思います。奈良町のクイズラリーのクイズを解く中で感じました。私は奈良町を訪れるのは初めてではなかったですし、よく通る場所もクイズには含まれていました。しかし、クイズがむずかしく感じました。それは、私が普段意識して見ていないものを問うものが多かったからです。例えば、庚申堂の屋根の猿は何匹かという問題がありました。私は5匹だと思い込んでいたのですが、よくよく見ると子猿を抱えているも

のがいて全部で7匹が正解でした。普段意識を向けていないところに、意識を向けて丁寧に見る。すると驚くことに、庚申堂の新たな一面を発見できた気がしました。大学ではクリティカルシンキングと合わせて多面的に物事を見るように教わりますが、あらゆる方向から眺めるだけではなく、一面を丁寧に見ることもとても重要なことだと感じました。

第3に言語の違いについてです。この東アジア・サマースクールに参加されていた外国のみなさんは、とても日本語がお上手でコミュニケーションをとることになんの不便もありませんでした。しかし、活動中に同じ国同士の方が出会うと母語と思われる言葉で会話していました。自分の慣れ親しんできた言葉が一番気楽に使えるのは当たり前のことです。これは後になって気づいたことですが、どうしてそんな簡単なことに気づけなかったのかを考えてみると、とても自然に日本語で会話してくださっていたからだと思います。どの活動のときも日本語で話して、いろんな日本のことを知ろうとしていました。私はそれがとても嬉しく思いました。だから私ももっと日本を知ってほしいという気持ちをもって、あなたたちの国のことも知りたいということ態度で伝えることが出来たらどんなによかったらと思います。そこまで考えて、言語の違いを感じました。言語が違うことを意識するのとしらないのでは、対応の仕方が大きく変わると思います。次にこのような機会があったら、意識して接したいです。

「意識する」と言うのは簡単ですが、実際はとても難しいことです。それを、以上の3点を通して再認識しました。同時に、「意識する」ことは非常に大切なことだと感じました。今回の活動で、意識しないと目に見えないものを多く見ることができたからです。これから私がしていくべきことは、「意識する」訓練をすることだと思います。このような経験を積み重ねて、徐々に自分からさまざまなことに気づいていけるように努力していきたいです。



東アジアサマースクール

奈良教育大学教職大学院 島俊彦

今回7/30～8/10まで奈良で開催されていた東アジアサマースクールの参加者（東アジア及び日本の大学院生など約40名）と、ユネスコクラブが交流する機会を設けていただきました。交流会では、まずユネスコクラブによる歓迎のアンクロン演奏を行った後、グループをつくり鹿せんべいやり体験、興福寺国宝館見学、ならまちクイズオリエンテーリングといった活動を共にすることで、東アジアサマースクールの参加者との親睦を深めていきました。

この交流会への参加は、私にとって非常に有意義なものとなりました。その理由は3つあります。第1に東アジアの方々と仲良くなれたこと、第2に国際的な感覚にふれることができたこと、第3に奈良の魅力を発見できたことです。

第1の東アジアの方々と仲良くなれたということですが、私のグループには日本人の大学院生2名と中国人の大学院生1名、中国の大学で日本語を教えている方が1名いました。私は日本人は勿論、中国人の2人と積極的にコミュニケーションをとりました。中国の大学院でどのような事を学んでいるのか、中国の大学でどのように日本語を教えているのか、好きな日本食は何かなど、さまざまな話題で盛り上がり、交流会が終わる頃にはその日が初対面と思えないほど親睦が深まり、国境を越えた友情を育むことが出来ました。

第2に国際的な感覚に触れることができたということですが、中国人の2人と大阪から東京に行くにはどれ位の時間がかかるかという話題になった時、私が「新幹線で2～3時間かかるから遠いよ。」と言うと、2人は「2～3時間で行けるなら遠くないね」と答えました。それを聞いて私が「遠いと思わないの?」と尋ねると、2人は「中国は国土が広いから、新幹線で2～3時間の移動距離ならば、むしろ近いと感じるよ。」と話してくれました。私は2人の言葉を聞いてハッとしました。それと同時に、恐らく日本人との会話では出てくることのない2人の言葉や感覚の違いに、生まれ育った所によって感覚も異なってくるのだなということを実感し、国際的な感覚に触れることが出来ました。

第3の奈良の魅力を発見できたということですが、私は奈良に来て4カ月が経ちましたが、普段は学校と家の往復の繰り返しで、折角奈良で生活しているのに、なかなか奈良の魅力に触れることが出来ていませんでした。しかし今回、興福寺国宝館で貴重な文化財を見たり、ならまちクイズオリエンテーリングであらゆるポイントに実際に足を運ぶことで、奈良の歴史に触れ、魅力を発見することが出来ました。

以上の理由から、この交流会が私にとって、また東アジアサマースクールの参加者とユネスコクラブの部員を繋ぐ非常に有意義な機会となったと確信しています。今後もこのような機会があれば積極的に参加し、より多くの国や地域の方々と国境を越えた繋がりをつくっていきたいと思います。

東アジアサマースクールを終えて

物質科学専修 2回生 後藤田洋介

東アジアサマースクールは、東アジアに住む学生と、日本に住む学生が交流を深めるために行われた国際交流行事で、奈良教育大学ユネスコクラブは、8月4日のならまちめぐりの企画に参加しました。

この、東アジアサマースクールで私が感じたことは三つあります。一つ目は、いまだ知らない地域の良さについて。二つ目は、日本語のむずかしさについて。三つ目は友達についてです。

一つ目のいまだ知らない地域の良さについてですが、私は奈良に来て、一年半が過ぎようとしています。その中で、ならまちをめぐることもしばしばありましたが、いまだに知らないこと、場所が数多くあります。今回のならまちめぐりでも、恵比寿神社や奈良町資料館など、はじめて知ったものが多くありました。おそらく、私が住んでいる町にもいろんな良さが隠れているのではないかと、思いました。教材開発とまではいかななくても、少しは良さを探することができるようになりたいと思いました。

二つ目の日本語の難しさについてです。私たちは日本語が母語であり、普段からコミュニケーションの手段として当たり前のように日本語を用いているので、日本語の難しさに気付かないと思います。世界では日本語の難しさは有名であるらしく、私の情報では、その難しさは上から教えた方が早いとも聞いたことがあります。今回参加されていた東アジアの方々の日本語は、私が予想していたよりも堪能でした。しかし、少し複雑な日本語（私たちが普段簡単に使いこなすレベルの日本語）で話しかけると、「??」という雰囲気になりました。日本語はやはり難しいものなのかもしれません。

三つ目の友達についてです。友達というと、私のイメージでは毎日会うような友達もいれば、たまに連絡を取るような友達もいます。しかし、この友達はいくつでもいつでも連絡をとれる友達だと思いません。今回知り合った数名の方は、おそらくこの日以外は会うことがないと思います。でも、この方々は友達ではないのか、ということそれも間違いです。一日だけ、しかも数時間の付き合いでしたが、ならまちを一緒に廻ったことを、私はずっと忘れないと思います。こうして、心の中に少しでも残る人が友達なのかなあと、自分の認識を改めました。

最後に、今回の東アジアサマースクールに参加することができて私はとても幸せであったと思います。それは、ならまちの良さを知ることができたこともあり、日本語を扱うむずかしさを知ることができたこと、そして、新たな友達ができたとあります。こうして国際交流を積み重ね、奈良の良さ、日本の良さを伝えるとともに、日本の良さを知り、友達を作り、いろんな輪を広げていきたいと思いました。

東アジアサマースクール交流会に参加して

数学教育専修1回生 濱崎千華

8月4日、奈良教育大学ユネスコクラブの一員として、東アジアサマースクールに参加している海外の学生、及び国内の学生と交流しました。この交流の目的は、国際交流をすることと、ESDで重要な「地域のよさを見出す視点」を養うことです。私たちは、アンクロンの演奏の後、東アジアサマースクールに参加している学生とともにならまちでフィールドワークを行いました。

さて、私はこの交流において、これからの課題を2つ見つけました。1つは「アンクロンの演奏」、もう1つは「奈良をよく知る事」です。

1つ目の「アンクロン演奏」は、演奏の出来がどうというわけではなく、演奏の仕方に課題があると思いました。アンクロンを演奏するにはまず、選曲をします。自分たちのレベルに合う曲を選ぶのも必要ですが、やはり「誰に聴いてもらうのか」が重要です。今回の演奏では、韓国の「アラン」という曲を演奏しましたが、後に韓国の学生がとても喜んでいと聞いて、嬉しく思いました。私を含め、演奏メンバーはほとんどこの曲を知りませんでした。でも、何度も曲を聴いて、暗譜し、心をこめて演奏できました。選曲の他には、演奏中の表情も意識するべきでした。間違えないように鳴らそう、指揮を見て音がずれないようにしようと真剣になると、表情が強張ってしまいました。中澤先生にも指摘されたように、笑顔で楽しく演奏できるように心がけたいです。

2つ目の「奈良をよく知る事」です。興福寺国宝館で、中国から来たシーさんとリクさんと一緒に回っている時、何度か展示されている国宝について質問されました。しかし、私はまともに答えることができませんでした。奈良に住んでいるにもかかわらず、何ひとつ満足に答えられない自分を情けなく思いました。シーさんと話していると、中国では国宝は様々な寺院に1つか2つずつ置かれていて、日本のように国宝館にまとめて収蔵されているのは珍しいという話や、中国の弥勒菩薩像はふくよかなお腹をしていて、笑っているのだという話など、興味深い話をたくさん聞きました。文化遺産についてももっと勉強して詳しくなりたいと思いました。ならまちフィールドワークの時には、どうして軒先に松ぼっくりが吊るしてあるのかと聞かれました。確かに、身代わり猿が災難を代わりに受けてくれるという話なら知っているけど、松ぼっくりを吊るすのはどうしてだろう。一緒に悩んでしまいました。家に帰ってから調べてみると、ならまちは車が通ることを考えずに作られたので、道幅が狭く、軒先ギリギリであることをドライバーに知らせるために吊るしてあるのだそうです。住民の温かさがにじみ出る工夫だと思いました。これからもっと奈良のよいところ、奈良にしかない工夫などを見つけて、県外の人に胸をはって紹介できるようになりたいです。

以上の2つを課題として見つけられました。今回の交流での反省をこれからの活動に生かして頑張りたいです。先日届いたユネスコクラブのポロシャツの胸に刻まれているESDの文字に恥じないように私も成長していきたいです。

「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト
三笠中学校リーダー研修会参加報告書

奈良教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター 専任講師 中澤 静男

1. 目的 ユネスコスクールの活動支援の一環として、奈良市立三笠中学校の生徒会の活動意欲の向上を目的に、奈良教育大学ユネスコクラブ員がリーダー研修会に参加した。なお、この活動は三笠中学校長から奈良教育大学ユネスコクラブへ依頼された7月～3月までの活動支援の一環である。

2. 準備会合

三笠中学校の生徒会担当者と三笠中学校でもとめるリーダー像について共通理解を図ると共に、リーダー研修会のプログラムについての打ち合わせを行った。

日時 : 平成24年7月11日(水) 17時～18時

会場 : 三笠中学校応接室

参加者 : 教職大学院生 島俊彦、竹田隼也、中澤哲也

教員 中澤静男

三笠中学校教員 長浜校長、野瀬先生 等

内容 : 別紙「三笠中学校 2012年 生徒会リーダー研修会について」参照

3. リーダー研修会

日時 : 平成24年8月20日(月) 11時30分～14時10分

会場 : 三笠中学校第1音楽室等

参加者 : 教職大学院生 島俊彦、竹田隼也、

学部生 清水阿弓香、寺坂真理、渡辺憲、糸綾香

教員 加藤久雄、北村恭康、中澤静男

三笠中学校 長浜校長他多数

内容

- (1) カレーを一緒に食べながら、身近な関係をつくっていった。
- (2) ユネスコクラブの大学生・教職大学院生各自が中学校時代の夢や体験、努力し続けてきたことなど中学生に語りかけ、中学生という今、大切にしてほしいことを考えてもらう機会とした。
- (3) インドネシアの楽器アンクロンによる「ふるさと」の演奏を披露すると共に、アンクロンとハンドベルにわかれ、演奏練習に取り組み、発表した。



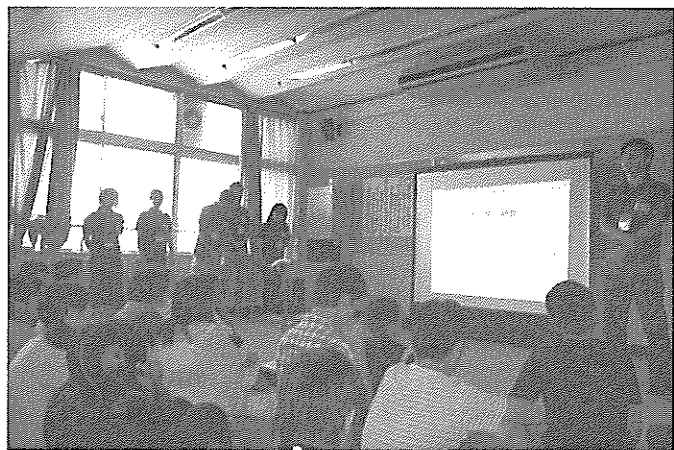
中学生の可能性

国語教育専修 4回生 清水 阿弓香

三笠中学校に行って、学校で中学生を相手にお話をするという企画を知ったとき、中学生と交流できる数少ない機会であることを喜びました。同時に、私でいいのだろうか不安にも思いました。自分は何を持っていて、何ができるのかを考えさせられました。行く前にはいろいろと考えてもやもやしていましたが、行ってみると三笠中学校の生徒さんは明るくて、いっしょに時間を過ごすことができ楽しかったです。

そこで感じたこととして、特に心に残っている3つの事柄について述べたいと思います。第1に心がけ次第で人は変わっていきけること、第2にこの場にいる一人でも欠けてはいけないということ、第3に生徒の行動力です。

第1の心がけ次第で人は変わっていきけることを感じたのは、生徒たちの前で私たちユネスコクラブ部員がお話をしたときのことです。いっしょに行ったユネスコクラブの方の話を聞いてみると、あきらめずに続けていくことの大切さや、目標を持って頑張ることの価値について触れていたものが多かったように感じました。夢の話や今までの経験、またそこから導き出されたことを聞いて、自分なりに「自分は変えられる、変わっていきける」というような漠然とした



メッセージを受け取りました。生徒たちもそれぞれに、何らかのメッセージを受け取ってくれたことと思います。それぞれの人生を生きてきて、経験も感じ方も全く異なるのに、強く共感できるというのは不思議なものだと思いました。私自身は、緊張していて何を話したか内容を深くは覚えていません。けれど、中学生に伝えたいと強く思うことが私の中に確かにあったということを知ることができてよかったです。



第2のこの場にいる一人でも欠けてはいけないということは、楽器演奏の時間に強く感じました。私はアंकロンの担当で、「ふるさと」を生徒たちといっしょに練習しました。人数が他より少ないグループ（アंकロンを2台持つ生徒がいる）を中心に見ていました。最初のうちは私が声を出して、生徒たちに持ち方やならし方のコツを教えました。すぐに生徒の一人がリーダーシップをとりはじめたので、途中から私はただ見守りました。

そこから、ときどきお互いが発言しあって演奏はどんどん上達していきます。演奏の発表を聴くとどのグループもとても上手で、練習が30分もなかったとは思えない出来栄でした。発表を聴いている間、生徒たちは真剣であたたかい視線を送っていました。一人ひとりが役割をもち、うまく協力しな

いとアंकロンもハンドベルも曲にはなりません。あの場に満ちていた、発表会は全員でつくったという空気感が心地よかったです。

第3については、今回の活動全体を通してこの生徒たちには行動力があると感じました。私たちが参加する前も、作業をしていたようで発表をしていました。朝から活動していたら疲れてくるのが当然だと思うのですが、どの場面を見ても生徒はしっかりと話を聞いて、考えて行動してしました。たとえば、昼食のカレーを食べるときも、並び方や配り方、お茶の用意など生徒同士での気配りが行き届いていたと思います。アंकロンを教えたときにも、ほとんど説明は必要なく、自分たちの力で行動してしました。これだけ考えてそれぞれが動けるという状態は、まさに理想的だと思いました。ほんの数時間見ただけでも、リーダーになる素質を全員が持っているように感じました。このように行動力のある生徒たちが、学校を動かす力になっていくのだろうと考えるととても頼もしいです。

以上の3つから、私は中学生の可能性の大きさを深く感じました。何もかもこれから、先にいろいろなことが待っている中学生は可能性のかたまりです。私は中学校の教師を目指しているので、教師になりたいという気持ちがまた大きくなりました。この活動をしている最中に、私の知りあいの中学生を思い出しました。ずっと勉強ができない、何ができるわけでもない、だから自分には価値がないといつも言っていました。けれど、そう考える



のは間違いだと気づかせたいです。できないことが多いことは決してマイナスだけではなく、できることを増やせる可能性をそれだけ持っているということです。それは、みんながみんな持っているものだと思うのです。今まで漠然と考えていたことを、今回の経験を通して確信に変えました。まずは目標を持つこと、何かを見つけて続けてみること。きっかけはどこにでもあると思います。生徒の持つ可能性を信じて最大限に伸ばしていける教師を目指したいです。

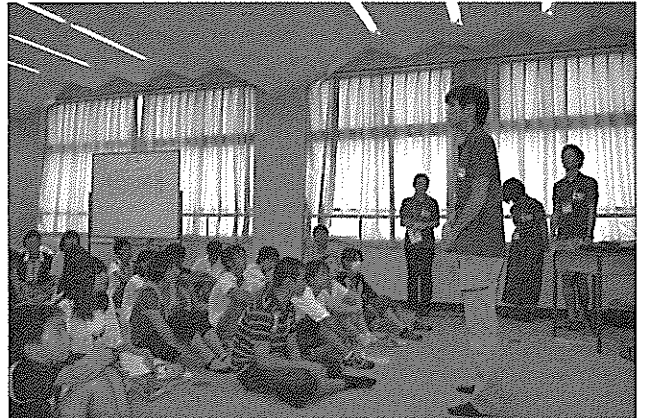
三笠中学校リーダー研修会に参加して

奈良教育大学教職大学院 竹田 隼也

8月20日に三笠中学校で実施された三笠中学校リーダー研修会に参加させていただきました。当日は三笠中学校の生徒と話をしたり、アंकロンやハンドベルの演奏をしたりしました。また、それまでも三笠中学校の先生方と打ち合わせをさせていただきました。この中で、私は多くのことを学びました。

私が三笠中学校リーダー研修会で学んだことは三つあります。第一に企画することの難しさです。第二に中学生の意欲と集中力です。第三に人前で話すことの難しさです。

第一の企画することの難しさですが、私は今まで、何かを企画するということがありませんでした。そのため、企画に携わらせていただきながら、自分の意見を一切言うことができずにいました。今回のリーダー研修会では企画から携わらせていただき、現場の先生方と企画をするなど、貴重な経験ができたので、次に何かを企画するときは今回の経験を活かして、意見を言えるようにしていきたいです。



第二の中学生の意欲と集中力ですが、実際に中学生の前で話をしたり、アंकロンやハンドベルの練習をしたりする中で、中学生の意欲と集中力に驚きました。私自身が中学生の時は無気力で、何がしたいのかわかりませんでした。しかし、三笠中学校の生徒を見ていると話を真剣に聞き、私たちから何か学ぼうとしていました。アंकロンやハンドベルの練習では、40分という短い時間の中で、班で協力して最後にはどの班も素晴らしい演奏ができていました。中学生は学ぶ意欲にあふれています。その意欲を引き出すのは教員の役割です。そのような指導ができるように、私自身も学ぶ意欲を持ち続けたいと思いました。

第三の人前で話すことの難しさですが、普段、あのような多人数の前で話す機会はなかなかありません。そのため、当日は非常に緊張し、何を話しているのか自分でもわからなくなってしまいました。しかし、教師になれば毎日40人の前で授業をしなければなりません。学生の中に人前で話す経験をたくさんしておきたいと感じました。

三笠中学校リーダー研修会では多くのことを学び、多くの人とつながることができました。研修会に時間をとっていただいた三笠中学校の先生方や誘っていただいた先輩に感謝するとともに、今後も多くの人とつながることができるように様々な企画にかかわっていきたいです。



三笠中リーダー研修会で学んだこと

英語教育専修 1回生 桑 綾香

今回私は、三笠中学校でのリーダー研修会に参加させていただいた。この研修会は、三笠中をより良くしていくため、リーダーとなる子どもたちが今の三笠中の良い所、改善すべき所を話し合い、今後の取り組みを考えていくといった内容であった。私たちは、その中で、ユネスコクラブの活動内容とアंकロン、ハンドベル交流を担当させていただいた。

今回の研修会で学んだこと、気付いたことが二つある。第一に現職の先生方の子どもに対する話し方、第二に今の私と、中学生の私の違いである。

まず、現職の先生方の子どもに対する話し方についてである。最初教室に入り、今から何が始まるのかと待っていると、私たちユネスコクラブと企画の段階から関わってくださった先生が前に出てお話を始められた。その瞬間、一気にその場の空気が変わったのだ。それまでのザワザワした空気から、話を聞こうとするシビアな空気変わったのである。また、ハンドベルの練習で一緒に見てくださっていた女性の先生は、とてもパワフルに歌いだし、グループ全員に満遍なく話しかけ、私が苦戦していた曲の練習も一回で終わることができた。

私は、高校の部活動の経験より前に出て話すことになれていると思っていたが、全くそうでは無かった。自己紹介をするだけであつた、ハンドベル練習の指導であつた。そのような中で先生方の仕切り方に助けられ、驚き、こんな風にすればいいのかと学ぶことができた。これからユネスコクラブの活動で、どんどん子どもたちと関わる機会が増えてくるだろう。その時に今回の学びが生かせるように、しっかり覚えておきたいと思う。

次に、今の私と中学生の私の違いについてである。中学生の時、部活動に大学生のボランティアの方が来られたことがあった。小学生の時から通っていた塾の先生も、皆大学生であった。当時の私は彼らに対し、「すごく大人だなあ」という憧れを抱いていた。「私もいつかあんな風になれるかな」とワクワクしていた。三笠中の子どもたちと触れ合う中でそんなことを思い出していたのと同時に、「今の私は中学生の私に憧れられるような存在だろうか？」とも思い始めた。「この子たちの見本であると言い切れるだろうか？」「今と、昔を比較して成長できた部分はあるのだろうか？」「年齢だけ増えただけではないだろうか？」この研修会のおかげで、決して後ろ向きに考えるのではなく、むしろ前向きに今の自分を見つめなおすきっかけを得ることができた。結論は出すことはまだまだできないが、一つだけ言えることがある。それは「将来の夢がある」ということである。将来、絶対に教師になりたい。色々な生徒、先生、保護者の方々と関わっていきたい。この思いだけは、今の私が胸を張って主張することができる、中学生の私の違いである。

今回の研修会は、私の中でとても大きな学びとなった。そしてますます、教師になるという思いが強くなった。これからこんな機会にどんどん関わることができたらと思う。

最後に印象的だった中学3年生の女の子の言葉を紹介したいと思う。彼女とはお昼ご飯を食べているときに関わることができた。私が彼女に話しかけ、その答えの第一声が「キャンプ楽しみにしています！」という言葉であった。キャンプの企画は、私が考えていた以上に大変なものである。しかし、この女の子のように楽しみにしてくれている子どもたちがいる、ということ胸に刻み、キャンプの成功に向け、あと一踏ん張りしていききたいと思う。

三笠中学校リーダー研修会

奈良教育大学教職大学院 島 俊彦

8月20日に三笠中学校で行われた生徒会リーダー研修会に、ユネスコクラブが講師として招かれ、生徒たちに対して講話や活動を行う機会を与えていただきました。生徒会リーダー研修会とは、各学級代表や生徒会本部役員、ユネスコ部の部員や専門委員長などが一堂に会し、学校や学年、学級をより良くする方法を皆で考えたり、今後の体育大会に向けて学校の結束を強める事を目的とした会でした。私たちユネスコクラブは研修の一環として、生徒にとって身近な先輩という立場で、自身が中学生の頃持っていた夢や現在の夢、自分が考えるリーダー等を語ったり、特技の披露などを、参加した学生6名が各々行った後、アンクロン・ハンドベルの演奏練習と発表会の指導やサポートを行いました。

私はこの研修会に参加することが出来て本当に良かったなと感じています。その理由は3つあります。第1に企画から携われたこと、第2に生徒達とふれあえたこと、第3に生徒や先生方の前で話す機会を頂けたことです。

第1の企画から携われたという事ですが、私は今回三笠中学校とユネスコクラブの窓口を担当させていただき、研修会の企画段階からに参加させて頂きました。初回の打ち合わせで三笠中学校の先生方が言っていた、三笠中学校が求めるリーダー像に生徒が近づける研修にするには、どのようなプログラムにすればいいのかを考えました。このように企画から携わることで、現場の先生方と連携を図りながら企画を進めていくことができました。

第2の生徒達とふれあえたという事ですが、昼食時間や演奏練習の時間に生徒達と積極的にコミュニケーションをとることができました。特に昼食時にはカレーを食べながら生徒達と様々な話をしました。今の中学生が何を考えているか、感じているか等を知ることが出来ました。小学校教員志望の私は、なかなか中学生と接する機会がないので、子ども理解の視野を広げるために良い経験になりました。

第3の生徒や先生方の前で話す機会を頂けたという事ですが、当日、司会進行を務めたということもあり、多くの場面で話す機会を頂きました。普段なかなか人前で話す機会が無いので、初めは不安や緊張もありましたが、徐々に慣れ自信を持って自分の思いや考えなどを話すことができ、人前で話す楽しさを実感することが出来ました。

以上の理由から、今回の生徒会リーダー研修会への参加が教職を志す上で、貴重な経験になったと考えます。当初は私がユネスコクラブの窓口を担当して大丈夫なのだろうかという不安も有りましたが、今ではこの経験が自分を成長させてくれたと実感しています。折角このような経験をさせて頂いたので、今後も三笠中学校とユネスコクラブの関係を維持できるよう努めてゆきたいと思えます。

奈良教育大学 ESD 学会 第 1 回研究大会

私たちはどのような未来を子どもたちに残そうとしているのでしょうか。

持続可能な社会の担い手を育てるための教育を ESD（持続発展教育）といい、今、世界中で進められています。ESD は未来のための教育であり、現在の私たちみんなの幸せのための教育です。日本でも学習指導要領に ESD が入りましたので、ESD の教え方・学び方の研究が求められています。

奈良教育大学は、日本で一番初めにユネスコスクールになった大学として、ESD の普及や研究に取り組んでいます。そこで、ESD をやっていこう、ESD をやってみたい、ESD っておもしろそう、といった方々の出会いの場として、本研究大会を開催します。

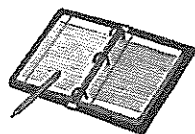
先生方、学生のみなさん、一般の方々、ESD で教育への希望を語り合いましょう。

とき：平成 25 年 2 月 23 日（土）

10 時から 16 時 45 分（受付 9 時 30 分から）

ところ：奈良教育大学 大会議室（管理棟 2 階）

なつきよん



入場無料

【プログラム】

09：30－10：00 受付（管理棟 2 階）

10：00－10：15 開会行事

10：15－11：30 ESD 子どもフォーラム I

気仙沼市・大牟田市・奈良市・附属中学校・奈良教育大学ユネスコクラブ

11：30－12：30 昼食（大学生協をご利用いただけます）

12：30－13：45 基調講演「若い教師へ 私の教育実践」

講師：奈良教育大学教職大学院 小谷 勝彦氏

アンクロン演奏：奈良教育大学ユネスコクラブ



14：00－15：45 テーマ別分科会

① ESD の理論化に向けて

（司会：奈良教育大学 中澤 静男）

国立教育政策研究所 五島 政一 氏

岡山大学大学院教育学研究科 川田 力 氏

奈良教育大学 加藤 久雄

② 地域の教材化

（司会：奈良市教育委員会 中川 克則 氏）

奈良教育大学附属小学校 櫻本 豊巳 氏

米子市立淀江中学校 山下 欣浩 氏

奈良県立法隆寺国際高等学校 祐岡 武志 氏

③ ESD の多様なつながり

（司会：奈良教育大学附属中学校 谷口 尚之 氏）

大牟田市教育委員会 安田 昌則 氏

岡山市 ESD 最終年合準備室 原 明子 氏

「ESD の 10 年・世界の祭典」推進フォーラム 福井 昌平 氏

【参加申し込み】

ご所属・お名前・連絡先・参加を希望する分科会を明記し、15 日（金）までに、下記へメールかハガキ、Fax でお申し込みください。

〒630-8528 奈良市高畑町

奈良教育大学持続発展・文化遺産教育研究センター

FAX：0742-27-9177 E-mail：jizoku@nara-edu.ac.jp

お問合せ：0742-27-9177

16：00－16：30 ESD 子どもフォーラム II

16：30－16：45 閉会行事

17：00－ 交流会（大学生協）

主催：文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、奈良教育大学

後援：奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、公益社団法人ユネスコアジア文化センター

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟、「ESD の 10 年・世界の祭典」推進フォーラム

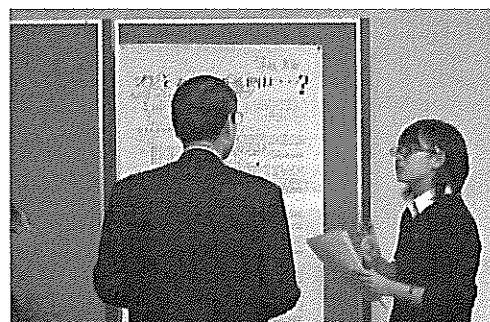
奈良教育大学ESD学会第1回研究大会【概要】

平成25年2月23日（土）に奈良教育大学ESD学会第1回研究大会を開催しました。雪まじりの雨が降るとい大変寒い日にもかかわらず、167名の方々のご参加をいただき、心の中にESDの火が灯り、温かい雰囲気につつまれた、ESDにふさわしい研究大会となりました。ESD学会の設立に韓国から、そして全国からご参集いただき、盛り上げて下さった皆様へ、心からお礼申し上げます。

開会に先立ち、奈良教育大学附属中学校3年生の3名が取り組んだESDについて、ポスターセッションで発表してくれました。会場に到着された方々は、すでに子どもたちによる研究発表が始まっていることに驚かれた様子でしたが、熱心に発表にご参加いただき、双方向のコミュニケーションによる学び合いとなっていました。

開会行事では、長友恒人学長の学会設立のあいさつ、その後、文部科学省国際交渉分析官の岩本渉様からは本学会への期待を含め、ごあいさついただきました。

本研究大会の主旨は、これからの社会を担う子どもたちであるはずであるという認識の下、ESD子どもフォーラムを開催しました。フォーラムの司会運営も本学のユネスコクラブの大学院生に一任しましたので、子どもの子どもによる子どものためのESD子どもフォーラムとなりました。ユネスコクラブのテーマソング「奈良の風」を歌った後、気仙沼市立唐桑中学校、大牟田市立延命中学校、奈良市立飛鳥小学校、奈良市立済美小学校の子どもたちが、日々の取組成果を報告しあい、会場の先生方からは温かい感想や励ましの言葉をいただくなど、終始和やかな雰囲気につつまれた素晴らしい子どもフォーラムとなりました。



附属中学校によるポスターセッション



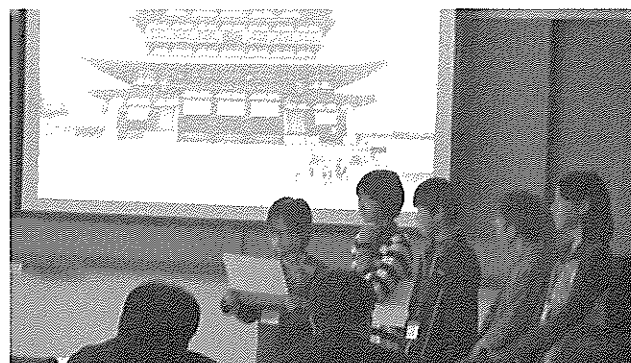
大牟田市立延命中学校の取組の紹介



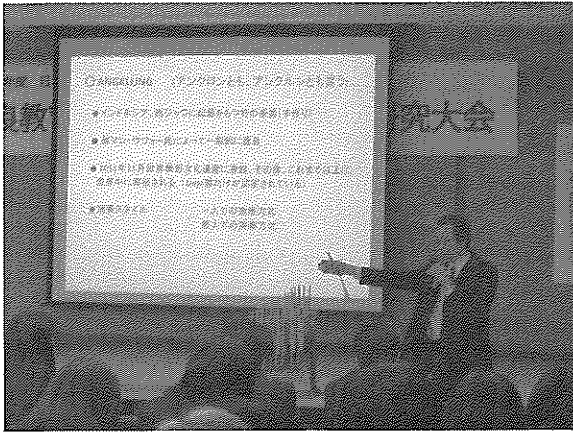
気仙沼市立唐桑中学校の取組の紹介



奈良市立済美小学校の取組紹介



奈良市立飛鳥小学校の取組紹介



小谷勝彦氏の貴重講演

昼食後、子どもフォーラムに参加してくれた子どもたちは、東大寺にフィールドワークに出かけました。会場では、本学教職大学院の小谷勝彦氏による基調講演「若い教師へ 私の教育実践」が行われました。まず、インドネシアの日本人学校に勤務されたときに出会われたインドネシアの民族楽器アングルンをご紹介いただき、会場が一体となって演奏しました。一人一人が違う音を担当し、全員で曲を演奏していくというところ、またアングルンそのものが竹という自然素材でできており、やさしい音色で、非常にESDらしい雰囲気につつまれました。その後は、小学校で勤務された時の経験をふまえた子ども理解の大切さ、学級経営の重要性について、熱く語っていただきました。

小谷氏の貴重講演のあとは、3つの分科会にわかれ、協議を通して、ESDに関する理解を深めました。



アングルンの演奏

第1分科会 ESDの理論化にむけて

国研の最終報告書をふまえた協議により、ESDの理論構築の基礎を明らかにする。

提案：五島政一氏（国立教育政策研究所）

指定討論者：川田力氏（岡山大学）

第2分科会 地域の教材化

地域の教材化の例を報告し合い、共通点を抽出する。

報告者：櫻本豊巳氏（奈良教育大学附属小学校）

山下欣浩氏（米子市立淀江中学校）

祐岡武志氏（奈良県立法隆寺国際高等学校）

第3分科会 ESDの多様なつながり

様々な立場におけるESDの内容、課題を出し合い、連携の必要性を明確にする。

報告者：安田昌則氏（大牟田市教育委員会）

福井昌平氏（地球市民会議）

原明子氏（岡山市ESD最終年合準備室）



第1分科会五島政一氏の提案

分科会終了後には、東大寺でフィールドワークを行った子どもたちが、奈良の魅力・不思議を発表してくれました。ESDでは価値観と行動の変革が目標です。地域を大切にすることが、持続可能な地域社会の実現に向けた行動化の基盤になります。そのためには、地域をよく知ることから始めなければなりません。地域を見つめ、その良さを再発見する視点を身に付けてくれたと思います。



子どもフォーラム大成功の記念撮影

奈良教育大学ESD学会第1回研究大会

第1分科会「ESDの理論化に向けて」

中澤：これからテーマ別分科会を始めます。ここ第一分科会はESDの理論化についてです。司会の中澤です。よろしくお願いします。昨年3月にESDにとって非常に重要な報告書が国立教育政策研究所教育課程研究センターから発行されました。「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究」の最終報告書です。本日皆様のお手元にはこの内容を凝縮したリーフレットをご用意させていただきました。この報告書に示された持続可能な社会づくりの構成概念やESDの学習作りで重視する能力・態度、ESDの理念を進める上での留意事項などが今や日本のESDのスタンダードになりつつあります。本日はスペシャルゲストとしまして、この報告書をおまとめになりました国立教育政策研究所の五島政一先生に東京からお越しいただきました。このあと五島先生にはこの報告書について内容とここに込めた魂についてご報告いただきたいと思っております。その後、指定討論者として岡山大学の川田先生にお話しいただきたいと思っております。川田先生は昨年9月にESDコンピテンシーという本を出版なさいました。ESD先進国であるドイツの事例を元にESDで育みたい能力や価値観を詳しく述べられています。今この2冊が私の一番の愛読書となっております。両方とも5回は読みました。それでもまだわからないことがあります。川田先生からは五島先生の発表の後にESDについて理解を深め、ESDの理論化に向けたご提言をいただきたいと思っております。お二人のお話の後10分間の休憩を取りたいと思っております。その間に日ごろからESDについて考えていること、会場の皆さんに向かって投げかけてみたいことなどをお手元のカードにご記入いただき、私のところへお持ちください。休憩後お二人の提言やカードをもとに話し合いを深め、ESDの理論構築に向けた第一歩を踏み出したと考えております。どうぞよろしくお願いします。それでは五島先生よろしくお願いします。

五島：みなさんこんにちは。国立教育政策研究所の五島です。それでは30分ぐらい話題提供という形ですのでよろしくお願いします。タイトルはESDの理論化ということで、これは面白いテーマだと思いました。実は結構いろんなところで実践はやられています。例えば世界遺産教育などです。それ以外にも地域学というのがあります。みなさんは奈良ですので世界遺産教育についてはご存知かと思えます。今日の小谷先生の話を感じながら聞いたんですが、実は私も16年間公立中学校で教員をしていました。そのときに地域学という分野でESDをやっていました。今日は「ふるさと学」というお隣の和歌山県の実践例をご紹介しますながらESDの理論化に向けての話題提供をしたいと思っております。まず今日の午前中のセッションですが、私は遠くに住んでいるので朝早く出てきたのですが、来てよかったなあと思いました。というのも子どもたちがよかった。最初は緊張して自信なさげな子どもが自信をつけていて、なおかつ自分の地域に誇りを持っているということが感じられました。やはりそういう教育は夢があるなあとみなさんも感じられたでしょう。小谷先生のお話も共鳴できました。あれはいわゆるESDなんてことを考えてやってる実践じゃないんですね。でも極めてESDっぽい。つまり私はESDは決してトレンドではなくて、教育の本質を求めていくとESDっぽくなるというのが私が考えているところです。ですからそれを理論化するというのを、日本の教育をもう一回夢のある教育へと構築していく上での理論化という風に考えれば、すごく夢のある話だなあと思えます。では前半の15分間は理論的な話、後半は私の実践に基づいたESDの解釈という形でやりたいと思っております。

ESDのSDとは、みなさんご存知かと思われませんが「将来世代のニーズを満たす能力を損なうことなく現在世代のニーズを満たす開発」です。別の定義としては「人間を支える生態系が有する能力の範

圏内で営みながら、人間の生活の向上を図ること」となっています。あまりにも抽象的すぎて、これが一体教育にどう反映するのかというところが難しく、なかなか現場で広がらない一つの原因かなと思っています。文部科学省では、学習指導要領の中に「持続可能な社会づくり」という用語を溶け込ませ、E S Dを行いやすくしています。中学校では社会科の中。実は高校は地理や歴史、公民とありますけれども体育にも「持続可能な社会づくり」という用語が入っています。高校は1年遅れで学習指導要領を作ったのでほとんど全ての教科に「持続可能な」というキーワードが入っています。ここに小中高の現場の先生はどれくらいいらっしゃいますか。半分ぐらいですね。では大学関係の先生はどれくらいいらっしゃいますか。大学関係の方が少ないですね。意識する、しないに関わらず、教科書をきっちり教えていけばE S D的なことをやっているということになります。国研では2005年にE S Dのミッションが始まりました。

私は環境教育の指導者の全国講習会の講師をおおせつかつているんですけども、たぶんE S Dという環境教育や開発教育に近いですね。都道府県の代表者が集まっているところで、4年半ぐらい前にE S Dについて尋ねても10%ぐらいしかは知らなかったですね。2年前でも20%以内です。それが現状です。でも内容をわかりやすく説明すると、先生方もそれだったらやっていますよという話になりますし、E S Dを意識してやっている先生は広く進めてほしいと思っています。国研では学校現場の忙しさを考慮して、先ほどの中澤先生が紹介してくれました500ページの研究書でなくて、10分間休みで大まかなところを把握できるというカラーのリーフレットを作成しました。これは全国でいろんな所に使われています。我々は作りっぱなしじゃなくて、レビューしてもらい、よりよいものを作りたいと思っています。例えばこのキーワードこう変えたほうがいいんじゃないとか、2014年に議論できたらと思っています。本当にいわゆる行政として提供したものが現場からフィードバックされ、さらに2014年以降も広がっていくという形を考えています。

国研のスタンスを簡単に説明しますと、ほとんどの教員は教科を教えていますから、教科の中でやるE S Dというものをビジョンに、学習指導過程やどうやってやればE S Dになるのかということ、基本的には紹介しようという形で行っています。総合的な学習の時間ははっきりいってやりたい放題できると思うんですね。これまでE S Dをやっているところはほとんど総合的な学習なんですよ。総合的な学習と教科が遊離していたら、普通の授業ではなく特別な時間だけE S Dですよというスタンスになってしまいます。そうではなく、普通の授業の中でするE S Dが基本スタイルです。ぱっと開いた(資料を提示)ここがエッセンスというわけです。10分休みでこれをぱっと開いてエッセンスは読んで、もうちょっと知りたいなあと思ったら休憩時間に読んでいただければはっきりわかるような形に作ってあるわけです。

それでまずポイントです。今日のE S Dの理論化という議論にいいものは何かないかなと思いました。E S Dと環境教育ってどこが違うかという、環境教育はどちらかという従来は自然環境中心です。E S Dは自然環境だけでなく社会、経済、文化あらゆるものが入ってきますよという枠組みで説明がなされています。環境教育のキーワードでいうと循環、多様性、生態系、共生、有限性、保全というものです。イメージできる言葉が極めて理科的ですよ。

ではみなさん、リーフレットを開いてください。国研でもE S Dの6つのキーワードを示しています。多様性、相互性、有限性、ここまで理科的ですよ。つまり国研では、自然環境に関わるキーワードは3つに直したわけです。多様性というのは地球上にはいろんな生物が住んでいること、それが生態系を作っていて共生しているということでそれを相互性としました。お互いに多様なんだけど実はよく見ればつながっているよということです。そして有限というのは今日の資源の問題というのがあります

からキーワードとしてあるだろうということで、それを3つにまとめて作りました。それ以外の公平性、連携性、責任制はどちらかというと社会的、文化的、経済的なキーワードで、世の中は基本的に平等、公平な世の中でなくてはならない。いろいろ価値観の違いはあるけれども最後は連携しあって、あなたが行動できるように責任もってやりましょうという極めてシンプルなメッセージです。そういうことを先生方授業で教えてませんかというほとんどの先生が教えてますということになるわけです。ただこういう風に概念をきちんと明確化することによって何がいいのかということ、つながりを意識して授業できるということです。例えば私は社会科の先生だから宗教の多様性、言語の多様性、価値観の多様性は教えていたけれども、それらがばらばらではいい世の中は作れないわけです。よりよい世の中を作るために相互性というものが重要で、お互いに繋がりがあっていることを認識することが大切なわけです。ちょっと先生が手を広げてやればまさにESDですよというイメージで授業化できるわけです。

もう一つはとらえ方ですけども、国研はどういう枠組みで作ったかということESDは何々教育、平和教育、開発教育、ジェンダー教育、防災教育。最近では防災教育はmust(必須)ですよ。防災教育無しでは考えられない。国研の6個のキーワードはエッセンスです。つまり全ての物に共通するエッセンスを抽出するという考え方で作っています。ですからESDのとらえ方のエッセンスじゃなくて、いろいろな教育のエッセンスを抽出したものです。ESDの概念図(『ユネスコスクールと持続発展教育(ESD)』p.1)は日本ユネスコ国内委員会で作ったものですが、こういう風に扱ってエッセンスよりも広く扱うことができます。いろいろととらえ方はあると思いますが、国研のスタンスとしてはエッセンスとして作ったと一応認識していただければと思います。ですから平和教育がESDですよというとき、平和教育独自のものがエッセンスにプラスアルファしてくるというわけです。つまり6個がすべてではないというスタンスで作ったということです。今日は時間の関係でできないんですけども評価もすごく大事ですよ。評価の観点として能力、態度について、国研はここにある7つ、批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力…、この7つに絞りました。でもこれはあくまで子どもの評価なんです。子どもにこういう力がついたよというものなんです。でも実はESDというのは子どもだけでなく社会全体を巻き込んで、全てのステークホルダーでやるわけですから、教育システムつまり学校で言うなら教育全体の評価というのがあるわけです。時間があればこれも含めて議論したいんですけども、今日この国研のリーフレットでは、個人の能力・態度を総括した評価を出しているということです。そしてどういう風に学校現場に分かりやすく説明しているのかということ、目標を抽象的でなくシンプルにしました。それは「持続可能な社会に関わる課題を見出し、それを解決する能力、態度を身に付ける」としたわけです。ここから後ろを見てください。「課題を見出し解決する」、まさに「生きる力」ですよ。学校の先生であればESDを知らない先生はいるかもしれないけれど生きる力を知らない先生はいないはずですよ。であれば課題というのを持続可能な社会づくりに関わるテーマにすれば、それはいわゆるESDに直結しますよという風に提示しています。例えば生物の先生だったら当然生物の多様性を教えているわけです。ということは生物の多様性はここに該当するんだなということがわかる。そうすると普通の授業の中で、資源の有限性や生物がお互いに関わりあっているわけだから絶滅危惧種を大事にしようよということにちょっと触れると授業がよりESDっぽくなる。そうするとより先生がやりやすいということで、実はパイロットスタディーで指定校30校ぐらいにお願いしたんですけども、それ以外の学校でもやってもらって結構やりやすくなっていると思います。まだ当然わかりにくいところもあるので改善の余地はあると思っています。そして先ほど言った7つの能力をきちんとやればまさに学習指導要領の評価とも整合性がある。これは実は学習指導要領と非常に似ている概念ですよ。あえて言えば批判的という言葉と、計画するということはしょっちゅうやっているけれど、50年後、100年後とい

うちちょっと長いスパンでの未来像というんですか、そのへんがESDっぽい。それからもう一個のキーワードとしてはつながりですよね。学習指導要領には「つながり」という言葉は全然出てこないと思うんです。ですからあえて言うならば一番ESDっぽいキーワードは関わり合い、相互性、つながりと。いろいろな言葉がありますが、考えに考えて「つながり」にしました。今のところよかったなと思ってます。関わり合いや関連性よりもポピュラーな言葉でよかったなと思ってます。ここが学校現場のこだわりで、つながりって抽象的ですよ。学習指導を進める上での留意事項を3つにわけて示しました。1つは教材のつながり。例えば国語だったらこの教材をこうやって扱うよ、理科だったらこう扱うよ。こういう風に扱うことによって教科と総合的な学習のリンクができるということですよ。もう1つは人とのつながりです。従来では学校現場で先生が主体で独断的に説明するわけですよ。しかしこれからの学習というのは子ども同士に学び合わせたり、地域のおじさんおばさんだったり専門家や大学の先生から教わることであったり、そういういろんなつながりが考えられるでしょうということ。最後は今日の午前中の子どもの活動にもよく出ていたけれど、ただ学ぶだけじゃなくて自分たちで行政に働きかけてどぶのところを直したりだとか、やっぱり学ぶだけでなく行動に移すことが大事です。この3つのつながりを意識してやると極めてESDの実践としてより深くなっていきますよというのが詳しく書いてあるのがこの資料の右側です。多様性というのがどういうものかというときにぱっと開いてもらうと、左側に概念的に、より具体的なものが右側に載っているという構成になっています。具体的に細かく説明し、しかもなるべく小学校の先生がわかるレベル、つまりなるべくテクニカルワードを使わないで作らしようというスタンスで作りました。例えば、批判的に考える力は、合理的で客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、物事を見極め、建設的、協調的、大々的に判断し思考する力と書かれています。まあわかるけれどももっとわかりやすくするために、最後のページには事例までつけました。「他者の意見や情報を取り入れ検討する」これよい例です。悪い例は得られたデータや考え方を鵜呑みにする。こういう風に具体的な場面を想定することによって現場の先生にはわかりやすくなったんじゃないかなと考えています。実はそれと日本の先生が当然やってるミッションって生きる力ですよ。生きる力とどう整合性があるのかというのもきちんと示す必要があるということで、一応このように生きる力と確かな学力や豊かな人間性がどういうつながりがあるのかというのを示しています。ですからこちら左側だったら日本の先生は必ずやっていますから、逆から見れば自分の実践はESDとどういう風につながっているのかというのを示せばわかるように示しました。さらに実は国研はTIMSS、この間の12月に現場の先生にもお世話になりましたけれども国際理科数学テストというのを中心になってやっていますので、国際学力標準と言ってキーコンテシーをOECD-PISAで測定しているんですけども、そこともどういう風につながりがあるのかというのを示すことによって、いわゆる学力問題とも対応できるという形に示しています。これまでがオフィシャルな話です。

そしてこれからは一教員としてESDの説明じゃなく人物像をあげてくれと言われたときに、私の尊敬する人がこの帽子をかぶっているの。今日はシンプルな小道具でこれをかぶらせていただきます。最後これを被っている人が五島さんがESDの教師としてイメージできる人、と参考にしていただければと思います。今日は及川先生来られてますが気仙沼では96%の学校がユネスコスクールに加盟して大々的にやっていますね。一番有名なのは最近気になる防災教育ですね。奈良市は世界遺産教育。実は東京都でも結構やっていて、ESDカレンダーというのですがこれはわかりやすくとてもいい工夫だなと思っています。それ以外で神奈川県の三浦、和歌山県の事例を紹介します。隣の和歌山県ではふるさと教育という形でやっています。だから先ほど言った地域教育ですよ。ふるさとのよさを知ることによって子どもたちがふるさとで終わるということじゃなくて、国際交流に広がっていく。だからふるさとの

中にESDに関わりの深い内容がいっぱいあるんだということですよ。これは私の研究者としての一生のテーマなんです。教科書で理科を教えていけば限界があるけれど、地域を使うと子どもたちは地域を大事にするようになるんですよ。これは私が現場で活動してひしひしと思うことです。地域にごみが落ちていけばきれいにしようと活動につながるんですよ。ですから私は教科書だけじゃなくて身近な環境を使ってやるということがすごく大事だということを研究者として明らかにしたいという思いで、私からするとESDにつながるわけですね。隣の分科会では地域学習というのをやっていますが、実は私は現場での専門は地域学習でした。そういうものを道徳、総合的な学習、全ての時間でやっていきましょう。そういうものをふるさとと他地域を関連付けて考えることにとって地域だけでなくグローバル、キーワードのThink Globally Act Locally、まさにその通りになるわけです。先生がESDを知らないで地域だけで閉じていたら、本当は子どもの興味や関心は広がるのに、ある意味でそれを制限してしまう。キーワードを知っているといいものに広げられる、そういう意味でも大事だと思っています。そして子どもの学びをつなげる、つまりいろんな教科でやった学びはつながってるよということを具体的に示すものとして、それが教員の実践をつなげるということになります。それを和歌山県では別名市民教育という形でもやっていますよということです。実はいろんなテーマがあって、お醤油から語るわけですね。それから防災、それからふるさとの観光ですよ。実はここでは昔トルコの船が難破してそこから今まで交流が続いているという話とか、いろんな地域学習からとかですね、ここにも世界遺産の高野山がありますし、このように多様なESDが行われています。これを国研の枠組みで整理するとこんな風に全体像が見えるよということです。これの何がいいのかというとおしょうゆの学習とトルコの学習のどういうところにつながりがあるのか、普通はつながりはないけれどやはり同じ思いでやってそこから議論が始まって、そこから和歌山のESDが語れるようになるというのが、やはりみなさんにいろいろ広める意味では非常によいかと思います。そしてESDやってどこがいいんですかという話になるわけです。どこが一番いいかという先生が思いをこめて授業できるということです。やはりここを育みたい、伸ばしたいと教師自身がこの教材で教えるという思い、先ほどの小谷先生のお話であったアングルン、先生に思いがあったからあそこまでできるわけですよ。それから授業で生徒が本気で学べる。学びたい、行動したいという動機づけ、これが私は今の教育に欠けているところの1つだと思います。大学受験のためにやっているんじゃないで、本当は学ぶこと自体が面白いよ。やっぱり学校が一つになるということは、地域と学校が一つになることであって、それは地域学習に関わりがあるんじゃないか。つまり指導力、子どもの学力、それだけじゃなくて学校全体としての力ですよ。そういうものも上がっていくというのがESDの実は良さじゃないかなあと思います。私は当時メンデルの遺伝の授業をやっているときはメンデルのバックグラウンドや人柄を語ってました。シュヴァイツァはアカデミックな人で、何の不自由もない人がなぜ自分の人生をアフリカに捧げようと思ったのかというのを私は道徳教育としてやっていたのですが、今でいえばESDですね。だからいろんな先生の思いがつながるのがESDの良さだと思います。じゃあ五島さん自身はどんなものを発明したかという、理科の地質ですよ、ここが火山の噴火という。これは友人の笠間さんが作ったものなんですけど、粘土とストローで作った火山です。こういうことをすると子どもは喜ぶわけです。究極なのは地震がどのように伝わるのかというデモンストレーションがあるんですけど20万円するんです。これを私はパンツのゴムと綿棒で作ったんです。こういうことの何がよいかというと子どもたちはうちに帰ってこれをやるんです。自分が学校でやってきたことを夕食の食卓で語るわけです。いい雰囲気ですよ。まさにESDです。こういう工夫をしていく必要があるわけです。こういうものを学校だけでなく、地域には博物館や大学の専門家や野鳥の好きなおじさんがいる。こういうものを学校を中心に文化の発信の中心

の場となるということです。つまり学校が受験勉強の場じゃなくなるということです。そういうのは結構楽しい教育だなと思うわけです。それは地域の教材化をやってきている人と人、人と地域、当然つながりますよね。人と世界、具体的にどういうことですかという私は三浦半島の地層について調べていました。ここの学校がオーストラリアのウォーナンブールと姉妹都市になるわけです。そうすると姉妹都市の地質はどうなっているんだとか、地質はどうなっているんだとなるわけです。そしてまさに子どもたちは受験勉強じゃないから学ぶ意味が分かるわけです。だから当然自分たちのテーマが見つけれられるわけです。これが今まさに日本が生きる力で育成しようとしている教育だというわけです。そしてやっぱり一番大事なのは郷土を大事にする、誇りに思う心ですよ。例えば奈良に来た大人の外国人に対して子どもが堂々と語るわけですよ。そういうものを私は意識的にやってたけれども、そこで終わるんじゃないくて今はインターネットの時代だから世界に発信する。そういう意味ではユネスコスクールネットワークというのはそこでネットワークができているのでやりやすいからどんどん利用した方がいいと思います。私は中学校の教師の時、子どもとしょっちゅう三浦半島の沢という沢を歩いてきました。実は私大学卒業してグランドキャニオンに行ってるんです。だけど教員になって国研に入ってアメリカで8ヶ月間研究をやらせてもらって、そのときに昔と同じこの上に立ったんですよ。そしてこの上を歩くんです。そうすると三浦半島は1千万年前より後の地層です。グランドキャニオンは6500万年から20億までと、全然桁が違うんです。だけど同じ模様があるんです。そうすると何が起こるのかというのとみているとグランドキャニオンにしながら、脳裏に映っているのは三浦半島のあその場所だというわけです。だから地域をよく知るといえるのは、世界に行ったとき地域が思い浮かぶわけですよ。こういう学習って大事だなと思います。まさにESD。私はまとめるのが好きなので、生徒と5年間ぐらい歩くと毎年だとA4の紙が10枚ぐらいになるんですけど、5年間ためると50枚になって本になるんですね。最初のうちはポケットマネーでガリ版で刷ってたんですけど、教育委員会が三浦市全体に広げようと言って刷ってくれるようになったんです。私はある生徒が色をつけてくれたオールカラーのものを1冊だけ持っているんです。それに議員が感動して3000万円の予算がつくようになったんです。これって子どもの力なわけですよ。私は三浦市の副読本を作ったときに三浦の植物、社会、いろんなものを見たんだけどそういうのっていろんな人を巻き込んでいけるわけです。私の場合は一般の人だけじゃなくて子どもを巻き込んでやれたというのが自分の特徴かなと。そういうのって文化継承でしょ。そういうものをやるには教員が4年間で大学出ただけでそんな力つかないじゃないですか。教員が学びなおしをするような教育センターや博物館の研修が私は大事だなと思っています。そしてそういうものを私が三浦市の教育長に言って、教育長も「三浦っ子」を育てるといっているのでここでは三浦学という形でやっていて、毎年先生が5回研修に来るんです。だいたい2ヶ月間宿題を持って帰るわけです。2ヶ月間頑張ると1年間やるとだいたい1つの単元について、例えばどういうものかというところある先生は鯖、ある先生は干潟、ある先生は蔵について知っている。いわゆる一芸の先生を作るんです。私はこれの効果があつたと思うのが、先生はやっぱり教科で尊敬されなきゃだめ。これはこの人のプライドになるんですよ。今東大がこれを知って逆に言うとバックアップしている。こんな広がりができて、30ぐらいテーマができていんです。宮沢賢治はいろいろ調べて子どもたちを北上川に連れて行って地層を語ったわけです。子どもたちは北上川で中生代の恐竜の時代を想像して時間を超えて広がっていったんです。そういう教育は私から言わせるとESDを知っているとかじゃなくて子どもが本当に学ぶことを面白いと思っていれば先生はこういう風になっていく。だから100年前もこういう先生はいたと思います。決してトレンドではなくて宮沢賢治はヴァイオリンをやって絵を描いて、最後宗教まで行くわけじゃないですか。それがきっと私は学びの本質であると思うんです。私はよく宮沢賢治みたいとは言われるけど宮

沢賢治になることはできないと思ってるんです。でも私が思う、「みたいな」先生はつくれると思うんです。私が尊敬してるのは物理学で寺田虎彦という人なんですけど、寺田虎彦と同じにはなれなくても、それに近づくことはできると思うんです。だけどそういうものがE S Dの典型的な人でしょうということです。今の教育は知識しか教えてないんです。本当は宇宙万物というのは自然というか環境なんですけど、環境の中には面白いことがたくさんあるんです。だけどそれは知識がないと読み解けない。勉強というのは私は人生を豊かにしてくれるものだと思うんです。それがあ意味ではE S Dなんです。ですからこれからの教員というのは従来では縦軸で学問体系というのを習ってきているわけです。それを横軸、防災教育、世界遺産教育、E S D学習、そういうものが自由自在にできる教員になるときって子どもは学ぶ楽しさがわかるんじゃないかなと思います。最後に一言で言うと、学習指導要領をきちんとやるのは当たり前。そうじゃなくてみなさん奈良だとしたら奈良の教育をいかにつくっていくかということです。それはE S Dという理論があるだけではだめで、実践だけでもだめで、それを融合できる教員が必要なんですということです。そしていかに教員が子どもの一生を変えるかということなんです。ただそういう教員になるためには日々勉強をしなければならない。夢をもって教育を目指してやっていくということが、いい教育につながるのかなと思います。お互いに頑張りましょう。どうもご清聴ありがとうございました。

中澤：五島先生ありがとうございました。E S Dとは学びの面白さを見つける。それは地域の誇りを育成できるものだと。またE S Dというもののキーワードがわかっていたら、地域から世界に突き抜けることができる。というお話でした。先生のお話によるとE S Dにはどうしても現地や本物が大切で、そこにまず行かなければならないと。今のご発表を受けて今度は川田先生から。

川田：五島先生の話の中では、教科書をきちんと指導していればE S D的なことはやっているんだ、E S Dは教育の本質と関わっているんだ、つながりを大切にしていればE S D、E S Dは文部科学省のいう生きる力と重なっているんだというお話がありました。E S Dを普及させる際に、E S Dってなんだろう、よくわからない、わかってからじゃあ始めようかという人にとって、このお話はおいしい誘い水ですね。ハードルを下げたということです。しかし、ここは注意が必要です。

私は、国立教育政策研究所のリーフレットの中で、E S Dの視点に立った学習指導の目標のところに書かれている「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」という箇所、前半部分の「持続可能な社会づくりに関わる課題を見出し」というところが極めて重要だと思います。この箇所の後半部分に重点を置いてしまうと何でもE S Dになってしまいます。極論すれば、英語のコミュニケーションを行う力の基礎としてアルファベットを習うのもE S Dだし、国語で50音を習うのもE S Dといえてしまいます。それは、私はちょっと違うと思います。「持続可能な社会づくりに関わる課題を見出し」というところを常に念頭に置いて、学習活動を進めるのがE S Dだと考えています。今日は、ドイツのE S Dコンピテンシーを簡単にご紹介しながら、この点についてみなさんと考えていきたいと思います。

ドイツではE S Dについて議論を重ねた結果、E S Dコンピテンシーという指針を出しています。ドイツでは、E S Dによってつけたい力は「持続可能な開発に関する知識を応用し、持続不可能な開発の問題を認識できる能力」だけにしぼっています（これを形成能力 *Gestaltungskompetenz* といいます）。これ以外の力はE S Dに関わる力ではあるけれど、E S Dでつけるべき力とはしていません。ですから、アルファベットを習うことなどはドイツではE S Dとはみなされません。

「持続可能な開発に関する知識を応用し、持続不可能な開発の問題を認識できる能力をつける」ことがどうして必要なのでしょう。それは、私たちの生活・社会が持続不可能な危機に面しているという強い認識に基づいて、それを解決できる力をつけるためにESDが必要だということです。持続不可能な危機には、環境問題、平和の問題、開発途上国に関わる諸問題なども該当します。このような問題を解決しなくてはならないので、そのための力が必要だということです。ドイツではESDをそのための教育に絞り込んでいます。ESDの理解が広く拡散してしまうと、何がESDなのかわからなくなってしまいます。日本的なとらえ方があるのかもしれませんが、ドイツではこういうとらえ方をしているのです。

次に、形成能力の内容ですが、環境、経済、社会（これを持続可能性の三要素とドイツでは言っています。）の相互依存を、現状分析及び未来予測から導き出し、この相互依存の中でそれぞれが開発されたらどのようなことが起こるのだろうかということを考えて、その帰結を導き出して、それに基づいて決断し、持続可能な開発のプロセスが実現するために、個人や共同体のレベル、あるいは政策のレベルで実行することを意味するとされています。持続可能な開発に関しては、当然、議論があります。特にESDのD（development）に関する議論は様々なものがありますが、ここでは、ESDは、持続可能な開発を実現するために個人、共同、政策レベルで実行するための能力をつけるとしているということが重要です。

それでは、この能力をどうやって計るのかということですが、非常に難しいのです。そこで用いられたのがコンピテンシーという考え方です。コンピテンシーとは、これは元々企業などの人材開発の分野から出てきた言葉です。たとえば、有能な社員はどういう力を持っているのかを評価するとします。ある社員がペーパーテストで高得点を取ったから有能なのかというと、そうではない。では、どうしたらよいのかということで、その社員がどんな行動をしているのかを見ることで有能かがわかるのではないかと考えたわけです。社員の行動様式を取り出して、こんな行動をしている人が有能な社員であると評価するのです。そして、そのような行動をするように他の社員を教育していけば会社の中で有能な社員が増えていくということになります。その際の、どのような行動様式を身に付けているというのがコンピテンシーの内容となります。

ここで、ドイツで示されたESDのコンピテンシーをご紹介します。翻訳書『ESDコンピテンシー』では、各コンピテンシーの説明が「～できる」となっているものが大半となっていますが、これは翻訳の問題で、私は異論があって「～できている。」「～している。」としたほうがわかりやすかったのではないかと思います。例えば、最初のコンピテンシー、「①世界に対してオープンであり、新たな視点を統合させた知を組み立てる。」では、その人が世界に対してオープンで、新たな知を組み立てているかを評価してみるということになります。「②先を見越して考え行動する。」も先を見越して行動しているだろうかということです。あるいは「③学際的知識を習得して行動する。」は学際的知識を使って行動しようとしているかということです。このほか、「④他者と協力して計画して行動している」、「⑤意思決定のプロセスに参加している」というようにコンピテンシーとはまさに行動様式を指しています。これだったら、コンピテンシーに示されていることをやっているかどうかは評価できます。例えば、ある人のコミュニケーション能力を評価するというのはそう簡単ではありませんが、ある場面でコミュニケーションを積極的にとろうとしているのかとか、コミュニケーションがきちんとできているかについては、他者の目に見えますから容易に評価可能です。そうした評価を引き出すのがコンピテンシーになります。先程も申し上げたとおり、ドイツのESDで身に付けたいとしている力は、形成能力ただ1つだけです。また、形成能力に関わるコンピテンシーも10個です。今、5つをご紹介します。他の5

つは、⑥行動的になるように他者を動機付ける、⑦自分や他者の理念を反省する、⑧自主的に計画し行動する、⑨恵まれない人たちに対して共感し、連帯を示す、⑩行動的になるように自分自身を動機付ける、です。この10個のことができているならば、E S Dの能力がついていると見ましようということですから非常にはっきりとしています。

以上のように、ドイツではE S Dはかなり限定的な教育の場面を想定していて、何でもかんでもE S Dではないという合意がなされています。2014年の、国連E S Dの10年の最終年が近づいてきています。このときには、少なくとも私たちが世界でE S Dがどのようにとらえられているのかを理解しておく必要があると思います。そうした中で日本においてどのようにE S Dを進めていくのかということや、E S Dを進める背景となる理論についてしっかり考える必要があります。これらは、E S Dは結局何なのかということに関わってきます。E S Dの理論化については3つの側面を考えないといけないと思います。1つは政策です。教育政策、教育運動というような側面です。もう1つは学校現場で行っている教育実践としてE S Dをとらえる側面。最後は学習評価、子どもがどれだけ育ったのかという側面です。それぞれの側面でE S Dをとらえる理論は異なるものと思います。E S Dの理論化にあたっては、E S Dの推進といった政策に関する議論、カリキュラムをどうやって作っているのかという議論、それから、子どもがE S Dによってどのように成長していくのかという議論が、それぞれの側面で必要になると思います。この後、議論が深まればと思います。

中澤：ありがとうございました。川田先生の方からE S Dとはもう少し絞らなくてはいけない、その絞り方についてご提言いただきました。またE S Dの評価のポイントについてもご提言いただきました。みなさん日ごろからE S Dをやっておられて、どうなっているんだろうとかあるいは聞いてみたいなど思われていることがたくさんあると思います。私はよく分からなくなるとき、本当に大事なことは分けられないと思い、混沌としたままやってしまうことがよくありますが、それではみなさんがここでE S Dについて話し合いたいと思うことをお手元のカードにご記入いただきまして、そしてこの場全体でまさにE S D的に議論して、少しでもこの会で参加された方が何か少しでも見えてきたらと思いますのでよろしくお願ひします。それでは10分間休憩をとりたいと思います。

中澤：それでは再開させていただきたいと思います。みなさんたくさんのカードありがとうございます。

加藤：南方熊楠のお話が出ましたが、1980年ぐらいですかね、白浜の南方熊楠記念館に行きました。そこには熊楠の子ども向けの伝記があって、ちゃんとタイトルがついているんです。あまりにもショッキングなタイトルで思わず買ってしまいました。「大学やめてもへっちゃら」というタイトルなんです。それを思い出しました。それで例えますと全員飛行機に乗っているようなものなんです。五島先生がまっすぐ飛べますよ、エンジン1つ調子悪いけどちゃんと飛べますよというようなものです。川田先生はその後ろの方でこの飛行機は安定して飛んでいるけれども一体どこに向かってどこに着陸するんですか、というようなお話なんです。実は私も教員養成系大学は次の飛行機に乗せる搭乗者、つまりこれから先生になる人たちをこの飛行機に乗せていくわけです。それでどこかに飛んでいく、という風に聞いていました。先ほどのお話でやはりE S Dがおできになる先生というのは力のある先生のような気がしますし、それから力のある先生のやっていることはE S Dだという循環しているところがあるわけです。そのあたりに何かヒントがあるのかなと私自身思っていて、本学でも学ぶ喜びプロジェクトで実践

から追究しようとしています。個別に答えていただいて議論していく中で方向性が見えてきたらと思います。

中澤：加藤先生ありがとうございました。今加藤先生がおっしゃったのはとりあえずE S Dの範囲ということに関わっていたと思いますが、それについてのご質問や感想が4枚来ています。都跡小学校池見先生と済美南小学校の竹本先生から、奈良市では世界遺産教育をやっていますが、川田先生のE S Dの枠組みから言うとどうなるのかということです。それでももう少し枠組みを広げてもいいんじゃないかということです。それから登美ヶ丘小学校の先生からもE S Dの広がりや拡散、E S Dを取り扱う範囲をもう少し明らかにしたほうがいいんじゃないかという意見が来ています。先ほど、五島先生の方からは学習指導要領をやっていくということはそれはすなわちE S Dだというご発言をいただいており、一方川田先生の方からは「持続可能な社会づくりに関わる課題を見出し」というのがキーワードであって、そこを外してはいけないというお話でした。みなさんはどんなふうに思われるのでしょうか。

登美ヶ丘小学校信田：川田先生の出していただいたコンピテンシーは10個あったと思うんですけど、現場の教員からしたらやはり窮屈かなと思えます。そのときに何のためにやっているのかというのがあって、例えば人権教育をやるとすると人権教育としての狙いがある意図的にそれがE S Dに乗っかっていることがあったりするのかなというイメージです。そこには広がりや世界があるのはどこまでも大きくなっていくと拡散していくのかなあというようなとらえ方です。国研が出していただいた資料の能力と、コンピテンシーの関連性というのをお二人で整合していただくと現場の教員としてはわかりやすいです。

川田：E S Dでつけた能力をどのように確認するのかという点から、ドイツではE S Dは「持続可能な開発に関する知識を応用し、持続不可能な開発の問題を認識できる能力（＝形成能力）」をつけるための教育だと限定し、形成能力に関わるコンピテンシーとしてこの10個が示されているのです。この10個が、E S Dのみに関わるコンピテンシーかということではないのです。それらは他の教育に関わるコンピテンシーにもなりえます。ただE S Dは、持続可能な社会づくりに関わる教育であることを常に意識することが重要です。スキルの方に注目してしまうと何もかもE S Dに含まれてしまう可能性が大きくなります。そうならないためにこのことをしっかり念頭に置いておくということが大事だと考えます。

五島：それでこれを見たときに例えば川田先生は生きる力に似ているなと思ったわけです。国研のほうにはリーフレットがあるので見ていただくとわかりますが、これだって生きる力に似ているわけです。実は私も研究者になって一つの言葉にすごくこだわるようになりました。現場のときはそんな時間はなくて、研究者というのは実はすごく大変で国語力が勝負かなと思ったりします。E S Dを簡単に言うと競技ととらえると何でもありの世界になってしまう。E S DをきちんとE S Dらしさを出そうと思うと、E S Dとは何ですかとなる。でも今日私がよかったと思うのは川田先生が実は持続可能な社会づくりに関わるということがE S Dなんですよと言われた。こういう視点はすごく大事なんです。E S Dをやってる研究者や、それを研究してる人にとってはすごく大事なんです。今日は私は話の前半はそういう話をしたんだけど、後半は私のオリジナルで現場の先生にわかりやすく言うとそれがわかりにくくなってしまふということで、それはその通りなんです。でも研究者の中で理論化するということに

なったときには川田先生の言ったところで議論しないといけないと自分自身すごく思います。自分を出しておきながら、どちらかという後半より前半の方が大事だなというのはその通りだなと思いました。先ほど先生が言われた生きる力というのは現場の先生だと言葉が多少違うけれど、我々は常に考えてやっていますよというような視点で見ると、確かに生きる力になってしまふし、教育というのは逆に言えばこれくらい抽象的なものなんだなと思います。それで例えば川田先生のドイツのESDコンピテンシーの⑩番からいくと、行動的に動機付けるというところからいくと、これは国研で言うと7番でしょうねという話になるわけです。⑨恵まれたない人たちに共感、これはつまり自分たちは恵まれない人たちとつながっているんだよ、これはまさにシュヴァイツァの気持ちになるということです。⑧自主的に計画し行動というのは行動を計画しというのは2番であって、行動できるというのは7番でしょうということです。だからそういうふうやっていくとたぶん私が唯一川田先生が出した中で整合性がないというのは①番です。世界に対してオープンなんて言っていません。でもこれも基本的にオープンであるということは他人を理解しようということだから、それが新たな視点を統合させた知を組み立てることができるという風にはなると思います。中教審では知の総合化なんて言ってますよね。そこは連携できると思うんです。だから私は川田先生がドイツのを出していただいてよかったこととして、ドイツの文脈と日本の文脈で共通している部分が見えたということです。逆に言うと共通していない部分がドイツらしい。それが理解できるということがすごく大事ななと思います。国研ので言いますと、基本的には生きる力でいいと思うんだけど、あえてESDっぽくした言葉というにあえて言えば批判的ということばです。これは従来なかったですね。日本語で批判的いうとあなたの言ったことに対して反対の事を言うということですね。でもこれは英語の翻訳の限界です。クリティカルという文化が日本にはない。何故かという日本は基本的に似たようなアイデンティティなんです。だからそういう意味で他民族の人類のつぼみみたいに言うと、議論し合わない限りいい世の中はできない。日本みたいな形で阿吽の呼吸みたいにわかってしまう民族は、むしろ言うことによって逆なでしてしまうから言わないでおく。それに対して、クリティカルという言葉が実はESDっぽい。でもなぜクリティカルにしなかったかという、文部科学省は基本的にカタカナは避けているんです。逆に言えばコミュニケーションという言葉は日本語にできなかったんですよ。基本的に日本語の従来言葉を使っている。だけどここでクリティカルと入れてしまうとその説明をいれるのもと思ったんです。でもここでクリティカルというのは批判だけでなく、より良いものにするという建設的という言葉もあるんです。だけどそれが言葉の限界。それからもうひとつ言えば未来を予測してというのは、計画を立てるのはもうやっているけれどビジョンが長い時間軸である、次の世代、さらに次の世代を考えているというのがESDっぽい。それから最後につながり。相手を尊重するというのは道德教育で十分やっているわけです。だからあえてこの3つなんです。こんなものですかと言われればそれは言葉の限界なんですけれど、だからと言って勉強しなくてもいいかというそれは違う。それは新しいものでもう一回リセットということなんです。今まであったものでもう一回方向付けを変えてみると、よかったものが悪く見えたり、悪かったものがよく見えたりするわけです。それが教育の糧というか学び直しというか。だからESDを知ることによって自分たちのやっている何気ない実践が見えてくる。そういう意味で私はESDをきちっとやることはいいことだと思います。

中澤：今の事に関してなんですけれども文科省の岩本さんから先ほどESDのうち、生きる力としてカバーできないものとしてつながりを挙げてこられたんだけど、もう少し踏み込んで共生とか他者の理解、さらには多様ということを踏み込んでいったらよいのではないかという意見がきています。

五島：それはもちろん議論を重ねてきています。最終的に今はつながりにしてよかったなと思っています。実際いろんなところで見ると、つながりという言葉は結構あります。それを英語にしてみるとなると国研はこれを Connection ではなくて、Linkage と訳したんです。言葉の一つに込められた長い歴史、それはすごく面白いんです。そういうことが詳しい先生に習っていたら本当はすごく国語が大好きになっていたかもしれない。

岩本：震災以降つながりや絆といった言葉が少し手垢のついた言葉になってしまいましたが、地球規模の問題や持続可能な開発作りのためには聞き合うという力がなくてはならない。例えば奈良で世界遺産教育をするというのは単に郷土愛を育てるだけでいいのか。自分のところはこれだけいいのだけれども、モンサンミッシェルに比べたらうちのはこんなところがだめではないか。あるいはさっきの児童の発表にあったように新薬師寺は世界遺産ではないけれど、立派な僕たちの宝ではないかといったこともあります。世界遺産になっているところを外からみて自分を相対化する。相対化するからこそ自分を理解できる。そういった能力が実は持続可能な開発に求められている能力なのではないかと思ってあえてご意見をお聞きする次第です。

五島：その相対化っていう言葉自身も実は私はキーワードだと思います。

岩本：学習指導要領の「生きる力」ではそういうことまでは言ってない。ただそこでESDが付加価値をつけたとすれば、またユネスコ推進していることを考えると、寛容とか多文化を理解するというところをもっともっと強調していかないといけないのではないかと思います。

中澤：他者に対する思いやりだけでなく、それを鏡として振り返るということですね。

岩本：そういうフィードバックですよね。自分を振り返り、また他者を見直す場面になるということですね。そういう力こそ今これだけグローバル化と言われている中で、求められているのではないかと思います。

川田：先程、ESDコンピテンシーは10個お示ししました。翻訳書『ESDコンピテンシー』の中には各コンピテンシーに対応する具体的目標が表になって載っています。今のお話に関わることだと、他者と協力して計画して行動することができるという範疇の中に、「持続可能性についての集団内の異なる立場を、その背景と共に理解し分析し、この意味で対立を民主的に解消することができる」というものがあります。対立が生じていることが持続不可能な状況を作り出すのです。そうした状況を理解することを超えて、民主的に解決するというのがESDのコンピテンシーの中には含まれています。ですから共感するというだけでなく、もう一步踏み込むというところまでドイツでは見通しています。

中澤：共感のレベルから一歩行動のレベルに入っているということですね。

川田：そうです。それは持続可能な状況を作るということを前提として持続不可能な状況を認識することでもあります。

加藤：E S Dでは行動の変革というのがありますが、変革までは伝わりますがそれにつながるのですね。

川田：対立があるということを知るだけでなく、次のところに向かって教育が果たす役割があるということですね。

中澤：少し視点を変えまして学生さんからの質問が来ています。1つは4回生下住君からなんですけど、現在の世代のニーズをみたすということなんです。将来世代のニーズを満たすということは本当にできるのかと。現在の世代のニーズを制限することを考えずに満たすということが可能なのかということですね。もう1つ教職大学院の中澤君からは6つの構成概念は本当に持続可能な社会づくりの構成概念として有効なのか、他にはないのですかということですね。いかがですか。私も持続可能な開発という言葉の中に何かうまくすればやっていると、今の社会や生活を反省するという視点があり見えないというところが疑問ですね。

田淵：やはり 3.11.以後生活スタイルを変えないというあり方はよくないという気がするんですね。アウシュビッツ以降、詩を書くことは野蛮であるとされていた。あの残虐な行為を見ずして人々の美しさや自然の美しさを書くことは野蛮であると。この現実を見よという、そういうものだと思うんです。3.11.以後やはり生活スタイルを改めないというのはよくないと思うんです。だから開発という言葉が川田先生が使っていたのをサステイナブルフューチャーというのを僕は未来予測にもなるし、デベロップメントというのも持続可能な未来という風になればよいのではないかと、ひとつは思った。もう1つは最初奈良は世界遺産だけと言ってたんですね。でもそれはおかしいということになった。空間的な面と時間的な面、それは何かというと空間的な面と言うと自分たちの地域にも誇るべき文化遺産があるし、自分たちの地域の中にも美しい景観がある。世界遺産であるかどうかにかかわらず、それを守っていこうと。そういう空間的な広がりを持たなければいけない。だからもう1つは岩本先生がおっしゃったように、これは1300年受け継いできたものだというのが今日の子どもの発表にもあったと思うんです。これは残って来たんじゃない、残されてきたんだ。残されてきたからこそ、残されてきた自分たちが渡されたバトンをつなぐバトンリレーの現在のランナーで、それを次のランナーにつなげていくんだという当事者意識、それは必ず行動にもなっていくと思います。そういう時間軸と空間軸においてその世界遺産をとらえてみよう、さらにもう1つは奈良の世界遺産の相対化ということで非常に大事だと思う。僕は相対化とは2つあると思います。何かというと他者のバックグラウンドを洞察するという目とそれを見ている自分の目にひずみがないかという自己を省みるということですね。そういう自己の相対化というその両方が必要なんじゃないかと僕は思います。それを批判するという事は僕は先生のおっしゃっている批判ではなく建設的なものなんだ。でもそれは自分での自己批判とは非常に限られているんだ、そしてそれを他者とともに行っていくということですね。1つの方法論ですけど僕のゼミはレポートを書いてきたらそれを読みあって、いいところと悪いところを指摘しあうんです。そうすると学生はどんどんよくなっていくんです。高まる教育ですね。だからこれをやっぱり批判的に考えるというのは他者ととも批判をしていくということが実は大切なんです。そして中澤先生の専門の構成主義的な知というもの。多様なバックグラウンドを持つ他者の考えの中から新しい知が構成されていく。それに結びついてくるのではないかなと思います。

中澤：今のお話だと相対化と省察ということですね。

加藤：私は2つ目の相対化は対自化だと思うんです。当事者意識と言ったりするけれど自分のこととしてその問題をとらえてみる、そうすると過去の自分と今の自分、未来の自分の自覚という概念かなと思ってるんですけどね。自分の中での相対化ですね。

中澤：最後に大きな質問が来ていますので。今ESDについて話しているけれど、日本型のESDがあるんじゃないのかと。この本にも日本らしい、その地域に即したESDがあるんじゃないかというふうに書いてあるんですけど、日本型のESDを考えてみた方がいいんじゃないかというものです。気仙沼市教育委員会の及川さんこれについてどうですか。

及川：日本型という用語があるかもしれませんが、日本は10年間ESDをけん引してやってきたわけです。来年の世界会議にアピールできるものは何かと、私もいつも考えています。先ほど国立教育政策研究所のESDの能力・態度と授業への取り入れ方の提案、そして、川田先生からは、ドイツのESDに対するドイツらしい理論（理屈）的な考えかたが紹介されましたが、私は、その2つのコンセプトの間に、日本がやってきた日本らしいESDの実践の素晴らしさが埋没していると思います。それこそ日本が発信すべきESDじゃないかと思っています。ESDのアプローチというのは2つあって、教科にESDを溶け込ませる「融合型」(Infusion Approach)と、総合的な学習の時間を軸に各教科を教科横断・総合的に組み合わせて学際的なプログラムを作成する「統合（総合）型」(Integrated Approach)の2つです。今まで、日本で、ESDを一生懸命やってきた多くの先生は、「融合型」のアプローチではなく、「統合型」なんです。五島先生が言っているのは、どちらかという教科の中にESDを溶け込ませて、教科の中でESDをやるという「融合型」ですね。これは、ESDに取り組みやすいというメリットはありますが、ある先生から言わせると、教科の目標とESDの目標の二兎を追うものは、一兎をも得ずになってしまうといわれます。もう1つ世界遺産教育や環境教育、防災教育も、そうなんですけれど、これは教科に溶け込ませるのではなくて、各教科や単元から関連する素材や題材を抜き出して、簡単に言えば、総合的な学習の時間を中心に、統合的かつ総合的にやってきている学習が多いわけです。これこそが日本がこれだけESDを発展させてきた大きな実践であり、原動力なんです。つまり統合的な単元構成、これこそがESDのカリキュラムデザインにおいて、教師が非常に力を発揮できる場所であるし、いろんな地域の素材や人材だとか、海外とのコラボレーションだとかいろんなものが組み込まれているんです。

さっき学ぶ面白さという話がありましたが、これも重要なキーワードです。学ぶ面白さというのは、そういう統合的で探究的なわくわくするカリキュラムとか、そういう物語があってはじめて、子どもたちはわくわくしてくる。もちろん教科でもそういうものはあると思うんですけど。と同時に教える方の喜び、教える方が面白いと思ってカリキュラムを作ればわくわくするし、その気持ちが子どもたちにも伝わる。子どもと教員が互いに作っていくという双方向なものを含めて、やはり日本のそういう「物語をつぐむ楽しさ」がこれまでの実践にあったんです。私は、これこそが日本が発信すべきものだと思うし、総合的な学習の時間で基軸にして、プログラム作成の手法であるとか、統合的なカリキュラムもきちんと整理して、その理論化することが大事なのかなと思います。

二つ目のとして、理論化の中で、能力・態度に私が付け加えて欲しいものがあります。構成要素にも入るかもしれないんですけど、今、東日本大震災の被災地や教育現場の現実を見たときに、ESDで、復

興を担う未来の子どもに、是非着けたいと思う力（能力・態度）のキーワードが2つあります。それは、「創造性」と「イノベーション」です。これがないと、多くのものを失った被災地は、我慢して我慢して縮小してやせ細ってしまうのです。そして、その力を育むために、日本のESDは「多様な主体の参画と協働」、すなわち、様々な人々や機関、地域がつながって、日本のESDとなっているということを発信していかなければならないと思います。国研が言っているように、ESDで育むべき力とOECDのキーコンピテンシーは、一見ばらばらに見えるけれど、実は方向性は同じで、それを実践を通して実証できるのは、世界で日本だけなのです。

五島：ほとんど賛成なんですけど私が一点だけ確認しておきたいのは、日本のESDは総合的な学習で真似できないようなすごい実践をやっていて、それはユネスコスクールだからできるというのがあるんです。我々はどこでも誰でもできるという視点でやったのは確かなんです。今、及川先生が言われたのは世界のESDはプロジェクト学習みたいなものだということなんです。私がイメージするプロジェクト学習は総合的な学習かなと思いました。ここは大きなポイントだと思います。であれば日本の総合的な学習はプロジェクト学習でないことをはっきり言う必要があるんです。

及川：最近、海外でのESDの実践は、プロジェクトベースになっているような傾向がありますが、日本でこれまで行ってきた総合的な学習を基軸とするESDは、あくまでもカリキュラムベースです。したがって、しっかりESDを、総合的な学習を入れないとそれは本当の意味でのカリキュラムベースにならないんじゃないかと思うんです。日本ではESDカレンダーなどが流行っているけれども、本当にそれでストーリー性のある探究的なESDとして学べたかの検証がされていない。カレンダーを作ったことで、ESDを学んだ気になっているのかもしれない。総合的な学習の時間がESDの基軸になることで、子供たちの学びが、探究的であり、問題解決的であり、体験的であり、そして新たな価値が生まれるような、さらには、できれば行動に結びつくような、そういうものになってくるというのが大事だと思います。ESDを進める際には、カリキュラムをデザインする、物語を作るということを教師はしっかりやっていかなければならないのです。

五島：最後は先生の能力をいかにつけるかということなんです。

中澤：今総合的な学習の時間でESDの実践をもっと充実させるべきではないのかという意見が出ました。奈良県国際理解研究会の中江先生からはそれには時間が大切なので土曜日の学習の復活も検討すべきでないかというカードをいただいております。それで日本型ESDということについて考えていることがあります。日本の持続不可能な社会への方向性は、近代化とともに始まったとも言えます。だから西洋化する前の社会のあり方も、持続可能な構成概念というものを考えるときに考えるべきではないのかということの本学の頓宮先生から教えていただきました。

五島：日本にESDというのはすごくあっているので、日本政府は逆に日本の教育をアピールする良い場だと思います。これを最後2014年にどうやって出していくかだと思います。及川先生も言われたように日本だからできたんだということ、日本が言い出して最後10年を閉めるときにこういうことをやってきて、それは世界とは違うということ、それを言うべきなんです。ESDというのは答えが明確じゃないんです。それをみんなで議論しあってやっていく、それは人も変われば答えも変わるわけです。だか

からこそ大事だと思います。最後に及川先生の言われた想像力とイノベーションという2つのキーワードも面白い議論だと思います。

中澤：時間になってしまいました。みなさんのおかげで大変充実した会議になったと思います。ありがとうございました。

あとがき

この「学ぶ喜び」プロジェクトの報告書を手にしていただいた時、様々な感想をお持ちになるのではないかと思います。まず、「とても分厚い」と思われるのではないのでしょうか。プロジェクトの報告書としては、類を見ないページ数です。そして中を見ますと、「ひとつひとつのプログラムに参加した学生の報告が随分多いな」と思われるのではないのでしょうか。しかしこのことが、本プロジェクトの特徴を如実に示しています。それは、「学ぶ喜び」プロジェクトは学生の学びを大切にしたいプロジェクトであったということです。私たちは、何をするにも学生の参加を意識しました。毎月の連続公開講座を開催する時、ESDキャンプをした時、あるいはESD学会の時、学生の参加がどれだけあるかということを強く意識しました。また、当日の参加があれば良いということではなく、そのプログラムの企画段階の時点から学生の参加があるということを強く意識しました。さらに、このプロジェクトの各プログラムは、小学校、中学校の先生方、教育委員会の先生方、附属校園の先生方との協働で進められたということです。

例えば、8月のESDキャンプは、5月から検討が開始されましたが、その企画会議には、奈良ASPネットの小学校、中学校の先生方とともに、学生諸君も参加しました。「正統的周辺参加」の学びと呼ぶことができるかもしれませんが、私たちはいつの間にか誰からともなく、それを「テトラモデル」と呼ぶようになっていました。「テトラ」は、「4」「正四面体」を意味しますが、現場の先生方を頂点にして、学部学生、教育学研究科院生、教職大学院生の四者を頂点とする正四面体をイメージした命名です。企画会議では、院生や学生の意見を述べます。話し会うということにおいては、四者は同格の立場をかたちづくりしました。9月になって、「テトラ」はいつしか「転がるテトラ」と呼ばれるようになっていました。「学ぶ」「教える」という関係は、statusではなくroleだという考え方です。そこには、教える立場にあった先生方が、学生から学ぶという状況も発生していたわけであります。そして、そこには「学び続ける」という営みが生まれているわけであります。このプロジェクトの会議の要項が大学の規則としてありますが、そのメンバーに「学生」が正式に加わる日も近いと思われます。もし、そうなりましたら、このことも大学の規定としては、初めてのこともかもしれません。

「学ぶ喜び」プロジェクトの報告書を、このような形でまとめあげることができましたことは、私にとってまさに「学ぶ喜び」そのものでありました。最後になりましたが、このプロジェクトを支えてくださった多くの方々にお礼申し上げます。特に、奈良市教育委員会の先生方、小学校、中学校の先生方、附属校園の先生方、気仙沼、陸前高田、大牟田のみなさま、また、総務企画課のみなさま、今西由佳さん、村上正子さん、北村恭康先生、中澤静男先生にお礼を申し上げます。そして、何よりこのプロジェクトに参加してくださった学生のみなさんにお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

なお、本プロジェクトは、次年度平成25年度も継続的に実施されます。教員養成の高度化、次世代教員養成センター、課題探求教育、ESD、ユネスコスクール、地域連携、リージョナルセンターといったこととの関係についても探求していかなければならないと思っています。本報告書を含め、様々な情報が「学ぶ喜び」プロジェクトのHP (<http://mailsrv.nara-edu.ac.jp/~katohs/manabu/manabu.htm>) にアップしてありますのでご覧いただければ幸いです。今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

加藤 久雄

奈良教育大学 平成 24 年度「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト 報告書

平成 25 年 3 月

国立大学法人 奈良教育大学

〒630-8528 奈良市高畑町

持続発展・文化遺産教育研究センター

TEL・FAX 0742-27-9177

